

ファイアーエムブレム聖魔の光石 紅蓮の傭兵

銀髪のナイフ使い

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

家族の生活の為、傭兵になると言つて小さな村を出た青年、アストラ。

しかし、平和な世界で傭兵を雇う者など極僅か。無計画な青年は、日銭を稼ぐことすら儘ならない。

遂に飢餓によつて倒れた青年の前に、青い髪の天馬騎士が舞い降りた。

目次

序章	貧乏な傭兵	1
1章	フレリア国王へイデン	1
2章	ルネス陥落	13
3章	救出と脱出	19
4章	守るべきもの	29
5章	ボルゴ峠の山賊	40
6章	異形の者たち	53
7章	帝国の影	63
8章	憎悪と決意	76
9章	レンバール攻城戦	84
10章	守るための力	96
11章	二度目の救出行	103
12章	同郷殺し	119
13章	幽霊船	131
14章	魔物の謎	141
15章	セライナの誓い	153
16章	皇帝との決着	165
17章前編	【虎日石】	179
17章後編	【月長石】	190
18章	奪還の戦い	202
19章	魔王	219
20章	灼熱の戦い	232
21章	最悪の剣	244
22章前編	真夜中の覚悟	256

序章 貧乏な傭兵

傭兵なんか、なるんじやなかつた。

俺は酷く後悔した。俺の名前はアストラ、年は16。マギ・ヴァル大陸、グラド出身。

3年前、親父が亡くなつて、母さんや妹を楽させる為に傭兵でもやつて金を稼ごうと、村を出たのはいい。初めはまともに振ることすら出来なかつた剣技も上達し、鋼の剣程度なら扱える。

しかし、この平和ご時世に傭兵を雇う奴なんて滅多にいない。賊どもはルネスやらフレリアやらの騎士団が対処しているらしく、傭兵の仕事を斡旋する施設に行つても殆ど何も無い。なんとか受けられた依頼はたつたの3件。護衛や用心棒ですらない、力仕事の手伝いだ。

少ない報酬で俺の生活を極限まで切り詰め、なんとか仕送り出来的たのも500ゴールドに満たない少額。帰つて母さん達に会わせる顔がない。

「はあ…北じやなくて、ジャハナの方角に行けば良かつたんだ。昔の俺は何考えてたんだか…」

ここから遙か東、ジャハナ王国は傭兵大国だ。そつちに行つておけば、どこかの傭兵团に滑り込んで仕事が貰えたかもしない。…だが、もう遅い。腹が減つてもう限界だ。この今にも壊れそうな剣や装備を売つた金じやパンの一つも買えそうにない。

遠目に立派な城が見える。脳内の曖昧な地図を頼りに考えれば、あれがフレリア城のはず。もう少し頑張れば城下町に行つて物乞いでもなんでも出来るが、そのもう少しが残つていない。

「ごめん、母さ…ア…リ…俺は、もう…」

歪む視界の中、仰向けに倒れ空を眺める。雲一つない、呆れるほど の快晴。最期の日としては悪くない天気だろう。天馬が視界を横切る。…フレリアの天馬や天馬騎士は有名だ。野生の天馬は森の中の泉に棲むと言われているし、あれは騎士が駆る天馬なのだろう。

ここで大声で助けを求められる体力が残つていれば良かつたんだ

が：目蓋が重い。とうとう俺も終わりの時が来たようだ。眠気に逆らうことなく目を閉じる。死後の世界で、俺は親父にこつぴどく叱られるのだろうか：

お父様やお兄様、城の皆に秘密で外に出た。城の中にいてもつまらないだけだし、少しくらいならお父様も許してくれる。

：あら？ 地面で誰かが倒れている。何か嫌な予感がするわ。天馬を操つて、その人のすぐ側に着陸させる。

「ねえ、大丈夫？」

赤い服に軽装の革防具、そして壊れかけた鉄の剣。金色の髪をしている。男の人みたいだけど、凄くやせ細つていて今にも死んでしまう。水筒を持ってきているし、城下町で買ったパンも持ってきている。これで目を覚ましてくれるといいんだけれど…

喉が潤う感覚と共に、失った意識が戻つてくる。目を開けると、青い瞳が俺を覗き込んでいた。

「ん…あんたは…？」

「良かつた、目を覚ましたわ。あなた、お腹空いてるでしょ？ ほら、これあげるから食べて。」

「…ありがとう。」

少女がくれたパンを受け取つて食べる。久しぶりに口にしたまともな食べ物、貪るように食べる。

「…ちしうさま、助かつたよ。あんたが来てくれなかつたら死んでいたところだ。俺はアストラ、あんたは？」

「私はターナよ。ねえアストラ、まだお腹空いたままでしょ？ 城に連れて行つてあげるわ。料理長に事情を話したら、ご飯も作ってくれると思うの。」

青い髪の少女、ターナに腕を引いてもらつて立ち上がる。ターナ：どこかで聞いた名前だな。確か：

「ターナ…まさか、フレリア王女の？」

「いいからこつち！」

ターナ姫に腕を引っ張られるままに付いて行く。その先には天馬…あの時見えた天馬騎士はターナ姫だったのか。だが、ターナ姫の天馬は山賊に囲まれている。フレリアにしか生息しない天馬は高く売れる。攫つていくつもりだろう。

「あなた達は…」

「おう嬢ちゃん。コイツはアンタの天馬かい？」

「返して！」

「返せと言われて返す奴がいるか？天馬は売れば大金になるからな。」

「くつ…」

…4人か。装備はそのうちその内3人が鉄の斧、今ターナ姫と喋っている奴が鋼の斧だ。やれるか？今の俺に…

「おい。」

「だれだ、てめえ？」

「…一応、傭兵だ。雇われた訳じゃないが、恩は返す。それだけだ。」

鞘から剣を抜いて構える。あと10回…いや、5回も使つたら壊れそうな鉄の剣だが、やるしかない。

「下がつてろ。」

「分かつたわ。…死なないでね。」

「…」

「へつ、骸骨みてえにやせ細ったガキに負けるかよ！すぐに殺してやる！」

「…ふつ！」

鉄の斧を構えた山賊がいきり立つて襲いかかってくる。動きは鈍い、今の俺でも余裕を持つて避けられた。

「くらえつ！」

「ぐつ！」

反撃に剣を振り下ろし、頭から血を流してその山賊は倒れた、もう動けないはずだ。すかさず2人目が襲いかかる。避けようとしたが、右肩のボロ防具に当たつて防具が壊れた。

「つ！」

辛うじて反撃したが、山賊の右腕に掠つただけ。追撃してくる山賊にカウンター、かすり傷を抉るように突き刺す。

「ぐああっ、腕があつ！」

……なんだか調子がいい。続いて3人目、一撃目は後ろに跳んで避けたが、着地の際に踏ん張り切れずに尻餅をつく。二撃目を剣の腹で防御するが、剣は折れてしまった。

「死ね！」

「ぐつ……！」

立ち上がりつたが、三撃目を胸に喰らう。幸い、革の防具は破れなかつた。鈍い痛みが走るが致命傷は負つていない。

相手の手元を狙つて蹴りを入れる。相手は斧から手を離し、それを素早く奪い取る。力に任せてその斧を振り回す。斧は相手の首筋に命中、その衝撃で俺も武器を手離したが、相手も首の骨を折つたのか動かなくなつた。残りは鋼の斧を持つたリーダー格らしき奴だけだ。

「よくも、兄弟達をやつてくれたなあ！」

見た目に反し、他の奴らよりも速い動きで俺を狙つてくる。距離をとりながら隙を探すが、なかなか見当たらない。

「がつ……！」

斧が左肩に当たり、腕が動かなくなる。激しい痛みが走り、出血量も多い。利き腕じやなかつたのは不幸中の幸いだろうか。

大きく斧を振りかぶる山賊の懷に潜り込んで、斧の柄を右手で掴む。

「へつ、馬鹿が。片手で俺に勝てるわけないだろう！」

勝負は力比べになる。山賊が押し返せば俺は死ぬ。俺が押し切れば山賊から武器を奪える。……が、やはり勝てない。空腹状態で片手しか動かないのに、力比べを挑んだのは判断ミスだつた。

「死ねええい！」

山賊は俺の腕を押し返し、そのまま俺の胸を叩く。耐えきれず倒れ、服の胸部がより赤く染まつていく。

「へつ、雑魚が。こいつで終わりにしてやる。」

最後は一息に殺すつもりなのか、山賊はゆつくりと大きく振りかぶる。あれが振り下ろされたら俺は死ぬ。結局俺は母さんにも妹にも、ターナ姫にも何も出来ないまま死ぬのだ。

「だめっ！」

ターナ姫は見張りのいなくなつた自分の天馬に乗つて、隠し持つていたらしい手槍で山賊に攻撃するが、山賊が負つたのはただのかすり傷だ。

「小娘が…お望み通り貴様から殺してやる！」

山賊は狂いを失って娘は夢見る とのみせ 僕は死め一てのは その
上フレリアの王女様を道連れなんて、とんだ大罪人だな…いや、まだ

…辛うじて喋っていることは出来る

「母の前で、おどけたりしないで。」

「ふうやダーリンは余裕だな！」

山賊の斧が振り下ろされる。ターナ姫は天馬の前脚を上げて躱す。今は躱けられても、いずれは当たつてしまふだろう。

「シレーネ！」

女性の声だ。フレリア軍の天馬騎士が騒ぎに気付いて加勢に来たらしい。加勢に来た天馬騎士は剣を構え、山賊の胸を一撃で貫いた。
：強いな。俺も、もつと強ければこんな死に方をしなかつたかもしけない。

「ば……か……な……」

良かつた。俺は姫を道連れに死んだ大罪人にはなりそうにない。

「ターナ様！」
「ごめんなさい……でも助けてシレーネ、彼が今にも死んでしまいそうなの！」

アストラの胸や肩から凄い量の血が出ていて、このまま放つておいたら死んでしまうわ。

「…包帯はあります。まずは止血をしましよう。」

シレーネはアストラの傷口を包帯で塞ぐ。白い包帯もすぐに真っ赤に染まつた。

「急いで城の医務室に運びますよ。」

「お願い、死なないで…」

アストラは私の為に戦ってくれた。生きてくれないとお礼も言えないわ。そうじゃないと、困るもの。

1章 フレリア国王ヘイデン

目を覚ますと、石の天井が見えた。俺が泊まれるような宿じゃない。ここはどこだ？

「青年よ、目が覚めたか。」

声を掛けられて同じ部屋に俺以外の人がいるのに気付く。立派な口ヒゲを生やした壯年の男性だ。

ああ、そうだ。少しずつ思い出してきた。飢え死にかけた、フレリア王女ターナ姫に会った、山賊と戦つた…そしてまた死にかけた。あれから起こった事を推測すれば、自ずとここはフレリア城の中だろうという結論に至る。

怪我は治っている。男性が持つているライブの杖で治療してくれたのだろう。

「あなたは？」

「わしはモルダ、ただの僧侶だ。お主の名前はアストラ、だな。」

「はい。ターナ姫から？」

「そうだ。どういうわけかターナ様はお主のことをいたく気に入つておられてな。素性を聞いてもよいか。」

「はい、俺の年は16、出身はグラド。シルバ村という所から傭兵として金稼ぎに来ました。村を出たのは13の頃です。傷を治していただき、ありがとうございます。」

「気にせんでもよい。しかし、ふむ、グラドの者か…」

モルダさんが悩む素振りを見せる。何か問題でもあつたのだろうか？

「あの…何か問題でもありますか？」

「いや、お主が知るはずも無いか。…お主が城に来てから、即ちお主が山賊と戦い倒れてから3日経つておる。そして一昨日、つまりお主が倒れた次の日、伝令が報せを持ってきた。グラドは永きに渡る交友関係を断ち、ルネスに挙兵した。とな。」

「な…！」

戦争…か？しかし、何の為に？数百年に渡る友好を断つ程の目的…

こうしちゃいられない。

「アストラよ、どこへ行く気だ？」

「ルネスの城に行きます。グラドを止めないと。」

「よせ、いまお主がルネス城に行つても間者と思われるだけだろう。それに、今までは碌に力も入るまい。」

忘れてた。そう言えばターナ姫に貰ったパン以来なにも食べていない：貰ったパン以前も録なものを食べていない。途端に空腹に襲われ、全身の力が抜ける。

「食堂へ案内しよう、ついて来い。」

モルダさんの後に続いて食堂へ案内される。城のウエイターらしき人達が整列していて、俺に向かつてお辞儀してきた。

「お待ちしておりました、ターナ王女から伺つております。料理をご用意いたしますので、しばらくお待ちくださいませ。」

料理人が頭を下げる。

「俺なんかに…」

「アストラよ、お主はターナ様の御客人なのだ。気にせんでも良い。」「…そうですか。」

ううむ、俺の身の丈に合わないことをされるとむず痒いな。…どの席に座ればいいんだ？俺の思うところを察したのか、モルダさんが奥の方の席へ案内してくれた。

「お主はここへ座るとよい。」

そう言つてモルダさんが勧めた席はかなり奥の豪華な装飾が施された席の隣で、それでも宿にあるような椅子とは比較にならないほど高価そうな椅子だ。

「ターナ様が是非お主と食事をしたいと仰つていてな。ターナ様をお呼びして来るので、ここに座つて待つているとよい。」

本当に気に入られたらしい。ただの傭兵がこんな席に座るなんて、まず有り得ないだろう。

ターナ Side

何をする氣にもなれなくて、私は部屋で座つていた。アストラの傷

はもう治っているのに、眠つたままなのは血を失い過ぎたせいだとモルダが言つていた。数日で目を覚ますとも言つていただけれど…

あれから3日、グラドがルネスに攻め入つたという知らせが入つて、お父様からは城の外に出ないように言われている。

アストラのこともあるし、お父様の言いつけを守つてているけれど：エイリーエやエフランのことが心配でならないわ。今すぐにでもルネス城に飛んで行きたいくらいに。でもきっと大丈夫よ。ファード様はとても強いし、ゼト将軍だつているはずだもの。エフランだつてとつても強いわ。

「ターナ様、モルダにございます。」

ノックの音の後に声がする。モルダ…ということはアストラが目を覚ましたの!?

「すぐに連れて行つて！」

思い切りドアを開けて、ドアがモルダの顔に当たつてしまふ。

「ターナ様、もう少し落ち着きというものを持つてくだされ。」

「ごめんなさい…」

アストラに会つて、お礼を言つて、それから…

アストラ Side

料理とターナ姫を待つ。やっぱり少し緊張する。俺みたいな傭兵がこんな所にいていいのか?

「アストラ！」

ターナ姫が小走りでこつちに向かつてくる。モルダさんもやや呆れた顔で戻つてくる。薄々感じていたが、ターナ姫は中々お転婆な人らしい。

「ターナ姫。」

「よかつた…ねえ、傷はもう大丈夫なの?痛みとか感じたりしない?それと、この前は本当にありがとう。あなたがいなかつたらアキオスは助からなかつたわ。あと…」

ターナ姫が隣の席に座つて話しかけてくる…が、喋るのが速すぎて理解が追いつかない。

「あの、一つずつ話してくれませんか？」

「あつ…ごめんなさい。言いたいことがたくさんあつて。」

「まあ、傷は大丈夫です。痛みもありません。それにお礼なんて、むしろ俺がいなかつたらターナ姫もあの天馬も危険な目に遭うことも無かつたですし。」

「もう、そんなこと言わないでよ。そうしたらあなたが助からなかつたでしよう？」

「…すみません。」

「お待たせしました。」

ウェイターが料理と食器を持つて来て、俺とターナ姫の前に置いていく。最初はスープとサラダみたいだ。身分が高い人の食事はこうやって前菜から順番に出てくるものらしい。

貴族や王族には食事にも作法みたいなものがある筈だ。ターナ姫と同席している以上、最低限のそれには従いたい。

「このナイフやフォークは確かに外側から…」

「そうよ。良く知ってるのね。」

「ええ、まあ。昔読んだ本で…」

食事をしながらターナ姫を色々な事を話す。俺の故郷の事や家族のこと、請け負った数少ない仕事のこと、ターナ姫の暮らしや狭苦しい生活に対するちょっととした愚痴、ターナ姫が話題を提起して、俺が合わせる。自然とそういう流れになつていて。

「アストラつて好きな女性とかいたりするの？」

「え？：俺から女性を好きになつた事はないですね。」

「その逆はあつたつてこと？」

「はい。セレフィユの宿の娘さんに。俺はまだそういう感情を知らなかつたし、傭兵も続けなきやいけないんで断つてしまつたんですけどね。あそこには1ヶ月くらい世話になつたな…」

「その事、今はどう思つてるの？」

「どうなんでしょうかね…もしあの時俺が彼女を受け入れていたら、いずれ彼女を裏切る事になつたでしよう。傭兵やつてたら、いつ死ぬか分かりませんから。だからきっと、あの判断は正しかつた。と、俺

は信じたいです。今彼女が何をしているかは知りませんが、きっと分かつてくれます。」

「そう…」

話し終わったタイミングで、俺もターナ姫もデザートを食べ終わる。すると、見計らつたかのよう一人の兵士が入ってきた。

「ターナ様、アストラ様。ヘイデン王がお呼びです。」

「お父様が？ 分かったわ。行きましょうアストラ。」

「は、はい。」

ターナ姫の後に続く。まさかフレリア国王に会う事になるとは…冷や汗が頬を伝つた。

「この先がお父様のいる謁見の間よ。」

「……」

ターナ姫がやたらと大きい扉をノックする。馬車でも入れそな程だ。

「お父様、ターナよ。アストラも連れてきたわ。」

「うむ。」

ターナ姫が扉を開ける。そしてターナ姫の後ろに続いて部屋に入り、ヘイデン王の前に立ち止まつたターナ姫の斜め後ろで硬直する。ヘイデン王の座る玉座の脇にはモルダさんが立つていた。

「アストラよ。娘を助けてくれたこと、深く感謝する。何か欲しい物があれば遠慮なく申すといい。」

「い…いえ、俺はターナ姫に命を助けていただいた身です。褒美はこの命だけで十分です。」

「そうか…まあ、良いだろう。それとは別に、もう一つ私から頼みたいことがある。」

「は、はい。」

「娘がお前の事を大層気に入つてな。モルダからお前の素性を聞いたところ問題もなさそうだ。万全でない状態にも拘わらず山賊4人を相手に取り、その内3人を倒し腕も中々に立つ。どうかフレリアに仕え、ターナの近衛となつてくれんか。」

「つ！」

傭兵の仕事には行き詰まっていた。グラドが戦争を起こして仕事も増えるかもしれないが、それでも収入が安定するとは思えない。

だが：フレリアに仕えるというのは：収入は安定するだろう。母さんや妹に仕送りが出来る。だが、シルバ村には帰れるのだろうか。フレリアに一生仕えて、一度と家族に会えないという事は無いのだろうか。ターナ姫はヘイデン王の隣に移動していく、俺の眼をまつすぐにつめている。

「……」

「すぐに決めろと言われても、難しいか。だが、これは他ならぬターナの頼みでな。」

「……分かりました。お受けしても構いません。」

「おお、そうか！」

ヘイデン王の表情が緩むのが分かる。フレリア国王は娘を溺愛していると聞いたことがあつたが、本当の話のようだ。

「ただ、グラドの件が片付いたら、もう一度考えさせてください。俺には、ターナ姫以外にも守りたい人がいますから。」

「そうか。ターナ、構わないな。」

「ええ、アストラが妹さんをどれだけ大切に思つていたか、さつきたくさん聞いたわ。私も妹さんからアストラを無理矢理奪い取るようなことはしたくないもの。」

「ありがとうございます。」

「いや、礼を言うのはこちらの方だ。アストラ、ターナの事、頼んだぞ。」

「下がつてもよいぞ。」

「はい。失礼致します。」

深く頭を下げてから謁見の間を出る。傭兵からフレリア王女の近衛に昇格：したのか？俺じや力不足かもしだれんが、少なくとも安定した暮らしが出来る。力不足も努力すればいずれ直つていくだろう。

2章 ルネス陥落

あれから1ヶ月が経つた。近衛と言つても、ターナ姫が一人で大抵の事をやつてしまふ上に外出もしないので特にやる事は無く、ターナ姫の話し相手になる時以外は城にいる兵士達と訓練をしている。とは言つても、殆どがグラドとの戦闘に出ていて、城にいる兵はいつもより少ないらしい。

「はいっ！」

「そらっ！」

「くつ…てやあっ！」

「のわあっ！…参つた、降参だ！」

「よつし！俺の勝ちですね。」

訓練用剣を振り上げて槍をかち上げ懐に潜り込み、喉元に剣をあてがい模擬戦に勝利する。城に残つたフレリア兵士の中でも俺は強い方らしく、戦績は今の勝利も合わせて29戦19勝10敗だ。

城の防衛に最低限の戦力しか置けないということは、グラドの侵攻はかなりの戦力を以て行われているようだ。

「やつぱりやるわね、アストラ。」

そう言うのはフレリア天馬騎士団第3部隊隊長、シレーネさんだ。あの時に4人目の山賊を倒した人で、彼女の妹のヴァネッサも天馬騎士だ。ほかの天馬騎士隊は前線に出ているが、第3部隊だけは城に待機している。二人にはまだ1度も勝つことが無い。10敗のうち5回は2人に負けたものだ。あと3回は重騎士のギリアムさんで、残り2回が他の兵士に負けたものだ。

「いえ、シレーネさんに比べたら俺なんかまだまだですよ。」

「いえ、その歳で、更にいえば我流でそこまで伸びたのですから大したものです。鍛え続けければヴァネッサや、いずれ私よりも強くなるでしょうね。」

「どうでしようが？これからも精進します。」

汗を拭いて訓練場を出ようとした時、伝令の天馬騎士の叫び声が聞こえた。

「伝令つ！一週間前、ルネス城が陥落！ファード国王は死亡し、エイリーク王女の消息は不明！エフラム王子は前線で引き続きグラドと交戦中！」

「なんだつて？！」

休憩中の訓練場に再び緊張が走る。ルネスは真っ先にグラドの侵攻が及んだ内陸の国だ。【勇王】と呼ばれる國王ファードは、王だけでなく、戦士としても一流の力を持つていると言われていたのだが：

ルネス王女エイリーエと王子エフラムはターナ姫の親友でもある。直接会つたことはないが、ターナ姫から何度も話を聞いている。

「アストラ…」

「ターナ姫の部屋に行つてきます。」

「ええ、行つてあげて。」

走つてターナ姫の部屋へ行き、扉を3回叩く。扉から1歩離れたのと同時に扉が開け放たれ、ターナ姫が飛び出してくる。

「何!? もしかして、ルネスが…」

「…はい。ルネス城が陥落、ファード国王は戦死。エイリーエ王女は消息不明で、エフラム王子は未だ前線で交戦中だそうです。」

「そ、そんな…ファード様が…エイリーエ…」

ターナ姫が崩れ落ちそうになるのを、すんでのところで支える。「ターナ姫、気を確かに。まだ、エイリーエ王女が亡くなつたとは限りません。」

「どうして…どうして、グラドは戦争なんて…」

「皆そう思つてますよ。だからターナ姫、今はエイリーエ王女やエフラム王子の無事を祈りましょう。」

「そうね…ごめんなさいアストラ、少し取り乱しちゃつた。」

「仕方ありません。親友の安否が分からぬのに取り乱さない人なんていませんよ。俺はターナ姫の近衛。それに俺の方が年上なんですから、頼りたい時はなんなりと頼つてください。」「分かつた…でも今は一人で居させて。」「はい、それでは失礼しました。」

ターナ姫はドアをぴしゃりと閉め、部屋の中に閉じ籠もる。：ルネス陥落、か。訓練場へ戻りながらもう一度考える。グラードはルネスの本拠地を落とした。しかも、たつたの3週間で。グラードはどこまで本気なんだろうか。そもそも目的は何なのか。

領土？いやグラードは十分な領土を持っているはずだ。じゃあ…だめだ、何も思い浮かばない。グラードのヴィガルド皇帝は【穩健帝】と呼ばれる、優しい方だつたはずだ。リオン皇子もヴィガルド皇帝以上の優しさを持つ方。将軍達も…

【蛍石】のセライナ将軍には会ったことがある。2年前、セレフィユの街でまだ未熟な傭兵だった俺は魔法の仕組みや対処法を一週間付きつきりで教わった。防ぎ方は結局掴めなかつたが、躲し方は今でも覚えている。

「…………でも、原因があるとすればやはりヴィガルド皇帝のはず。」

「…アストラ！」

「うおっ!? ああ、なんだヴァネッサか。悪いな、考え方をしてた。どうしたんだ？」

シレーさんの妹、ヴァネッサとはフレリア軍の中で1番歳が近いからか、わりとすぐに打ち解けた。生真面目なやつで、俺と意見がぶつかる時もあるが。

「どうしたんだじやないですよ！ 国王陛下がお呼びです。早く行つてください！」

「そうが、悪いなヴァネッサ！」
「もう…！」

小走りで謁見の間へと向かい、城の中では城門の次に大きい扉をノックする。

「アストラです。」「入るがよい。」「失礼致します。」

「アストラ、ルネス陥落の件でだが…おそらくターナは無断で城を出るだろう。」「…俺はそれを止めればいいんですか？」

「止められるのであればそれが最良であるが、お主の目を盗んで城を出た事が確認でき次第、一人で帶剣しミュラン城へ向かえ。フレリアとルネスの国境にある、ルネス城に最も近い城だ。ターナは間違なくそこへ向かうだろう。」

「はっ。承知致しました。」

「話はそれだけだ。下がるがよい。」

「失礼致します。」

玉座の間を出て訓練場に戻つてくると、ギリアムさん指導の筋肉鍛錬の最中だった。

「アストラ、ただいま戻りました！」

「戻つたか。ではいつも通り、全ての筋肉鍛錬術を10週だ。」

「了解です！」

筋肉鍛錬をしている集団の中に加わつて鍛錬を始める。フレリア式の筋肉鍛錬術は胴体から指先、足の先まで全ての筋肉が鍛え上げられる洗練された鍛錬術だ。

筋力が求められる男は毎日10週、筋力よりも俊敏な動きが求められる女性は週1回に3週だそうだ。それでもかなり筋肉が付きそつだが。おかげで重い武器も振りやすくなつた。まだ剣しか扱えないが。

「98……99……100!!」

1週目終わり。あと9週…

ターナ Side

神様にお祈りする。エイリーグが、エフランが無事でいてくれますように…やっぱりダメ、居ても立つてもいられないわ。ルネスに入るわけにはいかないけれど、せめて国境のミュラン城くらいまでなら…私はまた、こつそりと城を抜け出した。

アストラ Side

「999……1000!!」

やつと10週終わつた。遅れて來たが、なんどギリアムさんの次に

早く10週片付けることが出来た。

「相変わらず早いな、アストラ。」

「はい、少し早いですけど上がらせてもらいます。」

「あ、見つけました！アストラ！」

一旦部屋に戻ろうとしたら、ヴァネッサがものすごく焦りながらやつて来た。そう言えばそろそろ天馬騎士団の訓練も終わる時間だつたな。

「ヴァネッサ、今度はなんだ？」

「と、とりあえずこっち来てください！」

黙つて付いていく、なんかヘイデン国王に呼ばれてる時よりも焦つてないか？人気のない場所に連れられる。周囲に知られるわけにはいかないらしい。

「で？用件はなんだ？」

ヴァネッサは俺の耳元に顔を持つて行つて小声で話す。

「天馬舎からアキオスがいなくなつていきました。」

「…なるほど、ターナ姫も随分と行動が早いな。俺一人で追うから、ヴァネッサは何事も無かつたかのようにしといてくれ。」

「それなら私も追います！」

「国王陛下の命令なんだ。ターナ姫が脱走したら俺一人で追えつな。」

「そうですか…」

「ま、そういうことだから。行つてくる。」

「気を付けてくださいね。」

武器庫へ行つて番と話し、鉄の剣と傷薬を取る。いや、それだけじゃあ心許ないな。

「…アーマーキラーも借りて行きます！」

「そうか？まあ、持つて行きな。ほつといて腐るよりはマシだろう。」
ルネスが陥落したなら次はフレリアに攻めてくる。そうしたら最初に狙われるのは間違いなくルネスとの国境にあるミュラン城だ。
騎兵ならまだしも、ギリアムさんみたいな重騎士の鎧に俺の剣は通らない。

背中の鞘に剣をはめてミュラン城へと向かう。場所は覚えている。つい4カ月程前に行つたばかりだ。近衛としての初仕事、気を引き締めないとな。

3章 救出と脱出

ミュラン城が見えてきた。数日掛けて俺が知る限りの最短ルートを通ってきたが、道中にターナ姫の姿は見えなかつた。

城門の様子が見える場所まで移動して、城の様子を見る。全体的に赤みがかつた装備を纏つた一団が城門を取り囲んだ。

「グラド軍、もう来たか？」

見つからぬよう、近くの低木に身を隠す。城門を取り囲んだ一団の重騎士が城門を守る傭兵に迫る。そして、手に持つた鉄の槍での傭兵の急所を突き、一撃で死に至らせた。

「つ!! ターナ姫が中にいるかもしれない。：だが、無駄死にだけは絶対にする訳にはいかない。」

自分にそう言い聞かせて、深呼吸。もう一度グラド兵の状態を見る。かなり距離があるが、大まかな装備くらいならここからでも見えるだろう。数人が城の制圧にかかり、外にいるのは重騎士が1人、軽装の槍持ちが3人、斧持ちが3人。

一人で突っ込んだら間違いなく死ぬ。重騎士単騎、または斧持ち3人ならまだなんとかなつた。斧使いの攻撃は躲しやすいし、重騎士はアーマーキラーで倒せる。だが、重騎士を含めた槍持ち4人に囲まれたら俺の実力じやあ一瞬で殺されるだろう。

「せめて散開してくれたらな…」

バラバラに散つてくれた1人ずつ誘き寄せて倒していく事ができる。しかしターナ姫が中にいるかもしれないのに、その時をここから見計らつている暇はない。

「やつぱり玉碎覚悟で突撃するか？」

そう思つた矢先、山間の奥を指差したグラド兵達がバラバラに散開した。

「なんだ？」

見つからないように場所を移動してグラド兵達が指差した方向を見る。そこにはたつた二人の騎士がいた。

片方は馬に乗つて銀の槍と鋼の剣を振るう赤髪の騎士、そしてもう

片方は…レイピアを構えてグラド兵へ向かう女の子だった。

「あれは…まさかルネスの騎士か？だとしたらあの女の子はエイリーク王女!?」

チャンスだ。グラド兵がエイリーク王女達に集中している間に俺がここから叩けば勝機は十分にある。

まずは近くにある砦へ向かう。すると気付いた軽装の槍兵、兵種で言えばソルジャーが接近して来た。

「何者だ、貴様！」

「俺はフレリアの兵士だ。グラド軍、覚悟！」

鉄の剣を構えてグラド兵に斬り掛かる。命中はしたが、まだ致命傷には至らない。

「ぐつ…ふんっ！」

グラド兵が反撃してくる。その攻撃を横に跳んで躲そとしだが、脇腹に突き刺さった。

「こいつで決めてやる！」

剣を高く放り投げて落ちてきたところで掴み、兜ごとグラド兵の頭を叩き割る。そのグラド兵は動かなくなり、俺はミュラン城へと走る。

戦士とソルジャーが1人ずつ襲つてくる。2人同時には相手出来ない。回避の構えを取る。

「はっ！」

後ろからさつきのルネス騎士と思しき男が銀の槍でソルジャーを貫く。

「せやあっ！」

そしてレイピアを構えたエイリーク王女と思しき女の子が戦士の胸を突き刺した。不意を突かれたグラド兵は声を出す暇も無くその命を落とす。

一人ともかなり洗練された動きだ。俺では敵わないだろう。

「大丈夫ですか？」

「いえ、俺なら問題ありません。ありがとうございます。」

「フレリアの者か？帶剣しているようだが。」

「はい。俺は一応フレリアン兵士です。まあ、就いたのはほんの1ヶ月程前で、ターナ姫の近衛という特殊な立場ですが。」

「ターナの？ターナ姫の近衛がなぜこのような所に？」

「ターナ姫が城を抜け出してしまったんです。消息不明のエイリーエ王女を心配してのことですし、ルネス城に一番近いミュラン城にいるはずだと後を追つたんです。」

こと細かく説明する必要はないだろう。簡潔な説明で済ます。

「ターナが私を心配してあそこに…ですか、でしたら早く城を取り返しますよ！私がそのルネス王女エイリーエです。」

やつぱりか。しかしよく見ると装備が中々に軽装だ。動きやすさ重視なのは俺も同じだが…スカートの丈短くないか？いや、でもヴァネッサとかターナ姫とそう変わらないが…かなり際どい気がする。

「私はゼトだ。ルネス王国騎士団で将軍を務めていた。」

この人が噂に聞く【真銀の騎士】、ルネス王国騎士団将軍のゼトさんか。想像していたよりも随分と若い人のようだ。

「俺はアストラ。それじゃあ行きましょう。…戦士がこつちに向かってますね、俺がやつて来ます。」

「はい。お願ひします。」

勢いよく突っ込んでくるグラド兵に、それを超える速さで迫る。

「喰らえ！」

グラド兵の腕を狙う。正しくは手元、斧を持っている手だ。狙い通りにグラド兵の手から斧を弾き飛ばす。そして追撃で容赦なく斬りつける。そのうちその戦士は動かなくなつた。

後はソルジャーと重騎士、つまりアーマーナイトだけだ。と思つていた。

「見つけたぞ！ルネスの生き残りだ。逃がすなっ！」

後ろからソルジャー1人と戦士2人が迫ってきた。くそっ！もう少しでターナ姫を助けられるかもしれないというのに邪魔が入る。

「ああ、もう！」

が、こつちに向かう最中で何かに貫かれて倒れる。見るとそれは：

「ギリアムさん！」

そしてその隣には途中でずれ違った騎兵が。戦士の攻撃を躱し、果敢に剣を振るつている。

「フランツか：彼もルネス騎士だ。」

「そうですか：俺達は城の方をやりましよう。ターナ姫を早く助けないと。アーマーキラーを持つてます。城門にいるアーマーナイトは俺がやるので、ソルジャーをお願いします。」

「分かつた。エイリーエク様、相手は槍使いです。私が相手しますので、エイリーエク様は一度お下がりになつてください。」

「はい。剣では槍に不利ですからね。」

念の為傷薬で傷を塞ぐ。アーマーナイトはその重い鎧を着けて動けるだけの筋力故に攻撃力も高い。

まずはゼトさんがソルジャーを銀の槍で仕留める。俺は一度相手を油断させるため、鉄の剣を構えてアーマーナイトへ迫る。

「一応聞くが、グラド軍の奴だな。」

「そうだ。わしの名はブレゲ。そういう貴様は何者だ。」

「俺はアストラだ。出身はグラドだが、フレリアの兵士だ。」

「ほう、祖国に歯向かうのか？」

「グラドの尻はグラドが拭う。こんな暴挙を起こしたのたヴィガルド皇帝か？」

「さあな。そうらしいが、わしはわし自身の力を示す事が出来ればそんなことはどうでもよいわ。」

それだけか？力を示して何になるんだか。平和を壊したことに対する疑問を持たないのだろうか。

「…話を変える。ターナ姫は城の中にいるのか？」

「フレリア王女を人質にすれば、フレリアを落とすのも容易いだろう。今はこの城の牢の中では震えておるわ！」

「…そうか、じやあ話は終わりだ。」

手に持つ鉄の剣と、背中のアーマーキラーを持ち替える。ブレゲは驚きことしたものの、慌てる様子はない。

「そ、それはアーマーキラー！？しかし、それだけで勝てると思うなよ小

「僧！」

「ふつ！」

間一髪で躲したが、槍で上手く牽制されて、簡単には近づけない。

「ぬんつ！」

「くつ…！」

槍の穂先が頬を掠め、血の滲む感覚がする。

「でああつ！」

強引に距離を詰めてブレゲの鎧の留め具を狙う。そして左肩の留め具を破壊し、そのまま肉まで叩き斬る。

「ヌウ…小癩な！」

「あが…」

槍の柄で腹を突かれて、つい抑えてしまう。

「隙ありい！」

ブレゲの追撃を、わざと体勢を崩して躲そうとする。しかしブレゲの槍に革防具ごと右肩を貫かれた。

「ちつ!!」

アーマーキラーで左肩の留め具を狙う。しかし肩を透かされて剣は空を切る。そのまま剣を振り回して今度はブレゲの持つ槍を狙う。槍の柄が折れる。穂のある側は包丁くらいの長さしかない。最早使うことは出来ないだろう。

「せらあつ！」

「なにい…!?」

丸腰になつたブレゲの鎧を破壊していく。そして守る物が無くなつた腹に剣を突き刺し、抜く。

「こ、このわしが…」

ブレゲはうつ伏せに倒れ、城門の石畳が赤く濡れる。死んだのを確認してからアーマーキラーを背中の鞘に戻す。

「くつ…」

右肩が痛む。傷薬で治療するが、すぐには回復しないだろう。

「大丈夫ですか？」

「俺は問題ありません。それよりターナ姫を早く助けないと、行つて

きます。」

城の中に入る。グラド兵も数人居たが、ブレゲの死を知つてかすぐ
に投降した。やはり戦争を望まずに無理矢理やらされてる奴もいる
ということか。

「牢はどこだ…？」

城の中を探す。そして間もなく地下にある牢を見つけた。そして
その中にターナ姫が閉じ込められていた。

「ターナ姫！」

「アストラ！ 来てくれたのね！」

「はい、今鍵を開けます！」

壁に掛けてある鍵を取つて牢の扉を開ける。そしてターナ姫が飛
びついてきた。

「ああ、ごめんなさい。私が軽率な行動をとつてしまつたせいで…肩
の傷も酷いわ…」

「気にしないでください。俺もターナ姫が無事でなによりです。ほ
う、それより行きましょう。エイリーエ王女もおられますよ。」

「エイリーエが!? 無事だつたのね…」

「城門の方にいると思います。逆に心配されてしまいましたよ。それじゃ、
行きましょうか。」

ターナ姫を連れて城門の方へ行くと、既にギリアムさんとエイリーエ
王女達が合流していた。

「エイリーエ！ ああ、本当にエイリーエなのね！ よかつた…」

「ターナ、私だつて心配したのよ。私を心配してくれるのは嬉しいけ
れど、自分の事もしつかりしてくれないと。」

「ごめんなさい… 私、 いても立つてもいられなくて。」

ターナ姫とエイリーエ王女は出会つてすぐにそんなやり取りを交
わす。仲がいいのが見て取れるような光景だ。

「ギリアムさん。」

「アストラか、ご苦労だつたな。」

「はい、城の中に投降したグラド兵が数人居ますが、どうしましよう
か。」

「フレリア城へ連行し、暫くは捕虜として扱う。」「

「分かりました。」

城の中にいるグラド兵達にその旨を伝える。

「あんた達はフレリア城に連行してしばらく捕虜となつてもらう事になつた。」

それを伝えると、投降したグラド兵達の表情が緩む。

「そうか：死なずに済むんだな。」

「もう戦わなくていいんだ：」

「それじゃ、立て。もう行くぞ。」

その後ミュラン城を守る為に来たフレリア軍に城を任せてターナ姫やエイリーエ王女、グラド兵達とフレリア城へ戻った。

「さ、ターナ姫。ヘイデン様の所に行きますよ。」

「ええ、エイリーエも一緒にね！」

「はい。では行きましょう。ゼト、あなたもお願ひします。」

「はつ。」

謁見の間の扉の前へ行き、ターナ姫がノックする。そして扉を開いてこう言う。

「お父様、ターナよ。」

「おお！ ターナか、ミュラン城でお前がグラド兵に襲われたと聞いた時はどれほど心配したことか…とにかく、無事で良かつた。アストラもよくターナを助けてくれた。」

「それが俺の使命ですから。」

「それよりもお父様、とても良い知らせを持つて帰ってきたのよ。さ、エイリーエ！」

後ろで控えていたエイリーエ王女が前に出る。

「ヘイデン様、お久しぶりです。」

「おお！ エイリーエ、そなたも無事だつたか！」

「はい。ルネス陥落の前に城から脱出を。ですが父上は…」

「うむ…フレリアも伝令から報告を受けた。我が友ルネス王ファードは、ルネス城で無念の最期を遂げた…と。」

「そんな…」

「……」

エイリーエ王女の顔が蒼白に染まり、ゼトさんは俯いて言葉も出さない。父親を、仕えるべき主君を失った悲しみは深いだろう。

俺の父さんも俺がまだ幼く、妹が物心つく前に亡くなつた。その時は何がなんなのか分からず、俺はただ泣き続ける母さんの傍で妹の手を握つていた。

「卑劣なグラド帝国には我がフレリアが必ず報いを与える。エイリーエ、そなたは疲れておろう。しばらくはゆつくりとこの王宮で休むがよい。」

「……」

「……ヘイデン様、エフラン様の消息をご存知でしようか？」

「うむ、つい数時間前に詳細な報告を受けた。エフラン王子はグラド軍と激戦を繰り広げ、生き残った部下達と共にグラドへ進撃したと聞いておる。国境を突破し、今はグラド領内のレンバール城近くで孤軍奮闘しておるそうだ。」

強いな。城が陥落したにも関わらず進攻を続けるとは。一騎当千、とまでは行かなくても相当な猛者であることは違いない。

「兄上は……今も戦つておられるのですか!?」

「うむ、今も無事なのは定かでは無いが……」

「ヘイデン様、私は兄の援軍に向かおうと思います。」

「……気持ちは分かるが、無茶をすべきではない。そなたにもしもの事があれば、わしはファードに申し訳が立たぬ。そなたはこの王宮にて身を休め、戦が終わるのを待つのが良かろう……」

ヘイデン様の言つてる事は正しい。でもエイリーエ王女の気持ちもよく分かる。兄妹のことを想う気持ちはそう簡単には断ち切れない。戦禍の中、命を削りながら戦つているのなら余計にだろう。

「お言葉は有り難く思います。ですが、兄上は私の半身も同じ。兄上が命の危機に瀕しているというのに、私がここで安穩としているわけにはいきません。」

「そうか……しかし、そなたと手勢の騎士だけでは到底グラドと戦う事など出来ん。だが息子ヒーニアスもフレリア正規軍もグラド軍との

戦の最前線に出て激戦を強いられている。そなたらに出せる援軍も僅かだが、それでも行くというのか?」

「はい。…申し訳ありません。」

「…芯の強さは父親譲り、か。仕方あるまい…ヴァネッサ、モルダ、ギリアム…ルネス王女エイリーエと共にグラド領内へ行き、エフラム王子の援軍に向かえ。よいな。」

「はい、どんな困難があろうとも、必ず遂行してみせます!」

「ふむ、これは大役を仰せつかまりましたな。」

「この命に代えても。」

ヘイデン様に呼ばれた3人が順々に返事をする。

「待つて、お父様。アストラも連れて行つて。」

「ターナ、だがアストラはおまえの近衛。城に残るおまえを守らねばならぬ。」

「大丈夫、私はお城の中にいれば安全よ。でもエイリーエはこれからグラドへ行くのよ。アストラがいればきっと助けになるわ。」

…まあ、グラドの事はグラドの人間が止めないとな。

「おまえがそこまで言うなら良からう。アストラ、お主もエイリーエ王女と共にエフラム王子の援軍へ向かえ。」

「はい、承知しました。」

これからしばらくはターナ姫の近衛じゃなくなるのか。結局近衛らしい仕事は今回だけだったが。

「明日の朝に出発しようと思ひます。ですから、今日は身体をしつかり休めて、明日からお願ひします。」

「わしからも言うことはない。ただ、明日に備え各々準備を怠らぬよう。」

俺達は一礼してから部屋を出る。俺とターナ姫はターナ姫の部屋へ、ギリアムさんは武器庫へ、ヴァネッサは天馬舎へ、モルダさんは教会へ、エイリーエ王女とゼトさんはフランツと一緒に客間へ、それぞれの場所に向かう。

ターナ姫と2人で廊下を歩く。このお転婆姫様は俺を1歩後ろじやなくていつも隣に立たせている。

「ターナ姫。」

「なに、アストラ？」

「俺がいない間に城を抜け出したりしないでくださいよ。俺、助けられませんから。」

「ええ、分かってるわ。でも、あの時のアストラ、かつこよかつた。」「え？…どういうことでしようか？」

かつこいいという感覚が俺にはよく分からない。凄いと思う事は多々あるが、かつこいいと思つた事はほとんどない。「助けてくれて、とつても嬉しかったわ。きっと、白馬の王子様に助けられるお姫様つて、こんな気持ちなのね。」

そこまで大層なものじやない気がする。けど、そう思われるのは案外悪い気分じやない。

「それじゃ、俺は仕度して来ますね。エイリーケ王女とエフラム王子、どつちも死なせはしません。もちろん俺も、他の皆も。全員無事でここに帰つてきますから。」

「ええ、毎日お祈りするわ。きっと神様も私達に味方してくれるはずよ。じゃあね、アストラ。」

ターナ姫の部屋の前で、約束する。負けられないな。この任務、絶対に果たす。俺も生き延びる。それ以外は成功とは言えないだろう。

4章 守るべきもの

フレリアを発つたエイリーエ王女一行は旧ルネス領を進んでいた。曰く、旧ルネス領内を南下し、セレフィユの街を通り抜けてレンバーク城へとエフラン王子の援軍へ向かうそうだ。歩調はもちろんエイリーエ王女に合わせている。と言つても、俺のペースとエイリーエ王女のペースはそう変わらないみたいだが。

今の場所を確認するため、今の場所と地図とを照らし合わせる。「エイリーエ王女、もうすこし進めばイムっていう村があるみたいですね。」

話によると、グラドはルネス領を制圧してから統治することも無く、山賊が横行してるらしい。イムの村が襲われてるとは限らないが、襲われてないとも限らない。

「そうですね。：少し歩調を早めましょうか。」

「山賊やグラド軍と鉢合わせなければ良いのですがな：」

モルダさんが呟く。援軍には早く向かいたいところだが、無駄な時間は喰いたくない。

「エイリーエ様、私に偵察の許可をいただけますか。私と天馬なら速やかに敵影の有無を確認することが出来ます。」

ヴァネッサがエイリーエ王女の前に出て進言する。確かにヴァネッサとヴァネッサの天馬：名前はたしかティターニアだつたか。なら高いところから様子を見られるだろう。

「エイリーエ王女、ヴァネッサがこう申しておりますが、どうされます？」

「ええ、ではお願ひしますヴァネッサ。でも、敵の弓兵には注意してくださいね。」
「はっ、では出発致します。この偵察の任務：必ず成功させてみせます！」

ヴァネッサはティターニアに跨つて、気合い十分に飛んでいった。

「生真面目そうな方ですね。」

「それがヴァネッサの取り柄ですから。」

ヴァアネツサなら偵察くらいでヘマをすることも無いだろう。：気合いを入れすぎて途中でバテないか心配ではあるが。引き続き進みながらヴァアネツサが戻るのを待つ。

数分後、焦った様子でヴァアネツサが戻ってきた。この先で何かあつたんだろう。

「報告します。どうやら前方の村が山賊に襲われている模様です。」

「山賊か。」

まあ、山賊は大体斧しか使えないし苦戦はしないだろうが…「さて、弱りましたな…今、目立つ行動は出来るだけ避けるべきでありますが…」

「だけど、見捨てるつて訳には行かないでしょう。」

「はい。ここは私達のルネス領です。苦しむ自國の民を見捨てるなんて出来ません。ヴァアネツサ、村人達の被害は？」

「負傷してゐる村人を確認、まだ少年のようを見えました。」

「モルダ殿、あなたの杖で助けてあげらないでしようか？」

「確かにわしの杖なら傷を治せますが、些か距離が遠すぎますな。」

あの高い山を越えての回復はモルダさんのライブの杖じや無理だ。遠くまで魔力が届くりブローの杖ならまだ出来るかも知れないが。今、手元にそんなものは無い。かと言つて山を廻つてゐる暇も無いだろう。

「エイリーエ様、是非とも私にお任せ下さい。私が少年を救出し、こちら側まで運んで参ります。」

「ま、確かにそれが最善だな。ヴァアネツサ、弓には気をつけろよ。」「分かつてゐるわ。1人だけ山賊の弓使いが見えたから。それでは行つて参ります！」

ヴァアネツサはもう一度ティタニアに跨つて山を越えて飛んでいった。生き残りはその少年だけか？
さて、ヴァアネツサが少年を救出して来る間に、俺はそこの村に門を閉めるように言つてきます。」

「ええ。モルダ殿はそのもう一つ隣の村をお願いします。」「ふむ、承知致しました。」

走つて村に向かう。村人達は誰か騎士と話しているようだ。あまり時間が無い。大声で叫んだ。

「皆さん、すぐ近くに山賊が来ています！襲われないように今すぐ村の門を閉めてください！」

「…君は。以前、セレフィユの街で会つたな。確かアストラ、だつたか？」

「セライナさん！お久しぶりです。」

村人達と話していた騎士は、2年前にセレフィユの街で魔法使いとの戦いを教えてくれた、【螢石】セライナ将軍だつた。まさか、こんな所で会うとは。

「奇遇だな。今も傭兵を続けているのか？」

セライナさんは帝国将軍。俺がフレリアに付いてることは言わない方が良さそうだ。

「…はい。小規模の傭兵团に入れさせてもらいまして。」

「そうか。こここの村人達は山賊共に悩まされているらしい。本来なら私がなんとかしてやりたいが…王都から帰還命令を受けている。直ちにここを去らねばならない。済まないが、彼らを助けてやつてはもらえまいか？」

「もちろんそうさせていただきます。…でも、やつぱり分からぬですね。」

「何がだ？」

「いえ、そもそもなんでグラードは急に戦争なんか起こしたのかつて。領地がこの有様なら尚更分かりませんよ。」

その話をした途端、セライナさんの顔が一瞬だけ暗くなつたような気がした。なんだか、思い詰めているような、憂いでいるような。

「……悪いが、それは私の口から話せることではないな。」

「まあ、そうですよね。」

「報酬は渡しておこう。これを売ればそれなりの金額にはなるはずだ。」

セライナさんは赤色の宝玉を俺に渡してきた。それを受け取つて、腰に付けた袋に仕舞う。

「それじや、俺は山賊を倒してきますんで。セライナさん、またいつか会いましょう。」

「ああ、武運を祈る。」

セライナさんに別れを告げて村を後にする。：セライナさんの様子を見る限り、この戦争には疑問を抱いているのだろう。だけどヴィガルド皇帝の命令だから従わないといけない。と言つたところか？

「中々面倒くさいな。騎士つていうのも。」

過ちを犯す主を止めるこことすら許されないのか。：他の誰かに聞かれたら何か言われそうだ。

エイリーエ王女の所に戻ると、一人の少年がエイリーエ王女と話していた。近くにヴァネッサとモルダさんもいる所を見ると、あの少年が負傷していた村人だろう。小振りな斧を背負っている。

ゼトさんも黙つてエイリーエ王女の後ろで待機している。フランツとギリアムさんは先に山賊共の相手をしに行つてるようだ。

「…俺は戦士ガルシアの子。この斧に誓つて、山賊なんかに後れはとらない！」

なるほど、見習い戦士か。でもエイリーエ王女は少し困つてているようだ。隣にいるゼトさんもおそらく少年を避難させるべきだと考へているだろう。

「まあ、いいんじやないですか。エイリーエ王女。」

「アストラ、しかしこの子はまだ子供です。戦場へ出すわけにはいきません。」

「俺が傭兵になるのを決意した時はその少年より小さかつたし、ひ弱でしたよ。ちゃんと引き際さえ弁えれば死にはしません。」

「そうですか…分かりました。口ス、あまり私達から離れないで。いい？」

「分かつた。任せてくれ！」

任してくれつて…本当に分かつてるのか？まあ、無理に突撃しようとしたら俺が止めるか。とりあえず、山賊の相手をしなければ。

「エイリーエ王女、地図によれば南方にもう一つ村があります。こつちも山賊に襲われる前に訪問しておきたいですが…」

「ではその村には私が。」

名乗り出してくれたのはゼトさんだ。確かにゼトさんなら山賊が村に辿り着く前に訪問出来るし、困まれても問題なく蹴散らしてくれるだろう。

「じゃあお願ひします、ゼトさん。後は山賊を追つ払えばいい…ですかね？」

「待つてくれ！東の方で父ちゃんも戦ってるんだ、戦いながらでもいいから父ちゃんの方も手伝ってくれ！」

そう言つたのはヴァネッサが救出した少年だ。そう言えばさつきも戦士ガルシアの子とか言つていたか。

「分かつた。じゃあこの少年の父親への加勢も…ってなんで俺が指揮を執つてるんだ。」

今更になつて氣づいて自分の頭を小突く。誰も言わないうから気づかなかつたが、本来なら指揮はエイリーエ王女か、あるいはゼトさん辺りが執るべきのはずだ。

「いや、アストラの言つた方針でいいだろう。では、私は南方の村へ。エイリーエ様達は山賊を追い払いつつ、少年の父親の加勢へ。ギリアム殿とフランツもそろそろ消耗しているだろう。」

「それじゃ、作戦開始ですね。」

作戦なんて大したものじやないが、とりあえず全員で前に出る。「フランツ、ギリアムさん、交代です！モルダさんは2人の回復を！」

「はい、お願ひします！」

「頼んだぞ。」

2人と入れ替わつて、俺とエイリーエ王女が山賊の相手をする。エイリーエ王女は砦に構えているから安全に戦えるだろう。

「どこの傭兵か知らねえが、俺達バスバ山賊団を舐めるなよ！」

そう言つて振り下ろされた斧を危なげなく躰す。確かにあの時の山賊4人よりは強いのかもしれないが、フレリアで鍛錬を積んだ俺の敵ではない。

ゼトさんが山賊の間を通り抜けて南の村に向かう。これで南の村も大丈夫だろう。

「そらよつ！」

お返しに鉄の剣で山賊を斬りつけるが、まだまだ致命傷には至らない。

「せいつ！」

続けてもう一撃、もう少しでやれそうだが、足りない。

「ぜえりやああああ！」

後ろから気合いの入った声がしたからその場に屈んだ。すると投げ斧が頭の上を通つて山賊の額に命中、止めの一撃になつた。

「よくやつた！…そういうえば名前を聞いてなかつたな。」

「おう！俺はロス、戦士ガルシアの息子、ロスだ！」

自分が戦士ガルシアの息子であるという事を強調してくる。自分の父親を誇りに思つているんだろう。

「そうか、じゃあ次も頼んだぞロス！」

ロスの方を見てそう言う。：：その奥にある高い山に山賊が一人見えた。奴らと同じバズバ山賊団とやらか、あるいは漁夫の利を狙う他の山賊団か。まあ、どっちでもいい。

「フランツ、西の山から山賊が下りてきた！そいつの相手をしてくれ！」

「はい！」

フランツが山の麓へ向かう。相手が山に籠れば攻撃が当たりにくいやが、下りてくれればまだ戦えるだろう。

「きやつ…くつ！」

エイリーエ王女の左肩に山賊の斧が当たつた。そしてエイリーエ王女がいつの間にか購入していた鉄の剣で反撃する。

「せああつ！」

俺も横からその山賊に斬り掛かる。しかしこそ山賊は倒せない。

「はあああつ！」

頭上からヴァネッサの細身の槍が振り下ろされた。槍は山賊を貫き、死に至らせた。

残りの山賊も少ない。そろそろロスの父親、ガルシアの援護に回れるが、エイリーエ王女の左肩にも無視出来ない傷がある。

「エイリーエ王女、出来れば一度下がってモルダさんに傷を治してもらつてください。あなたはこの軍の指揮官なんですから。もしものことがあつたら困ります。」

「分かりました。お願ひしますね。」

「よしロス。お前の親父さんを助けに行くか。」

ギリアムさんやゼトさんもそろそろ戻つてくるだろう。エイリーク王女には一旦下がつてもらう。

「おうっ！」

高い山を回つて反対側に移動する。そこには森を巧みに隠れ回るアーチャーに悪戦苦闘する一人の戦士がいた。彼がロスの父親、ガルシアさんだろう。

「やはり、腕が、衰えたか！」

鉄の斧を片手で振り回す腕力は物凄いが、アーチャーもすばしつこくそれを躱す。

「父ちゃん！」

「ロス!? 何故お前がここに！」

ガルシアさんは驚いたようにロスの方を向く。まあ無理もない。ヴァネッサに息子を救出してもらつたと思ったらまた戻つてきたのだから。

「はあああああ！」

その間に俺はアーチャーに接近、剣を振り上げるが、木を盾にして防がれる。その後撃たれた弓矢が脇腹に刺さる。

「このつ…！」

今度は一気に近づいて右手でアーチャーの胸ぐらを掴む。

「ちつ…！」

「だあっ！」

舌打ちをするアーチャーの足を引っ掛けでその場に倒す。そしてそれに剣を突き立てて止めを刺した。

「まあ、後はゼトさん達に任せよう。」

森から出る。するとロスの肩を掴んだガルシアさんがそこで待つていた。

「済まない、息子が世話になつた。わしはガルシア、ロスの父だ。」
ガルシアさんはそう言つて俺に頭を下げる。

「いえ、特別なことは何もしてません。礼なら後でエイリーグ王女に。」

「…なんと、エイリーグ王女が？」

「はい、それじゃあ合流しましよう。…つと、俺が名乗つてませんでし
たね。俺はアストラ、生まれはグラドですが今はフレリアの人間で
す。それと、ガルシアさんとロス以外に生存者は？」

「いや、残念ながら生き残つたのはわしとロスだけだ。」

「あいつら、女だろうが子供だろうが容赦しなかつた。…許せねえ。」

ガルシアさんは俯き、ロスは怒りで腕を震わせている。…俺もシリ
バ村が山賊に襲われることなんて想像もしたくない。

「まあ、とりあえず合流しましよう。話はそれからです。」

俺達は急ぐこともなくゼトさん達と合流する。丁度この山賊達を
仕切つっていた奴を仕留めたところのようだ。

「ゼトさん、お疲れ様です。こつちもロスの父親、ガルシアさんと合流
しました。」

「なに、ガルシア殿？」

「知り合いでですか？」

「いや、顔見知りではないが、ガルシア殿は十年前までルネス軍の部隊
長を務めておられた方だ。恐れを知らぬ勇猛な戦士として、私が騎士
見習いだつた頃、よく噂を耳にした。」

なるほど。ロスが自分の父親を誇りに思う理由が分かつた。

「ゼト！ アストラ！ …どうやら山賊は追い払えたようですね。そちら
の方は？」

エイリーグ王女が走つてこちらにやつて來た。モルダさんに傷を
回復してもらつたところだろう。

「この方はガルシアさん、ロスの父親です。」

「あなたがエイリーグ王女か。わしの息子を助けていただき、ありが
とうございました。」

「いえ、そんな…」

……この先の話は俺が参加する必要は無いだろう。

「すみません。一応、襲われた村の様子を見に行つてきます。もしかしたら、まだ奇跡的に生存してる人がいるかもしないので。」

「あ、はい。お願ひします。」

俺は襲われた村に移動を開始した。

「……これは酷いな。」

襲われた村に着いた。路上にあるものは散り散りになつていて、家屋の窓や扉は全て破られている。

家屋の一つ一つを訪ねる。しかしそこにあるのは散らかつた家具と血に濡れた死体ばかり。それでも俺は僅かな可能性に繋り、全ての家屋の中を見て回る。

音がした方を見ても、見つかるのはネズミばかり。やはり生存者0かと諦めた時だつた。

「……うつ……ううつ。」

子供の啜り泣く声。最後に訪れた家屋で聞こえた。その声の発生源は、ボロボロのクローゼットからだつた。

クローゼットを開ける。その中にいたのはまだ10にも満たないであろう少女だつた。その少女は俺を見て、一層怯えた様子で蹲る。
：返り血を浴びてるから、怯えられるのも仕方ないか。服で肌に浴びた血を拭つて、少女の前に屈む。

「心配するな。兄ちゃんは山賊を追つ払つたフレリアの兵士だ。」

「……え？」

「ごめんな、村を助けてやれなくて。君のお母さんやお父さん、それに村のみんなを死なせてしまつて。……立てるか？」

「……あ。」

少女はいつの間にか足首に怪我を負つていて、立ち上がる出が出来なかつた。

「ダメみたいだな。……よいしょつと！」

俺は少女を抱え上げる。安心させる為にその頭を撫でながら村を出て、再び山沿いに南へ下る。

「あ、見つけました。」

「アストラ！」

南からフランツとヴァネッサが向かってくる。フランツは俺がミュランに向かつてる最中にすれ違ったルネス騎士の見習いで、エイリーク王女とゼトさんと一緒にルネス城から脱出したらしい。

「この娘を村で保護した。ヴァネッサ、足首を怪我してるみたいだからモルダさんの所に送つてくれ。」

「ええ、分かつたわ。」

ヴァネッサに少女を預けて、ヴァネッサと少女を乗せたティターニアが羽ばたいた。

「…少し走り回り過ぎて疲れたな。」

「良ければ、後ろにどうぞ。」

「悪いな。」

フランツの後ろに座つて、エイリーエ王女達と再び合流した。

ガルシアさんが共に来てくれるらしく、ロスも着いてくるという話になつた。噂にされる程の実力者が味方になつてくれるのは頼もしいし、ロスも今はまだ見習いだが、いずれきっと強く成長してくれるだろう。

少女は近隣の村に引き取られることになつた。その村の村長が一晩もてなしたいと言つたが、エイリーエ王女はそれを丁重に辞退した。

そして日が暮れ、野宿をすることになつた。食事を済ませたが、天幕に入つても眠れないでの外の空気を吸うことになった。

「あの村は無事かな…」

ルネスのある村に2週間程留まつたことがある。俺は早く村を出るつもりだつたが、いたずら好きな子供にまだ中身の残つていた俺の財布を隠されて結局2週間も残ることになつた。

その間に泊めてもらつた家のお爺さんは物凄い弓の名手だつた。そのお爺さんの孫娘はとても泣き虫で、そのいたずら好きなヤツに何度も泣かされていたが、お爺さん譲りの弓の腕前は凄かつた。

「…ん？」

俺の真横を誰かが通り抜けた。暗くて見えにくかったが、そいつの横顔には見覚えがあつた。そう、いたずら好きの子供だ。

「おい、コーマ。お前なんでこんな所にいるんだ。」

いたずら好きのヤツ、コーマは俺の方をみてぎょっとする。

「げ、アストラじやん。こんな所で顔見知りに会うとは思わなかつたな。」

コーマの左手を見ると、エイリーエ王女が着けていたものとそつくりな腕輪、ではなくエイリーエ王女が着けていた腕輪そのものを持っていた。

「ちよつと待て。左手に持つてるそれを寄越せ、というか返せ。」

「やだね。」

コーマは全力疾走で逃げ出した。

「おい、待てっ！」

コーマを追いかけるが、昼の疲れが溜まつているのと、あいつはやたらとすばしつこいのがあつて振り切られてしまつた。

「アストラ、ここを1人の少年が通らなかつたか？」

いつの間にか後ろに来ていたのはゼトさんだ。

「はい。エイリーエ王女の腕輪が盗まれてるようだつたので取り返そうと思つたんですが、逃げられてしまいました。」

「そうか。明日はあるの少年を捕らえ、エイリーエ様の腕輪を取り返す。もう身体を休めておくといい。」

……高価な腕輪なのは分かるが、援軍に向かうのを一時中断してでも取り返す必要がある物なのか？まあいいか。ゼトさんの言う通り、天幕に戻つて休むとするか。

5章 ボルゴ峠の山賊

エイリーエ王女の腕輪、もといコーマの行方を探すべく、三手に分かれて近隣の村から聞き込みをしている。

一つ目のグループはエイリーエ王女、ゼトさん、フランツ。

二つ目のグループは、ギリアムさん、ガルシアさん、ロス。

そして三つ目のグループがモルダさん、ヴァネッサ、俺だ。

容姿や服装の特徴、そして俺が知っているコーマの情報を伝えて、俺たちのグループはコーマのいた村、山奥にあるラクの村を目指して、到着したところだつたが：

「む、これは…」

「酷い有様ね…」

「ここも山賊にやられたのか…」

村は無残に焼かれ、もはやどれが誰の家だったのかも分からぬ。

「とりあえず、生存者を確認しないとな。」

イムの村とは違つて山賊に襲われてから数日経つてゐるような状況だが、たとえどんなに低い確率であつても生きているかも知れない命を見捨てる訳にはいかない。

荒廃した村の中を歩く。三人で手分けしてそれぞれの家屋の中を調べるが、やはりあるのは死体だけだった。

「ん…？」

よく見ると、それぞれの家屋の玄関前に小さな花が添えられてゐる。

「全滅…つてわけじやなかつたんだな。」

コーマがこんなことをするとは少し考えにくい。だとすれば…

モルダさんとヴァネッサと合流する。村の中に生存者はいなかつた。集合場所に戻り、それぞれの情報を擦り合わせる。

俺達のグループ、そしてギリアムさん達のグループは情報を得られなかつた。しかしエイリーエ王女達のグループが、近くの村でコーマらしき少年の話を聞いたようだ。

「村人の話によると、ボルゴ峠の付近にバズバ山賊団の根城があるよ

うです。そしてそこにエイリーエ様の腕輪を盗んだ少年、コーマと特徴が一致する人物が入つていったのを見た者もいたようです。彼の故郷、ラクが山賊に滅ぼされていったということは、生き延びる為に自らも山賊に堕ちたという可能性も挙げられます。」

「……」

「本当に？ 彼女が生きていながら、コーマが山賊に身を落とすなど有り得るだろうか。」

「山賊…ですか。村を焼き、物を奪う…あのような蛮行が我が国で行われていたなんて。」

「平時であれば我々騎士団が賊を討伐し、領内の村々を守つてきました。ですが今、ルネス軍は崩壊し、領土は治める者も無く野放しになっています。」

「グラードの方も特に統治してる様子も無いようですし。まったく、なんで俺の故郷の国はわざわざ戦争なんぞ起こしたんだか…」

何回考へてもやはりそこが謎だ。領土が欲しくて戦争を起こしたのならちゃんと統治してるだろうし、そもそもそれ以外に戦争を起こす理由が思い当たらない。セライナさんが疑問を抱くのも当然だ。

「あ……あの……」

声がした。…懐かしいな。結局彼女がコーマを説得し、盗んだ俺の財布を返してもらつたのだ。…中身は半分になつていたが。

「ネイミー！」

声の主はラクの村で俺を泊めてくれた家の娘、ネイミーだつた。

「あ、アストラさん！ 良かつた…あの、皆さんはアストラが入つてゐる傭兵団の方々…ですか？」

「アストラ、その方は？」

「この娘はネイミー、丁度俺たちが追つてゐるコーマの幼馴染です。」

「その、コーマのことなんですが…お願いします、コーマを助けてください！ 私、危ないから止めてつて言つたのにコーマが一人で…」

「落ち着け、ネイミー。最初からちゃんと事情を話してくれ。ゆっくりでいい。」

潤んだ瞳で訴えてくるネイミーの背中を擦り、落ち着かせる。泣き

虫はまだ治つていないうようだ。

「そ、その…村が焼かれてしまつて、それで私とコーマの二人だけが生き延びて、その、彼が山賊に奪われた宝を盗み返してやるんだつて…この先にある山賊団のアジトに…私、止めたんですけど…聞いてくれなくて…コーマまでいなくなつてしまつたら…私…うつ…ぐすつ…」

あの野郎…底なしの馬鹿だな。折角助かつた命なのにそれを捨てるようなことを。ネイミーを守ることが優先だらうが。

「互い目的は同じ、エイリーグ様、どうします？」

事情を知らないネイミーの前だ。エイリーグ王女が王族であることは隠した方がいいだらう。王女と呼ぶのは控える。

「分かりました。私達がその方を助け出します。ですからどうか泣かないでください。」

「ほ、本当ですか…？お、お願ひします…！私、お金はあまり持つていですけど…」

「いや、問題ない。むしろその少年を捕まえること自体が報酬、と思つてもらつて構わない。それに、ルネスに蔓延る山賊団は討伐しておく必要がある。」

ゼトさんがポケットからなげなしのお金を取り出すネイミーを制止する。

「え…？それって…」

「ん、まあアレだ。俺達もコーマに少し用事があるんだよ。つと、それじやあそろそろ山賊共のアジトに突入しましようか。」

「そ、それじゃあ…私も何か手伝えることはないでしようか…？その…アストラさんは知つていると思うんですけど、子供の頃はよくおじいちゃんと狩りに行つていたので…少しだけ弓が扱えます。」

「本当か？」

「は、はい…」

ネイミーの瞳を見る。確かにそこには決意の欠片も見られるが、そのか弱い瞳の奥底にあるのは、恐怖に見える。

「そうか、では山賊団のアジトに突入したら、後方から援護を…」

「ゼトさん、その前にネイミーに確認しておきたいことがあります。」

「なんだ、アストラ。」

ネイミーの目の前に立ち、少し屈んでネイミーを目を直視する。

「え…？あ、あの…アス、トラ…さん？」

「ネイミー、お前がこれから相手するのは人間だ。たとえお前の村を焼いた極悪人であつても人間。お前は人間を相手にして……人間を傷つけ、あるいは殺してしまう覚悟はあるのか？」

俺も初めて受けた仕事で、山賊を殺すことに対する恐怖を覚えた。今はもう慣れてしまつたが、俺とネイミーは別人だ。優しい女の子であるネイミーは、人を殺すということに対してのしかかる重みに耐えられるかどうか分からぬ。

「う、うう…」

「その覚悟が無いならついて来ない方がいい。山賊のアジトに突入したら、そこはもう戦場なんだ。殺るか殺られるか、話し合いなんかはほとんど通用しない。そんな場所に入るには覚悟がいるんだ。戦う覚悟をしないと、無駄死にしてしまうだけだ。」

「……」

ネイミーは俯いて黙り込む。少し意地が悪いと思われるかも知れない。それでもゼトさん達が何も言わなのは、これは必要なことであるからだ。覚悟が無いと死ぬ。戦場では当たり前のことだ。

「分かりました。私、山賊と…戦います…！そして、皆さん之力になります…！」

「うん、覚悟が出来たならそれでいい。じゃあ行こうか。」

ボルゴ峠付近に移動する。そこには一際目立つ建物があつたから、山賊のアジトは間違いないそこだ。隠れる必要は無い、どうせ近づいた時点ではされているはずだ。

アジトの正面から全員で突入し、周囲の状況を確認する。北側に扉、そして目の前にはいかにも壊れそうな状態の壁が二箇所ある。相手は山賊、山賊が使うのは斧、斧は槍に強く、剣に弱い。

「俺とネイミーの二人で扉から攻めます。皆さんは二箇所の壊れそうな壁を分かれて崩してください。それと、山賊は斧を使うので剣使い

が偏らないようにしてください。それぞれ別の場所から突入するの
で、突入してから合流するまでは誰かが指示をお願いします。」

「確かに合理的だな。よし、向かつて左側の壁を崩すのはわしに任せ
ろ！」

「では右側は俺が崩す。今回、槍を扱う俺に出来ることは少ないだろ
うからな。」

ガルシアさん、ギリアムさんが崩れそうな壁に向かつて武器を振
るつたり、体当たりしたりする。

「しかしアストラ、君はいつも的確な判断をするな。兵法はフレリア
で習ったのか？」

ゼトさんが感心したように言つてくる。うーん、兵法なんかあまり
知らないけど。

「いえ、習つたりしたことは無いですね。ただ、皆を死なせないよう
に、かつ素早く、確実な方法を見つけようとしているだけなので。」

「なるほど、大したものだ。では済まないが作戦に関しては毎度君が
考えてほしい。その作戦に穴があれば私が補う。君の作戦はルネス
の軍師にも劣らない。くれぐれも頼んだぞ。」

「了解しました。」

俺のこの軍師的な立場は早くも確定してしまつたようだ。またいつか兵法書を読む必要がありそうだ。崩れそうな壁を皆に任せて、北側にある入り口にネイミーと向かう。

「鍵が掛かってるな…」

山賊のアジトに鍵が掛かっているとは思つていなかつた。だと言
うのに何も言われなかつたのは、ゼトさん達にとつても想定外だつた
ということか。良く考えたらここは使われなくなつた砦の跡なのかも
しれない。

「あの…どうしましよう…?」

「扉を破ろう。扉 자체は頑丈に出来てるけど、蝶番の所が脆くなつて
る。剣で何回か叩きつければ壊れそうだ。」

「そう言つて蝶番に狙いを定める。…人の気配だ。」

「階段から足音がする。ネイミー、一応準備しておいて。」

「は、はい……」

剣先を階段の方に向けて、ネイミーも弓に矢を番える。足音が近づく。辛うじて聞き取れているが、とても音が小さく、足音を殺しているのが分かる。

「よつ、らせつ……と。へへつ誰も気付いてねえな、山賊なんて俺にかかりや軽いもんだぜ。さてと、まずはこつちのお宝を……」

聞き覚えのある声、ずっと追っていた声。つまりコーマだ。目が合つた。コーマは目を逸らすが、逸らした先にはネイミーが。

「昨日ぶりだな、コーマ。」

「そ、そうだな。アストラ。というよりネイミー、お前なんでここにいるんだ？」

「説教は後だ。：お前の持つてるそれは盗賊の鍵か？」

盗賊の鍵、それを使うことで扉や宝箱の鍵を開けることが出来るらしい。が、その鍵の使い方は自分で会得するしか無いらしい。つまり盗賊の才能がないと使えないという事だ。

「そうだけど。」

「そうか、じゃあここ扉を開けてくれ。」

「へいへいと。アストラがなんでここにいるのかも分かんねえけど、まあ言われなくとも開けてるからな。」

コーマがドアの鍵穴に盗賊の鍵を差し込んで、カチヤカチヤと音を鳴らしながら弄っている内にガチャリと鍵の開く音がした。

「どうやつてるんだ……それ。まあいいか。ちよつと待てよ……」

上半身だけを部屋に入れ、中に山賊がいないか確認する。

「奥の部屋に一人だけだな。コーマ、お前何か武器使えるか？」
「おう、コレなら使えるぜ。」

コーマが懐から出したのは少し小振りの鉄の剣だ。俊敏な動きも出来るし俺のと同じ大きさの剣よりは相性がいいだろう。

「そうか、俺がその山賊を引き付ける。ネイミーは後ろから援護を頼む。コーマは隙を突けそしだつたら背後に回つてやってくれ。」

「わ、分かりました……！ 頑張らないと……」

「おいおい、そこまで手伝う気はないぜ。」

「お前な、ネイミーは安全な村で待つても良かつたのに、お前を助ける為にここに来たんだぞ。…まあいい。話してる時間も無駄だ。言つた通りに行くぞ。」

「…ああ、分かつたよ。やればいいんだろ。」

山賊のアジトの中に入り、わざと大きな足音を鳴らす。

「てめえ、どうやつて入つてきやがつた！」

「お前に話すと思うか？ 来ないならこつちから行くぞ。」

山賊の右肩を狙つて抜剣しつつ斬りつける。が、山賊が思ったよりも素早く動いたから狙いが少しずれ、刃は山賊の上腕を掠める。

「ちつ…頭に報告だ！」

「そう簡単に逃がすか！」

後ずさる山賊に追い討ちをかける。脇腹に掠つた程度だったが、簡単に逃げられないことを相手に悟らせるだけで十分だ。

「ぶつ殺してやらあ！」

山賊が鉄の斧を振り下ろす。こんな力任せな振り方なら避けるのは容易い。

「え、援護します！」

ネイミーの声が聞こえたので屈んで弓矢の通り道を作る。頭上にネイミーの弓矢が飛び、山賊の胸に突き刺さる。

「あぐっ…まだ仲間が隠れてやがったのか…」

「おっさん、隙だらけだな。」

矢が刺さった場所を押さえる山賊は背後にいるコーマの存在に気づかないまま首を突かれ、息の根を止めた。

奥の部屋に入る。やはりこの部屋にいたのはさつきの奴一人だけだつたようで、後は宝箱が3つ置いてあるだけだ。

「お宝発見、中身は…つと。鉄の槍に手斧に鉄の剣、武器ばつかじやねえか。まあ高価なのは下にあつたからそういうことか。」

後でエイリーエ王女の腕輪を返してもらわないといけないな。

ここから繋がる部屋を見る。さつき来た入り口の他には2つ。入つた方向から見て右側、手前側と奥側に1つずつで、奥側の扉には鍵が掛かっている。手前側はガルシアさんが見えるので左側の壁を

崩した先にある部屋だろう。見たところロスの手が空いているので手招きして呼び寄せる。

「ロス、そつちの部屋は何があつた？」

「そうだな…待ち構えてた山賊は一人だけで、柱が一本あつた。あと左側に鍵の掛かつた扉があつて、奥にまた壊せそうな壁があつたから父ちゃん達はそれを壊そうとしてるところだ。」

「そうか。…コーマ！この先にある扉も開けてこい！」

「仕方ねえな。ていうかこいつらアストラの傭兵仲間か？傭兵にしちゃあ随分としつかりした装備だけど。」

嫌々でもちゃんと動いているのは、少しは罪の意識があるのか、あるいはネイミーの前だからってだけなのか。コーマが扉を開けた先是：右側の壊した壁の奥だつたようだ。今度はヴァネッサに話を聞く。

「ヴァネッサ、そつちは何があつた？」

「山賊が一人と、宝箱が一つだけよ。山賊が鍵を持っていたから、その宝箱を開けたら手槍が入つていたわ。その手槍はフランツが持つてる。」

「分かつた。壁に壊せそうな部分はあつたか？」

「いいえ、見た限りは壁はしつかりしていたわ。」

なるほど。となれば次の経路はガルシアさんが崩そうとしている壁とこの部屋の奥にある扉か。多分位置的に二つの経路は同じ部屋に繋がつているだろう。もしかすると扉に向こう側が見える窓があるかもしれない。少し見てみるか。

「右側の部屋のグループは左側の部屋のグループと合流してください！」ガルシアさんが壁を崩したら突撃せずにその場で山賊の相手を！」

そう言つて、ついでにコーマを呼び戻し、俺、コーマ、ネイミー、ヴァネッサの4人で奥の扉の前に移動する。思つた通り、窓から扉の奥の様子が見れた。ガルシアさんが壁を崩し、手斧を持つた山賊と戦闘中。他に見える限りでは盗賊が一人、アーチャーも加勢しようとしている。

「ヴァネッサはアーチャーが一人いるから下がれ。そしてコーマは扉

を開けてくれ。俺がアーチャーを叩く。ネイミーはコーエマの後ろに付いて、山賊や盗賊が近づいたらコーエマの援護だ。」「分かつたわ。」

「はい……！」

「それじゃあ、扉を開けるぜ。」

コーエマが扉を開ける。俺は真っ先にアーチャーに突撃し、先制攻撃を仕掛けた。

「なつ、なんなんだお前らあ！」

「ずあつ！」

問答無用で剣をアーチャーに突き刺す。急所は外したが、間合いを取る隙さえ与えずにもう一度斬り裂くことで息の根を止める。山賊の方もほぼ同時にエイリーエ王女が止めを刺した。

盗賊が俺に接近して何かを盗もうとする。持ち物の中で一番高価なのはアーマーキラーだが、武器を盗むのはまず不可能。となれば：「ふつ。」

「させるかつ……傷薬が盗られたか。」

あと2回分残っていたが、盗賊が傷薬を盗んでいる内に攻撃を叩き込む。盗賊だけあってやたらとしばしつこく、俺の剣は盗賊の外套を斬り裂くだけに終わつた。

「せやあつ！」

俺の攻撃の後、隙も無くフランツの槍が盗賊に突き刺さる。

「アストラから盗つたモン、返してもらうぜ？」

盗賊が俺から盗んだ傷薬をコーエマが盗み返す。

「ぬうん！」

そしてギリアムさんの一突きがフランツの槍で身動きがとれない盗賊の心臓を穿いた。

「そらよつと！」

コーエマが素早い動きで山賊を翻弄し、すれ違いざまに切り傷を入れていく。

「でりやあああ！」

そしてコーエマに気を取られている山賊の急所に口スが投げ斧を命

中させ、もう一人部屋に残っていた山賊も難なく撃破。この部屋の奥にある部屋で最後のようだ。どこの貴族の屋敷から盗つてきたのか、随分と立派な椅子があり、ボロい壁や汚い格好をしている山賊と見比べると違和感しか感じない。

「ちつ……りやあ受ける仕事を間違えたな…」

どうやらその部屋にはもう一人、傭兵がいるようだ。そこの椅子にふんぞり返っている山賊の頭領と思しき男に雇われたようだが、同じく傭兵だつた身としては、雇われる相手ぐらい選べと思わずにはいられない。

頭領らしき男が動く様子は見えない。あれほどの椅子なら、戦闘する際に有利に立てるだろう。盾代わりにしたり、椅子を盾にしている間に傷に布を当てるくらいの応急処置を加えるのも可能だろう。傭兵は俺とヴァネッサで相手をする。俺が胸ぐらを掴んで引き寄せ、腹部に剣を突き刺したのが致命傷になつたようだ。

「ち……くしょ……こんなになるなら……もうちょ……マトモな仕事を受けたりや……がはつ…」

「後一人ですね。多分ここの山賊達を纏めていた頭領か何かでしよう。」

「まずは僕が様子を見てみます。」

そう言つてフランツが前に出る。所詮山賊だし、腕力は強いかもしないが正確に斧を振るえるといふことも無いだろう。フランツが劣るような相手ではないはずだ。

フランツが剣を振るうが、山賊は籠手のような防具でそれを防いだ。獣の皮を縫い合わせただけの粗雑な物のようだ。防御と言つても大してダメージは減らせていない気がする。しかし、本人がかなり頑丈な身体をしているようで、特に怯む様子もなかつた。

「ふん、この山賊団の頭、バズバ様をその程度の力で倒せると思つたか！」

それに対しても山賊のバズバが取り出したのは鋼の斧、上質な金属で出来ているが、その分重く、攻撃を当てるには相応の技量が必要だ。バズバが振り下ろした斧をフランツは馬を上手く操つて回避しよ

うとしたが、思つたよりもバズバの斧が速く、フランツの鎧の胸の部分に大きな傷を付ける。相当な衝撃を受けたようで、フランツは危うく落馬しそうになるが、なんとか堪え切つた。

「ぐつ…」

「フランツ、無茶するな。モルダさんに回復してもらえ。今度は俺が…」

「次は私に行かせてくれませんか？」

エイリーエ王女が鞘に入つた剣に手を添えている。

「エイリーエ様？ フランツでのダメージなのに、もしエイリーエ様が攻撃を受けたらかなりの重傷に…」

「でも…やはり皆が戦つてゐるのをただ見てゐる訳にはいきません。ターナ姫といい、エイリーエ王女といい、そして妹といい、ネイミーもそうだが、俺は年下の少女の頼みというのを断われない性格らしい。

「…回避に専念してくださいね。ゼトさん、エイリーエ様をいつでも救出できるようにしてください。」

「分かつてゐる。エイリーエ様、くれぐれも注意してください。」

「はい。それでは…」

エイリーエ王女が剣を抜き、バズバに攻撃を仕掛けた。そしてバズバの反撃を素早く躱し、刺突と斬撃を織り交ぜた連続攻撃を仕掛ける。回避、攻撃、回避、攻撃。今度はバズバの斧を剣で受け流し、その勢いを乗せたまま反撃した。

「凄いな…」

「エイリーエ様はこの戦争が始まる以前から、エフラム様と剣の稽古をなさつていました。エフラム様がご使用していたのは槍でしたので、エフラム様の槍を相手して、いたエイリーエ様にとつて山賊の斧など、相手するのは容易な事なのです。」

ゼトさんが説明してくれる。なるほど。剣はそのリーチの差故に槍に弱い。しかし、小回りの効きやすさ故に一撃の強力さを求め動きが鈍重になる斧に対しても有利だ。不利な相手に向かつてずっと訓練をしていたのなら、有利な相手に遅れを取る理由は無いということ

か。

「これで決めます！」

エイリーエ王女は大きく後方に跳び、勢いをつけて山賊の急所、首を通る動脈に剣を突き刺した。

「この俺様が…なんてこつた…」

勝負あつた。山賊団を討伐し、イムの村とラクの村、そしてその村の人々の仇を討つた。

山賊のアジトの中で今回の事態を整理する。コーマがこのアジトに潜り込んだのはネイミーの母親の形見である手鏡を取り返すためだつたようで、ネイミーはそれを見て泣きながら喜んでいた。このバズバ山賊団も、陥落したルネス領の中でも特に大暴れしていた山賊団のようだ。ここでこの辺りの山賊は粗方片付いたことになるだろうが。まだ山賊がゼロになつたわけじやない。どうにか手を打ちたいところだ。

そして、肝心のエイリーエ王女の腕輪は…

「おいコーマ、ちょっとこっち来い。」

「アストラ、ネイミーが中々泣き止んでくれねえんだ。どうすりや…」

「エイリーエ様の腕輪を返してもらおうか。」

「な…なんのことだよ？」

この期に及んで誤魔化そうとする気か、こいつは。俺はコーマの胸ぐらを掴み、もう片方の手で剣の柄を握る。

「しらばつくれるな。」

「わかつた！わかつたから！すぐ返すから！」

俺が手を話すと、コーマは懐からえいエイリーエ王女の腕輪を取り出し、俺はそれを受け取る。

「金が欲しいんならもつと真つ当な手段で稼げ。例えば、山賊団討伐の依頼を受けるとかな。」

「そんなの無理だつての。俺一人じや殺されて終わりだ。」

それとなく山賊をなんとかしてくれないか持ちかけたが断わられた。まあコーマ一人じや無理か。そこにネイミーが加わつたとしても出来るとは思えないし。エイリーエ王女は…ここにはいないよう

だ。ゼトさんがいたので腕輪を渡しておく。

「ゼトさん、腕輪を取り返しました。」

「よくやつた。では先を急ぐぞ。我々に立ち止まつている暇は無い。」

「はい。了解しました。」

全員が装備を確認する。フランスの鎧の傷もまだ問題ないとのことだ。

「ちょっと待つてくれよ！」

アジトを出て再びグラードに向けて出発しようとこころでコーマに呼び止められる。その後ろにはネイミーも立っている。「どうしたコーマ。」

「なあ、アストラつて傭兵だつたろ？ならあんたらつて傭兵団だよな？俺達も連れて行つてくれよ。もう帰る村も無いし、働くにしても今はどこも戦だ。俺は鍵開けとか出来るし、腕には自信があるぜ。な、いいだろ？」

「あの…私も、弓での援護なら出来ますので…お願いします…！」

「…って言つてますけど、どうします？」

「その覚悟があるならエイリーエク様に許可を願うがいい。ただし、我々の任務は楽なものではない。足手まといを連れて行く余裕はないぞ。」

「望むところだぜ。あんたらに俺達がいてよかつたつて思わせてやるからな！」

「ありがとうございます…！」

エイリーエク王女は二人の加入を快く受け、コーマとネイミーが俺達の軍に加わった。二人は俺達を完全に傭兵団だと思つてゐるようで、なぜ自分達とあまり年が変わらないエイリーエク王女が傭兵団を率いているのか気になつてゐるようだ。コーマが色々と予想を立てるが、傭兵団という大前提を変えない限りバレることはないだろう。

6章 異形の者たち

腕輪のことも一件落着し、再びエフラム王子への援軍の為に南下する。なるべく人目につかない道を選んだ成果か、未だにグラド軍との接触はない。

もうすぐザツハという地域にある古森に入る。俺は今、輸送隊の馬車の中で食糧や予備の武器の数を確認しているところだ。
「森を抜ければ国境のセレフィユまでもうすぐだし、そこまでは物資も問題ないだろう。…うん？」

馬車が止まつた。小休止を挟むにはまだ早い気がするが。馬車から降りて先頭に向かい、どうなつているのか見に行く。グラド軍と鉢合わせたか、あるいは賊と遭遇したのか。どちらかだとは思うが。「行軍が止まつたようですが、一体どうしたんですか？」

「いえ、あちらに人のような影が見えるのですが…どうやら人ではないようです。」

「あれですか。…確かに、人とは思えませんね。」

人ではない。熊や猿でもない。敢えて例えるなら、腐敗した人の死体が立つていてるかのような…そんな姿をした動物を俺は知らない。「少し様子を見てきます。」

「相手の正体は不明だ。十分に注意していけ。」

「はい。」

その影の下へと走つて行く。近づくほどに、その正体はさらに分からなくなつてくる。

「本当に腐つた死体が歩いてるのか…？」

肉体が腐敗して爛れ、肋骨が露出している死体がその場を徘徊するように歩き回つていた。歩く死体…いや、まさかな。

何百年も昔の話。このマギ・ヴァル大陸は魔王の脅威に侵されていた。誰もが知つてゐる歴史の話だ。その魔王の下僕たる魔物の中でも最下級、死んだ人間の体を操つて作ると伝えられている魔物。「ゾンビなの…？」

魔王はグラド、ルネス、フレリア、ジャハナ、ロストンにそれぞれ

一つずつある【聖石】で封印され、その配下である魔物もそれで姿を消したと伝えられているはずだ。何故今になつてそれが：

「グア…ア、…ア、…」

まずい、気付かれた。呻くような声を上げながら俺の方へとにじり寄つてくる。

「くつ…せああつ！」

ゾンビが接近したところを狙つてゾンビの首を切り落とたが、ゾンビは止まらずに前進を続いている。

「マジかよ…！」

動きは鈍いし体も脆いが、首を切つて死なないんじゃあどうすればいいのか分からない。

「不淨なる魔物よ、退きなさい！」

若い男の声とともに、目の前のゾンビの体が砕け散つた。今のは光魔法の攻撃か？

「大丈夫ですか？」

ゾンビを倒した修道士がこつちに駆け寄つてくる。橙色の癖が強い髪型をしている。

「俺なら大丈夫です。あなたは…？」

「はい。私はアスレイと申します。旅の方、ここは危険です。私は神殿の命を受け、魔物の浄化に当たっていますが…」

「俺一人じゃないんです。話なら仲間も集まってるところでお願いできますか。」

アスレイと名乗った修道士を連れてエイリーケ様達の所に行き、全員を集めてアスレイさんの話を聞く。そして、あれの正体が本当にあのゾンビだったこと、そしてルネスの各地で魔物が出現していることが伝えられた。

コーマに木を登つて周囲を見渡してもらうと、ゾンビ以外にも歩く骸骨スケルトン、浮遊する目玉ビグル、そして大型ゾンビのマミーの姿が確認できたようだ。

「エイリーケ様、魔物が向かつてきます！」

どうやら魔物達が俺達の存在を認知したようだ。方々にいる魔物

達が俺達の方に向かってくる。

「と、とにかく応戦！どんな攻撃をしてくるか分からないから、動きを掴めるまでは魔物1体に2人、2体なら3人で相手を！あと、近隣の村に門を閉めるように言つてください！」

武器を抜いて迫り来る魔物達に応戦する。魔物の軍勢はその大半が最下級の魔物だと言われるゾンビとスケルトンだが、その力は山賊やグラド軍の兵にも劣らないもので、おまけに首を落としたり胸を貫いたりしても死ないので非常に厄介だ。

「ガルシアさんっ！」

「ふんっ！」

ガルシアさんと協力してゾンビの四肢を切断し、移動する手段と攻撃する手段を奪う。スケルトンの方も胴体を碎くことで動けなくななるようだ。ビグルは遠距離から魔法を撃つてくるので容易には近づけないが、隙を見て接近して目玉を潰せば倒せる。

「あの、アストラさん。」

「どうかしましたか、アスレイさん。」

「南の村に私の仲間がいるので、彼女の援護をどなたかに頼みたいのですが…」

南の村か。今俺がいる場所とその村の間には川が渡つている。そして、ここから直接その村に行ける橋がないから、東側の橋を渡つて回らないと行けないと云うはずだ。

「分かりました。俺が…いや、ヴァネッサに任せた方が早いか…？でも天馬騎士は魔法に対する防御力が高いからビグルに対して有利に出られるし…だが、俺が行くと遠回りになるしな…」「なに、簡単な話だ。」

「ガルシアさん？」

「見ていろ。…ぬうん！」

ガルシアさんが川の側にあつた古木に斧を叩きつけると古木が川に向かつて倒れ、向こう岸へと渡る橋になつた。

「そんな手が…」

「地面だけが道ではないぞ、覚えておけ。」

「…それじやあ、俺が南の村にいるアスレイさんの仲間の援護へ向かいます。」

「お願いします。」

「ではわしはまた化け物共を蹴散らすとするかな。」

村に向かうまでに2体のスケルトンが襲ってきたが、片方は胴体を砕き、もう片方は腕を挽いで人を傷つける力を奪う。そして間もなく南の村に辿り着いた。

村の門をくぐつてすぐそこにいたのは紫色の髪の女性だつた。感情を読めない無機質な瞳が俺の姿を捉えている。

「すみません、アスレイさんの仲間だという方を探しているのですが。」

「…」

「えーっと…聞こえます？」

「私が見たところ、あなたは新鮮です。どうやらゾンビではないようですね。」

「いや、見れば分かるでしよう。どんな判断基準ですかそれ。…あなたがアスレイさんの仲間ですか？」

「はい、現在私とアスレイは協力関係にあるので、その認識で間違いありません。」

「俺はアストラ。アスレイさんにあなたの援護をするように頼まれました。」

「そうですか。ではこの村の門を閉めるように伝えておきますので、私もアスレイとあなたに加勢しましょう。」

「分かりました。…あなたの名前は？」

「私はルーテ。卓越した才能を持つ稀代の魔道士です。ゾンビは下級の魔物と書物にありました。私の魔法で容易く倒せるでしょう。私、優秀ですから。」

「よ、よろしくお願ひします…」

変わつてると言うのか…独特なセンスの持ち主らしい。天才魔道士であると自分から名乗る人は中々いないだろう。

兎にも角にも魔物討伐を再開する。俺が引き付けた魔物をルーテ

さんが炎の魔法で焼き尽くす。卓越した才能を持つ稀代の魔道士かどうかは知らないが、優秀なのは確かだ。

「ビグルが1匹こつちに来てるな…」

「ビグルの使う闇魔法は私の優秀さを脅かす危険な存在です。即刻始末しましょう。」

「そう言えば魔法にも三すくみがあるんだつたな。」

炎・雷・氷等の理魔法は光魔法に強く、光魔法は闇魔法に強く、闇魔法は理魔法に強い。セレフィユの街でセライナさんに教わった。

「あの日玉は俺が始末します。ルーテさんは邪魔が来ないよう周囲のゾンビ達を牽制してくれませんか?」

「いえ、ビグルの相手は私がします。繰り返しますが、闇魔法は私の優秀さを脅かす危険な存在。ですので、私の理魔法がビグルの闇魔法より優れていることを証明しなければなりません。」

「…そうですか。じゃあ俺がゾンビ達を引き付けるんで、ビグルの相手はお願ひします。危なくなつたら引いて下さいよ。死んだら元も子もなくなりますから。」

「心配は要りません。私、優秀ですから。」

ルーテさんは言つても聞かなうだし、これでいいだろう。もしもの時は俺が無理矢理にでも退却させる。とにかく俺はルーテさんに他のゾンビ達を近づけないように立ち回る。

「ガアツ！」

「くつ…」

ゾンビから手痛い一撃をもらつてしまつた。爪で引っかかれた傷から血が滴る。全体的に動作が鈍いが、腕を振り下ろす動作だけは相当速いから感覚が狂う。

「せいつ！はつ！」

2発の斬撃で1体目のゾンビを切り裂く。

「せああつ！」

袈裟斬りで2体目のゾンビを行動不能にする。

「グルアツ…！」

「ぜえああつ！」

3体目のゾンビの攻撃を受けながら4体目と重ねて剣を突き刺し、そのまま剣を振り上げた。

「ぐつ・剣が！」

迫り来る4体のゾンビをなんとか倒すが、それと同時に使っていた鉄の剣の耐久が限界に達し、壊れてしまった。予備の武器は輸送隊が保管しているが、輸送隊は常にエイリーエ王女に随伴している。だから、そちら側に合流するまで魔物が相手では意味がないアーマーキラーで戦わなければいけない。鉄の剣とは違つてそう安いものはないので使用するのは手強い重騎士を相手する時に限定しておきたいたところだが。

さて、ルーテさんもなんとかビグルを倒すことに成功したようだ。だが、どうやら一撃もらつてしまつた様子なのでたつた今使用し、残り1回分となつた傷薬を渡しておく。

「一度、北にいる俺の仲間と合流しましよう。アスレイさんもそこにいますから。」

「合理的な判断と言えます。」

「…了解してくれたつて認識でいいですよね？」

ルーテさんは受け答えが特殊すぎるから判断に数瞬の遅れが出るな：アスレイさんも大変だろう、この人のテンションについて行くの。慣れたらそうでもないのか？

何はともあれ、北に進んでエイリーエ様達と合流する。俺達が来た方角からもゾンビの群れが現れたようだが、ゼトさんがいち早く察してなぎ倒したようだ。

「エイリーエ様、どうやら残っているのは南にいる少数のゾンビとマミーのみのようです。」

「分かりました。では南へ向かいましょう。」

輸送隊から予備の鉄の剣を受け取り、ルーテさんはアスレイさんに任せる。彼女の扱いならアスレイさんに任せた方が良さそうだ。

全員で南に向かい、残つていたゾンビは俺が切り伏せる。残りは巨大なゾンビであるマミーのみ。その爪を振り下ろした時の威力はゾンビのそれよりもずっと強いだろう。

「俺がマミーの攻撃を受け止める。その間に他の者が攻撃を加えれば難なく倒せるだろう。」

ギリアムさんがそう名乗り出た。たしかに、頑丈な鎧と盾を装備しているギリアムさんなら適任だ。

「それで行きましょう。ギリアムさんが相手のマミーを引き付け、その間に他の皆でマミーの四肢を切り落とし、止めを刺す。それじゃあギリアムさん、お願ひします。」

「ああ。」

ギリアムさんが走つてマミーへと近づき、槍で盾を鳴らす。

「ガ…ア、ア…！」

「効かぬ！」

マミーもギリアムさんの存在に気付き、唸り声を上げながら長い爪を振り下ろす。しかしそれはギリアムさんの盾によつて弾かれる。

「今！」

軍の中でも身軽に立ち回ることの出来るエイリーケ様、コーマ、ネイミー、ロス、そして俺が飛び出す。

「そらよ！」

コーマが屈んだ姿勢でマミーの右脚の付け根を切断する。

「どりやああああつて!!!」

気合いの入つた掛け声と共に、ロスがマミーの左脚の膝から先を切り落とす。

「当たつて…！」

ネイミーが狙いすました一撃で左肩の間接を射抜く。

「せいあつ！」

俺の斬撃でマミーの右腕を切り裂き、マミーは胴体のみの状態となつた。

「はああああつ!!!」

最後にエイリーケ王女渾身の刺突でマミーに止めを刺した。これで、突如現れた魔物達を全て撃退することに成功した。

「…さてと、こんなもんか。」

もしももう一度動かれたりしたら面倒だから、魔物達の死体を焼いている。物が焼ける時のそれとは違う、嫌な臭いがする。

「まさかルネスに魔物が現れるなんて…魔物とは伝説の中の存在だとばかり思つていました。」

「そうですね、俺もまさか実際に魔物と相見える事になるとは想像もしてませんでした。それに、ゾンビは最下級の魔物だと伝えられていますが、それでも力だけは並の兵士よりは上でした。」

さつきゾンビに引つ搔かれた傷はもう治したが、あれに囮まれでもしたらゼトさんほどの手練でないと間違いなく死ぬだろう。

「今回現れたのは、ゾンビやマミー、スケルトンにビグル等の下級の魔物の中でも弱い部類でしたが、それに留まらず、モーサドウーグにガーゴイル、バール、或いは書物で語られているような大物も出てくるかも知れません。いかに優秀な私がいるとはいえ、苦戦は避けられないでしよう。」

そう言つたのはルークさん。確かに今回は運が良かつたのか、出現したのは下級の魔物ばかりだつた。ここでもし、かつて大災害をもたらしたと伝えられている程の魔物が出現していたなら、俺達は全滅していくかも知れない。

「一体、何が起つてているのでしょうか…？」

「エイリーエ様、ここは一度フレリアに帰還すべきかと。グラド帝国軍に加え、魔物まで現れた現状では、これ以上の前進は危険が大きすぎます。」

ゼトさんがエイリーエ様に進言する。たしかに、グラド軍と戦つて消耗したところに魔物が出現し、立て続けに戦う事になつたらそれこそ全滅は避けられないだろう。

「確かに…私も何か得体の知れない不安を感じます。でも、だからこそ早く兄上をお助けしなければ。私の判断で皆を危険な目にあわせてしまうかも知れませんが、どうかお願ひします。」

エイリーエ様は一度決めた事は何があつたとしても曲げない性格なのだろう。迷いなく、強い決意でそう語つた。

「分かりました。エイリーエ様は私が必ずお守りします。」

「そして、エイリーエク様の行く先を阻む敵は俺達が全員切り伏せてやります。皆の力を合わせれば、どんな苦境も乗り越えられますよ！」

「ありがとうございます。ゼト、アストラ。…そうですね。私達なら必ず…？」

「さあ、邪悪な魔物達、お覺悟なさい！このラーチエルが見事成敗して差し上げますわ！」

東の方から馬に乗った女性が駆け付け、魔物相手に高らかに名乗り出た。…魔物が残つていたら様になつたのかも知れない。

「…誰だお前？」

「あら、魔物はどこですの？」

無視かよ。成敗すると言つていたが、よく見るとこのラーチエルと名乗つた女性、持つているのは杖だ。武器や魔道書の類は見当たらない。

「魔物なら、先程私達が…」

「まあ、それは幸い！神もお喜びくださいますわ。でも、少しだけ残念ですわね。わたくしの華麗な活躍を見せて差し上げようと、大急ぎで走つてきましたのに。」

「ガハハ！残念ですなラーチエル様！」

「引つ張り回されるこつちの身にもなつて欲しいんですけど…」

ラーチエルの後ろに2人の男性が追い付いてきた。快活に笑うごつい体格にヒゲを生やした壯年の男性と、呆れた顔でため息をつく、若い細身の男性だ。

「失礼ですがあなた方は？」

戸惑つた様子でエイリーエク様がそうラーチエルに尋ねる。仕方ない。眼の前で突然茶番劇が始まれば誰だつてそうなる。俺だつてそ娘なる。

「わたくし…問われたからには名乗らねばなりませんね。そう。このわたくしこそロストン聖教国の光の…」

「なりませぬ！なりませぬぞラーチエル様！ここでご身分を明らかにさせては！」

何故？いや、でもラーチエルつて名前、どこかで聞いたことがある

「うな…？」

「まあ、そうでしたわ。わたくしとしたことがあつかり。ここで名前も告げることなく颯爽と去るのが美しいのですわ。」

初っ端に自分から名乗つてたけどな。ついでに後ろの男も普通にラーチエル様つて呼んでたし。まあでも、いきなり過ぎてエイリーグ様は聞き逃していたのかも知れない。

「あの…」

「では見知らぬ方、ごきげんよう。縁があればまたお会いいたしましょう。さ、行きますわよ。ドズラ、レナツク。」

そう言つて、ラーチエルは颯爽とその場から立ち去つた。

「ガハハ！行くぞレナツク！」

「はいはい…」

髭の男ドズラと細身の男レナツクがその後に続く。

「…何だつたのでしょうか？」

「気にするほどの事でもないと思ひます。」

ようやく思い出せた。ラーチエルというのはロストンの聖王女と同じ名前だが、本人なのか偽者なのか、全くの別人なのかは知らない。

7章 帝国の影

間もなくルネスとグラドの国境にある街、セレフィユに到着する。国と国を繋いでいるこの街こそ両国の友好の証だつたのだが、今はグラドの支配下にある。今はゼトさんとフランツが街の様子を見にいつているので、俺はエイリーエ様の側で緊急事態に備えている。「この街に来るのは久しぶりです。以前、兄上と私がグラド帝国を訪問する際、この街でルネスとグラドの方々に出迎えていたのを憶えています。」

「俺もこの街に訪れ、留まつていた期間は長いです。顔見知りも何人かいりますし、無事を願うばかりです。」

グラド側に住んでいる市民は大丈夫だろう。ただ、ルネス側の市民がグラド軍から迫害を受けているかもしれない。ゼトさんとフランツが街から戻ってきた。急いでいる様子はないので、至急の事態ということはなさそうだ。

「ただいま戻りました。見たところ、市街の警備はさほど厳重ではないようです。ルネス城を陥落させた今、この地を守る価値は低いと見てるのでしよう。我々はなるべく人目につかぬように、警備の手薄な西門から…」

「…すまないが、ものを尋ねたい。」

ゼトさんの話に謎の男が割り込んできた。外套の上に肩を守るだけの軽装を身につけた、独特な雰囲気を纏つた男だ。

「どうしました？」

「人を捜している。藍色の髪をした幼い娘を見なかつただろうか？」迷子を捜しているのか。こんな街外れまで子供が一人で来れるとも思えないが。

「藍色の髪…俺は見てませんね。」

「私も、そのような少女は街中でも見かけておりません。」

「私もです。…すみません、お力になれなくて。」

「そうか…こちらこそすまない、邪魔をしたな。」

「…不思議な雰囲気の方でしたね。」

「はい、グラドの密偵などではないようですが……」

「…追え！逃がすな！あつちだ、あつちへ行つたぞ！」

街の方からそんな声がした。盗人が何かだろうか。
「なにか騒ぎが起きているようです。」

「行つてみましょう。」

あまり目立たないようにエイリーケ様、ゼトさん、俺の三人で街の様子を見に行く。そしてすぐに連絡が取れるように、俺達と待機している皆の中継をコーマに頼んでいる。

街の外から様子を見るに、どうやら数人のグラド兵士が一人のシステムを追いかけているらしい。

「反逆者ナターシャ、大人しく降伏しろ。降伏すれば、陛下の御前で釈明の機会が与えられるだろう。」

「待つてください、どうか話を聞いてください！」

「…捕らえよ。」

兵士の中の一人がそう命令すると、兵士達が槍をシスターの方へ向けながらにじり寄る。

「待つて、どうか信じてください！今の皇帝陛下は普通ではあります。あなた方にもそれは分かつて…」

「陛下への不敬は万死に値する。抵抗すればこの場で処刑して構わんとのお達しだ。かかれ！」

建物などに隠れていたグラド兵士達が一斉に姿を現す。そしてシステムは再び、こちら側へと逃げ出した。

「あのシスターがグラドの反逆者？どういうことだ？」
「きやつ！」

俺が階段を降りてすぐ横の場所にいた所為か、件のシスターとぶつかってしまった。

「うわっ。すみません、大丈夫ですか？」

「いえ…あの、あなた方は？」

「私たちはルネス王国の者です、あなたは何故グラド軍に？」

「ルネス王国の…ああ！あなた方にお伝えしたいことがあります。実は、今グラードは…」

「話すのは後にしましょう。グラードの兵が来ます。」

「…コーマに進撃準備の合図をして、すぐにでも戦闘に入れるようにしておく。」

??? Side

さて、今日のツキは…と。裏か、やつぱりな。闘技場でスッちまつたし、さつきのシスターのことといい今日のツキは良くないらしい。「傭兵！貴様、闘技場で何をしていた！さつさと持ち場に戻らんか！」

「あんたも一戦どうだい？なんせ命懸けの戦いだ。いい修行になるし、なんと言つても勝てば結構な稼ぎになる。」

「…隊長に報告する！貴様は減額だ！貴様のような薄汚い傭兵など、いくらでも代わりがいることを忘れるな！」

「ああ、わかつた。憶えとくさ。」

つたく、堅苦しいなグラードの連中は。しかし女が相手か、今まで受けてきた依頼の中でも一番気が進まねえが…これも仕事だ、仕方ねえか。

アストラ Side

「そこの三人。その女は帝国の反逆者だ、こちらに引渡せ。引渡せば僅かだが報酬をくれてやる。」

グラードの兵士が二人、シスターを引渡すように交渉を持ち掛けて来る。まずは情報を引き出せないか試すとするか。

「このシスターがか？まさかシスターがあんた達に暴力を振るうわけもないだろうし、どういう事だ？」

気さくな風を装つて何気なしに近づく。この距離なら不意打ちが効くだろう。

「お前達に教える義務はない。早く反逆者を引渡せ、さもなければ実力行使に出る。」

この調子じや無理そうだな。となれば…

「まあ、こつちとしては引渡すつもりは毛頭ないんだけどな！」

「なつ…」

足払いの左側に立っていた兵士の体勢を崩し、兜を剥がして兵士の頭に剣を突き刺した。

「…て、敵だ！ 敵襲だ！ 反逆者に加担する集団が…こつ…かはつ…もう一人の兵士の顔面を掴み、地面に叩きつける。そのままくり返し叩きつけ、気絶させたところにとどめを刺す。

グラド帝国軍が統率された動きで俺達四人を包囲する。

「殺れ！ グラドの反逆者共を今、この場で処刑するのだ！」

グラドの部隊長と思しき重騎士がそう号令を下した。

「アストラ、軽卒な行動は…」

「見捨てるんですか？」

「…分かりました。切り抜けましょう。」

シスターを庇いながら応戦するが、多勢に無勢。徐々に追い詰められていく。だが、グラド軍は敵が俺達四人だけではないことを知らない。

南の方が騒がしい。俺達を包囲していたグラド軍が背後からコ一マ達の奇襲を受けているのだろう。お陰でグラド兵が南側に集中した。

「北に抜けるぞ！」

兵士の層が薄くなつた北に走り、包囲から脱する。

「ぬう…下がれ！ 態勢を立て直すのだ！」

そう号令がかかるとグラド軍は追い討ちする隙すら与えずにその場から退却した。

「悪い、助かつたコーマ。」

「気にすんなつて、俺はアストラから受けた合図を皆に伝えただけだしな。真っ先に突つ込んでつたのはフランツだし、敵を薙ぎ倒してつたのはギリアムとガルシアのおっさん2人だ。」

「あの程度の攻撃、鎧の傷にもならん。」

「わしの斧の鏃にもなり得ませんな。ギリアム殿、わしら年長者の力、みせてやろうではありませんか！」

「年長者…か。ええ、アストラ達若輩に俺達が遅れを取るわけにはいきませんな。」

いつの間にかギリアムさんとガルシアさんが意気投合しているのには驚くが、そんなことよりも敵が来る。シスターを守りつつ、グラド軍を撃退しないと。

「グラド軍を街の正面にある広い階段の上で迎え撃つ！ 武器の相性で不利にならないように対応！ ルーテ、アスレイ、ネイミーは後方支援！ コーマとヴァネッサは多方面から攻撃されないように警戒！ 俺はシスターを護衛しつつ隨時指示を出す！」

『了解！』

大まかな方針を決めて指示を出し、できる限り得られる周囲の情報を確認する。

「まだこの軍師のような立ち位置には慣れないな…目の前の敵と護衛対象以外にも広く視野を持たないとな。」

「あの…軍師様…」

「アストラです。どうしましたか、シスターさん？」

「アストラ様、聞いてはもらえないかもしませんが、私はグラド軍の方々に事情をお話ししてみたいと思うのです。どうか、ご協力をお願いできぬでしょうか？」

「分かりました、力になります。ですが、敵の第一の標的はあなたなんですからくれぐれも注意してください。俺はあなたの後ろに控えて、グラドの兵があなたの話を聞く様子がないと見た瞬間にその兵を切り倒します。」

「はい。お願ひします、アストラ様。」

様付けで呼ばれるのには少しむず痒いものがあるが、そんなことを気にしている場合ではない。

「少し変更だ！ 俺はシスターと共に前線に出る！」

「アストラ！?しかし、それではシスターに危険が及ぶ。お前は後方でシスターの護衛をしつつ指示を出せるようにしておくべきだ。」

「分かつています。ですが、これはシスター本人からの頼みなんです。シスターは俺が必ず守ります！」

「…いいだろう、戦闘時の指揮を君に委ねると言つたのは私だからな。だが必ず守り抜け。」

「はい！」

シスターと共に前線へ出る。油断はしないが、いざとなれば俺がシステムを担いで撤退すればいいだろう。

「アストラ！東の方から山賊が来たわ！混乱に乗じて盗みを働く気よ！」

ここで余計な邪魔が入ったか：予想は出来なくもなかつたが、できれば起こつてほしくなかつた展開だ。

「そうか…ヴァネッサは近隣の民家に戸を閉めるように触れ回つてコーマとエイリーク様、そしてアスレイは山賊の対処に！フランツも隙があればヴァネッサと同じよう！」

「おいおい、俺とヴァネッサが動いちや背後の警戒が疎かになつちまうぜ？」

「そうか…モルダさん！後ろの警戒も頼みます！」

「任せておけ。敵が見えたら即座に知らせるからな。」

こなすべき事の量が多過ぎて、作戦を考える余裕が無くなつている。そこだけは誰かのフォローが必要になつてくるだろう。

「以上！まずは目の前の敵を倒す！」

やはりというか、グラド兵はシスターの言葉に耳を傾けようともせず、問答無用で殺しに來たので俺や、前線を張つているギリアムさんやガルシアさんが返り討ちにする。ソルジャーから一発、戦士から一発手痛い攻撃をもらつてしまつたが、シスターが持つていたリライブの杖で治療してもらつた。

「次の敵は…剣士か。シスターさん、下がつていてください。やはりグラド軍の奴らは聞く耳を持たないようですから。」

「あの方は…！アストラ様、少し待つてくだ…」

シスターの安全のためにも、やはり敵は俺が倒すべきなのだろう。シスターは諦めていないようだが、相手にその気が微塵もないのだからどうしようもない。剣を抜き、剣士に斬り掛かる。剣士はそれをを軽く流し、反撃して来る。

「そらつ！」

「くつ…」

こいつ、強い。素早い動きもそうだが、確実に急所を狙っている。更にこの剣士の得物はキルソード、特殊な構造をしているので、細身で急所を狙いやすい上に鉄の剣以上の殺傷力を持つ。その代わり扱うにはかなりの技術を要するので、この剣士はそれ相応の技術を持つということになる。

「負けて…たまるか！」

「隙だらけだぜ？」

「ぐああっ！」

攻めるのに躍起になつていて防御が疎かになつていた。必殺の一撃は防げたものの、脇腹にここまで深い傷を負つてしまつては意識を保つのも辛い。相手が待つてくれるはずもなく、畳み掛けるような斬撃を運び防衛本能だけを頼りに防ぐ。当然ながら、その防御は一切の意味を成さなかつたが。

「ぐつ…くそつ…たれ…」

「アストラ様！治療を！」

「シ、シスター…来ちゃダメだ…」

「やつぱり、あんたがターゲットだつたか。」

「あなたはさつきの…あなたも私の口封じに雇われたのですか？」

「ああ、グラドに頼まれてな。悪く思うなよ。」

「待つてください…私はどうなつても構いません。ですが、伝えて欲しいのです。今のグラドは以前とは変わつてしましました。この危機を他の国々に知らせなければ、大陸から光が失われてしまうのです…」

「悪いが、俺は傭兵なんでな。グラドがどうとかは興味ねえんだ。あんたが正しいのか、間違つてているのかもどうでもいい。」

「そんな…」

話を聞く奴だと思つたら、結局こうか…！やつぱりこいつは俺が…「とはいえ…確かにあんたみたいな美人をやるのは後味が悪い。…なあ、あんた、賭け事は好きかい？」

「え？」

は？

「俺はこいつがなによりも好きでな。いくら負けてもやめられねえ。
…賭けなよ。あんたが勝つたら、俺はあんたを信じるぜ。表か裏か、
どっちだ？」

そう言つて剣士は硬貨を取り出した。突然のことに呆氣を取られた
が…女好きの博打好きか。僅かでも可能性が生まれたのは幸いな
のだろう。

「な、何を…そのような事をしている場合では…」

「じゃあ、俺も仕事に戻つた方がいいか？」

「……表…いえ、裏です。」

「よし、じやあ俺が表、あんたが裏だ。いくぜ。」

剣士は硬貨を親指で高く弾き、落ちてきたところを手の甲に乗せ、
もう片方の手で押さえる。

「……どちらですか？」

剣士が押さえていた手を除けるが、這いつくばつている状態の俺には結果は見えない。

「……ははつー裏だ、あんたの勝ちだよ。やつぱ今日はツキがねえな。
いいだろう、今から俺はあんたの味方だ。」

「ほ、本当ですか？」

「ああ。イカサマはやつても賭けを反故にはしねえのが俺の主義だ。」

「ああ、神よ…！あなたのご加護に感謝いたします…」

「神さまもいいが、感謝なら俺にしてくれよ…まあいい、あんたはそこ

のガキの治療をしてやりな。俺は連中を片付けてくる。」

「あ…アストラ様！申し訳ありません！」

シスターがリライブの杖を振りかざし、神への祈りを捧げると、杖から出る光が傷口を塞いでいく。

「ありがとうございます。…奴ほどの手練が、一時的とはいえ味方になつたのは人数の少ないこちらとしては有難い限りです。それと：すみません、俺が突つ走つたりしなければこうしてシスターが余計に杖を振るう必要もなかつたのに。」

「いえ…アストラ様は私を守るために動いて下さっているのですから、私にそれを咎める権利などありません。」

「さあ、行きましょう。あの剣士以外にも話を聞いてくれる人がいるかも知れません。」

指揮をとり、ガルシアさんとギリアムさんとの3人で前線を張りつつ、シスターの護衛をする。そして、結局あの剣士以外にシスターの話を聞こうとするグラド側の人間はいなかつた。途中、山賊も何度か割り込んで来たが、問答無用で斬り捨てる。

ヴァネッサは南の民家にいた踊り子から竜の盾を譲り受け、フランスは東の民家からこの街を支配し、ルネスの民を迫害するザールを倒してほしいとアーマーキラーを託された。そしてさつきシスターの説得で仲間になつた剣士、ヨシュアは西側の民家を訪問し、かつては帝国将軍とも渡り合つた剣士だつたと自称した老人から秘伝の書を受け取つたようだ。

「山賊は粗方倒したと思うが、今日中はもうやつてこないという断定も出来ない。引き続き、戸を開けたままの民家があつたら閉めるように言つてくれ。」

しかし、グラード軍の方は全く山賊を相手にしていない。…ここがグラード側の街だつたら即刻討伐するんだろうな。

ギリアムさんが弓兵を引き付け、ガルシアさんが倒す。そして、ヨシュアが塀の向こう側にいた戦士と戦闘中で、その奥にいる傭兵とフランスが戦つている。全員シスターの説得には聞く耳持たずだ。

「あとはあのアーマーナイト…ザールを倒せば残りの奴らは勝手に散つていくか…？」

「ああ、その可能性が高い。どうするアストラ。」

その前に民家の戸…いや、あれは宿か？が開いたままになつている。山賊が来るかもしれないことを伝えておこう。

「俺はそこの宿に戸を閉めるように言つてきます。ゼトさんは皆を集めてザールを攻撃してください。」

「了解した。フランスが受け取つたアーマーキラーとルーク、アスレイの魔法を中心に攻めるのが最適か。」

俺が泊まっていた宿とは違う。あの宿はグラド側にある。

「今街の中での戦闘に乘じて山賊が現れました。討伐はしましたが、安全が確認されるまで扉を閉めておくようにお願いします。」

「ありがとうございます、傭兵さん。今から外に出るお客様がいらっしゃるので、その後で。」

「分かりました、お願ひします。」

その客は…すぐ近くで荷物を確認しているようだ。金髪のショートの、おそらくは少女だ。

「シルバ村の皆は元気かなあ…でも、ここまで来れば帝国までもうひと息。えーっと…傷薬に…」

この少女もシルバ村出身か。奇遇だな…ん? シルバ村に今年でこれくらいの少女つて…いや、えーっと…

「お前…まさかアメリカ…か?」

「え? どうしてあたしの名前知つて……お兄ちゃん? アストラお兄ちゃんなの…?」

宿を出る少女は俺の妹、アメリカだった。まさかこんな所で妹に会うとは…

「お兄ちゃん…ううつ…会いたかつたよ。」

いや、泣いて抱きつくのはいいんだけども。宿の人見てるからな? さつきの人苦笑してるし。まあ、泣きたいのは俺も同じだ。3年ぶりの家族との再開なんだから。だが、兄としては妹にしつかりしているところを見せたいのだ。下らないプライドだけど。

「…でも、あれ? なんでお前がここに? 母さんは?」

「お母さんは……大丈夫だよ。お兄ちゃんからの仕送り…って言つても少しだけだつたけど、それとお母さんが頑張つて稼いだお金でなんとか出来てるの。お兄ちゃんは仕事?」

「ま、まあな。山賊が来たつて言つただろ? アメリカは?」

「あたし? あたしはね、グラドの兵士になるの。」

「……はあ! お、お前がか!? お前がグラド兵士に志願するのか!？」

「もう…馬鹿にしないでよお兄ちゃん。あたしだつて戦えるんだから!…多分。じやああたしはもう行くねお兄ちゃん! バイバイ!」

「…………あ、おい！松明忘れてる……つてもう行つちまつたか。」

松明は貰つておこう。もう行つてしまつたアメリカにわざわざ届ける暇もないし。…ゼトさんの方はもう片付いたようだ。

「アストラ、今からシスターの話を聞くところだ。…どうやら重要な話だ。一応、フレリア側からは君に出てもらいたいのだが。」

「どうして…？それなら俺よりもモルダさんやギリアムさんが

…」

「モルダ殿には道具屋、ギリアム殿には武器屋での調達を頼んでいる。ヴァネッサも今は情報収集だ。」

ん？つまり俺が余つたからじや…まあ、いいか。街の外れへ移動すると、既にエイリーケ様とシスターが待つていた。

「ありがとうございます、助けていただいて。なんとお礼を申し上げれば良いやら…」

「あなたはグラドの人間か？」

「はい、ナターシャと申します。グラド帝国の神殿で皆様の手伝いをさせていただいておりました。」

「それがどうしてグラド兵に…？事情を話していただけますか？」

「はい：数日前、私の師である司祭様が突然捕えられ、処刑されました。罪名は反逆罪…ですが、それは濡れ衣です。司祭様は口封じのために、陛下に殺害されたのです。」

「それで、ナターシャさんはその口封じされたことの内容を知つていいから追われていた…ということですか？」

「その通りです。司祭様は私に仰せられました。『陛下は聖石を破壊しようとしている』と。」

「聖石を破壊だつて…？」

【聖石】。グラド、ルネス、フレリア、ジャハナ、ロストン、それぞれの国にある、魔を封じ込める為に作られた守護石。古くからそう伝えられ、そのことを知らない人間はこの大陸にはいないだろう。それを破壊しようとしているということは…

「前に魔物の集団と遭遇したことと無関係ではなさそうだ…」

「ああ、私もその結論に至つた。偶然とは考えづらい。」

「なぜ陛下がそのような暴挙に走ったのかは分かりません…温厚だった陛下はある時から人が変わったようになつてしまわれました。司祭様は死の直前に私に仰られました。聖石を持つ国々にこのことを伝えねばならないと。私は密かに国境を抜け出そうとしましたが、兵士に見つかってしまい…」

「どうだつたのですか…ゼト、アストラ。どう思いますか？」

「彼女はグラド帝国の者です。話を鵜呑みにすることはできませんが…もし、事実であれば無視できる話ではありません。聖石を破壊するなど…あつてはならないことのはずですが。」

「俺は信じてもいいと思います。少なくともグラドの兵は本気で彼女の命を狙つていましたし、グラドはルネスを陥落させたにも関わらず統治する様子はない。狙いは聖石のみだつたとすれば合点がいきます。」

「…ひどく嫌な予感がします。先を急ぎましよう。早く兄上にもこのことを知らせなければ…」

さて、話も聞かせてもらつたが、残念ながらこれ以上ナターシャさんの援護をすることは無理そうだ。

「ありがとうございます、ナターシャさん。俺たちはこれからグラドへ向かうところです。残念ですが、これ以上あなたに力を貸すことはできません。」

「いえ…よろしければあなた達に同行させてください。あなた達がグラドに立ち向かうのであれば、私も力になりたいのです。」

「それは…！…ありがたい限りです。いいですよね、エイリーグ様？」

「はい。今、一人でも多くの仲間が必要ですから。よろしくお願ひします、ナターシャさん。」

「それで、あんたはどうする？ヨシュア。」

「…ああ。小難しい話は分からんが、シスターが行くなら俺もついて行くぜ。」

民家の影からヨシュアが姿を現す。：話を聞かれていたのか。まあ、彼もナターシャさんを信じて仲間になつたのだから聞く権利はあるだろう。

「さて、それじゃあ物資の補給が完了したら出発ですね。日が沈むまでもまだ時間もありますし、行けるところまで進みましょう。」

「いや、その予定だつたが今回の戦闘で皆疲弊している。これから進むのはグラド帝国の領地。今日は宿を取り、万全の状態で明日から再びレンバール城へ向けて出発だ。」

「たしかに国境にあるこの街なら宿は沢山ありますが、そんなに都合よく空いている場所があるでしようか？」

「今、フランツとヴァネッサ、そして輸送隊の一部に宿を取らせていい。戦時中ということもあり、観光客は少ない。人数分の部屋は確保できるだろう。軍資金の心配も無用だ。」

しばらくして、宿を取ってきたフランツ達が戻ってきた。数件に分かれたが、なんとか人数分は取れたようだ。一件だけグラド領側にある宿のようだが。

そして偶然にも、俺に割り当てられたグラド領側の宿は前にこの街に来た時に利用していた宿だつた。この宿に泊まっているのは俺、ヴァネッサ、ガルシアさん、ロスの四人だ。

「アメリカ……」

まさかアメリカがグラド兵士に志願しに行くとは思つても見なかつた。：ロスと同じ歳でグラド兵になろうとするなんて、予想できるはずもないか。

「もし次に会つたら敵同士か…最悪だ。」

色々なことが頭に入り過ぎて頭痛がしてきた。早めに休もう。一眠りすればある程度頭も整理されるだろうし。

8章 憎悪と決意

レンバル城付近で奮闘しているであろうエフラン王子への援軍に向かい、グラド領内を進む。だが、霧が濃くなってきたので休憩を兼ねて一時的に進軍を止めている。その中で、俺はフランツと手合わせをしていた。お互いままだ未熟なので、有事であろうと鍛錬は欠かせないのである。

「つと！ 危ねえ。」

俺が使っているのは練習用の木剣、フランツが使っているのは訓練用の木の槍だ。当然武器相性はこっちが不利で、間合いを詰めれずには押されつつある。このままだと一本決められるだろう。

甘い!

「あつ…一本取られたか。やつぱり、間合いを詰めるのが難しいか。」一気に間合いを詰めようとした瞬間に見事に突かれてしまった。

「ランツも騎士だからな。グートの雑兵とは比べ物にならないくらいに強い。剣同士でも勝てるか怪しいところだ。

「いえ、こちらこそ。僕も最後に一気に詰められそうになつた時は驚きました。」

い、その茂みに隠れてる奴、誰だ！」

少しはなれた場所にある茂みが不自然に揺れた。そこから黒い頭巾と外套を身につけた男が現れ、逃げようとする。

お前は矢回りでるハナ
おの髪を指さんを

フランスに指示を飛ばして男の逃げる方向へ先回りさせ、即座に持ち替えた鉄の槍で牽制。その隙に俺が背後から捕縛しようとするが避けられ、俺達が来た方角へと逃げられてしまつた。

「後をつけられていたのでしょうか。」

「ああ、人目につかない道を選んでいたが、全部グラードには筒抜けになつていたつてことだ。ゼトさんに報告しに行こう。」

「はい！」

先頭で敵影がないか見渡していたゼトさんにさつきのことを報告する。エイリーエ王女も一緒だ。

「まさかグラードに後をつけられていたなんて…」

「そうか。つけられていたとすれば…セレフィユを出た辺りからか。となれば、すぐに…」

「見つけたぞ、ルネス王女エイリーエよ。」

「！」

すぐ後ろにフードを被つた男が数人のソシアルナイトと共に現れた。こいつ、いつの間に俺の背後に？

「誰だ、お前は…！」

「祖国を裏切った男に用などない。エイリーエよ、その腕輪を渡してもらおうか。」

「な…っ！」

「この腕輪をどうしようというのです！」

「わしの知つたことではない。陛下がそれをお望みなのだ。陛下にその腕輪を献上すれば、わしは将軍にその名を連ねることもできよう：さあ、渡せ。渡せば命だけは助けてやろう。」

「そうが、ならばお前もこの場から即座に立ち去れ。そうすれば命は助けてやろう。」

男の喉元に鉄の剣を突きつける。外見からして相手は闇魔法の使い手シャーマン。物理攻撃に対する守備力を持たないシャーマンがたつた数人で敵の集団を脅すなど、なぜ返り討ちに遭うと分からぬのか。すでに事態に気付いた皆がシャーマン達を包囲している。

「くくく…大人しく従つた方が身のためだぞ？貴様らはルネス王子エラムの援軍に来たのだろう？奴も既にグラードに敗れたというのに、無駄なことをする。」

「なんだと…？」

実際に目で見たことはないが、王としての素質は別として、という前置きはあれど武人としてはゼトさんが一目置く程の人だ。グラードにそう易々と負けるようには思えない。

「そんな、兄上が負けるはずがありません！」

「ふん、貴様がどう喚こうが事実は変わらん。今頃レンバール城の地下牢で処刑の時をつておるわ。だが、それでも従わぬのであれば…こうさせてもらおう。」

そう言つてグラードのソシアルナイトが連れて来たのは、一人の少女だった。…ちつ、人質か。

「た、助けて…！」

「そういうことか…！ネイミー、コーマ！」

「はい…っ！」

「おうっ！」

そのソシアルナイトが鞘から剣を抜こうとした手をネイミーが狙撃し、柄から手を離した隙にコーマが少女を救出する。

「ちつ…まあよいわ、人質は一人ではない。飽くまでも従わぬというのであれば生かしてやる必要もない。残りの二人は山に棲む化け物グモの餌にしてくれるわ！」

他のソシアルナイトが人質の首に剣を当てる連れて来る。…1人だけじやなかつたのか。軽率だつた。その人質達に向かつてシャーマンは何かを呟き、人質達の姿は消えてしまった。…転移魔法か。これではこの包囲の意味がなくなるな。

「ふははっ！いい見ものだぞ！あの人質共はルネスに生まれたことを悔やみながら食われていくのだ！」

「なんて…なんてことを…あなた達は…！」

「ふん、これは戦争なのだ！戦争なのだから何をしても構うまい！貴様ら敗残者ルネスの寝惚けた戯言は…」

「黙りなさい。」

「な、なにい？」

エイリーエ王女の言葉が、この男の言葉を遮る。エイリーエ王女の腕は怒りで震えている。

「私は、私達ルネスは…グラドと長い間同盟関係を保つてきました。以前、グラドを訪れ手厚い歓迎を受けたことも、よく憶えています。

そのグラドに突然侵略され、国を滅ぼされ、父上を失つて…それでも、グラドを憎んではならないと、私は自分に言い聞かせてきました。私があなた方を心底憎んでしまえば、両国の絆は永遠に断たれてしまう。いつの日か、再び平和を取り戻す為にも私が憎悪に捕らわれてはいけないと…

でも…これがグラドのやり方だというのなら…ルネスの民は滅んで当然だというのなら…

私は、あなた方を許しません。」

「小娘が、状況も弁えずに血迷つたことを！」

「状況を弁えるべきはそつちだ。」

今、人質はこの男の手に届く場所にいない。魔法を使うにしろ詠唱なりの隙はある。となればこいつを生かす必要は無い。

「ぐつ…」

俺の剣を後ろに跳んで回避したが、そこで止まったのが運の尽きた。

「フランツ！」

「せやあつ！」

フランツが投げた手槍がシャーマンに刺さる。そして怯んだ隙にロープを掴んで押し倒し、胸に剣を突き立てた。

「まあいい…人質の所へ行かせるな！化け物グモが人質を殺すまで時間稼ぐのだ！ふはは…がはつ…」

こいつは死んだが、おそらく…これが最期に魔力を振り絞って、他の奴らは包囲から抜け出した。奴らは言われた通りに人質救出を妨害してくるだろう。要するに敵が多い方角に突つ込めば人質がいるというわけだ。

「コーマー！敵はどの方角に何人いる！」

盗賊であるコーマは目がいい。この霧でも広い視界を確保しているかもしない。

「悪い、ここから見えるのは東の砦の向こうにソルジャーが一人だけ

だ！」

「東か…クモが棲む山…確かに山も東にあつたはずだ。よし、東に進むぞ！時間が限られている、できる限り素早く進むが、霧の中からの奇襲に警戒するんだ！」

視界は少しでも確保しておきたい。アメリカが忘れていた松明に火を灯す。アメリカには…次会つた時に松明一本分のお金を返しておけばいいだろう。

「ふむ…こはひとつ、わしに任せよ。」

モルダさんが杖を振りかざす。そして、杖から出た光が俺達の行く先を照らした。

「これは…」

「トーチの杖だ。セレフィユの道具屋に置いてあつたのでな。一本だけ購入しておいたのだが、早速役に立つたな。」

こんな杖もあるのか。治療や撹乱に使う杖に関しては調べていたが、こういった特殊な用途のものは調べていなかつた。

「これなら先も見渡せる…！もう少し大胆に…よし、ゼト、フランツを先頭にして東に突撃するぞ！ギリアム、ロス、アスレイは後方を、他の近接武器持ちで左右を警戒！ルーテ、ネイミーは前線で援護！ナターシャは左右後方の重傷者を治療、モルダは前線の2人を回復しつつ隙をみてトーチを進行方向に！」

助けた人質の少女は輸送隊の馬車の中に避難してもらう。輸送隊はエイリーケ様に随伴しているから大丈夫だろう。

さて、時間がない。ルネス民が化け物グモに襲われる前に助け出さないと。全員で東に突撃、2回目のトーチでヴァネッサがルネス市民を発見、山に囲まれていて、一般人では脱出できないようになつているようだ。

ヴァネッサにルネス市民の護衛を指示、これでもし化け物グモが襲つても少しの間は大丈夫だろう。

人質の居場所を俺達に知られたのを察したのか、グラド軍の全員がバラバラに突撃してくる。俺達としては崩せば一気に突破できる整つた陣形よりも厄介だ。

「ぜあつ！」

「ふんつ！」

ソシアルナイトを倒し、続く戦士の一撃を回避、ヨシュアがその戦士を斬り捨てる。

「倒しても倒してもキリがない……」

「だな。だが俺達が態々移動しなくても、敵の方からやつて来るんだ。移動する手間が省ける分、寧ろ楽だと思えばいいさ。」

「そう言われてもな！俺はお前よりも踏んでる場数が少ないし、こういう持久力にものを言わせる戦いは初めてなんだよ！」

ソルジャーの攻撃を透かして足払い、鎧の隙間に剣を突き刺してすぐには抜く。

「ま、慣れてくしかねえぜ？そういうのは。」

ヨシュアの方も余裕綽々といった様子で戦士を翻弄している。必殺の一撃で戦士の頸動脈を切り裂いた。

「分かつて……る！」

相手のトルバドールの後方支援が厄介だつたので一撃食らわせる。衛生兵であるトルバドールに戦う力は無い、気絶させて捕虜にした方がいいだろう。背後から後頭部に剣の腹を叩き込んで意識を奪う。「こつちの敵は全滅させました！あとは市民の救出だけです！」

フランスからの報告が来た。人質にされていたルネス市民は2人、ゼトさんとヴァネッサが間もなく救出するだろう。

「救出が完了するまでクモの襲撃を警戒！最後まで気を抜くな！」

「了解です！」

化け物グモの強さがどれほどのかは計り知れない。ゼトさん一人で倒せるとも限らないし、最後まで警戒する方がいい。ただ、グラドの奴らは別だ。

「グラド軍ども！降伏するか、逃げるか選べ！死にたい奴が居ればかかるつてこい！」

そう言つて攻撃してくる奴はない。殆どの奴らがその場から逃げ出した。戦う意思がない人間まで殺す意味はない。また別の場所で戦うことになるかも知れないが、その時はその時だ。

「アストラ、ルネス市民の救出に成功したわ。例のクモの姿もないみたい。」

「そうか、こつちも今グラド軍が逃げ出したところだ。」

「なんとか無事に解決しましたね。」

少女と男女のルネス市民が抱き合って、助かった喜びを分かち合う。おそらく3人は家族なのだろう。

「助けていただき、ありがとうございます。」

ルネス市民達は、そう言つてエイリーケ様に頭を下げる。

「いえ、当然のことでしたまでです。」

「せめてものお礼です。よろしければこれを…」

そう言つて、シャーマンが持っていた彼らの荷物から、女性は綺麗な装飾が施された一本の弓矢を取り出した。

「これは…？」

「あ…それは【オリオンの矢】だと思います…」

「ネイミー、知つているのか？」

「はい。手練の弓使いがその矢に祈りを捧げると、更なる力を得られる…つておじいちゃんが昔、言つていた気がします。」

「そうなのですか。なら、ネイミーがこれに祈りを捧げれば…」

「あの…私ではまだ実力不足なので…すみません。」

「そうですか…あなた達の感謝の気持ち、受け取らせていただきます。」

「はい！いつか、あなた方がグラドを討ち、再び平和が訪れるのを祈っています…」

最後にもう一度頭を下げ、ルネス市民はその場を立ち去る。彼らは伝令兵と共に行動、一度フレリアで保護されることになる。ルネスに帰されるのはこの戦争が終わつてからになるだろう。

「エイリーケ様、お話ししたいことがあります。」

「何でしようか、ゼト。」

ゼトさんが何やら思い詰めたような表情でエイリーケ様に話しかける。

「…すまないが、アストラ達には席を外して貰いたい。これは、ルネス

王家の問題だ。」

そう言われたなら仕方がない。今回の後始末も色々とある、俺はそつちに回るとしよう。

9章 レンバール攻城戦

エフラム王子がレンバール城に囚われているというあの男の証言、真偽は不明だが城に着けば全てが分かる。もうすぐだ。城へ続く橋、そして城門を警備しているグラド軍の奴らを倒せばすぐにも突入できる。

「ガルシア、ロス！ 橋を塞いでいるソルジャー達を叩け！」

ガルシアさんが二人いるソルジャーの片方を倒し、ロスがもう一人を相手する。ロスが一瞬危なつかしい状況になってしまったが、コートマが即座にカバーした。

「…よし、アーチャーがこつちにやつて來た。

「ヨシュア、右側のアーチャーを頼む！」

数本の矢が飛んでくるが、左右に動きながら進めば相手は狙いにくく当てづらい。もしかりそうになつても剣の腹で防げる。

俺の剣が届く間合いで詰め、鉄の剣で敵の弓を叩き折る。一旦剣から手を離して脇腹に回し蹴りを入れ、怯んだところに足払いを転倒させて突き飛ばし、そのまま橋の下へ叩き落とした。

「うわ、えげつねえ。」

コーマに少し引かれたが、これも勝ち方の1つであることに間違はない。鉄の剣を拾い、鞘に戻しておく。ヨシュアの方も止めを刺し、あと残るは城門に立ちはだかるソシアルナイトだけだ。

エイリーエ様がソシアルナイトの相手を名乗り出たのでいつでも救助できるようにしつつ見守る。

「くそつ…シユーターは何をやつていた!」

奴の言うシユーターも厄介だったがすぐにフランツに制圧させ、基礎は普通の弓と同じらしいのでネイミーに数発だけだが使わせた。

「通してもらいます！」

「ティ…ラード…様…」

素早い一閃が軽鎧を貫く。不利な相手でも難なく倒してしまった。イリーエ様には敵う気がしない。

「城に突入する。全員、警戒しつついくぞ。」

俺は攻城戦に關しては完全なる素人だ。ここからの指揮はゼトさんに任せる。

罠があつても見破れるであろうゼトさん、ガルシアさん、ギリアムさんの戦闘経験の多い3人を先頭に城へと侵入する。

「…罠はない、進むぞ。」

「待つてください、誰か来ます！」

「敵兵か…！」

エイリーク様が城の中からやつて来る人影に気づく。茶髪の顔色の悪い男性だ。兵種はパラデインだろうか。

「エイリーク様…それにゼトか。」

「オルソン殿…？何故ここに、貴方はエフラム様と行動を共にされていた筈では？」

(この人は?)

(オルソン殿はルネスの中でも上位の実力を持つ騎士で、エフラム様と共に前線でグラドと交戦していたはずです。)

目の前の男性に付いてフランツに小声で聞く。ルネス騎士か。どうやら敵である可能性は低いようだ。

「無事だったのですね、オルソン。兄上もこちらにいるのですか?」

「はい…エフラム様と我々はグラド軍に捕えられ、長らくこの城の囚となっていました。私は先ほど牢を抜け出し、脱出の機会をうかがつておりましたが…」

しかし、敵影が見えないな。さつきから外で俺達が戦っていたのだから、城内は既に防陣を固められているものかと思ったのだが。

「オルソン…大丈夫ですか？酷く青ざめた顔を…」

「い、いえ…大したことはありません。ですが、エフラム様が今も「無事かどうかは…」

「兄上はどこにおられるのですか!」

「私と同じく奥の牢に捕えられているはず…牢獄への道はこちらです。さあ、敵の増援がやつて来ぬ内に…」

「すみません、オルソンさん…でしたか?」

…この男、怪しいぞ。言つていることに矛盾は見当たらないが、こ

の男がルネス騎士であるなら話は別だ。

「…君は？」

「俺はアストラ。まあ、ただの傭兵と思つてもらつて構いません。はつきり言わせてもらいます。あなたの行動、とても騎士のそれとは思えない。」

「な…」

「ア、アストラ!? 何を言つてているのですか！」

「エイリーエ様もおかしいと思わないですか？ オルソンさんはエフラン王子は牢に捕えられているはずとしました。直接確認したならそんな言葉を使うわけがない。牢を抜け出した後、助けられないにしろ真っ先にエフラン王子の無事を確認するのが騎士としてすべき行動のはずだ。」

そもそも、エフラン王子と共に捕えられたあなたが一人脱出できたというのもおかしい。そして、本来グラド兵で溢れかえっているはずの城に、入つてから姿を現したのはあんた一人だけだ。極めつけは

⋮

距離を詰めてオルソン胸ぐらを掴み、懷に隠されていた極めつけを奪い取る。

「それは…！」

一本の短剣。捕囚になつていた男がこんなものを持てる訳がない。つまり、こいつは捕囚などではない。グラド帝国に味方する、裏切り者だ。

「…エイリーエ一人なら上手く騙せただろうが、この男が居なくともゼトなら気付いたのだろうな。」

「オルソン、何故ルネスを裏切った？」

「あの方はすべてを叶えてくれる…妻との幸せな日々が、もう一度この手に戻つてくるのだ…」

「何を訳の分からぬことを…」

「そこまでです。ご苦労でした、オルソン。後は私が引き継ぎます。貴公は愛しい奥方のもとへ戻られよ。」

奥から来た重装備の男がそう言う。そしてオルソンがその場から

立ち去ろうとする。

「おい、貴様。」

「……」

「これは返しておく。」

短剣をオルソンの顔に目掛けて投げつける。頭を動かして急所は外されたが、回転する刃が頬に一筋の傷をつけた。

「…そうか。」

傷がついたことにも反応せず、最早眼中に無いとでも言いたげに立ち去った。

「私はティラード。帝国将軍ヴァルター様の忠実かつ有能な副官です。」

「ヴァルター…あの男の…」

ヴァルター、どこかで聞いたような気がする名前だが思い出せない。だが帝国将軍？ 帝国将軍はデュッセル将軍にグレン将軍、そしてセライナさんの3人のはず…

将軍で思い出した、たしかセライナさんが将軍になる前の将軍で、市民を虐殺したとかでその地位を剥奪された奴だ。戦争に伴つてまた選ばれたのか？

「あなたはルネス軍のゼト殿ですね。うまく小鳥を網に収めたつもりが、厄介な守り刀がついてきたものです。」

「兄上はどこです！」

「さて、どこでしようね？」

「な、逃げる気か！」

ティラードは重い鎧を着ているとは思えない速さで奥へと逃げていく。

「待ちなさい！」

「逃がすか！」

「今です、橋を崩しなさい！」

「なにいつ！」

たつた今俺達がこの男を追いかけて渡つた橋が崩された。俺とエイリーエ様は他の皆と分断され、たつた2人でティラードと対峙す

る。

「ところで、貴女の兄上ですがこの城にはいませんよ。ヴァルター様の追撃を逃れ、脱出していきました。あの状況から逃げ出すとは：まつたく、呆れたしぶとさです。」

「だが、寧ろあんたは嘘の情報を餌にしてエイリーグ様を釣つたと。」「ええ。その失策を利用するのが私の賢いところです。現にこうやって、妹の方を罠にかけることに成功しましたしね。」

自ら賢いと明言すると逆に頭が悪く見えるものだが、この男は違う。エフラム王子が囚われた、という無視できない事柄を餌にして罠に嵌める。眞偽が分からぬ以上、俺達はまんまと引っかかるしかなかつたわけだ。

「ではやはり、兄上はご無事…！」

「ええ。ですが、感動の再開は天国でして頂くことになります。橋も落としましたし、逃げ道はありませんよ。」

「私もそつちに行くわ！」

「おや、そうはさせませんよ。」

「きやあっ！」

「ヴァアネッサ！」

崩れた橋の下、湖に浮かぶ小舟からアーチャーが弓矢を放つ。一人なら何とかなるかも知れないが、いかんせん数が多い。ヴァアネッサが撃ち落とされる前に戻れたのは運がいいとしか言えない。

「全軍出撃。ルネス王女を討ち、腕輪を奪うのです。」

「くそつ…エイリーグ様、脱出しましよう！出入口はここだけではないはずです！」

「はい！ですが、まずは目の前の敵を倒さないと…」

「柱を遮蔽に使つてください。傷薬の使用回数も限りがありますし、できる限り攻撃を受けないようにしましょう。」

背後に何も無い以上、防御に徹するには愚策だ。徐々に、そして一方的に追い詰められるよりは多少の危険は覚悟の上で突破口を探した方が賢明だろう。

「せあつ！」

目の前のソルジャーを二人で破り、その奥にいるアーマーナイトには俺はアーマーキラー、エイリーケ王女はレイピアを構えて同時攻撃。

敵の合間をすり抜けて左側の部屋に進む。まずは俺が姿を現してその部屋にいる傭兵とアーチャーを引き付け、あとからエイリーケ様がアーチャーに間合いを詰めて攻撃、俺は傭兵の相手をする。

「おらつ！」

「ぐつ…だあつ！」

身につけていたが革の防具が壊れたが、身体に傷はついていない。そのまま力ずくで刺し殺す。

「このまま先に…!?」

奥に進むと、何人ものソルジャー達が待ち構えていた。「へへっ、鍵がなけりやてめえらはこつちに来るしか選択肢がねえからな。」

逃げ道を限定してそこで待ち伏せる。予測は出来たが、対策は無理だ。こうやって、遭遇してから対処するのが精一杯だ。

「廊下を挟んで囮まれないようにしましょう。一人ずつ倒していくばらな。」

⋮

「ダメです、小舟に乗っていたアーチャー達がこつちに！」

やられたか…こうなれば多少の怪我は覚悟で兵士と兵士の間を強引に突破すべきか?いや、それでは成功率が低すぎる。

「エイリーケ様、ここは俺達一人でなんとか凌ぎ切りましょう。俺がソルジャー達を抑えます。エイリーケ様は弓矢を避けるのに専念してください。耐え凌げば、ゼトさん達も来てくれるはずです！」

「分かりました。アストラ、ソルジャーの相手をするあなたの方が負担は大きいはず。無茶はしないでください。」

「それは出来ませんね。今無茶せずにどこでするんですか。ですが、全員無事で帰るつてターナ姫と約束しましたから、心配なさらずとも死にはしませんよ！」

俺は前方のソルジャー、エイリーケ様は後方のアーチャーに向かい、身構える。

「死ね！」

俺を半円形に囲んだソルジャー達から五月雨のように槍が襲いかかる。

避けて、防いで、耐える。廊下でアーチャーの相手をしているエイリーエ様の所へは絶対に行かせない。

「がつ…はあつ…」

鎧が壊れたから、1回の攻撃で受ける傷が馬鹿にならない。軽い革の鎧を好んで装備していたが、こんなことが起こりうるのなら金属の軽鎧の方が良かつただろうか。

休む隙もなく回避を続いているから、自分の動きが段々と動きが鈍っていくのが分かる。脚にも激痛が走る。だが、動きを止めれば間もなく目の前の槍が胸を貫くだろう。

「突撃するぞ！」

「了解！」

「はつ！」

最早限界を超えて、力尽きる直前だつた。赤の鎧と緑の鎧の二人のソシアルナイト、そして、エイリーエ様と同じ青い髪の青年が俺を囲んでいたソルジャー達をなぎ倒した。

「はあつ…はあつ…あなたが、エフラム王子でしようか？」

「そうだ。あんたがアストラだな。エイリーエと二人でよく粘つた、後は任せてくれ。よし、フォルデ、アーチャー達も全員撃退だ！カイルはエイリーエを救出してくれ！」

「はは、流石エフラム様。一人でこんな人数のアーチャーをやるのは無茶すぎる。けど、負ける気がしないな！」

「兄上…兄上なのですね！」

「ああ。エイリーエ、悪いが話は後だ。まずは敵を全員片付ける！」

「エイリーエ様、こちらへ！」

「アストラさん！」

「フランツ…か…助かつた…」

脚が千切れているのではないかと思うほどに痛み、それ以外の感覚

が消えている。歩くことさえままならないだろう。

「いえ、礼を言うのは僕達の方です。本当なら僕達ルネス騎士がエイリーグ様をお守りしなければならないのに…」

「はつ、何言つてんだ。ルネス騎士でなくとも、ルネス王女であるエイリーグ様を守るのは当然のことだろ？なによりターナ姫の大切なご友人だ。死なせやしないさ。」

「そう…ですか。とりあえず、すぐにナターシャさんのところへ運びます！」

なんとかフランツの馬に跨り、ナターシャさんの元へと運ばれる。「酷い傷…すぐに治療いたします。」

ライブの杖で徐々に傷が塞がっていく。痛み以外感じなかつた脚にも通常の感覚が戻ってきた。

「ありがとうございます。これだけ傷が治れば、もう大丈夫です。」

「アストラ、無事!?」

「ヴァネッサか。俺は無事だけど、お前こそ大丈夫か？ティターニアに弓矢が当たつたりは…」

「大丈夫よ。私もこの子も弓矢には当たらずに済んだわ。危ないところだつたのは違わないけど。と言うより、あのくらい反応できなかつたらとつくな死んでるわ。」

言われて思い出す。ヴァネッサの咄嗟の反応は異常に素早く、誰も敵わない。無用な心配だった。

「アストラ。」

ゼトさんがエイリーグ様の無事を確認した後、俺のところに来る。「エフラム様の指示により、この城を制圧することになった。」

「そうですか。じゃあまだ俺の力も必要ですね。」

輸送隊へ行き、予備の防具と鋼の剣を受け取る。上半身の急所を塞ぐだけの防具だが、あるのとのないのでは全く違う。

アーチャー隊を撃退したエフラム王子が先頭に立ち、廊下を突き進む。剣を持つ傭兵二人を一方的に打ち破り、シャーマンと魔道士も赤と緑の騎士が先制攻撃を仕掛ける。

「…流れるかのような戦いだ。」

「兄上はとても強いんです。グラド帝国のデュッセル将軍にも師事を仰ぎ、この戦争が始まる前から、ゼトにも善戦するくらい戦えていたんです。」

「ゼトさんに…それはすごいな。」

ゼトさんには俺じやいくら頑張つても追いつく気配がない。エラム王子には、槍の才能、そして努力の才能があるのだろう。

「アーマーナイト…俺の出番だな。」

アーマーキラーを構え、一撃で仕留める。どうやら宝物庫を守つていたようで、有無を言う前にコーマが扉を開けて入つていった。

「銀の剣と…なんだこりや？ 鞭？」

「それは『天空のムチ』ね。オリオンの矢と同じ、経験を重ねたペガサスナイトやドラゴンナイトが更なる強さを求めて使うものよ。私はまだ、実力が足りないけれど。」

「そう言えば、セレフィユの街でこのような物を頂いたのですが…もしかするところも…？」

エイリーエ様が不思議な色合いの指輪を取り出す。装飾品としては些か派手すぎる。たしかに普通のものではなさそうだ。

「そちらは『導きの指輪』。『魔道のすゝめ』三十一項を始め、様々な書物にて記されています。卓越した魔道を扱う者が更なる高みへ至る際に使用するものです。優秀な魔道士たる私も既に使用可能な域に達してはいますが、それを使わなくともまだ伸び代はあるかと。」

「なるほど、じゃあその指輪はルーテに限らず、アスレイやモルダさん、ナターシャさんも使えるのか。」

その話はもう切り、ガルシアさんが壁を崩したところから全員でなだれ込む。俺はネイミーとの連携でアーチャーを狙う。

「ぜあつ！」

「そんなの当たるがつ…」

避けやすいようにわざと大振りに攻撃し、回避した隙にネイミーが急所を狙い撃つ。その後に来た魔道士にも同じ連携で仕掛ける。

「まあ、こんなものか。」

合流するまでに比べれば楽すぎて逆に不安になるくらいだ。やは

り人数が多ければ戦いやすい。指示を飛ばすのは大変になるが。

玉座前の広い廊下へ戻り、状況を確認する。玉座の間を守るソルジャー達はガルシアさんとロス、ヴァネッサが倒し、奥側のアーチャーと魔道士はヨシュアとアスレイが撃破。階段から侵入してきた盗賊はコーマが処理。ついでにその盗賊が持っていた鍵も盗んだようだ。

奥の部屋では数人のアーマーナイトが宝箱を守っている。玉座の間でティラードを囮むエイリーク様にエフラム王子、ゼトさん、赤緑のソシアルナイトを除けば、ガルシアさんかギリアムさん、フランツを前衛にしてルートかアスレイが攻撃すれば突破できるが、無理して宝箱を狙う必要もないだろう。

となれば、後はエフラム王子達の戦いの行く末を見守るだけだ。

「はっ！」

「せいつ！」

エイリーク様のレイピア、そしてエフラム王子の鋼の槍の同時攻撃が刺さる。しかし、ティラードは怯むこともなく銀の槍で薙ぎ払う。「確かにかなりの実力ですが……一撃が軽いですね。私の鎧に少し傷がついただけですよ？」

「そうか。ならこれならどうだ？」

エフラム王子は鋼の槍を捨て、見たことのない、だが一目で業物と分かる槍を構える。

「ほう、その槍……中々の業物ですね。確かにその槍であれば私の鎧も貫けるかも知れませんね。ですが、この私をそう簡単に倒せるとは思わないことです。」

「ああ、俺一人じゃ難しいだろうな。エイリーク、行くぞ。」

「はい、兄上。」

エフラム王子が攻撃し、ティラードが防いだところにエイリーク様が追撃を仕掛ける。それもまた防がれるが、間髪入れずにエフラム王子が再攻撃、次はそのままエフラム王子が攻撃……と、変則的で予測できない動きでティラードを追い詰める。

「あの槍は……？」

「レギンレイヴだ。エフラム様が大陸随一と呼ばれる鍛冶屋にて購入された特注の槍だ。鋼の槍と同じ威力を発揮しつつ、軽量化される。急所も狙いやすい。そしてエイリーグ様の扱うレイピアと同じく騎馬と重騎士、どちらにも高い効果を發揮する。」

それは確かに相当な業物だ。強力な要素を全て詰め込んだような、完璧な槍じやないか。

「ちい…っ！」

痺れを切らしたティラードは鎧を碎くほどの攻撃を喰らうのも構わず、全力の一撃を叩き込む。

「きやあっ！」

「エイリーグ様！」

攻撃を受けきれずに大きく体勢を崩し、倒れそうになつたエイリーグ様の身体を受け止める。

「これで決まりだ！」

ティラードが強引に決めた捨て身の一撃はエイリーグ様にかなりの打撃を与えたが、後の隙があまりにも大きい。エフラム王子が急所を狙いすまして槍を貫く。

「…み…見事です…しかし…ここを生き延びたことこそ、あなたの方の不幸…ヴァルター様は…私ほど優しくはありませんよ…」

死を目前に控えたティラードは、散り際にそう言い残して息を絶つた。

レンバール城の制圧が完了。残っていたグラド兵士は投降し、戦争が終わるまではフレリアの捕虜として扱われる。

まるで予定調和のように、滯ることなく城の制圧が終わつた。エフラム王子、そして一人のソシアルナイトの突出した実力がそうしたのだろう。

「あ、あの…」

「子供…？どうしたんだい？」

10歳もあるかないかくらいの、藍色の髪の少女が廊下でおろおろとしていた。

「エフラムは…どこにいますか？」

「エフラム王子？ エフラム王子なら玉座のところでエイリーエ様達と話をしているけど……連れて行つてあげようか？」

「はい……お願ひします。」

少女を玉座の間の前まで連れて行く。足音が小さいから、ちゃんと着いてきているか不安になる。

「あそここの階段を上ればエフラム王子がいるよ。」

「……ありがとうございます。」

少女は小走りで階段を上る。躊躇して転ばないか心配だったが、その必要なく少女はエフラム王子の下へ。

「藍色の髪の少女……そうか、セレフィユの。」

あの人探しも藍色の髪の少女を探していると言つていた。彼女のことなのかな、そうではないのかは分からぬが。

「一度フレリアに撤退だ！ すぐにグラドの増援が来るぞ！」

エフラム王子の掛け声で、早急に撤退の準備がなされ、フレリアへと戻つていった。

10章 守るための力

「只今戻りました！」

「おかえりなさい！」

フレリアに戻り、城の中に入るや否やターナ姫が駆け寄つて来た。目の隈を見るに眠ることなく皆の帰りを待つていたのだろう。帰還が予定より1日遅れたから心配していたらしい。遅れたのは道中に魔物の集団と遭遇したせいだ。

「エフラム、無事だったのね！夢みたい、二人が一緒に帰つてきてくれるなんて。私、毎日にお祈りしてたのよ、皆が無事に帰つてきますようについて。」

ターナ姫のことだし居ても立つてもいられなくて、唯一出来ることがお祈りだったのだろう。：毎日どこか毎時、いや毎分やつていても不思議じやない。

「すまない。君にも心配をかけてしまったな。」

「うん…いいの。だつて、こうしてまたみんなで会えたんだもの。お兄さまもね、もうすぐ前線からお帰りになられるのよ。みんなでゆつくり、いろいろお話ししましょう。」

ターナ姫の兄君、ヒーニアス王子：話はターナ姫から何度も聞いているが、実際に会つたことはない。プライドが高く、突出した統率力と戦略を持つ。そして弓を扱わせれば、フレリアで右に出る者はいないとか。

「ターナ様！ヒーニアス様が前線よりご帰還なさいました！」

噂をすれば、か。ヒーニアス王子が大勢のフレリア兵士を連れて帰還される。

「お兄さま、お帰りなさい！ご無事で戻られて本当によかつた…！」

王族は兄妹の間でも敬語を使って話さないといけないのか？エイリーエ王女もエフラム王子に対して丁寧な口調で話していたが、エイリーエ王女の性格面の理由だと思つていた。

「当然だ。この私がグラードの雑兵相手に手傷など負うものか。帝国将軍も皇帝ヴィガルドも、みな我が弓で仕留めるだけのこと。」

「久しぶりだな、ヒーニアス。」

「…エフラム。」

「ヒーニアス王子、お久しぶりです。」

「…ルネスは滅んだそうだな。以前、警告したはずだ。グラドなどに付けに入る隙を与えるからそうなる。」

あまりに冷淡な発言だ。ヒーニアス王子の言うことも間違つてはいないが…数百年に渡る親交がある国を疑えというのも無理な話だ。「お兄さま！そんな言い方しなくて。エフラムとエイリーグはお父上を亡くされているのに…」

「……お父上のこととは氣の毒だつたな。だが、エフラム。まずは一刻も早くグラドを倒し、この戦いを終わらせることが先決だ。」

そう言い終えるとヒーニアス王子はヘイデン王のいるであろう王座の間へと向かつた。冷淡というよりは、素直になれないだけなのかな？エフラム王子の前だからなのかもしれない。

「もう、お兄さまつたら…ごめんなさいエイリーグ、エフラム。」

「いや、相変わらずで安心した。昔からヒーニアスは俺を嫌つてたからな。」

「お兄さまはエフラムのことをライバルだと思つてるの。お兄さまは他人に負けるのが大嫌いだから。王としても、人間としても、男としても、戦士としても…とにかくエフラムには何もかも負けたくないんだつて。」

「ターナ、余計なことを喋るな。」

立ち去つたと思っていたヒーニアス王子が口を挟む。やはり、自尊心は高くとも根は純粹な方なのだろう。

その後、エイリーグ王女とエフラム王子はヘイデン王の軍議に呼ばれ、俺は身体の汚れを落とすために浴場に行つた。ターナ姫はヴァネッサ辺りから今回の行軍中の話を聞いたりしているだろう。

「…今はコーマとヨシュアが入つてゐみたいだな。あと、ロスもか。」湯を身体に掛けて目立つ汚れを落としてから湯船に浸かる。…久しぶりにゆつくりと身体を休められる。野宿やセレフィユの宿では警戒しつつの睡眠だつたから熟睡できなかつた。

「…俺、こんなでつかい風呂に入るのは初めてだ。」

「ここも城の中じゃ小さい方に入るが、街の公衆浴場なんかよりはかなり広いだろうな。」

浴場と言つても複数あり、場所や時間によつて誰が利用出来るかなどが決められている。今日この浴場は一般兵の利用時間が来るまで、エフラム王子やエイリーエ王女に協力していた兵士や平民が自由に使用していいことになつていて。

ギリアムさんやヴァネッサのような騎士や、神職のモルダさん、そして王族であるエフラム王子やエイリーエ王女にはこよりも上等な浴場が用意されているだろう。

兵士は兵士でも一応ターナ姫の近衛兵である俺は騎士と同じ浴場でもいいのだが、あつちの浴場はやたらと広いから苦手だ。

「ま、滅多に入れるモンじゃねえよな。このデカさのは。」

「その言い方、ヨシュアはこの規模の浴場に以前も入つたことがあるのか？」

「まあな。」

ジャハナの都市にはこれくらいの広さの公衆浴場があるのだろうか。

しばらくしてロスとコーマが風呂から上がり、その少し後にヨシュアも出ていった。…さて、そろそろ俺も上がるか。

風呂から上がつた後にホカホカとした感覚が残るのは苦手なので、冷水を浴びてから体を拭く。服を着て、汚れた服を洗う給仕を傍目に浴場を後にする。

残りの時間は…まあ、俺本来の仕事をするか。

丁度ターナ姫がやつて來たのでその隣で歩く。どうやら話は大体ヴァネッサとモルダさんから聞いていたようで、俺が話すことは、その二人とは全く別行動をしていた僅かな間のことだった。

「…ええ、俺とエイリーエ王女だけ分断された時はどうなることかと思いましたよ。正直、エフラム王子達の到着が少しでも遅れたら耐えきれませんでしたね。」

「でも、アストラもエイリーエもエフラムも…こうやつて生きて帰つ

てきてくれた。それでいいじゃない。」

「そう…ですね。過去より、現在を見ないと。グラドとの戦争が終わつたわけではありませんから。」

ターナ姫が気ままに城内を歩き回り、俺はその隣にお供する。この関係も、今は何よりも大切に感じる。この戦争が終わった後も辞めるつもりはない。

妹：アメリカのことは心配だが、アメリカもグラド兵士に志願した。自分の道を進み始めたのだから、俺がとやかく言うべきではないだろう。

「貴方がアストラ様でしようか。」

「…あなたは？」

外套に身を包んだ、若い男性が話しかけてきた。侵入者かと思い一瞬身構えたが、ターナ姫が俺を制止するように腕を出したので、どうやら違うようだ。

「こここの密偵の人よ。」

「はい。グラド軍に潜入し、諜報を行つていたのですが…ツ！」

密偵は突然、右手で肩を押さえる。その肩から腰にかけて、大きな傷跡がついていた。

「痛むのか？」

「はい…グラドに潜入を見破られ、殺されかけたのですが、なんとか逃げ仰せてきたのです。これはその時に…確かにアストラ様はグラドのシルバ村出身でしたね？」

「ああ、小さな村だ。今は母さんがそこで暮らしているはずだ。」

「私もターナ様が話されているのを耳に挟んでそれを知つたのですが…私はグラドから逃げる時、そのシルバ村の方々に匿つていただいたのです。」

シルバ村は平和な村だ。今回の戦争だつて村の皆が望むはずないし、戦争の発端がグラドにあると知つていればフレリアの密偵を助けたとしても不思議じやない。

「そうか…村の人達はどんな感じだつた？」

「皆、暖かく優しい方でした。それで、アストラ様がシルバ村の出身で

あることを思い出した私は村の方々にアストラ様がターナ様の傍付きとして仕えていることをお話ししたのです。皆様はとても喜ばれておりました。フレリアの姫君の傍付きであれば、アストラ様の将来も安泰だろうと。」

「…良かつた、村のみんなは俺が傭兵になることに反対してたんだ。シルバ村はみんなが家族みたいなものだから。まだ子供だつた俺が傭兵になるのは危険でしかないし、死んでほしくなかつたんだと思う。」

それに気付いていたがら、あの時の俺は村を飛び出した。…実際、ターナ姫と出会つた奇跡がなければ野垂れ死んでいたのだから村の皆が正しかつた。

「それで…アストラ様のお母上、ミリアーナ様のことなのですが…」「母さんのこと…？まさか、母さんの病気が…？」

母さんは元々体が弱く、俺が傭兵になる少し前から複雑な病氣にかかるつていた。村の医者でなんとかなるような病氣ではなく、王都にある高い診療所の医者に頼る他になかつた。だからこそ、俺は村を出た。…まさか、アメリカもそのためにグラードに？

「いえ…………アストラ様が村を発たれてから1年後のことです。村が山賊に襲われ、戦える者のいる家はなんとか山賊を追い返したようですが…アストラ様のお母上と妹様しかいなかつたアストラ様の家は…」

「…殺された…の、か…？母さんが…山賊に…」

「…妹様は身を隠して事なきを得たようですが、お母上は妹様を守るために…山賊に連れて行かれたようです。」

「…そうか、ありがとう。態々俺に伝えてくれて。…ターナ姫…少し、1人にしてもらえますか。」

「ええ、あんなことを聞いたあとだもの。アストラの気持ちが落ち着くまで、私は何も言わないわ。」

「ありがとうございます。」

自室へと戻る。ベッドと椅子と窓があるだけの、狭い部屋だ。

アメリカがグラド兵士に志願した理由はお金なんかじやなかつた。

：力が欲しかったんだろう。あいつは責任感の強いやつだ。もし、自分に力があれば、母さんを守れたのに。二度とそんなことにならないように戦う力を付けようとしたに違いない。

俺ほどに無様な兄なんていないな。家族を楽にしてやりたいと思つてたのに出来なくて、いざと言う時に家族を守れなくて、拳句に、妹に気を遣われて……！

「くそつ……畜生、ちくしょう！」

俺はあまりにも弱すぎた。石壁に拳をぶつけても、その拳が傷だらけになつても、自分への怒りが収まらない。

「……誰だ？」

考えることを放棄してベッドの上で仰向になつていたら、俺の部屋の扉を誰かがノックした。ターナ姫ではない。彼女のノックはもつと軽快なリズムを刻んでいる。

「……私は、エイリーエクです。」

「エイリーエク王女？」

扉を開けたすぐそこに、エイリーエク王女が立つっていた。

「軍議は終わつたのですか？」

「はい、今後の方針も決定しました。……ターナからお話を聞きました。少し、お邪魔してもよろしいでしようか？」

「……はい、狭い部屋ですが、それでも良ければ。」

ターナ姫、口が軽いな。まあ、エイリーエク王女だから話したのかも知れない。エイリーエク王女に椅子を渡し、俺はベッドに腰掛ける。「……お母上を、失つてしまつたのですね。」

「はい……明確な生死は不明ですが……山賊にいいようにされているのでしょうか。父さんも俺が幼い頃に病で死んで、もう妹しか……」

「そうなのですか……でしたら、あなたはその妹さんを何があつたとしても、守つてあげてください。」

「でも、俺は……なにも守れなくて……」

「あなたは私を、そしてターナを今まで守つてきたじゃないですか。」

「そう弱気にならないでください。」

「……」

ターナ姫の傍に付いている時に敵と遭遇したことはないし、ミュランから救出出来たのもエイリーエク王女やゼトさん、フランツにギリアムさんの助けがあつたからこそ。レンバールの時だって、エイリーエク王女の実力があつてこそ二人とも無事でいたのだ。俺は、自分を守るだけで精一杯だ。

「それでも、守らなきやならないのは分かつてゐるんです。でも、守るために力が俺にはないんです…！」

「今あなたならどうかもしれない。けれど、あなたはまだまだ成長出来ます。そうでしょう？」

…今の俺じゃ守れない、でも…。

「…そ…うか…」…そ…うだつた…俺は…俺は、戦い続けます。自分自身にも負けないように戦つていけば、皆を守れるくらいに強くなつていいくはずです。…目が覚めました。お手を煩わせてしまい申し訳ありませんでした、エイリーエク王女。」

「いえ、落ち込んでいるあなたは…なんと言えばいいのでしょうか。あまり見ていられないのです。…私もあなたに勇気づけられたのです。たつた2人になつても諦めずに戦い続けたあなたに。」

…そ…うだつたのか。ちゃんと守れたじゃないか、未熟な俺でも。守れるものがあるのなら、俺はまた立ち上がれるはず。

「さあ、もう夕食が用意されているようです。行きましょう。」

「ちよつ、エイリーエク王女!？」

エイリーエク王女に手を引かれて部屋を出る。思わずつんのめるが、すぐに体勢を立て直す。

「俺は、別につ、一人でも！」

それでもエイリーエク王女に引っ張られる俺は、傍から見れば滑稽極まりないだろう。しかし、相手が相手だから強引に振り払うわけにもいかない。これもエイリーエク王女なりの励ましなのだろう。

階段ですっ転ぶまで、エイリーエク王女は手を離してくれなかつた。

11章 二度目の救出行

俺達がフレリア城に帰ってきた日、フレリアの聖石はグラド帝国三将：改め帝国六将の【蛍石】セライナと【虎目石】ケセルダによつて破壊された。

そしてその2日後、ヒーニアス王子とエイリーエ王女はグラドの狙いが聖石であることを使え、協力を求めるためにそれぞれジヤハナ王国、ロストン聖教国へ。そしてエフラム王子は本格的にグラドへ反撃の狼煙をあげた。

エイリーエ王女とエフラム王子が別々に行動することになつたのでエフラム王子への援軍としてレンバールまで向かつた寄せ集めの軍も二つに分けられた。

とはいゝ、エイリーエ王女はロストンへ向かう為にカルチノ共和国の港から船に乗る安全な道のりなのでゼトさんとモルダさんが傍に付き、フレリア正規軍が幾つかの大隊に編成された内、最も小規模な大隊が護衛するという編成になつてゐる。

そしてエイリーエ王女について行くゼトさんとモルダさん。ターナ姫の側に仕える俺を除く中で、ヨシュアはヒーニアス王子と共にジヤハナへ行くことを強く希望したため、ヒーニアス王子が雇つた傭兵達と共について行くことになった。

それ以外の全員はエフラム王子と共にグラドに攻め込むことになり、フレリア正規軍第2大隊もエフラム王子の指揮下に入る。第1大隊はフレリア城の防衛が役割になる。

昨日、ペガサスに乗るターナ姫に少しでも歩調を合わせるためにと一頭の馬を貰つたので、乗馬の練習をした。だがやはり難しい。しがみついて移動するのが精一杯で、乗りながらの戦闘はまだまだ出来そうにない。

そして今は、ターナ姫が珍しく起きてこないのでターナ姫の部屋の前に居る。

「ターナ姫、朝ですよ。起きてください！」

扉を叩くが、返事はない。：嫌な予感がする。扉を押す。鍵は掛

かつていなかつた。ここで、嫌な予感は確信へと変わる。

「やつぱり、もぬけの殻か。」

開け放たれた窓。ターナ姫の行動力には感心させられる。…そんなこと考えてる場合じやないな。

近くを通り繋つた兵士にヘイデン王への伝言を頼み、装備を整えて馬舎へと向かう。

「さあ、早速出番だ。頼んだぞ！」

新しい金属の軽鎧を身につけ、鋼の剣を背負い、傷薬を多めに持つ。馬が走るのに邪魔にならないように予備の鉄の剣を装着させ、鞆には俺の食糧と馬の餌。ターナ姫を追いかける準備は整つたが、まずはターナ姫がどこに向かつたのかを突き止めないといけない。

城の中にターナ姫を目撃した人はいなかつたため、城下町での情報収集になる。街を行き交う人々に、青い髪のペガサスナイトの情報を尋ねて回る。答えを知っていたのは背の低いお婆さんだつた。

「ああ、青い髪の天馬騎士様かい。それなら、明け方に南寄りの方角に飛んで行つたよ。」

「南ですね、ありがとうございます！お礼はこれくらいしか出来ませんが…」

謝礼として鞆から100G銀貨を取り出しが、お婆さんはそれを断つた。

「気にすることはないよ。あたしは見たものをそのまま教えただけだ。お前さんはその人を追つかけなきやなんのだろう？急がねばいかんぞ。」

「…すみません、受けた恩はいつか必ず！」

南に向かつたのなら、エフラム王子のところで確定だ。フレリアとグラドの国境にある砦・リグバルドに向かえばターナ姫に会えるか、エフラム王子と合流出来るだろう。街の外に出て鞍の上に跨り、走り出すように脚で指示を出す。

「やつぱり、これに慣れるのは時間が掛かりそうだな…」

馬の背中の上で上下に揺れる感覚が慣れない。手綱を握りしめて馬にしがみつく。

この馬はかなり賢くて、俺の下手な操縦でもしつかりと意図を汲み取ってくれる。

「お前にも名前をつけてやらないとな……よし、今日からお前は『エルト』だ！」

フレリア城下町の国立図書館で読んだ、異界の伝承に出てくる英雄から取つた名前だ。最期まで忠誠を貫いた、獅子王と呼ばれる騎士。俺の目指す、理想の姿だ。

休憩を挟みながらひたすら南へと下り、いい加減慣れてきた次の日、リグバルドの砦へと辿り着く。ここまでにターナ姫は見つかなかつた。砦の方は、エフラム王子率いるフレリア軍が突入しようとしているところだ。砦門の前でグラド軍と交戦している。

「どうする……ん、あれは……アキオス！」

砦の裏口から、ターナ姫のペガサスが運び出されている。目の形や鬚のクセまで完全に一致しているので間違いない。また敵に捕まつたのか：いや、細かいことは後回しだ。まずはアキオスを取り返す。

「待てっ！」

エルトから降り、アキオスを連れ出そうとするグラド兵士に向かつて剣を構える。

「なっ!? 敵軍は全員正門にいるんじやなかつたのか!?

「知るかよ！：俺が時間を稼ぐ、だからお前はさつさとその天馬を連れて行け！ 天馬を逃がしたらゲブ様に何をされるか分かつたもんじゃない！」

「どけえつ！」

グラド兵がぐだぐだと話している間に近づき、喉に鋼の剣を突き刺す。

「ひいい！」

「その天馬をこつちに渡せ。そうすれば命だけは助けてやる。」

「わ、渡したところでゲブ様に処刑されて終わりなんだ…！ 渡してなどやるものか！」

自棄になつて突撃してくるソルジャーの攻撃を避け、がら空きの背中を斬り捨てる。

「大丈夫だアキオス。俺だ、落ち着いてくれ。」

パニックで暴れるアキオスを宥め、落ち着かせる。アキオスも俺の顔を覚えていたらしい。

「中にターナ姫がいるんだな？」

アキオスは首を縦に振った。

「エルト！ アキオスと一緒に居てくれ！」

馬とペガサスと一緒に居させても敵を撃退出来るようになつたりはしないだろうが、別々の場所に居させるよりはいいだろう。

アキオスが連れ出された裏口から砦の中へ入る。倉庫らしき場所に出た。床に扉があり、物陰にあることから緊急脱出用の隠し扉だったことが分かる。

物置部屋を出たところにいた傭兵を不意打ちで気絶させ、周囲を見回す。

「宝箱……はどうせコーマが持つてくか。そんなことより、ターナ姫を探さないと。」

廊下を進んだ先にいたシャーマンを背後から突き刺す。その時に魔道士に見つかりサンダーの魔法が唱えられるが、理魔法の回避は得意分野だ。一撃だけの被弾で距離を詰めて首の動脈を切り裂く。

ここから道が3つに分かれている。だが、迷う必要はない。目の前に牢屋があり、その扉はアーマーナイトが守っている。牢屋の中に人がいるということだ。つまり、ターナ姫はあの中にいる可能性が高い。

「アーマーキラーはレンバールで壊れたから厳しい。……いや、あの壁は……いけるな。」

牢屋の壁が崩れかけている。これならアーマーナイトにも気付かれずに牢屋を開放できるだろう。アーマーナイトの兜は視野が狭いから見られる心配も少なく、丁度エフラム王子達が砦の中に侵入してきたので、音も紛れて分からぬだろう。

ヒビが入った壁に鋼の剣を叩きつけ、蹴りつけ、突進する。崩した瓦礫を壁に叩きつけたのが決定打となり、壁に向こう側まで貫通する穴が空く。それをギリギリ人一人が通れるくらいの大きさまで広げ、

牢屋の中を除く。

「見つけた…ターナ姫！」

「あ…アストラ…アストラ！」

ターナ姫は手枷を嵌められ、鎖で壁に繋がれていた。鎖を剣で断ち切るが、その音でアーマーナイトに気付かれる。

「なつ、どうやつてそこに…くそつ、やはり壁が脆くなっていたか！だからゲブ様に何度も修復を進言していたのに！」

アーマーナイトが持っていた鍵で牢の扉を開け、にじり寄つてくる。相手の鎧を掴んで引き寄せ、体当たりで転倒させる。アーマーナイトが仰向けに倒れている状態から立ち上がるのにはかなりの時間を要する。逃げるなら今だ。

「さあ、逃げましようターナ姫！外にアキオスがいます！」

「ありがとう…でも、ごめんなさいアストラ。私は戦いたいの。エフラムを助けたい。」

そう言われる事は分かつていた。だからこそターナ姫は城を飛び出したのだから。そして、もう一つ分かることがある。この瞳をしているターナ姫は俺が何を言おうと折れないという事だ。

「俺が来なかつたら助けられる側だつたでしょ？…ターナ姫がそう言うのであれば、勿論俺もついて行きます。ターナ姫を守るのが俺の使命ですから。」

「…うん、ありがとう！」

ターナ姫を連れて砦の外に出る。そこで、エルトとアキオスは大人しく待つていた。この2頭の仲は悪くないらしい。

「あれ、この子は…？」

「俺の馬です。移動するのが精一杯で、ソシアルナイトのように戦うのはまだ無理ですが。エルト、お前は裏口の前で待つてくれ。」

ターナ姫はアキオスの上に跨り、手綱を掴む。…やはり幼い頃から訓練しているだけあって、その操縦は洗練されている。俺には到底出来そうもない。

「ターナ姫、武器は？」

「捕まつた時に取られちゃつたわ。」

「そうですか、じゃあこいつのを押借しましょう。」

さつき俺が殺したソルジャーの鉄の槍を拾つてターナ姫に渡す。しかし、ペガサスに乗つて戦うには少し短い。

「…まあ、少し短いけどこれで頑張るわ。要塞を制圧すれば見つかるでしようし。」

ターナ姫と再び砦の中に侵入し、周囲を警戒しながら進む。向かって右は階段、左手は広い廊下。しかし、運悪く廊下に配置されたソルジャーに見つかってしまう。

「侵入者!? フレリア軍以外にも居たのか!」

ソルジャーは増援を呼ぶのか、俺達のいる方と逆に走っていく。：倒すべきだろうが、今の戦力は俺と装備が心許ないターナ姫。追つて囲まれでもしたら最悪だ。

「ターナ姫、まずはエフラム王子と…ターナ姫?」

「……すう。」

寝てる？いや、まさか。例え誰であろうとこの状況で眠れるわけがない。戦場で眠る…つまり。

「スリープの杖…！」

地面から湧き上がる青白い煙に包まれた。途端に強い眠気が襲つてくるが、爪を立てて頬を切り、その痛覚で眠気を凌ぐ。

眠気を凌いだ所にファイアーアーの魔法が飛んでくる。回避できるだけの余裕が無かつたので剣で防ぎ、少しだけダメージを抑える。

「ソルジャーと魔道士の2人か。やれやれ、眠り姫を守りながらはちよつと厳しいかもな…やられる前に、やる！」

ソルジャーの攻撃を掻い潜り、体当たりして相手を転ばせる。頭を強打したのかソルジャーはそのまま気絶。狙いを魔道士に変え、魔道士本人ではなく魔道書を狙い真つ二つに裂き、追撃で息の根を止めれる。

どうやらその後ろにも槍使いがいたようだが、歩き方がぎこちない上に歩調も遅い。おそらく新兵だろう。肩に触れるくらいの金髪に碧眼。体格からして女性か。…いや、待て。まさか…

「アメリカ…？」

「えつ？お、お兄ちゃん！え…ええつ！」

「…お前には、一度謝らないとな。」

アメリカには辛い思いをさせた。戦いの中だが、兄としてこれは必要なことだ。アメリカに向かつて頭を深く下げる。

「聞いたよ、母さんのこと。…済まなかつた。俺は、お前にも、母さんにも…何もしてやれなかつた。俺が村に残つていれば、母さんも守れたかもしないのに。」

「お兄ちゃん…フレリアに雇われてるの？」

「…俺はフレリアの王女、ターナ姫の近衛。今の俺はフレリアの人間だ。」

「そ、そう…なんだ。…お母さんのことは謝らなくていいよ。お兄ちゃんはお母さんのために村を出たんでしょう？それに、ほんの少しだけの仕送りでも私もお母さんも凄く嬉しかつたんだ。」

「済まない…本当にありがとうございました、アメリカ。」

頭を上げて、剣を構える。呼吸が荒い、震えが止まらない。俺は、今から妹と戦う。アメリカを…倒す。

「構えろ、アメリカ。」

「…え？」

「お前はグラド、俺はフレリア。今は戦争中で、俺達はお互に敵国の人間だ。…戦わないといけない。例え、兄妹だとしてもな。」

「…そんな、待つてよ。いきなりそんなの…嫌だよ！」

アメリカは槍を構えることなく泣きながら後ずさる。俺だつてこんなことは望んでいない。だが、だからこそ戦わなくてはいけない。こんな悲劇が起こらないように、この戦いを終わらせなくてはいけない。

「そうか。…悪いが、俺はフレリアを裏切るという選択肢は無い。ターナ姫を絶対に守ると自分自身に誓つた。お前の選択肢は3つだ。俺と戦うか、投降するか…こつちに来るか。」

「私は…」

「出来れば、投降してほしい。俺だつて妹を怪我させたくない。フレリアが捕虜に酷い扱いをする事もないだろう。だが、今のグラドはお

かしいと思つてゐるのなら。今のグラドを倒して、戦争前の明るいグラドに戻したいなら、俺達と一緒に戦つてくれないか。」

「…………わかつた。私、お兄ちゃんの方に、フレリアの方につくよ。今のグラドは、なんだか変だもん。」

アメリカは槍を下ろし、俺に向かつて手を差し出す。：：ああ、凄く安心した。呼吸の乱れや震えは収まり、身体の芯から温かい感覚が湧く。

「そうか……ありがとう、アメリカ。」

「…その人がターナ姫？」

「ああ、そうだ。普段は落ち着きがなくてお転婆な方だが、とても強い人なんだ。」

「…アストラ？：：どうしてお前がここに。」

フレリア軍を率いていたエフラン王子と鉢合わせる。後から続いたガルシアさんやギリアムさん達も驚いている。

「エフラン王子。えつと…」

「え、エフランッ！ ルネス王子の!?」

事情を説明しようとすると、アメリカがエフラン王子の名前を聞いて大袈裟に反応する。：：怯えてるというか、戦慄しているのか？

「どうしたんだ、アメリカ。」

「いや、その…：：グラド軍の人々が、ルネス王子のエフランは女と見れば襲いかかるようなけだものだつて…」

「…いや、俺はそんな事しないぞ。その子は誰だ？」

「こいつは俺の妹のアメリカです。グラド兵士として戦つていたんですけど、俺達の味方として戦う事を選んでくれました。アメリカ、そのグラドの奴の言い分は嘘だから忘れろよ。」

「そうだつたんだ。：：考えてみれば、国の王子がそんなことする訳ないもんね。」

グラド軍はエフラン王子を悪人に仕立て上げることで兵士の士気を上げていたらしい。そうでもしないと士気を保てないのだろう。

「話を戻すが、どうしてアストラがここに？」

「ターナ姫がフレリア城から抜け出してエフラン王子を追いかけたと

聞いて、それを追いかけたらターナ姫がここで捕まつてました。

「相変わらずだな、ターナも。それでターナは…寝ているな。」

「スリープの杖で眠らされているようです。」

馬の蹄が石の床を走る音がする。場所は…俺が来た方と、この広い廊下の先だ。

「増援だな。ソシアルナイト、それもかなりの数だ。フランツ部隊、ギリアム部隊は向かって左側から来る増援を相手しろ！それ以外は全員右側へ進むぞ！」

「俺も加勢…したいところだけど、ターナ姫が起きるまでは動くわけにはいかないな。」

安らかな寝息を立てるターナ姫を乗せているアキオスも困つているのか、唸りながら首を振る。

「あ、あたしも戦いたい…けど、これ介入する隙がないよね…」

「俺も前線に出る。アメリカだつたか、今回はとりあえず、アストラと一緒に行動してくれ。」

「わ、分かりました！お兄ちゃん、どうするの？」

「俺はターナ姫の近衛だから、とりあえず待機だな」

ターナ姫が起きるまでここで待機。今之内に戦況の把握をしておこう。

目の前では敵のソシアルナイト部隊とルーテを中心とした魔道士部隊が交戦中、さすがにルーテが不利な状況だったが、ガルシアさんの部隊とロスが加勢することで形勢が逆転する。

「…アストラ様？」

「あ、ナターシャさん。」

さつきまで後衛で援護をしていたナターシャさんが隙を見てターナ姫の様子を見始めた。

「ターナ様はスリープの杖によつて眠らされているのですよね？」

「はい。杖を振っている奴の居場所は掴めていませんが…レストの杖はありますか？」

「はい、お任せ下さい。」

「ん…んう…あれ、私…？」

ナターシャさんがレストの杖を振りかざすと、眠っていたターナ姫が目を覚ます。レストの杖は毒や杖による状態異常等を回復できる杖だ。スリープの杖による睡眠状態もそれに当てはまる。

「おはようございます、ターナ姫。ターナ姫は今までスリープの杖によって眠らされていました。たつた今ナターシャさんがレストの杖で回復してくれました。」

「そうだつたの…ありがとうございます、シスター。」

「お礼を言われるほどのことではありません。…それでは、失礼致します。」

ナターシャさん達杖使いは忙しい。そう言ってお辞儀だけすると傷ついたフレリア兵士達の治療に奔走する。

「ところで、その子は？」

「アメリカ、俺の妹です。グラドの志願兵として戦っていたんですが、俺と一緒に戦うことを選んでくれたんです。」

「ああっ、あなたがアメリカね！アストラから話は聞いてるわ。よろしくね！」

「え、ええっと、は、はい！よ、よろしくお願ひします…」

押しの強いターナ姫にアメリカはたじたじになる。俺も初めてフレリア城で話した時はターナ姫のペースに全然ついていけなかつたな。アメリカは俺よりも人付き合いが良い方だと思うが、流石にターナ姫程ではなかつたようだ。

「アメリカ、この砦の指揮官は誰だ？」

「ゲブっていう、物凄く感じ悪い人。兵種で言えばウォーリア…かな。自信ないけど。」

「物凄く下品で…私が捕まつた時、『一晩じっくり調べてやる』って。凄くいやらしい目付きで睨んできたわ。けだものよ。」

「それに酷い人で、私達部下も奴隸みたいに扱つてくるんだ。少し文句を言つてやつたんだけど、『上下関係を身をもつて教えてやる』つて。」

「…ですか。」

そのゲブとやらが2人に掛けた言葉の意味が分からぬほど、俺は

子供じゃない。…いい度胸じゃないか。

「ア、アストラ…？ 目が怖いんだけれど…」

「何か：問題でも？」

「な、なんでもないわ。」

「お兄ちゃん…もしかして怒ってる？」

「いや、そんなことない。…ゲブとやら、覚悟しておけ。八つ裂きにしてくれる。」

（ねえ、アストラって怒らせたらこうなつちやうの？）

（分かんないです。お兄ちゃんが怒るところなんて、あたしも初めて見ました。）

ターナ姫とアメリカが何やらひそひそと話している。小声で話すくらいなのだから、大した話じやないはずだ。…さて、その指揮官を殺しに行くとするか。

「ターナ姫、俺達も前線に出ましようか。エフラム王子を助けたいのでしよう？」

「え、ええ、そうね！ アメリカ、行きましょう！」

「わ、分かりました！ お兄ちゃんと一緒にターナ姫を援護します！」

三人でエフラム王子達のいる最前線へと行き、前線でフレリア軍とぶつかるソシアルナイトへ攻撃を仕掛ける。

「俺が先行します。せあつ！」

まずは一人目、俺が真っ先に攻撃を仕掛け、鍔迫り合いをしながらターナ姫達が死角になるように仕向ける。

「同時にいくぞ！」

「なにつ…」

押される力を利用し、馬の股を潜り抜けて背後から攻撃する。ソシアルナイトが振り向いた時に、3人で同時攻撃。ソシアルナイトは同時攻撃で落馬。頭を強く踏んづけてやれば気絶したのか死んだのか、動かなくなる。

途中魔道士隊に襲われたが、初撃を躱して隊長格を仕留めたら他はさっさと勝負を放棄して逃げ出した。無理矢理戦わさせていただけなのだろう。

「そこのアーマーが守つてゐる先にゲブがいるよ！」

「…俺達にはアーマーナイトに対する有効打がない。一旦待機しよう。」

「俺に任せろ！」

エフラム王子がレギンレイヴを振り、アーマーナイトを圧倒する。あの武器、一度よく見てみたいものだ。

「さあ、先に行け！」

「はい！…アーチャーがいる、ターナ姫は下がつてください。アメリカは俺に横槍が入らないように警戒しておいてくれ。」

「うんっ！」

俺はアーチャーの視界に入り、弓矢を弾く。流れ弾がターナ姫やアメリカに向かうと危ないので回避せずに確実に受け止める。

あと一息で剣が届く距離まで詰めるが、相手は弓矢を構えたまま動かない。この場で撃たれるのなら反応出来るが、これ以上接近すれば防御は間に合わない。…やつてやる。

「ふつ！」

過剰な程に前のめりになつて剣の腹を前に向け、最小限の被弾でアーチャーの目に迫る。

低姿勢のまま足払い、アーチャーは体勢を崩し前方へと倒れ、うつ伏せになつた所に剣を突き立てる。

「アーチャーは倒しました、もう大丈夫です！」

アメリカが傭兵相手に苦戦していたが、ターナ姫とフォルデさんが加勢して事なきを得る。その奥のシャーマンもアスレイとカイルさんが連携して難なく倒せたようだ。神官も無力化して捕縛し、残るは指揮官のゲブのみだ。

「エフラム王子、あいつは俺にやらせてください。エフラム王子の槍では不利でしょう。」

ターナ姫とアメリカに手を出そうとするような輩はこの俺が直々に殺す。ここまで明確な殺意を覚えたのは初めてかもしない。

「そ、そうか。だが一つの得物はおそらくキラーアクスだ、用心していけ。」

キラーアクス：キルソードと同じように急所を狙いやすい斧だったか。だが、当たらなければ関係ないだろう。

「約立たずの無能どもはやられたようだなあ？」

その喋り方も態度も何もかもが下品だ。部下も全員引つ括めて無能扱い。絵に描いた脣、と表現しても大袈裟ではないだろう。剣を構えて突撃する。

「小僧…わしに勝てると思っているのかあ？」

ゲブの構えるキラーアクスが振り下ろされるが、その刃は床板に傷を付けるのみに留まる。…空気を斬る音がかなり重い、まともに食らえば致命傷は避けられないだろう。

脂肪に覆われた腹に斬撃を入れるが、思ったよりも手応えがない。脂肪の下には十分鍛えられた筋肉が備わっているようだ。

「効かんなんあ？」

「ちつ…！」

一度相手の間合いから外れ、相手の全体像を捉える。一目見ただけなら上半身の脂肪の塊が目に付くが、その下に筋肉があるとなれば見方は変わる。よく見れば、下半身も中々鍛えられている。ただの下衆の屑ではないようだ。

「ふんっ！」

「だらあ！」

ゲブの攻撃の一つ一つを切り取れば避けやすいが、見た目よりずっと素早いため、攻撃と攻撃の間の隙が少ない。回避してから攻撃に移る余裕が見つからない。だが、隙ができるのなら作ればいい。

「ネイミー、ルーテ、アスレイ、頼む！」

「は、はい！」

「お任せを。」

「分かりました。ライトニング！」

ネイミーが鉄の弓を引き絞り、ルーテとアスレイはそれぞれの魔法を詠唱。それらは僅かな時間差で放たれ、ゲブの意識は遠距離攻撃の方に向く。

「ええい、鬱陶しい！」

ゲブは弓矢を斧で叩き落とし、ファイアードは腕で防御、ライトニングは回避される。だが、三方向からの同時攻撃に対処すれば、当然大きな隙が生まれる。素早く背後に回り込み、ゲブの首に刃を入れる。

「ぐふつ…ぢぐしょお…」のわしがお前みたいな…ガキにい…」

「地獄で悔やめ。」

両腕に全力を込め、ゲブの首が宙を舞う。エフラム王子が主の消えた玉座を制圧、残りのグラド兵士達は撤退、或いは降伏する。

砦の中にいる狭い談話室で、俺とターナ姫の二人きりになる。一応、ターナ姫の意志を確かめるためだ。

「助けてくれて本当にありがとうございます。アストラ。：私、馬鹿みたい。助けようと思つたのにまた捕まつて。」

「ターナ姫が無事なら俺はそれで構いません。…それで、これからはどうするんですか？」

「…？」

「このままエフラム王子について行くのか、城に戻るのかですよ。勿論、どちらを選んだとしても俺はターナ姫を御守りします。」

「…私はエフラムについて行きたい。お兄さまもエフラムも、それにエイリーエだつて戦つているのに私だけ城で安全にしているなんて嫌だもの。」

「そうですか…では、俺もその傍でターナ姫を御守りさせていただきます。…戦うと決めた以上は敵を倒し、殺すこと。最悪の場合、殺されることへの覚悟はしていただきますよ。」

俺がいる限りターナ姫は殺させやしないが、絶対はない。飛兵と歩兵では機動力に差があるし、弓兵に伏せられてはどうしても厳しいものがある。他の仲間にも助けを求める必要があるだろう。

「覚悟はしているわ。最初からそのつもりで飛び出したもの。」

「ならばいいでしょう。後は…」

「あ、お兄ちゃん。いたいた。」

「アメリカか、どうしたんだ？」

「エフラム様から伝言を頼まれたの。ターナ姫を連れて城に帰るよう

に、だつて。」

「……ターナ姫、後はエフラム王子を説得するだけです。これに関する
は手助けしませんよ。」

「ええ、でもエフラムならきっとといいつて言つてくれるわ。じやあ今
からエフラムのところに行つてくるわね。」

「あ、エフラム様は玉座の隣の部屋にいます！」

最後のアメリカの声を聞く前にターナ姫が部屋を飛び出す。そし
て、今度は兄妹二人きりの状況が出来てしまつた。

「……なあ、アメリカ。」

「どうしたの、お兄ちゃん？」

「まだ早い話だが、この戦争が終わつたらどうするつもりなんだ？」

「あたしは村に帰るよ。強くなつて、村のみんなを守りたいんだ。」

「お兄ちゃんは？」

「俺は……このままターナ姫に一生仕えるつもりだ。村の家で過ごして
た時以上に、ターナ姫の隣にいることが自然に感じるんだ。」

「そつか……」

俺も、罪悪感がないわけではない。二度と母さんが攫われた事のよ
うな悲劇が起ららないようにするには、俺も村に帰つた方がいいから
な。

「……」

「アストラ！ エフラムが良いつて言つてくれたわ！」

次に何を言えばいいのか分からなくて、間が悪くなつていたところ
にターナ姫が走りながら戻つてくる……が、俺の前で急に止まろうとし
たので勢い余つて倒れる。

「おつと……ターナ姫、大丈夫ですか？」

「ありがとう、大丈夫よ。アストラが受け止めてくれたから。」

「まったく……気を付けてくださいよ。そういうところがターナ姫が
ターナ姫たる所以なんでしょうけど。」

「そうね……これから戦場に立つのだから気を付けないと。あ、アメリ
カ！ 私、あなたとお話ししたかつたの。今日はここで休むらしいか

ら、今からいっぱい話しましよう！」

「あたしとですか！？面白い話が出来るかは分からないですけど…」「俺は席を外した方が良さそうですね。女性同士の会話を男が聞いてるのは…」

まあ、聞かれて困るような話をしないのは分かりきっているが、そ

れでも女性同士なら女性だけがいる状態の方が話しやすいだろう。

「…？何言つてるのアストラ？勿論アストラも一緒よ！」

…男女がどうとか、ターナ姫にはあまり関係なさそうだ。考えてみれば積もる話も…あるのか？俺がターナ姫に話せることなんて、もう殆ど残っていない気がするが。

12章 同郷殺し

次の目的地である港町ベスロンが見えてきた。そこから海路を使いタイゼル港へ、ザールブル湿原を通過してグラド城へと攻め入るようだ。

「ふう…行軍は大変ね、休める時間も多くないから自分だけじゃなくて、アキオスの体調管理もしつかりしなきや。アストラもエルトのお世話はしつかりね。」

「はい、厩舎の人教えてもらつたので問題ありません。」

当然ながら輸送隊には馬の餌も備蓄されていて、それ以外の面倒は自分で見てやりたい。こいつも俺のことは信頼しているようだし…っ！」

「きやつ！？」

「ターナ姫、屈んでください！落ち着けエルト、大丈夫だ。」

何の前触れもなく大地が揺れる。それなりに強い揺れだったが、10秒ほどで地揺れは収まった。驚いて暴れるエルトを宥めながら、周囲の安全を確認する。…木が倒れてくる様子はない。大丈夫だろう。

「びっくりしたわ…アストラは平気なの？」

「グラドではよくあることです。」

グラドでの地揺れは特段珍しいことでもないので俺やアメリカにとつては慣れたものだが、フレリアやルネスの出身者が大多数を占める軍はかなり動搖しているようだ。

「慌てるな、少し揺れただけだ！」

しかし、エフラム王子の一喝によつてその動搖もすぐに収まる。…エフラム王子もあまり動搖している様子がないな。グラドに滞在した経験があるのだろうか。

「エフラム様、どうやら前方にグラド軍がいるようですがどうします？」

「ああ、だが様子がおかしい。誰かを追つているようだが、脱走兵か？」

港町の様子を見ていたフォルデさんの言う通り、港町の中にグラド

軍らしき影が見える。エフラム王子が言うように誰かを追いかけているようだが、少し遠いのでよく見えない。

こういう時、視力の高いコーマが役に立つ。ひと声掛けると、コーマは手近な木に登つてグラド軍の様子を確認し始めた。

「コーマ、見えるか？」

「追つかれられてるのもグラドの騎士……だと思うぜ。薄い紫色の髪をしているグレートナイトだ。」

薄い紫色の髪のグレートナイトか。俺が知る限りではあの人しか思い浮かばないな。

「デュッセルだな。だが何故…？」

帝国将軍が一人、「黒曜石」の異名を持つデュッセル将軍。思慮深く温厚なあの人は、きっとこの戦争を良く思っていないはず。

既に皆、戦闘準備を始めている。俺もエルトから降りて、輸送隊の人に預ける。余程広い戦場でもない限り、戦闘中に乗り降りを繰り返すよりはこうした方が速いのだ。

「エフラム様、ご命令を。」

「デュッセルを救出する！行くぞ！」

エフラム王子にフォルデさん、カイルさんの三人を先頭にグラド軍に向かつて武器を抜く。

「ターナ姫、俺達も行きましょう。」

「…ねえ、アストラ。」

「なんでしようか？…今更怖気付いたなんて言いませんよね？」

「そうじやないの。…デュッセル将軍はグラドの人でしょ？どうしてそれをグラド軍が追いかけているの？みんなデュッセル将軍のことが嫌いなの？」

当然そんな訳ないが…実際、グラド軍内では何があつたんだ？デュッセル将軍がグラドを離反する兆候でもあつたのだろうか。

「…ターナ姫、戦場においては好きや嫌いじや片付かないこともあります。デュッセル将軍がグラド軍に追い立てられている。今俺達に分かるのはそれだけです。」

「そうよね。でも、みんな誤解してるだけだと思うの。話し合えば

ちゃんと分かり合えるはずよ。」

「……行きましょう。」

ターナ姫が言つていることも間違いとは限らない。だが…それができるほど現実は甘くない。

フレリア軍の指揮は先頭で戦うエフラム王子が行う。本来この場にいなはずの俺やターナ姫の役割はその指揮の隙を埋めることだ。とはいえ、今は前線が詰まつている上に他の方向から敵が来る気配もない。

「…ヴァネッサ、 上だ！」

「え？…っ！」

間に合つた。ヴァネッサを乗せたティターニアは前方斜め上から飛んできた弓矢をすんでのところで躲す。他にも数発の矢が飛んできていたが、それはヴァネッサの手前を通り過ぎて地面に落ちる。「アーチャーがいたとしても届かない距離よね…？」

「シユーターがどこかにいるようです。ターナ姫も警戒を。」

どこだ…シユーターは先に潰しておかないと飛行兵あるターナ姫やヴァネッサのみならず、ルーテ達魔法職の行動も制限される。位置の把握だけでも先にしておかなければ。

「…アメリカ！」

「どうしたのお兄ちゃん？」

「悪いが、少しの間ターナ姫を頼む。ターナ姫、俺は前に出てシユーターの居場所を特定、可能なら撃破します。その間はシユーターの射程から外れるように下がついてください。」

「…分かったわ、気をつけてね。」

「それなら私もターナ姫の護衛に当たるわ。前線に出られないのは同じだから。」

先陣から溢れて手持ち無沙汰だつたアメリカと、同じくシユーターの驚異に晒されるヴァネッサにターナ姫の護衛を頼み、混雜している前線を通り傭兵の集団をすり抜けて崖際に辿り着く。

「船…か。これはどうしようもないな。」

海の上に浮かぶ船団にシユーターが搭載されている。あれを撃破

する手段は同じようにシユーターを使うか、サンダーストーム等の遠距離魔法、後は：危険だが飛行兵で突っ込むくらいか。だがシユーターも遠距離魔法も今のフレリア軍は持っていない、ターナ姫やヴァネッサ隊を突っ込ませるのは論外だ。

「…となればシユーターの矢が切れるまで待つしかないか。」

あの程度の大きさの船ならシユーターの矢はそんなに多くは搭載できないだろう。すぐに無くなつて無力化するはずだ。

船団に捕捉されて大量の矢が俺に向かつて降り注ぐが、近くの林へ逃げ込んでなんとか被弾を少なく済ませる。この程度なら傷薬を使うまでもない。俺一人に向かつて十数本の矢を放つのは明らかに非効率だが：元々シユーターというのは決定力に欠けるものだ。10人の軽傷よりも1人の重傷を狙つたのだろう。

戻る途中で敵の傭兵をフォルデ隊と挟み撃ちにして撃破し、ターナ姫のもとへ戻る。

「シユーターは海上の船団のものでした。撃破は非常に困難かと。」

「そう…シユーターの矢はどのくらいまで届くの？その外側なら動けるわ。」

問題はそこだ。俺はシユーターの射程がどれほどのものなのか知らない。レンバール城に攻め込む時にもシユーターはいたが、最大射程がどれほどのかは分かつていない。船団が動く以上、シユーターと自分の居場所の距離を常に把握するのも不可能だろう。

「すみません、俺もそこまでは把握できていません。……目立たないように行動しましよう。空を飛ばずに地上の部隊に紛れ込めばシユーターの脅威は免れるはずです。」

現にヴァネッサ隊は飛び回らずに地上でターナ姫の護衛に当たつている。

「シユーター対策の基本よ。飛びさえしなければ撃ち落とされて重傷を負う心配もないから。」

「…なるほど。そもそも飛ばなければ怖くもない訳か。それならターナ姫も地上で行動しましよう。それでも機動力は騎兵に劣らないはずです。」

「分かつたわ。」

「ありがとなアメリカ。…悪いけど歩兵と騎兵じゃ移動力に差があるからこつからは別行動だ。」

「うん、あたしは大丈夫だよ。」

ターナ姫を乗せたアキオスは陸地を駆け、俺もそれに追随する。

「エフラム達の戦いに交ざるのは難しそうね…そうだわ、この戦いに紛れて賊が近くの民家を襲つたりしたら大変よ。アストラ、近くに民家を見なかつた?」

「北に中規模の村がありました。そつちに向かうということですね。」「ええ。私達は私達に出来ることをしなくちゃ。」

フレリア軍の中を通り抜け、北にある塀に囲われた村を訪問する。「今、外で戦闘が勃発しています。これに乗じて賊が動く危険がありますので門を閉めておいてください。」

わらわらと集まつてくる村人達の中から、一人の老人が俺達の元へと進み出る。

「そなたらはこれからどちらへ向かうつもりじゃ?」

「私達はデュッセル将軍を助けたら船に乗つて…」

「海路を使つてタイゼル港へ向かいます。」

「そうか、この辺りの外海はよく霧が出てな。わしも船を出していたころは難儀したもんじや。大抵はたいまつやら何やらを積んで出るんじやが…こんなものもあつてな。」

老人はそう言つて一本の杖を取り出す。以前にモルダさんが使つていたものと同じ杖だ。

「それは…トーチの杖ですね。」

「おお、知つておつたか。杖を使える者が仲間におるのかの。どれ、持つていくかね?」

「そんな、それはおじいさんのものでしょ?」

「なに、遠慮せんでよい。この村に杖を扱える者はおらんし、わしもここに腰を落ち着けるつもりじや。最早無用の長物よ。」

「…分かりました。ご厚意に感謝いたします。」

老人の善意を無下にするのも失礼だ。トーチの杖を受け取り、村か

ら出る。村の門が閉められ、これでこの村は安全だろう。

「次はどうされます？」

「…私、やっぱり納得できないの。どうしてグラードの人はデュッセル将軍のことを信じられないの？同じグラードの人でしよう？」

「そう言われましても、俺にはなんとも言えません。」

「そうよね…私も前線に出るわ。でも、デュッセル将軍が突然敵になつたのだから戸惑つてる人もいるはずよ。そんな人がいたら、なんとか誤解を解けるように説得したいの。」

戦争に裏切りは付き物だ。戸惑いはすれど割り切つている者が殆どだろうが…ターナ姫がそう言うのであれば従うまでだ。

「分かりました。俺は後ろに付いてターナ姫を援護します。説得を試みる際は、邪魔が入らぬようにその他の敵を蹴散らししよう。」

「ありがとう、アストラ。お願ひね。」

船団の矢があとどれほど残っているのかは分からない、まだ飛ぶのは危険だろう。南へ下つて橋を渡り、最前線へと躍り出る。ターナ姫はこちらへ仕掛けてきた剣士と武器を交える。

「えいっ！」

剣士の一撃を防いで反撃、相手が回避したところを俺が追撃する。続いての剣士の再攻撃を俺が受け、その頭上からターナ姫が剣士を突き刺した。そして剣士の息の根は止まる。

「次…アーチャーとソシアルナイトが接近中です。俺が牽制しますのでターナ姫は手槍で援護を…」

「あの人なら話を聞いてくれるかもしれない…アストラ、私あの人の人ところへ行つてくるわ！」

「ターナ姫っ！」

ターナ姫は突如アキオスの手綱を引いて飛び立つ。その目線の先是：3騎のドラゴンナイトだ。ペガサスナイトとドラゴンナイトでは分が悪い。さらに言えば1対3、そして最悪なことに俺は空中戦に介入する術を持たない。俺も何か空中戦に介入する術が必要だな。

「…つと、させるか！」

アーチャーがターナ姫に狙いを定めていたので握り拳ほどの石を

投げつけて妨害、ソシアルナイトの横をすり抜けて距離を詰める。

「ぜああああっ！」

鋼の剣を抜いてすぐに攻撃、左肩を斬り裂いて体当たり、顔面を掴んで石で舗装された地面へ叩きつける。

「……」

こいつはもう動けないだろう。命があるかどうかも分からぬが、生きていたとしても長くはない。

「はあ…はあ…つ。」

後ろめたい気持ちが…罪の自覚が胸の中に渦巻く。だが、それを強く意識すれば余計に辛くなるだろう。その考えを頭から追い出し、戦況の把握へと…

「囮まれた…！」

戦場では5秒も動きが止まれば致命的だ。落ち着いた頃には数人の傭兵達に囮まれていた。北側は塀、逃げ道はない。一人一人の間隔が狭く、すり抜けも出来そうにない。

「五人がかりか。そこまでしないと俺ごときにも勝てないくらいお前らは弱いのか。」

「どうとでも言いな。知ってるぜ、あんたも裏切り者だろ？ グラード出身のクセにフレリアに味方する醉狂、アストラさんよお。」

「…仮にも傭兵名乗ってるんだ。雇い主が誰だろうと関係ない、お前らもそらうだろ。」

安い挑発には乗らないか。寧ろ手痛いところを突かれてしまった。俺の意志でフレリアに味方し、この戦争もグラドに非があるとはいえ、同郷の連中を殺すのは気持ちのいいものではない。最近、それを意識すると激しい頭痛がする。

「ま、細けえこたあどうだつてい。あんたも賞金首に指定されてんだよ。この戦場で一番高い首が反逆者デュッセル、二番目がルネス王子エフラン、その次があんただ。あんたの首を取れば追加報酬2500ゴールド。狙わない手は無いよなあ？」

「やれるもんならやってみろ…！」

頭痛など、皮膚を裂かれたり弓矢が腕に刺さる痛みに比べれば些細

なものだ。根性で無視すればいい。

「やれ！」

一人目の三段攻撃を剣で防御、二人目の横回転斬りを籠手で防ぐ。三人目以降は防御する術もなく、体勢を崩される。

「ぐつ…」

「なんだ、聞いてたよりもずっと弱つちいんだな？」

「…………」

尻餅をついた。立ち上がるうとするが、その前に身体を押され、仰向けに倒れる。

「隊長、さつさとトドメ刺しましようぜ。そいつの首で貰った金で酒でも呑みましょう。」

「ああ、そうだな…じやあ死ねっ！」

「ふんっ！」

なんとか防御しようと籠手で頭部を防御する。しかし、敵の剣が振り下ろされる前に目の前に巨大な影が割つて入つた。

「掴まれ！」

巨大な影、飛竜に乗つた男が差し出した腕を掴み、そのまま引っ張り上げられて飛竜の背中に乗る。

「しつかり掴まつていろ！…ゲネルーガ、翔べ！」

「ちつ、逃げられたか！」

飛竜は再び飛び上がり、五人に包囲された壁際から離脱。こいつは…ターナ姫が説得に向かつた竜騎士か。

「…あんたは？」

「俺はクーガー。他の奴らと同じくデュッセル将軍の討伐を命じられていたが…姫に説得されて覚悟を決めた。」

「俺はアストラ、ターナ姫の近衛兵士。…ありがとう、お陰でなんとか生き延びれた。」

「多勢に無勢では仕方がないだろう。お前がある程度強かろうと、数の前では無力だ。あまり突出し過ぎるな。」

「アストラ！」

前線より少し後ろで降ろされると、ターナ姫がすぐに駆け寄つてき

た。ああ、くそ。頭の中がぐちゃぐちゃする。それに目眩が…

「…顔が真っ青になつてゐるわ。アストラ、大丈夫？」

「大丈夫…です、問題…ありま…せ…」

「……ラ…………！…………ストラ…………起きて、アストラ！」

「……つ！」

目が覚める。…氣絶してしまつたようだ。戦場だというのに情けない。

「よかつた…アストラ、氣がついたのね！」

「俺は…どのくらい眠つていた?」

「一分も経つていない。エフラム王子もデュッセル将軍と合流し、今はこちらが優勢だ。」

「助かつた、クーガー。」

「構わん。」

ゆつくりと頭を起こす。どうやらターナ姫の膝の上で看病されていたらしい。恥ずかしさと情けなさで顔が紅潮するのを感じる。

「アストラ…もう大丈夫?」

「はい。…心配をお掛けしましたが、もう問題ありません。」

今度は自分の目で戦況を確認する。今俺達がいるのは南北を繋ぐ橋、南側はエフラム王子がデュッセル将軍と合流して優勢、北側も敵の増援が来たようだが全て対処が終わっている。

「俺達に出来るのは前線維持の援護くらいでしようか。」

「いや、グラドもそろそろ引くだろう。」

「え? それは…どういうこと?」

「見ればわかる。」

クーガーはグラド軍の指揮官がいる砦の方を指さす。そちらへ目を向けると、指揮官が砦の中へと入つて行く所だつた。周囲の兵士達も続いて砦の中へと逃げ込むように入つていき、砦の裏から数隻の船が去つていつた。

「逃げた…？」

「あいつの上官はヴァルターという奴だ。帝国将軍【月長石】の名を与えられている。残忍を極めた男で、部下が失態を犯せば奴が連れる蛇竜の餌食にされるそうだ。」

「そんな、酷い…誰だつて失敗することはあるのに…」

「蛇竜に食われるくらいなら逃げた方がまし、ということか。」

蛇竜使い…つまりヴァルターという男は兵種で言えばワイバーンナイトか。実際にその兵種を目で見たことはないが、蛇竜の持つ魔力で槍が強化され、防具を貫通することがあると兵法書に記された。いつかその男は強敵として立ちはだかるだろう。

「はあ…」

戦闘の事後処理も終えた夕暮れ、俺は野営の拠点から少し離れた木影に腰掛け、深く溜息を吐いた。後続の部隊が船を手配しているらしく、到着には暫く時間がかかるため、出発は明日の早朝になるようだ。

「どうしたのお兄ちゃん？ そんなに暗い顔して。」

「アメリカか…さつきの戦いでみつともないことになつてな。」

「うん、あたしもターナ姫に聞いたよ。お兄ちゃんのことすぐ心配してた。」

「そくなつた原因というか…正直、かなり参つてる。決心はしたが、それでも同じ国に生まれた奴をこの手で斬るのは気分が悪い。」

迷いは無いと思っていたが、そんな事はなかつた。賊が相手なら心が痛むことも無いが、グラードの兵士や傭兵は悪人ではない。戦えと命令されて戦うことも、雇われて従うことも間違つた行いではない。

無論、非はグラード帝国にあるが、それは戦争を推し進める皇帝やそれに乗つて非道を尽くす者が悪であり、普通の兵士や傭兵に責はない。戦争を終わらせる為とはいえ、彼等を殺すのは本当に正しい行いなのかな？

「…お兄ちゃん、優しいんだもん。本当は戦いなんか向いてないんだよ。でも、ターナ姫のために戦うことを選んでる。それが全部でしょ

？」

「そうか…そうだな。ありがとう、アメリカ。」

「ふふ、あたしはお兄ちゃんの妹なんだから。もつと頼つてくれてもいいんだよ。」

正義とか、大義とか、難しい事は考えなくていい。俺は守りたい人の為に戦う。…簡単なことじやないか。

「…おや、先客がいたか。」

「あなたは…デュッセル将軍！」

この人がデュッセル将軍か。緊張する様子のアメリカだが、確かにデュッセル将軍に憧れてグラード軍に志願したんだつたか。

「少し独りで涼もうと思つてな。」

「…もし邪魔なのであれば、俺達は移動しますが。」

「いや、良ければ少しの間、話し相手になつてくれんか。」

「俺は構いません。アメリカは？」

「あたしも大丈夫だよ。と言うより、お兄ちゃんこそ大丈夫なの？ ターナ姫のこと放つておいて。」

「流石に天幕の中までお供するのはまずいだろう。そこで着替えだつてするだらうに。」

「そつか、それはそうだね。」

「すまないな…おぬしらの名はなんという？」

「俺はアストラです。グラードのシルバ村出身、今はフレリア王女ターナ姫の近衛兵士です。」

「あたしは妹のアメリカです！お、お兄ちゃんの2つ下で、えつと…ひと月くらい前にグラード兵に志願しましたが、今はフレリア軍で戦つてます！」

「そうか、アストラにアメリカか…」

デュッセル将軍はアメリカの顔をまじまじと見て、手を顎に当てる何かを考えている。

「…? デュッセル将軍、どうかしましたか？」

「いや…お前の顔にどこか見覚えがあつてな…」

「つまり…デュッセル将軍は以前、どこかでアメリカを見かけた…と

「いうことでしようか？」

「うむ…しかし、シルバ村に訪れた記憶もなし…思い出せん。齡を重ねると、いかんな…」

「そんな！デュッセル将軍は今でも十分若いと思います！」

「こんな老兵をつかまえて何を言う。こんな歳になつてまでそんなことを言われるとは思わなかつたぞ。」

「ですが、ここにいる兵士にデュッセル将軍に敵う人なんてほとんどいない。まだそれ程の強さを持っているのですから、嘆く歳でもないでしよう。」

シルバ村は山奥にある村だ。麓にある街までも遠く、アメリカもグラド兵に志願するまで、降りる機会もないはず。他人の空似だろう。「ははは…確かに、お前達にそうして気を遣つてもらうにはまだ早いな。」

「あ…う…すいません。」

「謝らんでもよい。お前達と話すと不思議と気が安らぐ。お前達の屈託のない明るさや優しさに救われている者も多いだろう。」

「アメリカ！そろそろ寝る準備をしておかないと十分な睡眠時間とれないわよ！」

「アストラ！武器の手入れを手伝ってくれ！」

「はーい！」

「分かつた、今行く！…すみませんデュッセル将軍、俺達はこれで。」

「そうだ。アストラ、これを受け取るがよい。」

「…これは？」

『英雄の証』だ。先程追い立てられた時、北の村を出た剣士から貰つたものだ。お前が今の状態に満足いかなくなつたら使つてみよ。さらなる力を得ることができるだろう。』

「…ありがとうございます！」

デュッセル将軍から英雄の証を受け取り、礼をしてからギリアムさんの所へと急ぐ。剣の手入れは知っているが、他の武器の手入れ方法を知るいい機会だ。

「しかし、思い出せぬ…一体、どこで…」

13章 幽霊船

タイゼル港へ向かつて船は霧が深い海の上を進む。流石に一隻の船にフレリア軍全員が乗るのは不可能なので数隻に分かれてはいるが。

そういえば、船に乗り込む前にいつぞやの三人組と出くわした。女性の名前は…ラーチエルだつたか？と髭面の巨漢と茶髪の気障つぽい男だ。

「…アストラ、こんな隅っこでどうしたの？顔色が良くなないみたいだけれど。」

「ターナ姫。…少し気分が優れなくて。」

俺は頭が痛くて、甲板の隅で手すりにもたれている。船酔いというものらしい、船の揺れが原因だそうだ。酷い場合は吐き気を催す場合もある。そうだが、俺は少し気分が悪い程度で済んでいる。

「多分そのうち慣れます。申し訳ありませんが、少しだけ一人にさせてくれませんか。」

「…駄目よ。苦しそうなあなたを一人にする訳にはいかないもの。」

そう言つたターナ姫は俺の頭を膝の上に乗せる。…確かに楽になつたけれど、これは…その、かなり恥ずかしい。

「た、ターナ姫？」

「いいから、楽にしていて。」

堪らず退こうとしたが、ターナ姫に肩を押さえられて動けない。…仕方ない。大人しく、されるがままにする。少なくとも、他に誰も見ていないのは幸いだろう。

海路を使っての船旅、内心楽しみにしていたのだがまさかこんなものがあるとは知らなかつた。今や一刻も早くタイゼル港に着くのを願うばかりだ。

「…グラド軍か？」

「いえ、霧も深いためはつきりとは見えませんが…その影は明らかに人の形をしていません。」

船首の方から歩いてくるエフラン王子達の話し声が聞こえてくる。

：ベスロンの船乗りが言っていた。最近、幽霊船が出るという噂が絶えないということを。実際、かなりの数の船が海に出たまま帰つてこなかつたらしく、今はほとんどの船が港から出でていないうようだ。：勘弁してくれ、こつちは体調が優れないというのに。

「全員、戦闘準備だ！杖使いはトーチの杖を持て！」

頭痛を堪えて立ち上がり、戦闘準備を始める。急いで船室に戻り鎧を装着して、武器の不備がないか再確認する。

準備を終えて甲板に出ると、既に皆、作戦の話し合いを待つている状態だつた。俺とターナ姫が最後らしい。

この船にいる主戦力は：

エフラム王子

俺

ターナ姫

アメリカ

デュッセル将軍

カイルさん

フォルデさん

ナターシャさん

クーガー

ルーテ

アスレイ

この辺りか。勿論、この11人以外にもそれなりの人数のフレリア軍の小隊長、小隊員もいるが、船上戦において、あまり出撃人数が多くすぎると身動きが取れなくなる。暫くは船の中で待機させる必要がある。

「…心配ありません。この優秀な私が魔物を全て焼き払つてみせましょう。」

「いや、いくらルーテが優秀だからといって…成程、そういうことか。」
ルーテが左手の薬指にはめていたのは導きの指輪。エイリーエン女がセレフィユでもらつたという、魔法職に力を与えるクラスチエンジアイテムだ。

「…私は稀代の天才魔道士ルーテ。大いなる力よ、私に更なる魔道の導きを！」

ルーテが祈りを捧げると指輪が光を放ち、ルーテの体を包み込む。空から稻妻のような魔力がルーテを穿ち、光が晴れると共にルーテの魔力が溢れ出す。

「…素晴らしい。」

ルーテはクラスチエンジの結果に満足している。相変わらずの無表情だが、声音からおおよその感情は推察できる。ルーテの自己評価は単なる自惚れではなく、しっかりと客観的に見て判断した結果だというのは彼女の戦う様を見れば分かる。今となつてはおそらくセライナさんと並ぶ：いや、超えるほどの魔力を持つているのではないだろうか。

「期待していいんだな？」

「勿論です。私、優秀ですから。」

強い魔法抵抗力を持つ魔物は少ない。ルーテがクラスチエンジしたことで魔物を掃討するのは少し楽になつたと言えるだろう。

「近接戦の準備をしろ！」

幽霊船が船の真横まで迫る。エフラム王子の号令で俺達は武器を構え、ルーテ達魔道士もいつでも魔法を撃てるよう待機する。

「ナターシャさん、トーチの杖を！」

「分かりました。」

ナターシャさんがトーチの杖を降ると、周囲の霧が少しだけ晴れて敵船の様子が見られるようになる。

「…おい、マジかよ。」

誰かがそう呟くのが聞こえる。俺もそう言いたいくらいの驚愕に襲われているが、まずは冷静になつて状況を確実に読み取る。

「今見えているだけでも20は下らない…それに、弓を持っているスケルトンもいる。ターナ姫、注意を。」

「ええ、あまり前に出過ぎないようにするわ。…アストラは大丈夫なの？」

「戦いが起こつたとなれば船酔いでどうこう言つている暇はありません」

んから。」

狭い船上において、味方の頭上から割り込める飛行兵は重要だ。その行動を制限する弓スケルトンは早めに排除しておきたいところだ。

「……つけられた！」

相手の船の橋がこちらの船に繋がれる。魔物とはいえ、理性的な行動も可能らしい。

「ああ、だがこれで俺達の攻撃も届く。いくぞ！」

敵船に向かつて左右二本の橋があり、左側は右側の二倍の横幅がある。とりあえず両方をおさえて迎撃、魔物の数が少なければそのまま攻め入りたいところだ。

「右側はわしがおさえる！」

右側から来る魔物はデュッセル将軍が一人で対処する。彼なら魔物の攻撃など屁でもないだろう。そして、左側は俺とエフラム王子が先頭に立ち、フォルデさん、カイルさんと交代しながら魔物の攻撃に対処していく。

「ふつ！」

攻撃を受け流すついでにスケルトンの横つ腹に剣を叩きつけ、そのまま海へと転落させる。

「背後からビグルが迫っているようです。私が対処しましよう。：はあっ！」

「ルーテさん、私も援護いたします！」

ルーテがライトニング、アスレイがシャインの魔法で背後から来るビグルを即座に撃破していく。俺は目の前のスケルトン討伐に集中だ。

「せつ、はつ……ちつ、しまつたな。」

橋の上でかなりの数のスケルトンやゾンビを倒したが、ここで鋼の剣が壊れてしまう。相手のスケルトンは既に槍を突き出す寸前で、予備の鉄の剣を抜く時間はない。

「くつ…はあっ！」

身体を捻つて槍を躲し、次いで薙ぎ払われるのをしやがんで回避、

スケルトンの懷まで潜り込んで丸出しの背骨を狙つて拳を突き出す。関節の部分が千切れでスケルトンは身体の上下が分断、スケルトンが動けない間に鉄の剣を抜き、とどめを刺す。

「やあっ！」

空中から接近してきたビグルの目玉に手槍が突き刺さる。アメリカアが投げたものだ。

「それっ！」

さらに上からターナ姫が細身の槍を突き刺す。また一匹ビグルが海の底へと沈んでいく。

「ふう…流石に数が多いわね。」

「お兄ちゃん、これいつまで続くの？」

「魔物が全滅するまでだろうな…後ろ！」

「くっ…！」

ターナ姫の背後から槍が突き出されるが、ターナ姫はそれを間一髪で受け止める。翼を持った、灰色の爬虫類のような魔物だ。

「翼の魔物…」

「ガーゴイルですね。石像が魂を持ち、古の時代の空を支配した魔物です。『ナザニアの魔書』第二部第九章第四節に記載があります。ビグルも粗方片付いたことですし、私も援護しましよう。」

ルーテのサンダーの魔法がガーゴイルの翼に落ちる。ガーゴイルが痺れて動けないところにすかさずターナ姫が槍で翼を貫き、飛翔力を失つたガーゴイルは海の中へと落ちていく。

「…させるか！」

弓を持つたスケルトンの腕を切断して無力化。地上の敵をターナ姫に手出しさせないのが俺の仕事だ。空中戦はターナ姫やルーテを信じるしかない。クーガーもガーゴイル討伐に当たつているし大丈夫だろう。

「…あれは…まずいな。」

もう一隻、幽霊船の反対側に別の船が張り付く。他の幽霊船か？これ以上の魔物が来ると俺やエフラム王子はともかく、一人で大量の魔物を相手しているデュッセル将軍にかかる負担が大きくなる。

「…エフラム王子、どうします?」

「そうだな…まずはあの船の様子を見たい。ナターシャ、トーチを頼む。」

「はい、分かりました。」

ナターシャさんはトーチの杖を振り、霧が晴れて奥の船の様子が見られるようになる。明るい緑色の髪をしたトルバトールと、深い緑色の髭面のバーサーカー

「…人、か?」

「というより、あれは…」

港で会つた三人組の内二人だ。茶髪の男だけはいないようだが。ラーチェルは馬に乗つたまま魔物の攻撃を器用に躱し、バーサーカーの巨漢がバトルアクスと思しき斧で魔物を一刀両断、ゾンビの爪やスケルトンの剣や槍もほとんど効いていないようだ。だが、ビグルの闇魔法は流石に防ぎきれない。ラーチェルがリライブの杖で回復しているとはいいつまで持つかは分からぬ。

「よし、俺とフォルデ、カイルで援護に向かう。アストラ、あとは頼んだぞ!」

「了解です!…この橋を塞ぐには俺一人じゃ無理だ。アメリカ、やるぞ!」
「あ、あたし!…お兄ちゃんとあたししかいないもんね。やつてみせるよ!」

ターナ姫とクーガーはガーゴイルの処理に全力を出している。前衛を頼めるのはアメリカしかいない。

「回避より防御を重視するんだ、多少のダメージはナターシャさんが回復してくれる!」

「うん!」

回避は失敗したときの代償が大きすぎる。防御であれば多少のダメージは受けるものの、ほぼ確実に防ぐことができる。

「ぐつ…!」

「まだ…!」

今まで四人で交代しながらやつていたから今まである程度余裕

を持つて耐えていたものの、やはり一人になるとかなり危うい状況が続く。

上位種と思しきスケルトンとの鎧迫り合いで押されたところを透かして肩を斬りつけるが、他のスケルトンのようにはいかない。骨に少しヒビが入った程度だ。

「うつ…ああっ！」

「アメリカ！」

アメリカがスケルトンの上位種に防御を破られ、手痛い一撃を叩き込まれる。

「きやあつ！」

「ぐつ…！」

「ターナ姫！クーガー！」

ターナ姫とクーガーも4体のガーゴイルに囲まれ、連携を乱されている。

拙いな、エフラム王子達が別行動を始めてから押されつつある。戦力の低下はもちろん、さつきから上位の魔物が混ざってきている。背後のビグルこそいなくなつたが、徐々に追い詰められていく。

どうする…みんなが消耗している。なんとか打開しなければ…！何か作戦を…大量の敵を掃討するだけの戦いに作戦…何か…船、船か。やつてみるしかないな！

「ターナ姫！ルーテを乗せて飛んでください！クーガーとアスレイはガーゴイルを牽制！ナターシャさんはアメリカの治療、更にトーチを使つてエフラム王子の居場所を！」

「分かったわ！ルーテ、掴まつて！」

ターナ姫はルーテの腕を取り、アキオスの上に乗せて上空へと飛び立つ。ガーゴイルもルーテを乗せて動きが鈍くなつたターナ姫に狙いを定めるが、アスレイとクーガーがその行く手を阻む。

「エフラム様は三隻目の船の上です！」

「…よし、アメリカ！前線を少し後ろに下げるぞ！」

「う、うん！」

スケルトンの攻撃を防御しながら後退り、あと一步下がればこちら

側の船の上というところまで前線を下げる。

「…そうだ、デュッセル将軍！」

「聞こえておる！こちらも前線を下げた！」

「よし…ルーテ！相手の船の上に最大級の炎をぶちかませ！」

「…なるほど、いいでしよう。」

ルーテは呪文を詠唱しながら魔力によつて光の紋章を3つ浮かび上げ、それを1つに収束させてその魔力を手に握りしめる。詠唱が終わると魔力が激しい炎へと変わり、最後にルーテはその炎を幽霊船に向けて解き放つた。

「……エル、ファイアアアアアアア！」

幽霊船は木材で出来ていて、つまり、燃える。普通は燃えにくいうに何か加工が施されているのだろうが、古ぼけた幽霊船にそんなものは無いだろう。ルーテの炎は幽霊船の甲板を燃やし、瞬く間に燃え広がっていく。

「よし、後は橋を崩すだけだ！」

橋の上で激しい戦闘を繰り返していたせいか、橋はかなりぐらついていて、今にも崩れそうになつていて。強い衝撃を加えたら軽く壊せるはずだ。

「俺に任せろ！」

俺とアメリカが一歩下がつて船の上に戻ると、クーガーの飛竜が橋に急降下して橋を崩す。

「ふんっ！」

デュッセル将軍も銀の斧で橋を切り落とし、幽霊船とこの船は完全に分断された。

三隻目の船を見れば、髭面の巨漢が橋を引き上げ、その上に乗つていた魔物は振り落とされたところをカイルさんとフォルデさんがどめを刺している。

「これで残りはガーゴイルだけ…」

「いえ、どうやら問題ないようですよ。」

アスレイの言葉につられて空を見上げると、ガーゴイル達は燃え落ちる幽霊船を一瞥してから退却している。三隻目の船にいたガーゴ

イルやビグルも同様だ。魔物にそんな判断力があるのか？

ルーテを乗せたターナ姫をガーゴイルから守り切れなければ失敗、エフラム王子達が三隻目の船にいなければ実行不可能、ルーテの炎の威力が足りなければ失敗、橋を崩すタイミングを間違えたら失敗、エフラム王子達がこちらの意図に気付かなければ失敗。穴だらけの作戦だったが、なんとか上手くいった。

この船とラーチエルの船を繋げ、エフラム王子達が戻つてくる。

「あれを考えたのはアストラだろう？あんな作戦、よく思いついたな。」

「皆の力量を把握しきれていなかつたので、ほとんど賭けだつたんですけど、なんとか。」

「いや、ほんとすげえよ。」

「素晴らしい作戦でしたわね、これで海の平和も守られますわ。」

ラーチエルがこちらの船に乗り込んで会話に参加している。何か用事があるみたいだ。

「エフラム殿からお話は伺いましたわ。わたくしもあなた方と一緒にさせていただきますわ。」

「…いいのか？お前が大陸中の魔物退治をして回つてるのはお前の言動を見れば分かるが、グラド軍相手となれば危険度も比じやないぞ？」

「覚悟はしておりますわ。驚かないで聞いてくださいな。実はわたくし…ロストン聖教国の聖王女ですの。」

やはりそうだつたか…ラーチエルという名前は間違いなくロストンの王女の名前だったが、偶然ではなかつたようだ。

「よんどころない事情でお忍びの旅に出ていたのですが、事態が事態ですもの。身分を隠し続けるわけにもいきませんわ。ルネス王子エフラム殿、ロストン聖教国はあなたの味方ですわ。共に邪悪なグラド帝国に立ち向かいましょう！」

「あ、ああ。よろしく頼む。」

ラーチエル王女はそう言つてエフラム王子に右手を差し出し、エフラム王子もその右手を握り返す。随分と騒がしい人だが、なにはとも

あれ頼もしい戦力が加わったのは事実だ。

「あと、こちらの大男は付き人のドズラですわ。ドズラ、話は聞いてお
りまして？」

「ガハハ！勿論ですとも！」このドズラ、ラーチエル様の為なら魔の中
海の中！どこへでも重石を付けて飛び込んでいく覚悟ですぞ！」

「…そりいえば、もう一人の茶髪の男がいないようですが。」

「レナックのことですの？船に乗る前まではいたのですけれど、いつ
の間にやら姿を消したのですわ。」

ああ、逃げたなあの男。この2人のペースについていけなくなつた
のだろう。…気持ちは分からぬもない。

14章 魔物の謎

「大丈夫か、アメリカ？」

「うん、前は重くて動けなかつたけどいまなら大丈夫！」

アメリカは今までの物よりも重い、アーマーナイトの鎧を身につけた。体格差もあつてギリアムさんの鎧よりは小さいが、アメリカが今まで装備していた鎧と比べ、倍の重量はあるだろう。

「よつ、とつ、ほいつと。」

重い鎧を装着したままで動けるか確認する。極端に移動が遅くなつてゐる訳ではなく、傍から見てゐる限りでは問題なさそうだ。

「やつた…お兄ちゃん！これであたしも前に出て戦えるよ！」

「調子付くのはいいけど、あまり突っ走るなよ。」

念の為アメリカに釘を刺しておき、俺も装備品を取りに船室に向かう。先程、間もなくタイゼル港に到着すると連絡があつた。下船の準備を済ませておかないと。

「あ、あの…」

「君は…」

か細い声に振り向く。いつもエフラム王子の近くにいる、翼の生えた藍色の髪の少女だ。名前は確か…

「ミルラだつたか？」

「はい。…エフラムは今どこにいますか？」

「エフラム王子は…ごめん、俺は知らないよ。」

「そう、ですか。」

「…良かつたら俺が手伝おうか？」

「えつと、お願ひ…します。」

人見知りな少女を連れて、エフラム王子の居場所を聞いて回る。結局、エフラム王子は船内の会議室にいた。エフラム王子が船内を忙しく動き回つてゐる内に置いていかれてしまつたようだ。

「…ありがとうござります…あの…」

…そう言えば俺はまだ名乗つていなかつたか？ミルラの名前はエフラム王子が呼んでゐるのを聞いて、一方的に知つていただけだつ

た。

「アストラ。俺の名前はアストラだ。」

「あ：はい。ありがとうございます、アストラ：さん。」

「どういたしまして。エフラン王子、俺はこれで失礼します。」

「ああ、すまないな。」

「エフラン様、間もなく船がタイゼル港に到着します。下船の準備を。」

会議室を後にしようと振り向いた、その時。会議室にカイルさんがやつて來た。ようやく船旅も終わりのようだ。

「分かつた。行くぞ、ミルラ。」

自分が寝泊まりしていた船室に置いていた荷物を取つて甲板に出で、ターナ姫と合流した時に港と船が橋で繋げられる。エフラン王子から順に下船し、他の船に乗つていた仲間と合流する。そして、ここからはラーチエル王女とドズラもフレリア軍に同行することとなる。「敵影は無しか。妙だな。」

海路を使つたという情報は既にグラードに知られているはず。船の行先として予想出来る港はここを含めて4箇所程度。それらの港に厳重な警備を敷いておけば、俺達の出鼻を挫くことは容易いはずだ。「…いや、駄目だカイル。予備兵を前線に出すことには賛成できない。」

「しかし…！」

「えつと…どうしよう…」

ターナ姫のすぐ隣でエフラン王子とカイルさんが何やら揉めている。ターナ姫は険悪な空氣をなんとか出来ないか模索しているが、戦術等に関わりのないターナ姫では無理なのか、ずっとあたふたしていた。

「…少し離れておきましよう。」

ターナ姫を連れてエフラン王子達が話している場所から離れる。ターナ姫はラーチエル王女を見つけると2人で世間話を始めた。他の仲間達も装備の手入れをしながら話をしている。

「俺はエルトを迎えてきます。」

「分かつたわ。：それでね、ウルズの森にいる天馬達の光景はとても神秘的なの。」

「ロストンの高峰ミーミルも素晴らしい絶景ですよ。この戦争が終わつたら案内して差し上げますわ。」

「そう！楽しみだわ！それじゃあ私もその後にあなたをウルズの森に案内させてね！」

他の船に乗せられていたエルトを迎えに行く。：カイルさんは輸送隊の警護に当てている予備兵を前線に出すべきだとエフラム王子に提案したんだろう。

敵の伏兵に輸送隊を襲われでもしたら、前線での戦いに勝利したところで元も子もない。しかし、俺達の戦力：特に数が不足しているのも事実だ。

「待たせたな、エルト。少し身体を動かそうか。」

エルトに跨り、停泊している船の上を軽く歩かせる。悪くない、良し、このまま剣を…

「うわっ！？と…無理か。悪いエルト、驚かせたな。」

フランスの真似をして剣を振つてみたが、バランスを崩して落馬してしまつた。やはり俺には騎兵の才能はないようだ。

「…ん？」

物音がしたのでそちらを見たが、犬が小鳥を追い回しているだけだつた。…それにしてもこの街、やけに静かだな。犬が遊んでいるだけで反応してしまる程に、街は静寂に包まれている。乗つっていた船の隣に停泊していた船も中に人の気配がしたが、誰一人として甲板やその周囲には…：

「敵襲、敵襲！市街に潜んでいたグラド兵が奇襲を！」

「…そういう事か！」

エルトに乗つてターナ姫のところへと駆けつける。今は船の西側、最も近い敵は：ソシアルナイトだ。そしてその後ろにシャーマンが控えている。更に壁の後ろにはアーチャー。あれを倒すまで、ターナ姫達飛行兵は自由に動けない。

「ドズラ、あなたは矢面に立ちなさい。アストラ、後方支援はわたくし

に任せなさいな！」

「お願いします、ラーチエル王女！」

ラーチエル王女が持つている杖はリライブとレスト。これで多少の怪我は気にせずに戦える。ドズラもその巨躯と、それに見劣りしない巨大なバトルアクス。2人とも頼もしい仲間だ。

「ガハハハ！いくぞぼうず、嬢ちゃん！」

「ああ！」

「ええ！」

「準備はいいな、ロス！」

「ああ、俺だつてとつくに一人前だ！父ちゃんにも負けねえぜ！」

「ゆくぞ！」

前衛はドズラとギリアムさん、二人が敵の攻撃を引き付けている間に俺、ターナ姫、ガルシアさん、ロスが攻撃する。そして後方支援はラーチエル王女、王女の背後を取られても誰かをそちらに送るだけの余裕もある。ロスも既に一人前か：俺も負けていられないな。

「だらあつ！」

ギリアムさんがソシアルナイトの攻撃を盾で防ぎ、俺とターナ姫が同時に攻撃、シャーマンが突撃するドズラに闇魔法を放つがドズラは被弾上等で構わず突き進み、ガルシア親子と共に二人のシャーマンを薙ぎ倒す。ドズラが受けたダメージはすかさずラーチエル王女が回復する。

船の向かい側の桟橋を見れば、エフラム王子を先頭に敵を蹴散らし、壁の後ろにいたアーチャー達もソシアルナイト三人で制圧、隣の船に潜んでいた敵もデュッセル将軍とアメリカ、クーガー、ルーテの四人で対処している。

「随分と勢い付いているな。」

「そうですね。向こうが仕掛けてくる前になるべく前線を押しておきましょ。」

「ああ。俺もこんなものを用意しておいた。」

「それは…騎士の勲章！」

ギリアムさんが取り出したのは騎士の勲章。導きの指輪や英雄の

証、天空のムチと同じクラスのエンジニアアイテムだ。アーマーナイトやソシアルナイトが使うと更なる力を得ることが出来る。

「俺に敵を討ち、仲間を守る為の更なる力をくれ、騎士の勲章よ！」

ギリアムさんが騎士の勲章を掲げるとその勲章が光り輝き、稻妻となつてギリアムさんへと突き刺さる。

「はあああああっ！」

稻妻となつた光を取り込んだギリアムさんが姿を現す。鎧はより硬く重厚なものに、武器は鎖と繋げられ、移動が遅くても鎖付きの武器を投げて攻撃が届くようになつていてる。

「ぬうん！ ずああっ！」

ギリアムさんは跳躍して剣を振りかぶる傭兵を鋼の槍で串刺しに、続いて突撃してくるソシアルナイトの頭を斧でかち割り、魔道士は手槍で脇腹を深く抉つた。

「それっ！」

ギリアムさんが仕留め損ねた魔道士は頭上からターナ姫がどどめを刺す。

「魔物が街に侵入して來たぞ！」

やはりそう簡単にはいかないようだ。町外れの林の方からスケルトンや大型の魔物モーサドウーブ、背後の海からはガーゴイルが現れる。

「ガーゴイルの相手はわたくし達に任せなさいな。ドズラ、行きますわよ！」

「承知しましたぞラーチエル様！ 悪しき魔物どもよ、わしが相手だ！」

ラーチエル王女の命令でドズラが即反転し、背後から飛んできたガーゴイルの攻撃をものともせずに巨大な斧の一振で両断していく。「ターナ姫は近くの民家に呼びかけを！」

「分かつたわ！」

「来るぞ！」

「グルル…グアツ！」

モーサドウーブが素早い動きで接近してくる。ジグザグに走つて

くるモーサドウーブの前でロスが斧を構える。

「俺がやる！」

ロスがモーサドウーブの前に立ち、噛み付いてくるのに合わせて斧で打ち返す。武器を投げ斧に持ち替えて追撃するが、攻撃が外れてモーサドウーブに噛みつかれる。

「ぐつ…！」

「ロスから離れる化け物め！」

ガルシアさんがいきり立つてロスに噛み付くモーサドウーブに斧を叩きつける。それが致命傷となり、モーサドウーブは動かなくなつた。

「大丈夫か、ロス。」

「わりい、父ちゃん。」

「傷薬も使っておけ。ラーチエル王女はガーゴイル討伐に夢中だから。」

ラーチエル王女はドズラが戦つている横でガーゴイルを杖でぽこぽこと殴つている。あれでは一切のダメージを与えられないだろう。

ロスの戦いを見て要領を得たのでもう一匹のモーサドウーブに向かつて剣を抜く。

「そらよつ！」

「ぐつ…!？」

モーサドウーブの攻撃に合わせてカウンターしようとしたが、ファイアーの魔法が飛んできて剣が弾かれる。

「グラードの魔道士か…俺に任せろ。ふん！」

ギリアムさんがジエネラルとは思えない俊敏な動きで魔道士との距離を詰め、鉄の剣で魔道士を真つ二つにする。

「せやあつ！」

追撃してくるモーサドウーブの口の中に剣をねじ込み、喉を貫通させて息の根を止める。妙だな、あの魔物…

「どうしたんだ、アストラ。」

「今倒したモーサドウーブ、北から来たのなら俺達よりもあのグラードの魔道士が先に視界に入るはず。何故奴を襲わなかつたんだ？」

「…考えるのは後にしろ。今はグラド軍と魔物を撃退することに集中するんだ。」

「…そうですね。考えるのは事を済ませてからでいい。」

「アストラ！周りの民家はもう大丈夫よ！」

ターナ姫が戻つてくる。隣にいるのは…子供？赤い髪の少年で、歳はおそらく俺やターナ姫より下、アメリカと同じくらいだろうか。脇にファイアーの魔道書を抱えている。

「その子供は？」

「この子、人を探してゐみたいなの。」

「マリカつていう人を探してゐるんだ。傭兵としてグラドに雇われてると思うんだけど。」

「どんな人だ？」

「桃色の髪の女剣士だよ。持つてる武器はシャムシールだつてジスト隊長が言つてた。」

シャムシール：腕の立つ剣士のみが扱える、ジャハナ特有の剣だつたか。キルソードに近い性能だが、一撃の威力が低い代わりにより急所を狙いやすい形状になつていていた。

「分かつた、桃色の髪の女剣士マリカだな。…君、名前は？」

「僕はユアン、魔道士見習いだよ。」

「ユアンか。俺がその女剣士に君のことを伝えておくから、君は安全な場所で待つてくれ。」

「ううん、僕もついて行くよ。戦つてるマリカが他人の話を聞くとは思えないし。…大丈夫、いざという時はお師匠様直伝の魔法でやつつけちゃうから！」

ユアンは自信ありげに胸を張る。見習いの魔道士といったところか。…そのマリカとやらがグラドに雇われていて以上、俺達の説得には応じないだろう。本意ではないが、ユアンを連れて行くしかない。

「人を傷つけ、殺す覚悟は出来てゐるのか？」

「うん、大丈夫。僕だつて傭兵団の一員だもん。」

「分かつた。あまり前に出るなよ。」

近くにいたスケルトンをおびき寄せ、持つていた武器を弾き飛ば

す。これでこのスケルトンは丸腰、ほとんど無害な状態だ。こいつを使つてユアンの手並みを見せてもらおう。

「ユアン、こいつに一発撃て！」

「見ててね！えーっと…これをこうやつて…ファイアー！」

ユアンが放つた炎がスケルトンの身体を焼いていく。威力は低くないが撃つまでが遅い。グラド軍の魔道士なら今の間に二発ファイアーを撃つている。ルーテだつたら四発以上だろう。

「はあっ！…よし、一度下がりましよう。」

「そうだな。このままだと他の隊と分断されかねん。」

スケルトンをバラバラに碎いてから後退。エフラム王子達と合流する。桟橋でガーゴイルを相手していたラーチェル王女とドズラも戻つてくる。

「船の敵は全員倒した。そちらはどうだ。」

そして船に潜んでいた敵に対処していた四人も戻り、全員が揃う。残りの敵は街の外れ、スケルトンが四体、傭兵とその仲間の剣士と戦士、シャーマンが三人、マミーが一体、そして巨人の魔物が一体だ。「シャーマンの相手は私が。」「私も加勢しましょう。」「援護するわ。」

アスレイとルーテがシャーマンをおびき寄せ、ヴァネッサと一人ずつ分担、反撃からの追撃で倒す。続いて迫るスケルトンはフランツ、フォルデさん、カイルさん、アメリカが攻撃を受け止めて反撃、ロス、ネイミー、ユアン、ターナ姫が中距離からの攻撃でどどめを刺す。

「次、来るぞ！」

こちらに迫る三人の内、戦士はコーマが引き付けて翻弄、傭兵はギリアムさんが斬撃を鎧で弾く。剣士の攻撃は俺が受け止める。

「……ふつ！」

「速い…！」

剣士の攻撃を剣で防ぐが、反撃する隙もなく二撃目が繰り出される。今度は籠手で防御するものの、透かさず三撃目が目の前に迫る。身体を反らせて回避を試みたが避けきれず、頬の肉が少し削げる。

「…っ！」

続く相手の攻め立てを剣で防ぐ。雨のように絶え間ない斬撃を防ぐのに精一杯で、反撃に転じる隙がない。相手の得物はシャムシールで、桃色の髪の女剣士。ユアンが言っていた女剣士であることは間違いないが、話しかけるタイミングすら掴めない。

「…あん…つたが、マリカか！」

体勢を低くして地面を滑るように相手の股を潜り抜け、背後に回り込む。振り向きざまの一撃を受け止めながら話しかけた。

「なぜ私の名前を？」

「あいつに頼まれたんだよ。」

フレリア軍の間を通り抜けようとしていたユアンに合図を送る。それでマリカに気付いたユアンはロスの身体を押し退けながら走つて来た。

「どわつ、何すんだよ！」

「ごめんね！おーい、マリカー！」

「…ユアン？」

「傭兵团から伝言！マリカさ、ジスト隊長と一緒に仕事つて紹介されてここに来たでしょ？」

「そう。でも隊長がいない。」

「それがね、傭兵ギルドが間違った仕事の案内をしちゃつたみたいでさ。隊長は違う所で別の仕事してるよ、早く来いだってさ。」

「本当？隊長がそう言つてた？」

「うん。この人達も東に向かうみたいだし、一緒について行こうよ。」「分かった。」

：手違いだつたとはいえ、傭兵がそう簡単に仕事を放棄していいものなのだろうか。傭兵にとつて最も重要なのは信頼。仕事の放棄は、仕事の失敗すら上回るタブーのはず。もつとも、ここに残っているのは俺達フレリア軍に巨大な魔物、そしてマリカと一緒に雇われたと思しき傭兵達。マリカの風聞に影響はないか。

マリカと並んでいた傭兵と戦士もギリアムさんとコーマに難なく倒され、残るは巨人の魔物だけだ。手に持っているのは、その巨体に

相応しい大きな斧。

「私がやる。」

マリカがシャムシールを構えて巨人に突撃、怒濤の超高速連撃を放つが、巨人にはまるで効いていない。

巨人が斧を振りかぶる。：あの斧の形状、普通のものではない。なかに特殊な武器だ。ソードバスターに似ている……ますい！

「マリカ下がれ！ソードキラーだ！」

「…っ！」

叫んだものの、回避は間に合いつかない。マリカを体当たりで突き飛ばし、剣を構えて振り下ろされた斧を受ける。

「ぐうっ！」

強い衝撃に剣は碎かれ、巨人の一撃をもろに受けてしまう。軽鎧による防御も意味を為さず、鎧に大きな裂け目が出来た。身体中に鈍い痛みが伝わってくる。

幸いにも巨人の追撃は遅く、ターナ姫に救出されなんとか離脱する。

「もう、馬鹿！」

「申し訳…うぐっ。」

「喋らないで、傷口が広がるわ。ラーチエル、お願ひ！」

どうやら俺の傷は相当酷いらしい。リライブの癒しの光に包まれ、痛みが引いていく。

「ありがとうございます、ラーチエル王女。」

「構いませんことよ。：仲間を想い、己の身を投げ打つてでも守る信念は感心いたしますが、自身の命も大切になさいな。今回の戦いを見させてもらいましたが、あなたは間違いなくこの軍の精神的支柱。あなたに何かあれば軍の士気に関わりますわ。」

「…そう簡単に死んでやるつもりはありません。ターナ姫を守るのが、俺の使命です。」

確かに、今の行動は少し無茶が過ぎた。天馬が銀の弓に突撃するが如き行為、一撃で殺されなかつただけ儲けものだ。：マリカが死ぬかと思えば身体が勝手に動いていた。俺でこうなるなら、細身なマリカ

では耐えられなかつただろう。

ともかく、巨人の扱うソードキラーはソードバスターをさらに対剣歩兵に特化させた、剣殺しの斧だ。ソードバスターと同じく、普通の斧とは逆に槍には滅法弱い。今もエフラム王子とソシアルナイト三人が巨人の攻撃に対応し、少し離れた場所からルーテとアスレイが魔法で、ヴァネツサとアメリカが手槍で巨人に確実にダメージを与えている。

「これで最後だ！」

最後にエフラム王子が飛び上がり、巨人にレギンレイヴを突き刺し、巨人は大量の血を流しながら倒れた。

港街で待ち伏せしていたグラド軍と魔物を倒した次の日、進軍準備が整うまできしの休息だ。ターナ姫はラーチエル王女やアメリカ、ネイミー達と楽しそうに話し合っていたので、俺は席を外し街の外れの林で新しく支給された鋼の剣の素振りをしていた。鎧も壊れたものと同等の新しい軽鎧が支給されている。

「98…99…500…！」

500回も振れば、この剣の特徴も掴めてくる。剣は一本一本それが出来が違う。実戦に挑む前の素振りは絶対に欠かせない。

「よし、マリカに手合わせでも…ん？あれは…」

翼の生えたシルエット。ミルラがおぼつかない足取りで歩いている。…エフラム王子と別々に行動してるのは珍しいな。

「ミルラ、どこに行くんだ！」

「……」

街から出ていきそだつたので声を掛けたが、ミルラは一瞬立ち止まつてこちらに振り向いただけで、何も答えることなく行つてしまつた。

「追いかけないとな。」

エルトを呼ぶ暇はない。見失う前に連れ戻さなければ…

「どうしたの？」

「マリカか？悪い、少し頼まれてくれ。ミルラが東に向かつて街を出た。アストラが追いかけてる。そうエフラン王子に伝えてくれ。」

「ミルラ…？わかった。」

「ありがとう、なるべく早急に伝えてくれ！」

あの速さならすぐに追いつける。だが、ミルラに翼を使われると、どれだけ速くなるのか見当もつかない。早く追いかけないと…！

15章 セライナの誓い

ミルラを追いかけて数時間、彼女は翼を使うことで俺とほとんど同じ速度で移動し続け、ついには林の中でミルラを完全に見失つてしまつた。

「くそつ……！」

木々に阻まれて視線が切れている間に方向転換されたのだろう。北側に曲がったのか南側に曲がったのか、それとも上空に逃げたのかは分からぬ。どれにしても今から見つけ出すのは困難を極めるだろう。

「…………」

見失つてしまつた以上無闇に探しても見つけられない。どこに向かつているのかを考えて先回りするしかないだろう。とはいえミルラが向かつている場所の手掛かりは一切ない。いや、そもそも俺はミルラのこと何も知らないんだ。

「エフラム王子なら何か知つてゐるかもしねいな……」

しかしエフラム王子はタイゼル港だ。ネイミーからの伝言を聞いて早急に進撃準備を完了させてから後を追つていたとしても俺よりもずつと後ろだらう。

とにかく前に進むしかない。平原に出るまで進めば遠くからミルラが見えるかもしれない。

「…………ここは……」

林を抜け、山の麓を走り、低い丘を横切ると広大な湿原に辿り着いた。ザールブル湿原、グラド城へと進軍する時に通る予定だつた場所だ。もうこんな場所まで進んでいたのか。

グラド軍の兵が陣を敷いていたので見つからないように茂みに身を隠す。ミルラは見つからなかつたが、見つかる前に撤退しないと面倒なことになる。

「……ミルラ？」

グラド軍の様子を伺つてゐると、奥にある村に藍色の髪の少女が

入つていくのが見えた。翼は隠していたが、服装や髪型からして間違いないミルラのそれだつた。

さて……どうしたものか。このまま動けば間違いなくグラドの兵士に見つかる。グラド軍に俺の顔が知れ渡つていることも十分に有り得る上に素性を隠すためのフードもない。できるのは無事ミルラが戻つてこれることを祈るくらいだ。

「……ん？」

見張りをしていたグラド兵がミルラが入つていた村に駆け込んでいく。あそこに指揮官がいるのだろうか。西を見ればいつの間にかエフラム王子達が追いついて来ていた。

その後しばらくすると一箇所に固まつていたグラド軍が湿地中に陣を展開していく。これは流石に戻らないとまずい。ミルラを連れ戻す前に死んでしまつては元も子もない。

足音を殺してなんとかエフラム王子達と合流する。

「すみません、今戻りました。」

「アストラカ。ミルラはどこにいるんだ？」

「南東の方角にある村です。おそらくグラド軍の司令官もそこにあるかと。」

「なに……？ それはまずいな……」

「エフラム様、どうやら敵軍の司令官は帝国六将【螢石】のセライナのようです。」

グラド軍の状況を見ていたカイルさんがエフラム王子に伝える。

：いずれ戦うことになるのは分かつていた。だが俺にとつては一番戦いたくない相手だ。少しの間とはいえ、俺はあの人から魔法使い相手の戦い方を教わった。俺が今生きているのはセライナさんのお陰でもあるのだ。

彼女が使う魔道書は知っている。昔、理魔法の特徴を教わった時に見せてもらつたのだ。

「あの人……セライナさんは『サンダーストーム』の魔道書を使います。対象が遠く離れていても攻撃できる厄介な魔法です。中近距離では『エルファイア』だつたかと。」

「…戦闘準備だ。俺も彼女とは戦いたくない。だが、それでも戦わなければいけない。それが戦争というものだからな。」

「…はい。」

俺は自分の仕事をするだけだ。エフラム王子のすぐ後ろにいたターナ姫の傍で準備運動代わりに肩を回す。

「…エフラム。」

「ミルラ、無事だつたか！」

俺が戻つた道を辿つてミルラが帰つてきた。どうやらセライナさんに帰してもらつたようだ。

…やつぱりセライナさんはあの時のままの優しい人のようだ。エフラム王子もミルラの話を聞いて説得を試みると言つてくれた。

「おっ、あんたがエフラムかい？」

「ああ、そなだが…お前達は？」

ミルラの後ろから更にくすんだ若草色の髪をした顔の傷跡が目立つ男と赤く長い髪を三つ編みに纏めた妖艶な雰囲気の女性が走つてくる。

「俺は傭兵団のジストだ。ヒーニアス王子に雇われてな。あんた達に加勢することになった。」

「お兄さまが？」

「あら、ヒーニアス王子の妹さん？ フレリアのお姫様がどうしてから。」

色々あつてとしか言えない。ターナ姫の踏んだドジを他人に晒すわけにもいかないだろう。

「…構わねえか？」

「勿論だ。戦力が増えるならそれに越したことはない。よろしく頼む。」

「それともう一つ、王子からあんたに伝言を預かつてる。『私には助けなど必要ないが。エフラム、お前には必要だろう？』…だそうだ。」「あいつらしいな…まつたく。」

ターナ姫から聞いたことだが、ヒーニアス王子は何かとつけてエフラム王子に対抗しようとしてるらしい。とにかくどうしてもエフラム

ム王子には負けたくないらしい。戦術は総合的に見るとエフラム王子の方が優れているが、勉学の方面では全体的にヒーニアス王子が勝っているそうだ。

「あら、そう言えば私の自己紹介がまだだつたわね。私はテテイス。傭兵団の踊り子よ。」

「踊り子…か。」

たしか優秀な踊り子の踊りを見ると元気が出る…つまり気力が回復して少しの間いつもよりも多く行動しても疲れなくなる…だつたか？おおよそそんなことが戦術書に記載されていたはずだ。

「エフラム王子、指示を。」

「よし、二手に分かれて挟み撃ちだ。まずは俺達が西側からグラドを叩く。その間に東側に回つて背後から撃破していくんだ。」

なるほど。東側から挟み撃ちにしてくることは相手から見てもわかりきつているだろう。しかし、だからといって主力を注ぎ込んだ西側の部隊を無視するわけにもいかない。東側の守備が手薄になるのは必然だ。

「東側にはターナ、アストラ、ロス、ジスト、マリカ、ユアンの6人で行つてくれ。杖使いがないが、特効薬ひとつと全員分の傷薬を渡しておく。回復にはそれを使つてくれ。」

輸送隊から一人ひとつの傷薬を受け取り、特効薬は俺が管理する。当然、傷薬では回復が追いつかない状態で危険になれば躊躇なく使うつもりだ。

そして西側の部隊が攻撃を始めたのを見ながら俺達は東側へ進む。

「隊長。」

「マリカ、お前どうしてここに？それにユアンも。」

「ギルドの人が間違えちゃつてさ、元々隊長と同じところに行くはすだつたんだけど。僕はそれをマリカに伝えに行つてたんだ。この軍と行動してたら隊長が仕事してたジャハナで合流出来るでしょ？」

「あー…そういうやあそこのギルド、最近新人雇つたばつかりつて言ってたな。ま、結局こうやつて会えたし運が良かつたな。」

「あら、あなた達知り合いだつたの？」

「おう、知り合いもなにもマリカとユアンはうちの隊員だ。それにティイスはユアンの姉さんだしな。」

橋の前まで進み、敵軍の様子を探る。

「…もう敵軍の戦力はほとんど前線に出されている。そろそろ頃合いだな。」

グラード軍前線に戦力を投じて後方の守備が手薄になつていて。最低限の警備は敷いてあるが突破は容易いだろう。

まずはソルジャー、戦士、ソシアルナイト各二部隊ずつだ。敵軍の数は数十に及ぶがこつちはたつたの六人、先制攻撃を仕掛けてできる限り優位に立ちたい。

「…俺とジストが先に前に出て、攻撃の隙を突いてロスとマリカがなぎ倒す。ユアンは魔法で攻撃を牽制してくれ。」

「ええ、僕はもっと派手にやりたいんだけどな。」

ユアンが口を尖らせてそう言う。：自分で見習いを名乗つていた割には自信過剰だな。

「言つちや悪いがユアンの魔法はまだ威力も速さもまだまだだ。ルーテ程とは言わないが、グラードの魔道士とほぼ同等くらいの実力をついたらそれくらいの役割は与えられるだろうな。」

「うーん…わかった。もつと強くなれるよう頑張るよ！」

「アストラ、私はどうすればいい？」

「ターナ姫は川の向かい側にいる魔道士の相手をお願いします。手槍であれば川を挟んでも攻撃が届くはずです。それじゃあ…行くぞつ！」

俺とジストが剣を抜いてソルジャーに先制攻撃を仕掛ける。武器の相性など実力差の前では無力、反撃する隙も与えず確実に相手していく。

「くつ…かかれ！ 数の利はこちらにある、物量で押し込め！」

「ファイアー！」

小さな火の玉が敵兵の足下に落ち、前進しようとした敵兵の足が止まる。

「今だつ！」

相手が立ち止まつた一瞬を利用してもらう。俺達の横をすり抜けてロスは豪快に斧を振り回し、マリカは音もなく敵兵の首をとつていく。そして屍が重なつた道を俺とジストが突き進んでいき、戦士の部隊も勢いに任せて突き崩して突破する。

「……アストラ、右だ！」

「くつ……弓兵……スナイパーか！ 厄介な相手だな。」

飛んできた弓矢を革の籠手で受けるが、弓矢はそれを突き破つて手首に刺さる。すぐに抜いて傷薬を使い、傷口が塞がるまで布で縛り付ける。

「よし、俺が道をこじ開ける！ マリカ、スナイパーをやれ！」

「私が斬る。」

「おらあつ！ へへっ、ソシアルナイトなんか屁でもないぜ！」

「アストラ、加勢するわ！」

「ファイア――！ ……ファイア――！ ……ファイア――！」

ジストが一直線に突撃して敵兵を押し飛ばし、マリカが風のような速さで捕捉したスナイパーへと突貫、ロスは一度に四人のソシアルナイトを薙ぎ払いまとめて倒す。ターナ姫も魔道士の処理を終えて空中から急襲を仕掛ける。ユアンも集中力が極限に達したのか矢次早に魔法を放つていく。

「行ける！」

確実に倒していくソルジャー、戦士、ソシアルナイトの部隊を全滅させた。

「おい、山賊が来たぞ！」

ロスが指を向けた南東の山から賊が降りてくる。火事場泥棒を狙っているのだろう。

「俺がしんがりをやる！」

ジストが最後尾に立つて山賊達を睨む。戦いに関係の無い一般人を巻き込むわけにはいかない。

さつきまでグラド軍が駐留していた街がちょうど目の前にある。

「ターナ姫、街に警告を！」

「分かったわ！」

山賊の相手をしているからと言つてグラード軍が待つてくれることはない。南から魔道士、西からソシアルナイト二部隊とグレートナイトが距離を詰めてくる。

「ちつ…マリカ、ロス！魔道士をできる限り素早く仕留めてくれ、ユアンは俺と一緒にソシアルナイトを二人が魔道士を倒すまで押さえるんだ！」

「了解。」

「よし、任せろ！」

「ユアン、こっちだ！」

「うん！」

橋で戦えば三部隊に囲まれる心配はない。橋を渡つた場所にアーマーナイトの部隊も構えているが、少なくとも騎馬隊を倒すまでは守りに徹するだろう。

「くつ…！」

攻撃することよりも防御と回避に集中する。ターナ姫やマリカ、ロス、ジストが加勢に来るまでは攻撃してもこっちが先にやられてしまう。

「ファイアーファイアーファイアー！」

ユアンも必死になつて魔法を連発するが、あのままでは魔力が欠乏してしまう。早くこの状況を突破したいが…

「やああっ！」

物凄い速さで投げられた手槍が風を起こし、ソシアルナイトの部隊を丸ごと吹き飛ばす。

「た…ターナ姫！今のは…？」

「分からぬ…でも、崩すなら今よ…！」

「くつ…せあああああっ！」

身体ごと回転させながら薙ぎ払うと、その一撃だけで数人を巻き込んで橋の外へと放り飛ばされる。

「山賊はもう片付いた！俺も加勢する！」

…！山賊はかなりの数がいたはずだ。傭兵团の隊長というのはこれほどまでの実力があるのか…？

「突破する……」

「グレートナイトは俺に任せろ！」

魔道士を瞬殺したマリカとロスも突撃、マリカが切り開いた道をロスが駆け抜け、ハンマーをグレートナイトの兜目掛けて振り下ろす。「よし……このまま押し切るぞ！」

六人で武器と魔法を振るつてグラードの騎馬隊、そしてアーマーナイトも撃破、傭兵も難ぎ倒し指揮官のセライナさんがはつきり見える位置まで辿り着く。

「お前達、上手くいったか！」

エフラム王子達の本隊もグラド軍を突破してここまで来たようだ。残りはセライナさんとそれを囲うシャーマン三人だ。

「まずはシャーマンを倒そう。外堀から確実に埋めていくんだ。」

エフラム王子の指示で西側のシャーマンをアスレイ、南側のルーテ、東側はターナ姫とヴァネッサが撃破する。

「……残りはセライナだけだ。」

「俺にやらせてください。」

「アストラ？」

「俺はセライナ将軍と面識があります。俺なら……俺なら彼女を説得できるかもしだせん！」

「…………分かった。お前の覚悟を信じる。」

剣を抜き、セライナさんのいる三角州へと歩く。

「…………久しぶりですね、セライナさん。」

「アストラ、話には聞いていた。フレリア軍として戦っているのだな。」

「……俺はあなたと戦いたくない。あの時の恩を仇で返すような真似はしたくない！」

「分かつていて。だが……私は陛下に忠誠を誓った身。騎士として……帝國の将として私はここに立つていて。」

「王の乱心に盲目に従つて何が忠誠だ！主君の過ちを正すことが眞の忠誠……デュッセル将軍が身をもつて示しているだろう！」

「愚かであることなど百も承知！これ以上語らうことなどない！私は

「アーヴィング、君はフレリア。敵である以上、倒すのみ！……エルフアイ

「レウル…」

凄まじい熱を放つ炎が降り注ぐ。その威力は防御などでどうにかなるものじやない。ルーク以上の魔力だ……！

「ぜあああつ！」

炎の中を掻い潜つて剣を振り上げるが、馬を方向転換させて回避される。

一撃目の炎は跳んで躱し、そのまま突進しながら剣を突き出すがや
はり避けられてしまう。

魔法を防ぎ、斬撃を躱され、重症は特効薬で強引に治療、傷薬を使い切り特効薬もあと一回分のみになつたところでようやく剣先がセライナさんのわき腹を抉る。

〔 〕

残る力を全て出して攻め立てる。千載一遇の好機、逃しはしない！

一
ぐあー···！

セライナさんが体勢を崩し、落馬して仰向けになる。その隙にエルフアイアの魔道書を奪い取つて川に投げ捨て、セライナさんの喉元に剣先を向ける。

「か」

「あなたが何かをするより俺があなたを突き刺す方が速い
ください。」

—

セテイナさんは口を固く閉じて黙り込んでいた。
「……安峰さん！ セライナ！」

...!

セライナさんはこつちを見て目を見開く…いや…見ているのは俺の後ろ…?

「アストラ、後ろ――！」

突如、俺の足元から光の渦が浮かび上がる。その渦は俺の頭上で塊になつて：

そこで俺の意識は途切れた。

三人称視点

「ふえふえふえ、いけませんなセライナ殿。相手が傷薬で回復していたとはいえ、こんな若造に負けるなど。」

「貴様…アーヴ！」

セライナは立ち上がりアストラに不意打ちを仕掛けた男、帝国六将【血碧石】のアーヴを睨みつける。

「何をしに来たアーヴ！今の勝負は私の敗北だ！貴様が邪魔さえしなければ…私は…！」

「セライナ殿…いや、セライナ。口の利き方には気をつけた方がよいぞ。」

「何を…！」

アーヴはセライナに紐で括られた書面を渡す。

「……」

「どうされた、読まぬのか？」

セライナはアーヴに言われた通りに書面を開いてその内容を読む。

「…馬鹿な、そのような…陛下が…！」

書面に目を通したセライナの顔から色がなくなつていく。

『本日を以てセライナの騎士の称号を剥奪する グラド皇帝 ヴィガルド』

「陛下が直々にお書きになつた書状だ。それではわしは失礼させてもらおう。ふえふえふえ…」

アーヴは不気味な笑い声を上げながら転移魔法で姿を消した。

「アストラ！」

「お兄ちゃん！」

アーヴが消え、セライナにも抵抗の意思が見えないのを確認してか

らターナとアメリカは氣絶しているアストラに駆け寄る。

「…まだ息があるわ。ラーチエル、お願ひ！」

「任せなさいな。」

ラーチエルはリライブの杖を翳してアストラの傷を癒していく。
「これで命の危険はなくなりましたわ。意識の回復にはまだ時間がかかると思いますけれど。」

「ねえ、あの人はどうするの？」

アメリカが絶望して俯いたままのセライナを見てエフランに訊ねる。

「…彼女にはもう抵抗する力は残っていない。誰か彼女の傷を治してやつてくれ。」

「私が治療します。」

ナターシャがセライナの傷を回復させ、痛みが引いたことに気付いたセライナが顔を上げる。

「何故…私を助けた。」

「もうお前との決着はついた。命を奪う必要はない。」

セライナは再び俯き、うわ言のように自分の心境を語る。

「…陛下が昔の陛下ではなくなってしまったことには気付いていた。…私にとつては陛下が全てだつた。の方に仕えることこそが私の喜びだつた。…かつての陛下を失つてしまつた私は、一体何者なのだろうか。」

「さあな。それはお前が考へることだ。どうする、お前にはもう戦う意志がない。見逃してやつてもいいが。」

「……」

セライナは自らに与えられた称号でもあつた【螢石】を握りしめ、胸の中で祈る。過去の自分への決別か、かつてのグラド皇帝への黙祷かは分からない。

「デュッセル将軍、あなたを裏切り者呼ばわりしたことを謝罪させていただきたい。あなたの忠誠に搖るぎはなかつた。」

「よいのだ。今、陛下に刃を向けているのは紛れもなき事実。裏切り者と呼ばれても仕方あるまい。さあ、ゆくのだ。己を見つめ直せば道

も開けるであろう。」

「はい。…最後に、これを。」

「あ…」

セライナはエフラムの傍に佇んでいたミルラに黄色い宝石を手渡す。

「その石は返そう。私には必要ないものだ。」

「ありがとうございます。」

ミルラの礼を受けとると、セライナは馬に跨つてエフラム達に背を向ける。

「私はもう今の陛下に従うことはない。私が何者なのか、今一度それを確かめる。」

さらばだ。と最後に告げて湿地を立ち去つた。

「エフラム：あの人の大切な人は変わつてしましました。」

「ああ。全てに決着をつけるんだ。行くぞ、グラド城はもうすぐだ。」

16章 皇帝との決着

エフラム王子からセライナさんのことを見聞き、安堵する間もなくフレリア軍は歩みを進める。

グラド城はもう目の前に迫っている。あそこにグラド皇帝ヴィガルドがいるはずだ。

「グラド帝都…昔来た時と変わつていい。俺とエイリーエは父上に連れられてここに来た。デュッセルに槍を習い、リオンと共に歴史を学んだ。あの頃はグラドにルネスを侵略され、俺がグラド城に攻め込むことになるなんて考えたこともなかつた。」

「これで全てが……ッ！」

地面が前触れなく震えはじめる。二回目だから軍内での動搖は少ない。

「また地揺れか…」

「半年ほど前からかなり頻繁に起こつてているようです。どれも今程度の弱いもののがうです。」

今までは多くて一年に2、3回が精々だつたが、今では数週間に一度は揺れているらしい。前に揺れたのがベスロンの港に入る時だからおよそ2週間前、確かにこの間隔は異常だ。

「外の警備は無いも同然…奇妙ですわね。」

「帝国六将の内【月長石】のヴァルター、【虎目石】のケセルダ、そして【血碧石】のアーヴ…この3人が帝国側についているはずですが、偵察兵の報告では全員が城の警備には充てられていないようです。」

クーガーの兄、【日長石】グレンはエイリーエ王女やヒーニアス王子と接触し、説得に応じてエイリーエ王女達を見逃した後に消息を絶つてゐる。恐らくは…

「意図は分からぬが好都合だ。左右の城門から同時に攻め込むぞ。右側の第一部隊の指揮は俺が執る。デュッセル、第二部隊の指揮は任せた。」

「任せよ。」

俺は第一部隊で数人の傭兵を率いてターナ姫達のペガサスナイト

部隊に同行する。弓使いや斧使いを牽制するのが主な役目だ。

「行くぞ！」

エフラム王子に続いて突撃、城内の様子を素早く確認する為にフォルデさんが先頭に立つソシアルナイト部隊が速度を上げるが、すぐに立ち止まつた。

「まずいですね、敵兵の数が想定の3倍以上はありますよ。ここで敵を引き付けて迎え撃つたとしても耐えきれるかどうか…」

グラド兵士だけでなく、雇われた傭兵や戦士までもがぎつしりと、それも戦いに支障が出ない完璧な布陣で並んでいた。

「だが、ここまで来た以上はやるしかない。いくぞ！」

先頭に立つていた数十人の敵ソルジャー達がこちらに向かつて突進。フォルデ部隊とカイル部隊、ガルシア部隊が迎え撃ち、クーガーが単身で空中から急襲を仕掛ける。だが、足元から黒い塊が現れてカイル部隊に炸裂した。その隙を逃すことなくグラド軍は猛攻を仕掛けてくる。

「ぐつ…怯むな！」

「後方支援はお任せ下さい。」

「構え…………放て！」

ダメージは受けた瞬間にナターシャさん達の後衛部隊がリライブで回復させていく。更に長弓を構えたアーチャー隊がシャーマンを狙う。そう上手く当たることはないと分かっているが牽制としては十分だ。

「行け、全軍突撃！」

「ちつ、やはりそう来たか！」

魔法使い、弓使いを除くグラド全軍が強引にフレリア軍の内側にまだれ込む。混戦に持ち込めば数が少ないフレリア軍はすぐに押し込まれてしまうだろう。

「くつ…これじゃターナ姫達を援護できない…！」

相当な数の戦士…斧使いが戦場に入り乱れている。俺達傭兵隊は複数人で背中合わせになつて戦うことに対処出来ているが、ターナ姫達ペガサスナイトは空中に避難せざるを得ない状態だ。それも天井があるために手斧が届く高さまでしか上昇できず、弓兵が来たら一巻

の終わりだ。

「まざいですアストラ隊長。弓兵隊が四方囲まれてます。」

「ソシアル隊かクーガーのどちらかに移動する余裕が出来れば…」

…もしもに賭けている場合ではないが、そうせざるを得ない状況だ。

俺は腰の袋からベスロンでデュッセル将軍から受け取った物を取り出す。英雄の証…俺がこれを使うに足りる器なのは分からない。使つたとしてこの状況を打破出来るだけの力が付くかも分からない。だが、これが今思いつく限りの最善策だ。

「英雄の証！俺に力をくれ！皆を守ることの出来る力を！」

英雄の証を胸元に抱いて祈る。すると英雄の証は稻妻のような光を放ち、視界を白に染めた。

「…ツ！」

祈りが届いたのか、英雄の証は俺の身の丈の半分以上もある大きさの盾に変化した。手にしても重みは感じない。むしろ昔から使つていたかのように手に馴染む感覚がする。これがクラスチエンジニアイテムの力か…！

「死ねエツ！」

「ふんっ！」

戦士の攻撃を盾で防ぎ、剣で切り裂く。剣を無理に回避して体勢を崩した傭兵に即座に追撃、確実に仕留める。

「…俺はターナ姫達の所に向かう。他の隊に合流して対処してくれ。」「了解！」

決して全能感に満つている訳ではない。この状況を切り抜けるには今之力で十分だ。

「ふんっ！」

一呼吸する間に一人仕留め、その屍を足がかりにして飛び上がる。空中から剣を振り下ろし背中を裂く。背後から迫つていた敵は回し蹴りで対応、ルーテのサンダーの魔法が飛ぶ方に突き飛ばし、ルーテが狙つていた敵諸共息の根を止める。

「くつ…あんな強者を放つておけば敗北は必至…まずは奴を殺せ！」

囲まれた。…10人中ソルジャーが2人、ソードバスター持ちが3人、残り5人は鉄か鋼の斧。

問題ない、倒せる奴から倒す。鉄の斧持ちの戦士と距離を詰め、攻撃を盾で防ぎつつ太腿に剣を突き刺す。更に振り返つて追撃、鉄の斧を奪い取る。

「なるほど…こうか。」

剣以上に刃の重みを意識すればさほど扱いは難しくない。そのままソルジャーを狙つて斧を振るう。

「ぐがあつ！」

肩の鎧を碎きはしたがどどめには至らず。…少し打点がズレたか。それでも戦意喪失させるには十分だろう。次の敵に狙いを移す。相手は剣に有利な斧ソードバスターを持つ戦士、このまま斧で戦うべきか。

「せいツ！」

「ふん。」

可能な限り素早く降つたが、身を捻るだけで回避された。雑兵とはいえ相手も斧使い、動きは読まれて当然だ。

「ぬうん！」

斧を大きく薙ぎ払う。当然戦士は後ろに跳んで回避。…こだ。

「ぐつ…!」

後ろに大きく跳べば必ず着地の際に隙が出来る。そこを突いて俺は戦士の腿の内側を狙つて小ぶりのナイフを投げた。
「がつ…身体が…」

「…魔物の武器に付着していた毒を塗り付けている。太い管が通つている腿の内側から毒が入れば動くこともままならないだろう。」
顔面を思い切り蹴りつけて気絶させる。下手すれば死に至ることもある毒だ。生きて捕虜に出来ればそれが最善だが期待はできない。

本来は六将級の相手にまるで敵わなかつた時の切り札だったが、斧の扱いは素人故に当たらない。剣で挑んでも…勝つこと 자체は可能だろうが余計な傷を負うことになる。使わざるを得なかつた。まあ、回収すれば刃が折れるまで何度も使える。

そこからは簡単だ。鉄、鋼の斧持ちは剣で斬り伏せ、ソルジャーは斧で脳天を叩き割る。ソードバスター持ちは毒ナイフを警戒して攻撃を回避せずに防御に徹してきたのでその上から叩き伏せた。

「らあああああああ！」

俺が一人で半分倒せば状況は好転するはずだ。傷薬の残量を考えれば十分だ。

この盾で何度も攻撃を受け止めると、ひとつたりとも傷が付かない。盾で全ての攻撃を受け止め、一瞬で距離を詰めて敵を切り裂いていく。

「ずああつ！」

「ぐ…ば、化け物……め…」

近くの敵を粗方倒し、周りの戦況に目を向ける。どうやら敵の第一陣は突破したと見て問題なさそうだ。

「アストラ、お前の斧でアーマーナイトは倒せそうか？」

「いえ…この鉄の斧では厳しいです。それに鋼の斧は重すぎて使いこなせるかどうか…その上弓使いの気配もします。」

周囲に弓使いの姿は見えない。だが、それでもどこかに潜んでいる。普段から最大限警戒していた成果か、弓使いの気配がかなり鋭く察知できるようになっている。

「…戦士隊はハンマーを持つて前線に上がれ！その後ろから魔道士隊もアーマーナイトの撃破を狙うぞ！傭兵隊は引き続きペガサスナイト隊の護衛、騎馬隊は魔道士隊の護衛だ。その他は魔道士隊の後ろに待機、敵アーマーナイトを撃破後、扉を破つて一気に玉座の間まで突き進む！」

エフラム王子は先頭に立ち、レギンレイヴを構えて突撃、アーマーナイトの振るう槍をものともせずに無双する。

「アストラ様。」

「…ナターシャさん、どうかしましたか？」

「大きな怪我はないようですが、小さな傷でも残しておけば後に重大な障害となり得ますので。」

指摘されて自分の全身を見渡してみる。英雄の証を使う前の傷も

残っているが、武器を握っていた右腕の当たりにそれなりの切り傷が出来ていた。これは英雄の証を使う前に付けたものでは無い。いつの間にか油断していたようだ。

「すみません、治療をお願いします。」

「はい。……人は興奮状態に陥ると一時的に痛覚を感じなくなることがあります。今回も無事でしたが、お気をつけください。」

「肝に銘じておきます。」

そんな状態になつて気が付いたら再起不能の重傷、は笑えないからな。

そんなことをしている間も周囲に目を配る。コーマが堂々と宝物庫と思しき部屋の鍵を開けている。倒されているアーマーナイトはおそらくアスレイ辺りがやつたんだろう。

「うわつと!?あつぶねえな…おらあつ！」

コーマが叫んだのを聞いて様子を見に行つたが、既に二人のシャーマンを仕留めた後だつた。素早く宝箱の中身を盗んでいる。

「さてさて…と。まずは導きの指輪か。こつちはハルベルトだな。最後のひとつ：の前にアストラ！このふたつは輸送隊が使える人に渡しといてくれ。俺はデュッセル側だからな。」

「そのハルベルトはそつちにいるロスに渡しておいてくれ。指輪は俺が預けとく。最後のひとつの中身はなんだ？」

「今開けるところだ。つと、これは…なんの杖だ？」

コーマが盗んだ杖を観察する。…見たことのない杖だ。先端の宝玉は赤色。だがトーチ、レスト、アンロックのどれにも似ていな。…そろそろ戻らないとな。ああ、その杖も輸送隊に預けておく。戦いが終わつたらその杖のことをナターシャさんかラーチエル王女に聞いてみる。そつち側の様子はどうなんだ？」

「数じや負けてるが、デュッセル将軍とギリアムのおつさんが前に立つて質で押し込んでるぜ。あの二人、下手な相手じや攻撃受けても一切ダメージないしな。」

どうやら反対側の心配もないようだ。戻つてみれば丁度アーマーナイトを突破した瞬間だつたらしく、傭兵達を率いて開いた扉を駆け

抜……け……

「ぐつ……が……ああつ!?」

「隊長!」

「アストラ!大丈夫!」

「タ……ナ……ひ……メ……俺カラ…ハ……レ…グアアアツ
！」

三人称 Side

「危ないっ！」

突如発狂したアストラがターナ目掛けて振り下ろした斧を傭兵が防ぐ。しかし強すぎる力によつて攻撃を受け止めた鋼の剣はへし折れ、押された勢いで肘があらぬ方向へと曲がる。

「ぐああああつ！」

「アストラ、しつかりして！どうしちゃつたの!?」

「…そうか、バサークの杖だ！」

「バサークの杖…？」

「相手の正気を失わせ、敵味方関係なく襲うようにさせる杖です。毒やスリープの杖と同じようにレストの杖で治療が可能ですが…」

「…ここでアストラを止めないと軍がめちゃくちゃになるわ。ナターシャさんが来るまで私たちで止めましよう。」

ターナはアストラに向かつて槍を振るう。大きく薙ぎ払われたそれをアストラは後ろに跳んで回避、着地と同時に斧を構えて飛び出す。

「させません！」

盾を持っている傭兵がアストラの斬撃を受け止める。アストラは盾ごと叩き割らんと力を込めるが、頭上から襲い掛かるアキオスの蹴りに反応して身体を反らせた結果転倒する。

「両手を押さえて！」

盾の傭兵ともう一人の傭兵がアストラの両手を抱え上げて動きを封じ、その間にアストラが持つている武器をターナが回収する。

「グツ…ギ…ギ…ツ」

「大丈夫よ、アストラ。すぐに返すから…」

「シスター！こっちです、早く！」

腕が折れた傭兵の治療を終えたナターシャが走つてアストラの下に駆けつける。

「レスト！」

ナターシャは祈りを捧げ、杖を翳す。そして杖から放たれた光がアストラの狂気を鎮めていった。

アストラ Side

「……俺は…？」

気がつくと俺は仰向けの状態で、共に戦っていた傭兵達やターナ姫、ナターシャさんに顔を覗き込まれていた。

「アストラ、あなたはバサークの杖によつて正氣を失っていたの。大丈夫？頭痛がしたりしない？」

「はい、問題ありません。：バサークの杖か。」

正氣を失わせ、人を暴走させる杖：か。正氣を失つていた時の記憶はない。：だが、来ると分かつてているなら大丈夫だ。

「：心配をお掛けしました。もう大丈夫です。先へ進みしよう。」

俺一人に起きたトラブルのせいでの指揮が乱れるのは良くない。失つた時間は一刻も早く取り戻さないといけない。

「…ツ！」

前線に向かつて進んでいる途中、闇魔法の気配を感じて咄嗟に回避する。

「今の紋様、ルナの魔法か…！」

「知つているのか？」

傭兵の一人が今の魔法を知つてゐるらしいので話を聞く。どうやら使い手の放つ魔力を増幅させる力はない代わりに、魔道士やペガサスナイトが持つ魔法防御力を無視してダメージを与えてくる魔法のようだ。おまけに他の魔法よりも魔力が暴走しやすいらしい。

「なるほどな、確かに厄介な魔法だが隙は大きい。面倒なことになる前に片付けるぞ。」

傭兵隊とペガサスナイト隊で敵のシャーマン部隊を制圧する。ルナの魔法は詠唱がやたらと長く、さつさと魔道書を斬り裂いて無力化。中にはローブの中にナイフを仕込んでいた奴もいたが、素人の動きに負けてやる道理はない。

ここから玉座の間までの敵はエフラム王子達によつて既に撃破されている。残るは玉座の間に潜んでいるであろう敵兵と…グラド皇帝ヴィガルドだけだ。

丁度反対側のデュッセル将軍達も敵陣を突破し、こっちの部隊と合流する。

「さあ、行きますわよレナック！この戦争の元凶であるグラド皇帝をわたくし達で成敗しますわ！」

「はあ…俺じゃ無理ですって。ラーチエル様だつてまだ杖しか使えないから攻撃は出来ないでしようが。ドズラのおっさんも…出来なくはなさそうなのが腹立つな。」

…ベスロンでラーチエル王女が連れていた茶髪の男がいつの間にか軍に参加している。この戦いに紛れて宝を盗もうとしたら不幸にもラーチエル王女と遭遇…といったところだろう。

「決着をつけるぞ！」

カイルさんが扉の鍵を開けて全員が玉座の間に突入、そしてフランツとヴァネッサ、そしてカイルさんとフォルデさんが部屋の中にいたドルイドを降伏させる。

「何故ルネスを侵略した！何故父上を殺した！…答える！皇帝ヴィガルド！」

「…………」

エフラム王子が激昂しながら叫ぶが、ヴィガルドは何も答えない。無機質な瞳をエフラム王子に向けながら巨大な槍を構えている。

「…やはり、もうまともな状態ではないのか。…行くぞヴィガルド！」

俺が…いや、俺達がお前を討つ！」

エフラム王子はレギンレイヴを構えてヴィガルドへと迫る。しかし、ヴィガルドの投げた槍によつて進行を阻まれる。

「はああああっ！」

エフラム王子はそれを乗り越えて自分の槍が届く間合いで入り込み、すかさず槍を鎧の隙間を狙つて突き刺すが、ヴィガルドが鎖を使つて素早く戻した槍によつて防がれる。

「行くぞ、アメリカ、ターナ姫！」

「うん！」

「ええ！」

アメリカが左側から鉄の槍で、俺が右側から鉄の斧で、そしてターナ姫がヴィガルドの頭上から貫きの槍で同時攻撃を仕掛けたが手応えは弱い。反撃を受ける前に素早く身を引く。

「エルファイアーアー！」

「シャインツ！」

「陛下…………ぬうん！」

ルーテのエルファイアーアーとアスレイのシャイン、そしてデュッセル将軍の銀の斧も突き刺さるが全て防がれ、ルーテの眼前にヴィガルドの槍が迫る。

「させるかつ！」

ルーテの前に割り込んだジストが鉄の大剣を盾代わりにして槍を防ぐ。勢いを殺し切れずに吹き飛んだジストをドズラが受け止め、すぐにはラーチエル王女が回復させる。

フレリア軍全員で息つく暇もなく波状攻撃を仕掛けるが、ヴィガルドはまるでその攻撃を予め知つていてるように悉く対処する。

「くそつ、なんて強さだ。人間の域を超えているぞ……！」

「あれを破るには一体どうすれば……？」

まずい、軍の士気が落ちてきている。このままではヴィガルドの圧倒的な強さの前に潰されてしまう。

何かないのか……？相手は化け物じみた強さであつてもただ一人の人間だ。幽霊船を燃やした時のような奇策は俺では考えられない。「アストラ、アメリカ。ひとつだけ考えがあるの。」

「ターナ姫？」

「え……あたしですか？」

俺とアメリカはターナ姫が考えた作戦の概要を聞く。

「…それ、本当に可能なのでしょうか。それに、俺と比べてターナ姫とアメリカにかかる負担が大きすぎます。」

「分かつてる。けれどこれしかないとと思うの。チャンスは一回だけになるけれど…」

「あたしはやるよ、お兄ちゃん。」

「…………分かりました。輸送隊、確かアーマーキラーが一本あつたはずだな。そいつを俺に渡してくれ。」

チャンスは一回だけ。一度失敗すればそれ以降は何度仕掛けても見切られてしまうだろう。

「ふんっ！」

「はあああっ！」

「おおおおっ！」

エフラム王子とギリアムさん、デュッセル将軍の同時攻撃がヴィガルドの槍を弾き、更にユアンの炎が足元に突き刺さる。

今が最大の好機だ。二人に合図を送り、俺がアーマーキラーを、そしてターナ姫とアメリカが鉄の槍を構えて一斉に飛び出す。

「えいっ！」

「やあっ！」

ターナ姫はヴィガルドの周囲を素早く飛び回りながら攻撃を加え、アメリカは正面から突撃する。攻撃が弾かれようが、鎧に防がれようが食らいつくように攻撃を続ける。

「エルトオオオオオオオオ！」

俺は愛馬を呼び寄せて並走し、ヴィガルドの死角から鞍を踏み台にして飛び上がる。それと同時にターナ姫とアメリカが退却、当然ヴィガルドの注意はそこに向く。

「おらああああああああっ！」

その大きな隙を突いてヴィガルドの頭上からその鎧を一刀両断する。落下の速度も合わさって威力は通常よりも大きなものになつているだろう。

『トライアングル……アタ——ツク！』

【トライアングルアタック】、フレリアの天馬騎士団に伝わる必殺の秘奥義だ。本来であれば敵の左右をペガサスナイトで挟み込んで敵を撃乱し、隙だらけになつたところを必殺の同時攻撃で倒すといったものだが……まあ、同時攻撃以外は再現出来たと言える。他の所々劣化版ではあるが、実用性は十分だ。

「エフラム！」

「ああ！これで……とどめだ！」

ターナ姫の声に反応してエフラム王子はレギンレイヴを構え、ヴィガルドの胸に狙いを定めて穿いた。

「…………」

ヴィガルドは結局一言も言葉を発することなくその場に倒れた。
「!?なんだ……これは。」

倒れ伏したヴィガルドの肉体が、灰となつて散っていく。

「これは……予想に過ぎませんが、闇魔道の類いのものでしそう。ゾンビやマミーのように死体の状態で動いていたものと思われます。」

「ヴィガルドは既に死んでたって訳か。」

「とにかく、帝都の制圧は完了しました。我々は城内の様子を調べて参ります。行くぞフォルデ、フランツ。」

「俺も行こう。城のどこかにリオンがいるかもしれないからな。」

カイルさん、フォルデさん、フランツ、エフラム王子は城内の様子を見回りに、ナターシャさんとラーチエル王女は負傷した兵の治療に、そしてギリアムさんとデュッセル将軍は投降したグラド兵の捕縛に向かう。

「あー…レナックつて言つたか。お前。」

「そう言うあんたはアストラだつたか。何か用か？」

「悪いが、この城にある宝ができる限り回収して輸送隊に渡してくれ。軍備の足しにする。」

「へいへいと。」

グラド軍にはまだ【虎目石】と【月長石】、【血碧石】が残っている。皇帝が倒されたとはいえ、戦争がすぐに終わるとは思えない。使える

ものは有効活用するべきだろう。

「何はともあれ、帝都を制圧したことで一区切りついたのは確かだな。

：ターナ姫？」

「ごめんなさい、アストラ。あの…今のみて少し気分が悪くなつて。」

：確かに、人の身体が突然灰になつて散つていつた光景は見ていて氣味が悪いものだつた。

「…分かりました。外に出ましよう。風に当たれば気分も落ち着くでしょう。」

「あ、あたしも行く！」

アーマーキラーを輸送隊に預けてからターナ姫とアメリカと三人で城の外に出る。見張り台の上に登つてみれば、丁度心地よい風が吹き抜ける。

「ふう、やつと息抜きができる。」

「戦いの連続だつたものね…」

「アメリカも休める間に休んどけよ…アメリカ？」

返事が聞こえないと振り向けば、アメリカは既に横になつて目を閉じ、安らかな寝息を立てていた。

「……まつたく、風邪ひくぞ？」

ずっと堅い表情をしていたから成長したなど思つていたが、改めてその寝顔を覗くと、とてもあどけない顔をしていた。

「ずっと気い張り詰めっぱなしだつたもんなあ…」

布は…敵軍への潜入等に備えて用意していた外套があつた。それをアメリカに被せてやる。

「…鎧ぐらいは脱いでも問題ないか。」

鎧と籠手を外し、大きく背伸びをする。そして脚を前に伸ばしたまま身体を大きく前に倒す。

「それ、ルネス式の筋肉緩和術…？だつたかしら。エフラムがやつているのを見たことがあるわ。」

「はい。実際、これをやると疲れが次の日に残らないんです。」

これをフランツに教えて貰つてからは殆ど毎日やつている。普段

は就寝前に行うが、折角落ち着ける時間が出来たのだから今のうちにやつておく。

「私達は上手くやれたけど、エイリーエやお兄さまは大丈夫かしら。」「…エイリーエ王女の傍にはゼトさんがいる。優秀な剣士のヨシュアもいますし、ヒーニアス王子だつて弓の達人です。エイリーエ王女だつて卓越した剣技を持つっています。きっと大丈夫ですよ。」

ジストやテテイスのような強力な傭兵をこつちに寄越すくらいの余裕があるので大丈夫だろう。それこそ帝国六将が相手だろうと引けは取らない筈だ。

「全員、進軍の準備だ！すぐにジャハナに向かう！」

「…ツ！アメリカ、起きて！」

悪いとは思つたが眠つていたアメリカを揺り起こし、鎧を装備し直してすぐに準備を整える。

「アストラ…エイリーエに何かあつたのかしら…？」

「分かりません。ただ、エフラム王子が急いでいた以上、危機的状況であるのは確かです。急ぎましよう。」

間に合つてくれよ…エイリーエ王女、どうかご無事で！

17章前編 【虎目石】

「もうすぐジャハナ砂漠だ！飛行兵達はエイリーグ達を見つけ次第すぐ救援に向かってくれ！」

伝令の報告によれば、ジャハナは軍団長の男がグラドに寝返ったことによつて陥落、聖石も破壊され女王のイシュメアは死亡。その後すぐエイリーグ王女達によつて城は奪還されたが、帝国六将【虎目石】ケセルダと【月長石】ヴァルターの部隊に包囲されて圧倒的に不利な戦いを強いられているようだ。

エフラム王子が急を要する事態と判断し、飛行兵と騎兵を心に編成された先遣部隊が全速力でジャハナ城に向かっている。

「アストラ、エイリーグを見つけたら一緒にアキオスに乗つて。砂漠は足を取られて動き辛いから空を飛んだ方がうんと速く移動できるの。」

「分かりました。：エルト、その間お前は待つといてくれ。後から輸送隊が来るからな。頼んだぞ。」

戦闘の時、エルトは大体輸送隊と一緒にいる。こいつも多分輸送隊の人々の顔は覚えてるんじゃないだろうか。

「着いたぞ！飛行隊、頼んだぞ！」

「いたわ！ジャハナ城の門の前！」

ヴァネッサが声を上げたが俺からは三角形の建造物しか見えない。ターナ姫の腕を借りてアキオスの上に乗つてジャハナ城であろうその建造物を注視する。

風に靡くあの青い髪は間違いないエイリーグ王女だ。

「アストラ、しつかり捕まつてね。アキオス、お願ひ！」

アキオスは俺を乗せながらも風のような速さで砂漠の上を駆け抜ける。

まずい、グラドのアーチャーが狙つてる。いや、ソシアルナイト：多分フオルデさんが弓を撃たれる前に対処した。地上は任せて俺た

ちはエイリーグ王女の所に急がないと…！

「アストラ、そろそろ着くわよ！」

エイリーエ王女にヨシュア、ゼトさんが背中合わせになつて敵に立ち向かい、三人の内側からヒーニアス王子が一人ずつ狙撃、モルダさんともう一人の杖使いはエイリーエ王女達をギリギリの状況で回復している。

ジャハナ城は黒い煙を上げている、グラド軍に燃やされたのだろう、籠城には使えない。

「ターナ姫、敵の真上にお願いします！」

「分かつたわ……アストラ!？」

エイリーエ王女達を囲っている敵の真上でアキオスから飛び降りる。敵の身体を踏み台にして落下の衝撃を和らげると同時に殺す。そして周囲の敵が動搖してくるところに手斧を投げつつ剣を抜いて切り裂く。

「誰だ!?……アストラか、脅かすなよ。」

「それは悪かつたなヨシュア。でもこうすればほぼ確実に不意を突けるだろ?」

「確かにそうだけどな。というより、なんでお前がここにいるんだ。城でお姫様を守つてるんじやなかつたのか?」

「いろいろあつてな。エフラム王子達と一緒に行動してる。」「援軍か。ふつ・ツキが向いてきたな。」

「そういうことだ。」

「エイリーエ！助けに来たわ！」

「ヒーニアス様、ご無事ですか！」

「援護に来たぞ！」

ヴァアネットサ率いる天馬隊とターナ姫、クーガーが残つた敵を退ける。

「ターナ!?それにアストラも…あなた達が何故ここに?」

「事情は後で！北と北東から敵の増援が来ている、天馬騎士隊とクーガーで対処してくれ！」

エイリーエ王女からもヨシュアと同じ疑問をぶつけられるが、説明している余裕はない。今も敵軍はこちらに向かっている。

「ぜあああつ！」

しばらく戦い続け、とりあえずエイリーエ王女達に差し向けられた
いたグラド兵は全て撃退した。

「とりあえずはこんなものか…エイリーエ王女、ご無事ですか？」

「ええ、あなた達のおかげでなんとか無事で済みました。けれど、あなたとターナはフレリア城にいたはずでは…」

「それについてはですね…」

俺とターナ姫がエフラム王子達と同行するようになるまでの経緯を話す。

「…ターナらしいわ。気持ちも分かるけれど、せめてアストラにだけでも相談しておけばよかつたかも知れないのに。」

「ごめんなさい。でも大丈夫よ、あの時私がどれだけ考えていなかつたか十分に思い知つたもの。これからはエイリーエのことも守るから！」

「ターナ…」

砕けた口調で話すエイリーエ王女を初めて見たような気がする。エイリーエ王女にとつてターナ姫は数少ない、一切の気兼ねなく話せる人なんだろう。親友という言葉が当てはまる。

「ターナ、私からも言いたいことは山ほどある。」

「お兄様…」

「が、それはこの戦いが終わった後でもいいだろう。アストラ、お前は軍の指揮能力に関しては非常に優秀だと聞いている。私達の戦力を正確に把握しておけ。」

ヒーニアス王子に言われる通り、今ここにいる戦力を確認する。

ヒーニアス王子は兵種で言えばスナイパー、百発百中とも言われる弓の名手だ。ヴァルターが率いる竜騎士達を撃退するには必須の戦力だろう。

エイリーエ王女は海路でロストン聖教国に向かう予定だつたが例の幽霊船のせいで船が出せずにヒーニアス王子と合流、併まいからも以前とは比較にならないほど腕を上げたのが分かる。

一体このジヤハナに着くまでに一体どれだけの戦いがあつたのだろうか。レンバールですらある程度の余裕を持つているように感じ

たゼトさんがどことなく疲弊しているのが見て取れる。

ヨシュアはおそらく英雄の証でソードマスターへとクラスチエンジしている。…それとは別だろうが、以前とは纏っている雰囲気がまるで違う。例えるなら森を吹き抜ける涼しげな風…或いは透き通る氷だろうか。

モルダさんは導きの指輪で司祭へとクラスチエンジしたようだ。リライブ、レストの杖に加え、シャインの魔導書も持つている。

「あなたは？」

最後に、賢者と思しき男だ。持つている魔導書はエルフアイアードサンダー、そしてライトニング。リライブの杖も持つている。

：思い出した、確かに前の人を探していると言っていた人だ。場所は確かセレフィユの街だつたか？

「私はサレフ、ポカラの里の賢者だ。竜人様がエイリーケ殿の兄上と共に行動していると聞いて同行させてもらつていて。」

「竜人様？」

「ミルラのことです。サレフ殿は彼女と共にグラードの方角から感じた禍々しい気配の正体を探つていたそうです。」

それに加えてフレリア正規軍やロストン聖騎士団もいるが、ほぼ壊滅状態。ヒーニアス王子が雇つていた傭兵に至つてはヨシュアやこつちに送られてきたジスト、テティス以外は全滅、どうやらカルチノの裏切りによつて大半がやられてしまつたようだ。

そしてそこに俺とターナ姫が加わる。ヴァネッサ達やクーガーは敵ペガサスナイトを相手しているから今は数えられない。

「この戦力じゃあ何をするのも厳しい。まずは南西にいるエフラム王子達と合流する。」

「だがどうするんだ、砂漠を進めば竜騎士どもの格好の餌食だし、崖の上を進もうにもケセルダの野郎が待ち構えてやがる。」

「崖の上を進む。空から見た限りではケセルダの隊は人数がそこまで多くない。遠隔攻撃で牽制しつつ進めば損害は最小限に抑えられるだろう。もし近づかれたらヨシュアとエイリーケ王女、ゼトさんを先頭に弓兵を除いた正規軍と聖騎士団で対処してくれ。」

剣使いには現在遠隔攻撃をする手段がなく、ゼトさんが使っていた手槍は壊れて使い物にならない。だが、俺の手斧とターナ姫の手槍、ヒーニアス王子の銀の弓。そしてモルダさんとサレフの魔法。遠隔攻撃の手段は十分にある。

「おつと、ルネスの王子様と合流されると厄介だ。お前ら、あいつらを出来る限り足止めしな。しばらくすりやあグラドの各拠点から増援が来るはずだ。」

ケセルダの号令と共に奴の周りで迎撃体制で陣取っていた剣士や戦士が全員突撃してくる。最初は様子見にごく少ない人数を送つてくるものかと思っていたが…まあいい、やるべき事は変わらない。目標を牽制から撃破に変更するだけだ。

「ふつ！」

「貫け！」

「エルファイアー！」

手斧を剣士に向かつて投擲する。当然のこととく回避されたが、その後一瞬だけ止まつた隙をヒーニアス王子の放つ弓矢が貫く。更にサレフがエルファイアーを拡散して炎の壁を築き上げた。

「なるほど…そういうやり方もあるのか。いや、今は感心してる場合じゃない。」

壁に阻まれて攻めあぐねる敵兵に向かつてひたすらに手斧を投げつける。強引に突破してくる奴も多いが、エルファイアーによつて火傷を負うので帝国将直属の精銳と言えど十全の力は發揮出来ない。一対一であれば難なく勝てる。

「つたく、無理矢理抜けたところでやられるのは目に見えてるだろうが。理魔法だろ？シャーマン隊、やつちまえ！」

エルファイアーの壁がシャーマンの闇魔法によつて相殺され、更に闇魔法の雨が空から降り注ぐ。

「これは…！」

「ぐつ…なんという威力だ。それにこの量では避けることすら難しい。」

「…とにかく光魔法を！魔法を相殺しつつ中距離からシャーマンを狙い。」

う！ターナ姫も空中からの攻撃を！」

「ゆくぞサレフ殿！…シャイン！」

「ああ。ライトニング！」

手斧には投げつけて命中したとしても必ず帰つてくるような投げ方がある。しかしそれでは距離が足りない、当てることを優先して手斧を全力でぶん投げる。

「ぜああああっ!!」

物凄い速度で飛んでいった手斧はシャーマンの額に命中、周囲の複数人を纏めて吹き飛ばした。

「やああああっ！」

ターナ姫が敵軍の殆ど真上から流星のような勢いで急降下、着地の寸前で槍を振るい、その衝撃で敵を攪乱するや否やすぐに上空に撤退、その隙にヒーニアス王子が弓を連射してシャーマンの頭を確実に撃ち抜いた。

数を減らし、攪乱も効いて闇魔法の雨の勢いも少し弱まつたが不利が覆ることはない。

「傷薬がもう無い。限界が近いぞ！」

「…大丈夫、来た！」

「遅れてすまない、加勢する！」

ここでエフラン王子達が参戦、颯爽と敵陣の中へと切り込み、シャーマンだけを狙つて撃破していく。そしてラーチエル王女はエリーケ王女の傷を治療している。

「兄上！」

「エフラン王子に続くぞ！モルダさんとサレフは味方の回復を優先してくれ！」

「伝令！後発隊、到着致しました！南方にて敵増援との交戦を開始しています！」

よし、これでこつちの軍勢も揃つた。数だつて相手に負けてはいなはづだ。

「勝つぞ！」

ヨシュア、フランツと並んで剣を構えて戦士に攻撃を仕掛ける。迎

撃を盾で受け流しつつ剣を振り上げ、俺の背後からヨシュアが飛び出して敵の意識を向ける。そして横からフランツが敵の利き腕に剣を振り下ろして力を削ぎ、最後にヨシュアがとどめを刺す。

更にターナ姫、エイリーエ王女を交えて一人ずつ撃破、最奥に陣取る【虎目石】ケセルダの下まで辿り着く。

「…悪いな、まずは俺一人にやらせてくれ。」

「ヨシュア？」

「私からもお願ひします、アストラ。」

「エイリーエ王女まで…分かりました。やつてやれ、ヨシュア。だが、危なくなつたら加勢するからな。」

「…ありがとな。」

ヨシュアは氷のように透き通る青い剣を手に持つてケセルダに向かう。

「…ケセルダ。」

「あ？誰かと思えばヨシュアじゃねえか！久しぶりだな、元気してたかよ。」

「まあな、なんとか傭兵やつてるぜ。お前、いつの間に帝国将軍なんかになつたんだ？」

「昔から言つてただろ？俺はちつぽけな傭兵じや終わらねえつてよ。…そもそも、てめーの方こそなんだよ。てめーが実はジヤハナの王子様だつただあ？ふざけやがつて、その国一つ寄越せよ。」

「断る。国は物じやないんだ、簡単にやれるかよ。何より、俺は母上に誓つた。…この国を継ぐとな。一応確認しておくが…母上を殺したのはお前だな。ケセルダ。」

「ああ、そうだ。悪いな、こつちにも事情があるんだ。…ヨシュア、俺を恨むなよ？戦つてりやしそうがねえじやねえか。いちいち根に持つてたらこんな仕事できねえだろ？」

「ふつ、確かにお前の言う通りだ。ところでケセルダ、俺は今からお前を斬るんだが…俺を恨むなよ？」

「てめえ…相変わらずだな、何も変わっちゃいねえ！てめえとはいづれ決着をつけようと思つてたぜヨシュア！俺はある頃より強くなつ

た。：その澄ました面、死に顔に変えてやるぜ！」

まず先手を打つたのはケセルダ。トマホークをヨシュア目掛けて投げつける。ヨシュアは距離を詰めつつ、身体を捻ることでトマホークを回避。そのまま剣を振り下ろしたが盾で防御される。

「死ねっ！」

「はあっ！」

銀の斧によるケセルダの反撃とヨシュアの追撃がぶつかる。しかし競り合うことなくヨシュアの剣が押し切り、三度目の斬撃でケセルダの防具を切り裂く。

「ちつ…その剣、ただの剣じゃねえな。」

「ああ。【氷剣】アウドムラ、ジャハナの双聖器の片割れだ。だが、お前が押し負けたのをこの剣だけのせいにするなよ？ 強くなつたのはお前だけじやない。」

「へつ、そりやそうだ。二年も経つたんだ、少しさは強くなつてくれてねえとな！」

ケセルダは帰つてきたトマホークを間髪入れずにもう一度投擲、自らも銀の斧でヨシュアを狙う。

ヨシュアは身を低くしてトマホークを躱すが、ケセルダの動きが思つた以上に速かつたのか、銀の斧への反応が遅れる。

「ぐつ…」

なんとか身を捻つたが銀の斧はヨシュアの左腕に掠り、袖が赤く染まる。

追撃を避ける為にヨシュアはケセルダの背後に回つて構え直す。

「つたく、相変わらずの馬鹿力だな。」

トマホークを掴んですぐに投擲し、直後に銀の斧を構えて突進。手斧と鉄の斧であつても難しい動作をケセルダはいとも簡単にやつてしませた。流石に傭兵から帝国六将に抜擢されるだけはある。

ヨシュアは高速で方々に移動することで残像を生み出す。

「来やがつたな…」

ケセルダの死角である頭上は背後は警戒されていると踏んだのか、ヨシュアは残像で攪乱しつつケセルダの左斜め前方から接近。ケセ

ルダが持つ盾を遮蔽にして至近距離から飛び出して攻撃、必殺の一撃が決まる。

「おつと、そつちから来たか。こいつはしてやられたな。」

「…今のは決ましたと思つたんだがな。まあいい、このまま押し切る！」

そこからはヨシュアが攻勢に出る。頻繁に残像を出して攪乱、常にケセルダの意識の死角を突く。

元々剣は斧に有利。相手が余裕を崩した以上、ヨシュアが有利な武器を相手に遅れをとる理由もない。

「くそつ、動きが読めねえ！…仕方ねえ、奥の手だ！」

ケセルダはその場で大きく飛び上がる。そして着地の衝撃で砂漠に膝辺りまで沈み、沈んだ脚を振り上げて砂煙を起こした。

「ぐつ!? げほつ、げほつ。くそつ、しくじつた。」

「死ねつ！」

ヨシュアは砂煙を正面から浴びてしまい、吸い込んでしまった上に目にも入つてしまつたようで、隙だらけになつたところにケセルダの銀の斧が振り下ろされる。

「させない！」

ヨシュアを突き飛ばし、盾でなんとか銀の斧を受け止める。間一髪だつた、あと一瞬でも判断が遅れていればヨシュアは死んでいただろう。

「おいおい、今のを邪魔するのかよ。」

「ここは闘技場じやないんだ。仲間を見殺しにするわけないだろ。」

ケセルダは既にボロボロの身体だが、まだ終わりというわけにはいかない。相手は帝国六将、更なる奥の手があつてもおかしくない。

「闘技場じやない…か。へつ、面白え答えた。お前、名前はなんて言うんだ？」

「アストラ。フレリア王女の近衛だ。」

「なるほど、お前が噂のアストラか。…俺の部下にもお前のことと同じ鄉殺しだのなんだと乏しめる奴はいた。傭兵やつてた俺としては別に文句言われることでもねえと思うがな。同じ国の出身だからと

言つて全員が同じ考え方を持つてゐるわけないだろ。」

「…まったくその通りだな。」

ヨシュアが漸く起き上がる。どうやら砂に足を取られて時間がかかつていていたようだ。ヨシュアは服に付いた砂を払い落とし、アウドムラを構える。

「やつと起きたか、ヨシュア。」

「仕方ないだろ。さてと…恨むなよケセルダ。俺たちは負けるわけにはいかないんでね。」

「二対一だろが俺は勝つ。悪く思うなよ！」

俺とヨシュアは一斉に飛び出し、左右からそれぞれケセルダに攻撃する。当然俺よりもヨシュアの方が動きが素早いから攻撃のタイミングばずれるが、一瞬のずれであれば寧ろ同時攻撃よりも対応しづらいだろう。

「一気に決めるぞ！」

「ああ！」

ヨシュアは残像を生み出して姿を消し、俺は剣を空高く放り投げ鉄の斧に持ち替えて一撃を仕掛ける。

「でりゃあっ！」

俺の斧はケセルダの銀の斧と衝突することであまりにも呆気なく壊れる。元々グラド軍の戦士から奪つたものだ、既にかなり消耗していたのだろう。

しかしこれは飽くまでも牽制の一手。本命である剣を飛び上がつて掴み、落下する勢いも利用して振り下ろす。

「がああっ！ちつ、まだ…終わっちゃいねえ！」

ケセルダの左肩から縦一直線に深い傷が入るが、それでも奴は斧を振りかぶる。

しかし、ケセルダの動きはそこで止まつた。ヨシュアの斬撃はケセルダの胸を切り裂き、傷口から血が噴水のように溢れる。

「くそつ……もう少しで……玉座に…手が届くつてのに…おい…ヨシュア。」

「なんだ？」

「元相棒のよしみだ…………こいつを……くれてやる。」

死に体のケセルダが取り出したのは青い盾のような装飾品……いや、お守りのようなものだろうか。ヨシュアはそれを受け取り、身につける。

「そいつは……ホプロンの守護つてやつだ。……まあ、どんな代物かは自分で調べな…………いいか、俺に勝つたからには……絶対に生き残りやがれ。」

「……ああ、生きてやるよ。地面に這いつくばつてもな。じやあ……またな、ケセルダ。」

ヨシュアが別れを告げた直後にケセルダは事切れる。
「さて……と。ケセルダは片付いた。あとはヴァルターとか言う野郎だけだな。」

「ああ。ここでもう一人の将軍を討ち取ればこの戦争自体、大きく戦局が変わるだろうな。」

【虎目石】ケセルダは死んだ。この戦場にいるもう一人の帝国将軍、【月長石】ヴァルターを倒せば残る将軍は【血碧石】アーヴのみとなる。「まずは傷を治療しないとな。ケセルダが率いていた兵も粗方倒されたか撤退したようだし。」

回復に追われて忙しなく走り回るラーチエル王女の所に行こうと歩き始めるが、何かに足を引っ掛けた倒れ込んでしまう。

「おいおい、お前も相当疲れてるんじやないのか？」

「疲れてないと言えば嘘になるが、今のはそうじやない。これは……剣か？」

足に引っ掛けた何かを砂漠の中から掘り起こす。そこにあるものは装飾が施された汚れた剣だった。刃の大きさは俺の使う剣と同じくらい、重さは鉄の剣より重いが鋼の剣よりは軽い。

「飾り剣の類いか？いや、それにしちゃ刃が鋭いな。」

「もしかしたら貴重なものかも知れないし貰つておこう。」

もしかもこの剣が強力なものであれば戦力の強化に繋がるだろうし、そうでなくとも金銭的な価値があれば軍資金の足しになる。取つておいて損はないだろう。

17章後編 【月長石】

E n e m y , s S i d e

「ほう、ここまでやるとはな…？」

帝国将軍が一人、「月長石」のヴァルターは興味深い様子でフレリア軍に蹴散らされる自分の部下達を眺めていた。相手にも一騎当千と呼ぶに相応しい奴らがいるのは確かだが、それら以外の雑兵共も中々やるらしい。

「ふえふえふえ、苦戦しているようじゃなヴァルター。北のケセルダはやられたぞ、勝算はあるのかね？」

「黙つていろじじい。イクリップス隊、準備をしろ。狙いは誰でも構わん、敵に傷を負わせて戦況を搔き乱せ。」

転移魔法で隣に現れた【血碧石】のアーヴを無視してヴァルターは待機させていたシャーマン達に指示を出す。

「わしの駒を貸してやろうか? こちらとて、おぬしに死なれては少々困るのでな。」

「…貴様は化け物共を駒にしていたな。いいだろう、少しこちらに寄越せ。」

「ふえふえふえ、日差しが強い故にゾンビは動けぬが…代わりに上位の魔物も動かしてみるとしよう。」

アストラ S i d e

「流れはこっちに来ている、確実に勝ちを掴みに行くぞ!」

エイリーケ王女達は一度輸送隊で装備を整えてから、エフラム王子の号令の下フレリア軍は南東に構えるもう一人の帝国将軍、「月長石」のヴァルターの軍と激突する。俺は合流した傭兵隊を引き連れ、ターナ姫やその近くで戦うヴァネッサ率いる天馬騎士団に動きを合わせて、横槍を入れようとする敵兵を徹底して叩く。

「…これは、闇魔法の気配ですね。皆さん、警戒を。」

「ですが、一般の魔法が届く距離に相手のシャーマンは見えません。おそらくイクリップスの魔法でしょう。『闇魔道の基礎 下巻』26頁から35頁に渡つて記述があります。油断さえしなければ、回避は容易です。」

グラード城の牢に捕らえられていたというシャーマン、ノールの警告が軍内に渡ると、ルーテが戦況から飛んでくる魔法の種類を予測する。イクリップス：理魔法のサンダーストームと同じく、遠距離から敵を狙うことができる闇魔法か。

「そんなこと言われたつて…のわあつ!?

「ロス！お前達、援護に行くぞ！」

傭兵達を連れて、イクリップスの魔法を食らったロスを討とうとする敵のフォレストナイトやドラゴンナイトを迎撃つ。

「わしの息子に手を出すな！」

更に、全速力で加勢に来たガルシアさんがフォレストナイトが乗つていた馬を踏み台にして飛び上がり、鋼の斧でドラゴンナイトを飛竜ごと叩き落とした。

「ガハハ！わしも続くとしようかの！」

ドズラは両手で構えたバトルアクスをぶん回して、攻撃の為に接近していたドラゴンナイトを返り討ちにする。敵将を守る兵はいなくなつた。畳み掛けるなら今だ。

「…待つてください、何か来ます！」

「あれは…魔物よ！沢山の魔物がこっちに向かつてるわ！」

ターナ姫の目線の先を見ると、確かに北東の方角から魔物の軍勢が押し寄せてきていた。ガーゴイルやその上位種のデスガーゴイル、ビグルの中にも上位種らしき姿が混じつていて、モーサドウーブの群れの中にも頭が三つあるものが見える。

「ふん、ようやく来たか。私を倒したくば、先にこの化け物共を片付けることだな。」

「…やはり、グラードは魔物と手を組んでいたのか！」

ヴァルターと残つたドラゴンナイトが魔物達の頭上を通過して、港で抱いた疑念がここで確信に変わる。北上したヴァルターはジャハ

ナ城の門に構えている。

「あ、あれ…」

「ネイミー、どうし…おい、まずいぞ。南西の方からも魔物の群れが来てる！」

グラード城の方角からも、サイクロプスやヘルボーン、上半身が人で下半身が馬の魔物が群れをなしてやつて来ている。ルーテによると、あれはタルヴオスという魔物で、中にはマグダイルと呼ばれる上位種もいるようだ。

…魔物と遭遇する度に手強い相手が増えしていくな。ただの偶然か、聖石が破壊されてから月日が経つて強い魔物が出現するようになつているのか。どちらにせよ、戦う力のない民間人が心配だ。

「砂漠が苦手な騎兵、重装兵を中心に南西の魔物を迎え撃て！ゼト、デュッセル、そつちの指揮は任せたぞ！」

「承知いたしました、お任せを。」

「任せよ。噂に聞く【真銀の騎士】の実力、見せてもらうとしよう。」サイクロプスの斧を受け止めるギリアムさんを見届けてから、エフラム王子と共に北上する。

当然アメリカも南西側だ。ユアンとペアを組んでスケルトンやヘルボーンを一体ずつ確実に倒している。…頼んだぞ、ユアン。

「所詮は獣か、隙だらけだ。」

ヒーニアス王子が銀の弓で空を飛ぶガーゴイル達を一撃で仕留めていく。しかし、数匹混じっているデスガーゴイルは弓矢を槍で防いでヒーニアス王子に接近する。

「通しませんっ！」

ランスバスターを構えたエイリーエ王女がヒーニアス王子を狙うデスガーゴイルの一匹の前に現れて迎撃するが、寸でのところで回避される。

「もうつた！」

『おおおおおっ！』

デスガーゴイルが回避したところを、俺が鉄の斧で追撃。地面まで叩き落として、傭兵隊が袋叩きにする。2人が両翼を切り裂き、4人

が四肢を切り落とし、1人が頭に剣を突き立てる。

「距離を詰めた程度で私を倒せるとと思うな！」

「ヒーニアス王子、無理は禁物です！」

しまつた、他のデスガーゴイルに加えてモーサドウーグがヒーニアス王子とエイリーエ王女を包囲している。即座に援護に向かおうとするが、ビグルの放つ闇魔法に行く手を阻まれる。

「クーガー、合わせて！ やああああっ！」

「ゲネルーガ！ はあっ！」

「ゆくぞ、シャイン！」

ターナ姫とクーガーの連携でデスガーゴイルが少し後退、その隙をヒーニアス王子が射抜き、モルダさんのシャインによつてビグルが内側から破裂した。

「ここは私達だけで十分よ！ アストラ達はエフランの所に！」

「了解です！」

見れば、エフラン王子は二匹の三頭犬の相手を一人でしている。三頭犬はジストとマリカの二人がかりでようやく互角に戦えている程の強敵だ。周囲にいる中で援護に向かえるのは俺達だけ、急がないと。

「エフラン王子！」

「すまない、手を貸してくれ！」

傭兵隊を二組に分けて片方をエフラン王子の援護に向かわせ、残つた傭兵と俺で二匹の三頭犬の片方を引き受ける。

「グルル…ガアッ！」

三頭犬は唸り声をあげて飛びかかる。下手な剣よりも鋭い爪を盾で防いだが、それを踏み台に背後に回り込まれ、後ろにいる傭兵達に牙が突き立てられる。

「大丈夫か！」

「どうつ…このくらいなんでもねえ！」

すぐに振り返つて、傭兵達と同時に攻撃を仕掛ける。とはいえ、やはり砂漠の上では動きづらく、俺の攻撃は一切当たらず、数発掠つた傭兵の剣も大したダメージにはなつていな。

「仕方ない、使うか。」

三頭犬が迎撃の為に開いた口の中に毒ナイフを放り込んで、一旦距離をとる。

猛毒によつて三頭犬の動きは目に見えて遅くなつたものの、倒れる気配は見えない。更に毒ナイフを飲み込んでいないふたつの頭は平氣な様子で、判断力の低下も期待できない。

「俺があいつの氣を引くから、お前達は毒で悶えている頭の方から回り込んで渾身の一発をぶちかましてくれ。」

「了解です。」

「頼んだぞ。…こつちだ、化け物め！」

攻撃は傭兵達に任せて、俺は三頭犬の意識を俺に向けさせることだけを考える。剣で盾を叩いて大きな音を出し、わざと大振りで鈍重な攻撃を繰り出す。

「ガウッ！」

中央の頭からの攻撃を盾で防ぎ、次いで振り下ろされた脚を剣で受け止める。しかし、その銳利な爪は見た目以上の威力を持つていたようで鋼の剣の刃が粉々に砕けてしまい、鎧にも大きな傷が入った。

「ふんっ！」

壊れた鋼の剣を捨て、盾も一度放り投げる。そして毒ナイフを飲み込んだ箇所以外の頭を掴み、力尽くで押さえつける。

「今だ、やれ！」

三頭犬を包囲した傭兵達が一斉に手に持つていた剣を三頭犬に突き刺す。中にはそのまま剣を回転させて三頭犬の肉体を抉つている奴もある。

「ガアアアアアッ！」

流石の三頭犬と言えども一瞬のうちに受けた致命傷には叫ぶことしかできず、そのまますぐに力尽きた。剣が抜かれた穴からは赤黒い血が流れている。

「これでどうだ！」

隣を見ると、エフラム王子が鋼の槍で三頭犬の中央の頭を深く貫いたところだった。

エフラム王子は傭兵達に三頭犬を包囲させて逃げ場をなくし、飽くまでも自分の力で三頭犬を倒したようだ。エフラム王子の高い実力があつてこそその戦い方だ。俺だと勇者にクラスチエンジした今でも難しいだろう。

「助かった、アストラ。あのまま一匹を同時に相手していたら俺は死んでいただろう。」

「当然のことです。」

三頭犬の攻撃を受けた傭兵に傷薬を使う。一回分で完治とまではいかないが、そこまで深い傷でもないから十分に戦えるだろう。

「ふん、置いていくぞエフラム。」

「えっと…兄上、お先に失礼します。」「エフラム王子、先に行つてください。俺は体勢を立て直してから追いかけます。」

ヒーニアス王子達に追い抜かれて微妙な顔になつていたエフラム王子は俺の言葉に頷いてから再び北上する。

俺自身も鋼の剣を碎かれた時の攻撃でそれなりの傷を負つていたので、自分にも傷薬を使用する。剣が壊れてしまつたのは痛手だが、輸送隊に戻る時間はない。ケセルダを倒した時に拾つた汚れた剣も、呪われた剣である危険性がある以上は使えない。暫くは鉄の斧だけが頼りだ。

傭兵隊を纏めてから北に向かう。同じく三頭犬を相手していたジスト、マリカ、サレフ、テティスの4人とも合流し、行く手を阻むモーサドウーグやビグルを蹴散らしていく。

「しかしこいつら、いくら倒しても湧いて出てきやがるな。」

「邪魔をするなら斬るだけ。：でも、武器の消耗は心配。」

「帝国が魔物を従えているのは明白だ。であれば、私達のするべきことも変わらないだろう。」

突進してくるモーサドウーグを鉄の斧で叩き斬る。これで何匹目だろうか。この鉄の斧も、そろそろ壊れてしまいそうだ。

「南に残つたユアンが心配だわ。アメリカちゃんと組んでたみたいだけど…ごめんなさい、わざわざ口にするべきじやなかつたわね。」

「俺もアメリカのことは心配だけど、別に一人で魔物を相手してゐるわけじゃない。アメリカは一人前と言つてもいい頃ですし、ユアンもそこの実力を身に付けてます。大丈夫ですよ。」

それに、二人の近くではラーチエル王女とドズラも戦つている。二人が傷を負えばラーチエル王女がすぐに対処できるだろうし、なんだかんだ周囲をよく見て戦つているドズラなら一人が追い詰められたら援護してくれるはずだ。

「そうね…ユアンも頑張つてるし、少しば信じてあげないといけないわね。」

テテイスの踊りに元気を貰つて、ビグルの上位種に接近する。ビグルの上位種が使う闇魔法の威力は相当なものだが、やはり接近されてしまえば脆い。一撃ないし二撃で簡単に倒れていく。

動きににくい砂漠地帯は突破し、帝国将【月長石】ヴァルターが構えるジヤハナ城門の目の前まで辿り着く。既にエフラン王子達が連携して戦つているようだが、ヒーニアス王子の弓があるにも関わらず苦戦しているようだ。

「加勢します！」

エフラン王子達の連携の隙間を埋めるようにしてヴァルターに攻撃を仕掛けるが、銀の槍の一振りによつて斧が弾かれた。：ただ弾かれただけだと、腕が少し痺れている。どんな威圧力だ。『貫通』攻撃をまともに受けたら一撃で死に至る危険すらある。

「ククッ…【紅蓮の傭兵】どのお出ましか。【真銀の騎士】と【黒曜石】がいなのは惜しいが…中々上質な獲物が揃つたようだな？」
【紅蓮の傭兵】：まさか、俺のことか？

返り血が目立たないように赤い防具を好んで使つてゐるが、そこから取られたのだろうか。確かにフレリア軍の中では赤い鎧は目立つが…まあいい、今は目の前の戦いに集中だ。

「さあ、喰わせろ…！」

ヴァルターは蛇竜に跨つて空中を縦横無尽に飛び回り、急降下しながら地上にいる俺達に向かつて必殺の一撃を狙つてくる。俺はその攻撃を防御するのに精一杯で、反撃を試みた頃にヴァルターは既に空

中に退避している。

「ヴァルター、貴様の勝手にはさせんぞ！」

「私達を甘く見ないで！」

「フレリア天馬騎士団の力、見せてあげましよう！」

上空ではクーガーにターナ姫、そしてヴァネットサ率いる天馬騎士団が空中戦を仕掛ける。まずは天馬騎士団が陣形を組み、ヴァルターの行動範囲を制限する。そして、ターナ姫とヴァネットサが不完全ながらもトライアングルアタックの補助役の要領で妨害し、クーガーがその整えられた状況でヴァルターと相対する。

「クーガー、貴様までがグラド帝国を裏切ったとはな。」

「……」

「お前の力では私には勝てぬ。：：貴様とて死にたくはなかろう。今からでも私に縋りついてお願ひしてみろ、命だけは救つてやらんでもないぞ？」

「ああ、俺は裏切り者だ。今の俺の実力が貴様に劣っていることも承知している。だが、貴様のような下衆に願うことなど何もない。」

「ほう、面白い。では精々楽しませてみろ！」

クーガーはキラーランスを構え、雨の如く激しい連続突きを繰り出す。ヴァルターは防御はするものの回避しようとはせず、瞬く間にヴァルターの全身が傷で塗れる。

狂ったような笑みを浮かべたヴァルターは攻撃を受けながらも魔力を宿した銀の槍をクーガーに突き刺す。咄嗟に回避して急所は外したものの、クーガーの左の腕に大きな傷が入った。

「つ……これが、『貫通』の一撃か……」

「面白い、貴様も中々上質な獲物に仕上がったようだな。少なくとも、お前の兄よりはましな獲物であることは違ひあるまい。」

「……兄貴が消息不明と聞いてからまさかとは思っていたが、やはり貴様の仕業かヴァルター。」

「ああ、そうだと。弱すぎて、あまり楽しめはしなかつたがな。喜べクーガー、貴様は兄を超えたぞ。私が保証してやろう。」

「……いくぞ。」

クーガーはヴァルターの真下から回り込んで後ろから急襲を仕掛けるが、ヴァルターは蛇竜を宙返りさせることで回避、武器をスレンドスピアに持ち替えて投擲する。クーガーはそれを箒手で防ぎ、ほぼ同時に来たヴァルターの追撃をすんでのところで回避、反撃を試みるが蛇竜の牙にキラーランスが噛み碎かれる。

「…小蠅どもが厄介だな。やれ、化け物共。」

ヴァルターが腕を挙げると、僅かに残っていたビグルとガーゴイルがヴァルターの動きを制限していた天馬騎士団やターナ姫、ヴァネッサに向かつて襲いかかってくる。

「つ！一度包囲を解除、魔物を近づけさせないで！」

ターナ姫とヴァネッサ達が魔物の対処に向かうと、均衡していた戦況が一気に傾く。ヴァルターは最初と同じく空を縦横無尽に飛び回り、クーガーをスピードによつて圧倒している。

「ぐうっ！」

「どうした、その程度かクーガー。もつと私を楽しませろ！」

「言つただろう、今の俺が貴様に劣つていることなど承知していると！」

そう言い放つクーガーが掲げるのは…天空のムチか。クーガーが天空のムチで自分の飛竜を叩くと、飛竜が雄叫びを上げて天から降り注ぐ稻妻に包まれる。

「行くぞ、ゲネルーガ！」

稻妻の中からドラゴンマスターとなつたクーガーが飛び上がり、遙か上空からヴァルターに向かつて急降下する。

「くたばれ！」

「ぐ…がああつ…」

急降下の勢いが乗つた鋼の槍はヴァルターの身体を容易く貫き、クーガーはそのまま陸にヴァルターを叩きつけた。

「ぐつ、わた…し…は、まだ…くくつ、ふはは…」

胸に槍が突き刺さり、貫通しているのにも関わらずヴァルターは血反吐を吐きながら立ち上がり、近くにいたエイリーエ王女に襲いかかる。

「なつ…！」

「わた、し…に…喰われろ！」

エイリーエ王女もレイピアを構えて応戦したが、激しい攻撃に耐えきれず手元から弾かれる。

「させるかっ！」

無防備になつたエイリーエ王女にヴァルターの槍が振り下ろされようとしていたが、エフラム王子がギリギリで割り込み、ヴァルターの左胸にレギンレイヴを突き刺した。

「ぐ…がっ…」

エフラム王子の一撃でようやくヴァルターの眼から生気が失せ、その場に仰向けになつて倒れた。なんという執念と生命力だ。気圧されてしまつて、攻撃が届く位置に立つていたにも関わらず動くことができなかつた。

襲いかかってきた魔物達も天馬騎士達によつて掃討され、南西に残つた面子も俺達と合流する為に北上している。何とか勝利できたようだ。

「…俺達の勝ちだな。エイリーエ、俺達が来るまでよく耐えたな。」

「兄上…はい。ゼトやヒーニアス王子、皆のおかげです。あ、そうでした。兄上にお渡しするものがあるんです。」

エイリーエ王女はそう言つてエフラム王子に一冊の魔道書を渡す。緑色の装丁が施された、見覚えのないものだ。

「これは…双聖器か？」

「はい。ジャハナの双聖器の片割れ【風刃】エクスカリバーです。もう片方の【氷剣】アウドムラはヨシュアが使つています。…彼は、女王イシユメア様のご子息だったようです。」

エフラム王子がエクスカリバーの魔道書を受け取ると、南からやってきたラーチエルが会話に入つてくる。どうやらドズラを連れているだけのようだが。

「他の皆様は近くの砦で休ませていますわ。話をするのであれば、そちらに移動してからでも遅くないのでありませんか？」

「そうだな。ヴァネッサ、ターナ、もし砂漠ではぐれている仲間がいた

ら回収してくれ。」

「了解です。」

「分かったわ。アストラ、行きましょう。」

砂漠に残っていたレナックとコーマと合流する。どうやら砂漠に眠っていると言われる財宝を探していたようで、実際いくつかの掘り出し物を見つけたらしい。

「特に凄いのはこれだな。古の大賢者が遺したと言われる【メティスの書】。これを手に取つて祈れば女神の祝福が得られるという話らしいが。」

レナックが妙に綺麗な状態の紙を見せびらかしてくる。女神の祝福か、クラスチエンジアイテムとはまた違うみたいだけど。「レナックはいいのか？女神の祝福とやらを得なくとも。」

「まあ、興味ないね。祝福だとかそういうのは、ラーチエル様の無駄に仰々しい説教だけで十分だ。なんなら天馬騎士のお姫様が使つてみるかい？」

「え、いいの？それならご好意に甘えてみようかしら。」

ターナ姫はレナックからメティスの書を受け取り、胸に抱いて神への祈りを捧げる。すると、メティスの書は白い光となつてターナ姫の身体の中に入つていった。

「…何が起つたんだ？」

「ターナ姫、何か変わった様子は？」

「いえ、特別に何かが変わったような感じはしないわ。…でも、少し調子がいい気がする。」

「まあ、所詮は眉唾ものだろ。あんまり期待するものでもないと思うね。」

レナックはあつけらかんとした様子だ。まあ、女神の祝福と言うからには悪いことにはならないだろう。メティスというのも、神話に出てくる女神の名前だつたはずだ。

「コーマは何か収穫あつたか？」

「おっさんと比べたらお宝つて言えるのは少ないけど、実用性のある物なら結構取れたな。よく分からぬ杖が2本とキラーボウ、それに

珍しそうな剣が一本。」

コーマが持っているのは先端の玉が赤色で、それぞれ形状が違う杖と、キルソードやキラーランスと同じく急所を狙いやすい弓のキラー ボウ、そして青緑色の金属が使われた大振りの剣だ。杖は知らないが、剣については俺も知っている。

「それはドラゴンキラーだ。ドラゴンナイトやドラゴンマスターが乗つていて飛竜を倒すために作られた剣だ。まあ、一応剣だからドラゴンナイトが使う槍には不利なんだけどな。：：そうだレナック、この剣に関して何か知らないか？」

俺が砂漠で拾った剣をレナックに見せる。改めて見てみると柄や鍔の部分は随分と古びていて、刃の部分は未使用の銀の剣と並ぶほどの光沢を保っている。刃に使われている金属が黒いのも合わさって、なんだか不気味だ。

「知らないが、宝剣の類じゃないのは確かだな。業物だつてのは見れば分かるが：：デュッセル将軍に聞いてみたらどうだ？　あの人、武具への造詣がかなり深いからな。」

「デュッセル将軍か、状況が落ち着いたら聞いてみることにしよう。
：：妙に手に馴染むな。」

なんとなく柄を握つてみると、まるでずっと使い続けてきた剣であるかのように手に馴染む。デュッセル将軍に聞いて危険なものでないことが分かれば、このまま使っていくのもいいかもしない。

18章 奪還の戦い

「ふむ、この剣か…素晴らしい業物だな、ガヴレウスの…いや、彼の槍にすら勝るとも劣らぬ。しかし、この金属は…？」

野営地で開いた天幕の中で、デュッセル将軍に例の剣を見せる。

「ジヤハナの砦でエフラム王子達とエイリーエ王女達の情報を共有していた際、エフラム王子が驚きの事実を語った。

今回の戦争の発端はリオン皇子にあるという。皇子は【魔石】なる聖石以上の力を持つ宝具を生み出し、全ての聖石を破壊すべく、魔石の力で父ヴィガルドの亡骸を操つて戦争を引き起こしたという。

兎にも角にも、俺達次の標的はルネス城である。ロストンへ向かうグラード軍の残党を追うフレリア軍の大隊が撃撃されるのを防ぐ目的だ。もちろん、エイリーエ王女やエフラム王子達の故郷を取り戻す戦いもある。

「どうでしようか？」

「…うむ。素晴らしい業物だ、わしが今まで見てきたものの中でも片手の指に入るほどにな。しかし、刀身に使われている金属はわしにも分からぬ。鉄や鋼、銀ではなく、当然青銅や金でもない。わしが知るどの金属よりも硬く、もしかすると金剛石よりも頑丈かもしだぬ。」「…俺はこの剣を使つても大丈夫なのでしょうか。」

「問題あるまい。わしは禍々しい力を持つ魔性の槍を知つておる。だが、この剣にそれと同じような手に持つだけで身体が疼くような感覚はない。」

「それを聞いて安心しました。ありがとうございます、デュッセル将軍。」

剣を返してもらつてから天幕を出て、刀身の素材を知つていそうな人物を探す。とはいって、デュッセル将軍が知らない金属を知つていそうな人なんて一人しか思い当たらないが。

「…いた。少しいいか、ルーテ。」

「…おや、アストラですか。私への要望は7種25項目に分類されますが、どのような要件でしようか。」

「7種25項目…う…どれに該当するかは分からんが、この剣を見て欲しいんだ。刀身に使われている素材が何か分かるか？」

遠くにいるアスレイを観察していたと思われるルーテに声をかけ、刀身の素材についてデュッセル将軍が言つていたことをそのまま伝える。

ルーテは様々な本で得た情報を記載箇所まで併せて記憶している。おそらく、知識量において彼女に勝る人は大陸中探してもそう見つからないだろう。

「…なるほど。色は明るめの黒、硬度は金剛石…ダイヤモンドと同等以上ですか。マギ・ヴァル大陸では産出されませんが、世界に一種類だけその条件を満たす物質が存在します。」

「二種類だけ…」

「その金属の名称は『アダマンタイト』。『究極の金属』の5項から21項に渡つて記載があります。『壊れない』という意味の単語が語源で、産出されるのはマギ・ヴァル大陸から遙か北西の大陸にある小国の渓谷のみ。一切の魔力を持たず、同じく最高級の金属であるオリハルコン等と比べるとその価値は低いとされています。しかし、アダマンタイト最大の特徴は世界最硬とも呼ばれるその頑丈さ。塔の天辺から大岩を落としても傷ひとつ付かないと言われ、更に溶岩に浸けたとしても融解することはありません。」

どうやら、究極と呼ばれるほどの珍しい金属で出来た剣のようだ。
：アダマンタイトにオリハルコン。ルーテの口から出た2つの金属の名前は耳にしたことがあるが、まさか実在していたとは。

「ありがとう、ルーテ。助かった。」

「礼には及びません。アダマンタイトを直接目にしたのは初めてのことなので、私にとつても非常に価値のある要件でした。」

ルーテにとつても非常に価値のある要件。それも7種25項目の中のひとつなのだろう。

デュッセル将軍とルーテのお陰で、この黒い剣が非常に強力で有用な剣だと分かつた。この剣があれば、より安全にターナ姫を守るという使命を果たすことが出来るだろう。

「行くぞ、俺達の故郷を取り戻す！」

夜が明け、フレリア軍は速やかに部隊を編成してルネス城に攻め入る。：酷い有様だった。ルネス各地で山賊や魔物が横行し、戦う力のない民はそれらに怯えながら隠れるようになっていた。

今のルネス城を守るのは裏切り者のオルソン、レンバールでエイリーグ王女を陥れようとした男だ。奴はろくな統治もせずにずっと部屋に籠っているらしい。既に各地で反乱の兆しは見えているが、それまで力なき民を放つておくわけにはいかない。

今回の攻城戦では、俺もといターナ姫は本隊の遊撃手として正門から攻め入ることになつていて。別働隊としてジスト傭兵团全員とヨシュア、レナツク、モルダさんが裏口に回っている。ルネス将軍のゼトさんが城の構造を隅々まで理解しているため、作戦を立てるのは容易だつたようだ。

「アストラ、援護をお願い！」

ターナ姫の攻撃に合わせて俺もアダマンタイトの剣で攻撃、反撃する隙を与えずにどどめを刺す。剣士、戦士と立て続けに突破し、パラディンとなつたフォルデさん、グレートナイトのカイルさんと並んで城に突入する。

「絶好調だな、アストラ！」

「油断するなフォルデ！」

待ち構えていた傭兵の鋼の剣にアダマンタイトの剣を振るうと、剣同士がぶつかつた拍子に傭兵の剣が真っ二つに折れてしまつた。世界最硬の謂われは伊達ではないということだろう。

「有り得ねえ、新品の鋼の剣が。：後ろに警告しねえとな。」

剣を折られた傭兵は俺の追撃を回避して即座に撤退を始める。しかし、それを追う余裕はないので傭兵を援護していた魔道士に接近する。

「はあつ！…ターナ姫！」

「任せて！…りやあつ！」

魔道士が俺の攻撃を回避したところに合わせてターナ姫が追撃を仕掛ける。しかし、ターナ姫が攻撃を終えた隙に別の魔道士がサンダーの魔法を放つた。

「つ、この程度！」

白く光る電撃はアキオスの胴体に命中したが、そもそもペガサスというものは魔法に強い動物だ。かすり傷すら付いていない。追い付いてきた後続隊のノールが魔道士に反撃する。

「ミイル、ふつ！…終わりですね。大丈夫ですか、ターナ王女。」

「ええ、ありがとうございます。…辛いの？」

「…いえ、私のことは心配なさらず。」

追撃も決めて魔道士を仕留めたノールだが、その顔はどこか優れない。この軍の中には戦闘に向かない性格の人が多くいる。エイリー・ク王女にターナ姫、アメリカ、ネイミー、それにアスレイなど挙げればキリが無いが、ノールもその中の一人のようだ。

「無茶はするなよ。」

「ええ、貴方も。」

その先に待ち構えていた戦士を軽く片付け、修道士はフォルデさんとカイルさんが囮になつている間に死角からターナ姫が仕留める。

「…アストラ、避けて！」

「つ！」

ターナ姫の声に反応して咄嗟に後ろに跳ぶ。それとほぼ同時に俺が立っていた場所で光魔法が炸裂した。間一髪だ、ターナ姫の警告がなければ危なかつた。

「…さつき倒した修道士のものか？」

「いいや、今のは『ページ』だ。遠距離を狙える光魔法だな。この城に魔道書が幾つか置いてあつたからな…しつかりと使われてるわけだ。」

「しかし、後続隊が遅いな。我々5人だけが随分と先行してしまつている。フォルデ、様子を見てきてくれ。」

「へいへいと。じゃあ少し戻る…必要もなさそうだな。」

フォルデさんが様子を見に行こうと馬を方向転換させたのとほぼ

同時に、曲がり角の奥からフランツが現れ、エイリーエ王女、エフラム王子、ゼトさんと続く。

「すみません、後方からグラードの増援がやつて来て突破に時間が掛かりました。」

「他の全員で増援がなだれ込むのをなんとか食い止めている。この人数では不安だが……先に進むぞ。」

「了解です。相手にページを使う光魔法使いがいるので注意してください。」

エフラム王子の決定で俺達9人で先へ。道を塞ぐアーマーナイトの後ろから魔道士が炎を放つてくる。エフラム王子が真っ先にレギンレイヴで道をこじ開け、ゼトさんとフランツがそこを抜け出して魔道士達を仕留める。

廊下の突き当たりで左右に道が分かれている。玉座の間は右側に出てすぐのようだが、左側からはウォーリアや傭兵、ドルイドにシャーマンが接近している。奴らを倒すのが先だろう。フランツとエイリーエ王女、ノールの3人に右側の警戒を任せ、ウォーリアとの間合いを詰める。

「アストラ！」

ゼトさんの掛け声に合わせて屈むと、ゼトさんの馬が頭上を飛び越えて死角からウォーリアに必殺の一撃を入れる。瀕死となつたウォーリアはゼトさんに反撃しようと斧を振り下ろしたが、それが届く前にアダマンタイトの剣でとどめを刺す。

「すまない、助かつた。……それが例の剣か？」

「ええ。アダマンタイトという非常に硬い金属で出来た剣らしいです。」

まだ敵に向かつて振るつた回数は2桁に満たないが、たつたそれだけでも非常に協力な剣であることが十二分に理解出来る。だからこそ扱いには一層気を遣わなければ。

取り巻きの傭兵達をカイルさんと連携して制圧し、降伏したところを拘束する。

「邪魔だ！」

エフラム王子は槍でドルイドの側頭部を殴打して昏倒させ、更に追撃して心臓を貫く。そして、フォルデさんとターナ姫がシャーマン達の魔道書を切り裂いた。

「…士気が低いな。」

向こう10人に対してこつちが6人。更に相手には上級職もいたというのに、あまりにも決着が早すぎる。ウォーリアや傭兵達の構えや体捌きも問題なく、相手の実力が不足しているわけでもない。「残党達もオルソンに対する不満が大きいということだろう。…この先には何も無いはずだ。」

「分かりました。エイリーエ王女達の所へ戻りましょう。」

そんな奴にこの城やこの国を任せるわけにはいかない。一刻も早く取り返さなければ。

「はつ、はつ…ふう。やつと追い付いたよ。」

エイリーエ王女達と合流してすぐに遅れていた本隊が追い付いた。増援は一人残らず撃退したようだ。何故か機動力の低いアーマーナイトであるアメリカアが先頭を走っている。

「なんでアメリカアが先頭なんだ？」

「えつとね…これだよ。レナックさんがくれたんだ。」

アメリカアは前に出した右脚を示して：「ブーツ？ アメリカは何故か古ぼけたブーツを履いている。」

「砂漠で掘り当てたお宝だつてさ。上から防具も被せられるし、すつゞく動きやすいんだ。」

「…まあ、動きやすいならそれに越したことはないか。」

別働隊のジスト達とも合流し、増援への対処を任せて俺達は玉座の間へと突入する。

玉座にはオルソンが座り、その傍らには側近らしきジエネラルが立つ。そして、オルソンの前方で勇者や賢者、ドルイドが守りを固めている。

「邪魔だ！」

「どいてください！」

エフラム王子とエイリーエ王女が同時に飛び出し、グラド残党の勇

者達へと突撃する。しかし、勇者は盾でエイリーエ王女の攻撃を弾き、その隙を突いて袋叩きにしようとする。エフラム王子も一瞬で多数の勇者達に囲まれて身動きが取れない。

「エイリーエ様！」

「危ない！」

ゼトさんとフランツがエイリーエ王女の前に割つて入つて銀の槍とキラーランスで勇者達を牽制し、ターナ姫と俺も加勢する。

「合わせろよ、フォルデ！」

「分かってる！」

カイルさん、フォルデさんに加えてデュッセル将軍がエフラム王子の包囲を破り、混戦状態となる。

俺はターナ姫と組んで同じく2人の勇者を取り、アダマンタイトの剣で敵の得物を叩き落とす。ターナ姫には引き続き攪乱を任せ、隙が多くなってきたところでどどめを刺した。

「…あとはあのジエネラルとオルソンだけか。」

賢者は理魔法に有利なノールと、それに張り合うようにエルファイアーを放ち続けるルーテが撃破し、ドルイドはドズラやガルシアさん、ロスが魔法を回避しつつ一刀両断した。

しかし、オルソンの傍らに立つジエネラルからは別格の雰囲気が漂っている。その威圧感はグラド皇帝ヴィガルドにも劣らない。

「…っ！兄上、あの鎧は！」

「ああ、間違いない。あの鎧は父上のものだ。」

ルネス王ファード…おそらくリオン皇子の手により、ヴィガルドと同じ死体操る術をかけられているのだろう。【魔王】と呼ばれる程に勇敢で情に厚く、エフラム王子と同じように戦士としても高い実力を持つている人物だと聞いた。

「エフラム様…」

「ゼト、オルソンの方は任せた。：エイリーエ、やるぞ。」

「はい。父上への冒涜…許すわけにはいきません。」

エフラム王子はレギンレイヴを、エイリーエ王女はレイピアを構えて傀儡となつたファードへと向かっていく。あちらは2人に任せる

べきだろう。俺達が戦うべきは…

「来たか、ゼト。」

「…オルソン殿。」

「お前は大した騎士だ。主君のために、国のためにその身を捧げ…片時も気の休まる時はない。哀れで報われぬ生き方よ、どこまでもな。」

「それが我が使命、我が望みだ。オルソン殿…覚悟を。」

ゼトさんは銀の槍を構え、玉座から身を起こしたオルソンへとその刃を振り下ろす。オルソンは一步も動くことなく左の籠手でその槍を弾き、手に持った剣を天に掲げた。

「…つ！」

オルソンの剣から闇魔法の紋章が浮かび上がり、そこから溢れた闇の力がゼトさんを包み込む。そうしてゼトさんにダメージを与えた闇の魔法力は剣を伝つてオルソンの体内に取り込まれる。闇魔法のリザイアと同じ作用だ。

「行くぜ、フランツ、カイル！」

「はい、兄さん！」

「ああ！」

カイルさんが正面から鋼の槍を突き出し、同時にフォルデさんとフランツが左右から鋼の剣とキラーランスで回避させないように挟み込むが、目にも止まらぬ剣捌きで3人の攻撃は弾かれた。その速さはマリカのそれに匹敵するだろう。

「オルソン殿、なんで裏切りなんて真似したんですか？亡くなられた奥さんが泣いてますよ。」

「…そんなことはない。妻は今、幸せだ。」

フォルデさんの追撃をオルソンは上体を傾けるだけで回避し、即座に反撃してフォルデさんの腕から血が滴る。

「何故そういう言ひれる！あなたは奥方の故郷でもあるルネスを売つたというのに！」

「妻は…とても喜んでくれている。」

オルソンはカイルさんの槍を切り上げることで弾き、その衝撃で槍の先が折れて使い物にならなくなる。

「…もしかして、その奥さんもヴィガルド皇帝やファード様と同じですか？オルソン殿、その奥さんは本当にあなたが愛した奥さんなのですか！」

「……モニカは、モニカだ。それ以外の何者でもない。私の…邪魔をするな！」

激昂したオルソンは剣の闇魔法をフランツに差し向け、更に剣を振り下ろして追撃する。肩から斜めに大きな傷が入り、フランツは馬から落とされる。

「フランツ！」

フランツにとどめを刺そうとしたオルソンの攻撃にアメリカが割つて入つて盾で防御、更に鉄の槍で反撃する。オルソンにとつても予想外だつたのか回避が少し遅れて鎧に大きな傷が入つた。

「お兄ちゃん、フランツをお願い！」

「分かつた！」

傷に障らないようにフランツを抱え上げて救出、サレフの杖が届く場所まで撤退する。フォルデさんの傷はナターシャさんがリブローの杖で回復し、カイルさんは近距離ながらも手槍を構えて再攻撃している。ゼトさんも傷薬で回復して再び銀の槍を構えている。

「アストラさん、助かりました。」

「当たり前だろう、仲間なんだからな。礼ならアメリカに言つてやってくれ。」

まさかあそこでアメリカが真っ先に反応するとは思わなかつたな。
：仲がいいのか？ロスやユアンと組んでるのはよく見るし、野営の時にネイミーと偶に話しているのも知つているが。

「おおおおおっ！」

フランツをサレフに任せ、俺はアメリカの背中を飛び越えてオルソンにアダマンタイトの剣を振り下ろす。完全に不意を突いたにも関わらず、オルソンは超人的な反応を見せ剣先が頬を掠めるだけに留まる。

「…厄介な男だ。アストラと言つたか。」

「ああ。別に語ることも無いだろう？すぐに殺させてもらうぞ。」

「妻のためにも、私は負けるわけにはいかない！」

盾を正面に構えてオルソンの斬撃をなんとか凌ぎ、アダマンタイトの剣で切り上げるがオルソンは後ろに跳んで回避、着地したところをゼトさんが狙つたがそれも跳んで躰す。飛んできたカイルさんの手槍も上体を反らして避け、フォルデさんの攻撃は剣で強く弾いて馬から叩き落とした。

「お前が裏切ったのは誰かに奥さんを蘇らせてやると言われたからか？」

「…そうだ。私は妻が生きてくれさえすれば、他のことなどどうでもいい。」

「だが、それは奥さんの死体を動かしているだけの人形だろう。お前はそれで満足なのか。」

「…ああ、十分だ。」

「そうか。」

とつぐに狂っているな。あるいは分かつていながらその現実を見ないようになっているのか。どちらにせよ救いはない。

「ターナ姫！ アメリア！ 行くぞ！」

「ええ！」

「うん！」

『トライアングルアタック！』

俺とアメリカが囮となつてターナ姫が擬似トライアングルアタックを決める。オルソンも来るのが分かりきつてはいるとはいえ、それでも避けられないのがトライアングルアタックだ。急所は外したがターナ姫の鉄の槍はアメリカが付けた鎧の傷をさらに広げ、オルソンの鎧の一部分が碎け散る。

「ぐうっ…まだ、倒れるわけにはいかない。」

オルソンはルーンソードを掲げてアメリカから生命力を吸い取ろうとしたが、アメリカを突き飛ばして俺が身代わりになる。

「ぐふっ…があつ！」

力を吸い取られたところをオルソンに踏みつけられ、蹴りつけられる。血の混じつた胃酸を吐き捨てながらなんとか立ち上がり、最後の

追撃を盾で防御する。

「…お前、強いな。」

兵種や戦い方が違うから一概には言えないが、ジャハナの砂漠で戦ったケセルダよりも強いように感じる。視界の外から来る攻撃に即座に対応するには聴覚や空間把握など、非常に高い能力を持つていなければ不可能だろう。

「当然だ。強くなれば妻を守ることはできない。」

守りを捨てて剣と拳の連続攻撃を仕掛けるが、全て躱され、反撃のルーンソードは後ろに跳んで回避。ターナ姫がその隙に鎧が壊れた箇所を狙うが筆手で弾かれ、アメリカの必殺の一撃は剣で防がれる。オルソンは狂つてこそいるが、その信念だけは本物だ。

だが、これも全て想定内だ。最後に捨て身の特攻でオルソンが持つルーンソードを弾き飛ばす。

「オルソン殿、もう終わりにしましよう。」

「あなたは取り返しのつかないことをしてしまった、だから！」

「返してもらうぞ、我らが祖国を！」

「俺達の全力、耐えられはしませんよ！」

俺とターナ姫、アメリカの3人でオルソンの隙を強引に作り上げ、その一瞬にゼトさん、フランツ、カイルさん、フォルデさんの必殺の一撃が4発同時にオルソンへと突き刺さり、オルソンの身体を貫いた。

「ぐう……つ……モニ……カ……」

オルソンは尚も立ち上がりようとしていたが、徐々に目から光が失われていき、ついに力尽きて倒れ伏せた。

「オルソン殿…」

「裏切りなんて真似しなければ、また奥さんと一緒になれたかもしけないのにな。」

妻を喪い弱っていたところに付け込まれ、狂わされてしまった哀れな男。誰に唆されたのかは分からぬが、それを可能にしたのは魔石の力に違ひない。リオン皇子ともいはずれ相対することになるだろう。「あと残るは操られているファード様だけ…ですが。」

「戦いが激しすぎて割り込む隙もないな。悔しいけど、お二方のことを感じるしかない。」

モルダさんの治療を受けながら、ルネス王族の3人の戦いを見届ける。この様子じや近接武器による攻撃はもちろん、魔法や弓による援護ですらかえつて邪魔になるだろう。

「…………」

ファードが手に持つのは勇者の槍。青色の軽くて頑丈な金属が使われた、非常に精巧だが使い手を選ぶ最高級の槍だ。使いこなせば他の武器の倍の早さで攻撃することも容易い。

エイリーエ王女とエフラン王子はそれぞれが別々のペースで動いているにも関わらず、お互いに邪魔することなくファードの狙いを定めさせないように戦っている。

「はあっ！」

エイリーエ王女のレイピアは鎧の隙間を的確に突き刺し、直後にやつてくる反撃も軽い身のこなしで回避するが、勇者の槍特有の連続攻撃には対応しきれていないのか打点を防具のある箇所にずらすだけに留まる。

「そらっ！」

エフラン王子はファードの鎧の継ぎ目を狙つて破壊していき、今は右腕の肘から先が露になつていて、ファードの肌は不気味なほどに青白く、生氣を感じない。

「…………！」

ファードは人のものとは思えないような叫びを上げ、滑るような動きでエフラン王子の背後をとる。死体を操る術の前では鎧の重さなど無いようなものらしい。

「なつ……」

しかしファードの槍はエフラン王子ではなくエイリーエ王女へと迫る。エイリーエ王女は意識外からの攻撃に反応出来ず、脇腹から夥しい量の血が吹き出す。エイリーエ王女は耐えられずに気を失つているのか受け身をとる様子もなく、既に勇者の槍による追撃が迫つている。

「エイリーエーク！」

しかしその追撃はエフラム王子がファードの腕に攻撃することで狙いが逸れ、エイリーエーク王女は咄嗟に回り込んだゼトさんが受け止める。

「一刻も早く治療を！」

エイリーエーク王女が倒れてしまえば一巻の終わりだ。すぐにラーチエル王女にナターシャさん、モルダさんが駆け付け、その後ろにも杖使いのルーテとサレフが控えている。

「ファード様への侮辱、決して許しはせんぞ！」

エイリーエーク王女がやられていきり立つたガルシアさんがファードへと突撃、ファードは勇者の槍で迎え撃つが、ガルシアさんは回避することなく身体で受け止め、両腕で勇者の槍を掴んで押さえつけようとする。

「貴様のような紛い物に負ける訳にはいかんのだ！」

ファードは槍を繋げて引つ張つて槍を戻そうとするが、ガルシアさんも腰を低く構えて負けじと引つ張り返している。だが、槍を受け止めて傷を負っているガルシアさんと、痛覚があるかすら怪しいファードでは勝敗が見えている。今の内に攻撃するべきだ。アダメンタイトの剣を振り下ろし、鎖を掴んでいるファードの右腕を斬り落とす。

「よくやつたアストラ！」

武器を失つたファードは背中から銀の斧を取り出したが、もう遅い。綱引きに勝つや否や、即座にハンマーを構えたガルシアさんが左腕に必殺の一撃を叩き込み、鎧だけでなく左腕の骨まで打ち碎く。「これで…終わりだつ！」

両腕が使えなくなり無抵抗になつたファードにエフラム王子が怒涛の連続攻撃、胸部の鎧を破壊し、最後に心臓を貫いてとどめを刺した。

「…エフ…ラ…ム…」

「…」

「ルネス……を…頼……んだ……ぞ…」

「……はい、父上。」

ファードの肉体は塵となつて崩れ去り、破損した鎧を残して消えていった。∴最期に遺した言葉、ファード王の魂はまだあの肉体に宿つていたということか。

これでエアテム王子達の祖国は取り返した。だが、それを喜ぶような気分にはなれない。とにかく今は何かをするべきだ。ターナ姫と共に、城内の制圧をしに動き始める。

途中でセトさんとも合流し、オルソンが籠っていたという部屋を備していたグラド残党を拘束する。

「……なるほど、これが裏切りの対価か。」「なんて酷い……こんなの、可哀想だわ。」

「ターナ姫、下がついてください。目に毒です。」

部屋の中には質素なソファやテーブル、ベッド。そして、死体を操る術によつて動いているオルソンの妻がいた。しかし、ヴィガルドやファードとは違ひ死んでからしばらく経つてゐるせいか肉体はやや腐敗しており、ゾンビと人間の中間のような外見になつてゐる。

言葉も話せるようだか「あなた」という一言を延々と繰り返すだけ。これを生きていると表現するのは難しい。

俺にはでんで理解できないか

いつの間にかやつて來ていたエフラム王子が鋼の槍でオルソンの

妻をひと思いに突き刺した

一睡らせてやろう。死人はそうしているのが一番だ。」オルソンの妻もまた、塵となつて風にさらわれた。

カルソンの妻もまた塵となって風にさらされた。カルソンが裏切ることなくルネス騎士として戦い抜いていれば、彼女は塵になること

少しでも疲れを取るために、ターナ姫と一緒に玉座の間前の廊下で

座り込む。杖使い達だけは未だに奔走しているが、俺に手伝えるようなこともないだろう。

「あつ、ターナ様、それにアストラさんも。」

俺達に声をかけたフランツは魔よけに金貨が入った袋、そして騎士の勲章というよく分からぬ組み合わせの荷物を運んでいた。

「フランツか。傷はもう大丈夫か?」

「はい。先程サレフさんにしつかりと診てもらいました。傷は治つたんですが、完治させないまま激しく動いたせいで傷跡が残つてしまつたみたいですね。」

「まあ、痛まないならいいだろ。傷跡なんてその気になれば隠せます。」

傷跡は男の勲章…なんて言う人もいるが、爽やかな容貌のフランツにはあまり似合わない。そういう言葉はガルシアさんやロスのような屈強な男に向けるものだ。

「…何かしら？外が騒がしいわね。」

「少し覗いてみましょーか。」

様子を見に外が見れる場所まで移動する。城内の窓から覗いてみると、武装していないルネスの民が城の前に集まって皆で喜びの声を上げていた。

「…やつと取り戻せたんですね。ようやく実感が湧いてきました。」

「戦争が終わつてもやるべきことは尽きないな。」

「もちろんです。必ず僕達の手でルネスを復興させてみせます！」

「復興する時に何か困ったことがあつたらフレリアに言つてね。お父様は絶対に支援を惜しんだりしないから。」

ルネスは一度滅んだ。だが、きつと蘇る。この戦争を早く終わらせなければ。

「それはそうとフランツ。お前、アメリカとは仲がいいのか？」

「はい。年が近くて槍使い同士なので、ライバルとしてお互い競い合つてます。」

「そうか。…村じや年が若い子どもがいなかつたからな。これからも仲良くしてやつてくれ。」

「はい！」

「…ありがとう、フランツ。」

ターナ姫にはヒーニアス王子やヘイデン様がいる。しかし、母さんが攫われてしまつたアメリカには何も残らない。でも、フランツならきっと大丈夫だ。これで安心して命を賭けられる。

「アストラ？」

「…？ ターナ姫、どうかしましたか？」

「いえ、なんでもないわ。」

ターナ姫が心配そうな顔で覗き込んでくる。治つてない傷でもあつたか？ 小さな傷跡が残るくらいなら気にすることもないが。

武器の手入れに行つたフランツと別れ、ターナ姫と共に玉座の間でエフラム王子とエイリーケ王女の儀式を見守る。2人が身に付けている腕輪を掲げることで聖石が安置されている間への道が開けるらしい。

玉座の足下から地下への階段が現れ、エフラム王子とエイリーケ王女、そしてルネス将軍であるゼトさんが聖石の間へ続くその階段を下つていく。あの奥に聖石があるのか…

「…戻ってきたわ。」

エフラム王子が聖石を手に持つて玉座の間へと戻つてくる。エフラム王子とエイリーケ王女の腕から例の腕輪は無くなつていて、代わりに身に纏う鎧がより豪奢で頑丈なものへと変わつていて。あの腕輪は聖石の間への鍵であると同時に、クラスチエンジアイテムでもあつたのだろう。

「あれが聖石…」

魔力をはつきりと感じることが出来ない俺ですら分かるほどの圧倒的ながらも静謐な力。リオン皇子が持つ魔石に対する唯一の切り札だ。

「これで魔石なんて怖くないわね！」

「我が国の聖石は既に破壊されてしまつていて。事実上、このルネスの聖石が我々の唯一の武器…か。」

「いえ、我らがロストン聖教国を忘れていただいては困りますわ。」

大陸の五国に伝えられる五つの聖石…グラド、フレリア、ジャハナの聖石は帝国の手によつて滅ぼされましたが、ルネスの聖石はわたくしたちの手に。そしてロストンの聖石もいまだ厳重に守られていますわ。」

ヒーニアス王子の発言の唯一であるという部分をラーチエル王女が訂正する。

「さあ皆さん、ロストンへ参りましょう。皆さんを我が宮殿に案内してさしあげますわ。」

ラーチエル王女は杖を掲げて、その先端をロストンがある方角へと向ける。…グラド軍の残党も聖石を狙つてロストンへと向かつているはずだ。聖石が破壊される前になんとしてもこちらが手に入れなければ。

19章 魔王

「…兄上のことを疑うわけではないけれど、あのリオンが戦争を起こしただなんてとても信じられない。あの時もリオンは私の味方だったて言つてくれた。彼が嘘をつくはずなんてないのに…」

エイリーエ王女が心の内に秘めていた不安を吐露しているのをターナ姫と共に聞いている。ターナ姫とエイリーエ王女は同性かつ同年代の親友。エイリーエ王女も気兼ねなく弱みをさらけ出すことが出来るのだろう。…俺はいないふりをするべきなのだろうか？

「私はリオン皇子のことをよく知らないけれど…もう一度会つて話をするのが一番よ。そうすれば、本当の事を話してくれるかも知れないわ。」

…エフラム王子に対して自分が戦争の元凶だと言い、エイリーエ王女には味方だと言つた。つまり、リオン皇子どちらかに対しても嘘を吐いていることになる。そして、皇子と共に聖石の研究をしていたノールが『皇子はグラドの聖石から分離した魔石を手にし、元の聖石を破壊した。』という証言をした。そして、魔石の力で死体が動いている様を俺達は目の当たりにしている。

現状で揃っている手がかりから言えばリオン皇子は間違いなく悪。エイリーエ王女に対しても嘘を吐いているということになる。それで もエイリーエ王女は僅かな可能性を信じたいのだろう。

…だが、もし皇子がどちらに対しても本当の事を言つているとしたら？この戦争の元凶ではあるが、エイリーエ王女の敵ではないとすれば…そんな状況が有り得るのか？やはり本人に話を聞くしかないだろう。

「…そうね。ありがとう、ターナ。」

「ふふっ、エイリーエに頼りにされるなんてなんだか嬉しいわ。またいつでも話を聞いてあげるからね。」

「それに、アストラも。また頼りにさせてもらつていいでしようか。」「ええ、俺で良ければ。」

突然呼ばれたので驚いたが、俺も他人に頼られるような人間である

ことが分かつて少し安心した。

：微妙に金属同士が触れ合う音が聞こえる。戦闘が起きているのだろうか。

「…待つて。あれ、シレーネじやない？」

ターナ姫が正面の大河の向こう側を指差す。シレーネさんが率いる天馬騎士団が編成されたフレリア大隊はロストンへと向かっているグラド軍残党を追っていたはずだ。ナルーベの大河で合流する予定だったが…そうか、ここが合流予定地だ。

「…大変よ！」シレーネは市民を守りながら、たつた一人でグラド軍に戦つてるわ！」

「なんだつて!? すぐに戦闘準備を：エイリーエ王女!？」

ターナ姫はアキオスに跨り、エイリーエ王女も白馬に乗つて戦闘準備を始めるが、何かを感じ取つたエイリーエ王女は突然軍の先頭へと走り出した。ターナ姫もその後に続き、俺も遅れないように全速力で走る。

軍の先頭の方から何やら嫌な空気を感じる。魔物達が纏う邪悪な気配を何倍にも濃くしたような感覚だ。

「リオン！」

「…やあ、エイリーエ。」

「あれがリオン皇子？」

ターナ姫を守る位置に立つて抜剣する。この男が戦争の発端であることは間違いないのだ。

「リオン…前に帝都で俺に会つたな。その時、俺になんと言つたか憶えていいるか。」

「…ああ。憶えているよ。それがどうかした？」

エイリーエ王女が何かを言う前にエフラム王子が本題へと入る。エイリーエ王女は信じられない、信じたくないという表情でリオン皇子のことを見ている。

「なんならもう一度言つてあげようか？ルネスを滅ぼし、君達のお父上の命を奪つたのは僕。グラド皇子リオンだ。」

「…そして、殺した父上の身体を操つたのもお前だろう。」

「そうだよ。オルソンの妻を甦らせるついでにやつておいたんだ。喜んでくれたかな？」

「リオン…嘘です、そんな…」

「エイリーエ、隙を見せるな。…」いつはリオンではない。」

堪らずエイリーエ王女がリオン皇子に歩み寄ろうとしたが、エフラム王子が腕を掴んで制止する。

「随分とおかしなことを言うね？リオンは優しくて弱くて良い子…そう思っていたのは君だけじゃない？」

「違う…俺とエイリーエとリオンは親友だった。確かに俺たちはお互いのすべてを知っていたわけじゃない。だが、どんなに時を経ようと。その間に何が起ころうと…俺たちは親友なんだ。リオンは絶対に俺たちを裏切るような真似はしない。お前は…リオンじゃない。」「…なるほど。ならば、もう正体を隠す理由もないか。」

「ツ！」

リオン皇子の顔つきが変わり、邪悪な気配もより一層強まる。…これが皇子の正体か。

「その通りだ。この身は既にリオンのものではない…あの哀れな皇子の心は我が喰らつた。」

「貴様、何者だ！」

エフラム王子はレギンレイヴを構え、いつでもリオン皇子を貫ける体勢に入る。だが、リオン皇子に取り憑いた何かは一切動じることなく邪悪な笑みを浮かべている。

「学んだ歴史をもう忘れたか？ルネス王子エフラム。思い出してみるがいい。貴様らの語り継ぐ伝説を…グラドの【聖石】に封じられた、最も強きものの名を。」

…マギ・ヴァル大陸の人間であれば誰もが知っている昔話。俺も小さい頃、よく母さんに聞かせてもらつたものだ。知らない奴などいるものか。

「魔王…！」

「やはり、恐れていたとおりですわ…」

「そうだ、それこそが我が真名。弱き皇子リオンは既に死んだ。」

「…おおおつ！」

皇子が死に、魔王がその身体を支配しているというのなら躊躇う必要はない。双聖器ではなくとも、このアダマンタイトの剣なら魔王にも効くはずだ。

「邪魔だ。」

闇魔法…ノスフェラートか。舐められたものだ。そんな詠唱の遅い魔法に当たるほど俺は弱くは…!?

「ぐあつ！」

「ノスフェラートとリザイアを同時にだと…？」

ノスフェラートの黒い炎に気を取られ、足下からせり上がる瘴気への反応が遅れる。俺はまんまと己の生命力を魔王に吸い取られてしまった。

「その剣は…まあいい。エフラムよ、お前の持つ【聖石】をこちらへ渡せ。たつた今我とお前達の力の差を理解しただろう。お前もこのリオンのように惨めに死にたくはあるまい？」

「ふざけるなっ！」

エフラム王子は魔王の言葉を両断し、魔王の喉元にレギンレイヴの先端を当てる。

「やはり抗うか…ならば、直接思い知らせてやろう。人の身では決して敵わぬ力というものを。我是我が名のもとに全てを支配する。我是魔王…その力、見るがいい。」

剣を杖代わりにしてなんとか立ち上がる。魔王は姿を消したが、きつとこの大河の先で待ち構えているのだろう。…よし、まだ動ける。

「早くシレーネを助けなきや！」

「ターナ！…飛行兵達は早急にあの天馬騎士への援護に向かつてくれ。重装兵及び歩兵は河を渡つてくる敵を警戒しろ。弓兵は北西のドラゴンナイト達を牽制。騎兵、魔法兵、衛生兵は市民の安全を確保しつつ各所の補佐だ。」

ターナ姫がアキオスに跨つて突出し、それ見たエフラム王子が早急に全軍へ指示を出す。俺のやるべき事は変わらずターナ姫の援護だ。

ターナ姫に置いていかれないようにエルトに乗つて追いかける。

「シレーネ、大丈夫!?!」

「ここは俺達に任せてくれさい！」

エルトから飛び降りてシレーネさんの前に立ち、来る敵へと備える。シレーネさんは今までの戦闘で既に満身創痍。戦闘の継続は不可能だろう。

「ターナ様！それにアストラも…分かりました。一旦この場はあなた達に託します。アストラ…いえ、今更言う必要もないわね。頼んだわよ。」

シレーネさんに言われるまでもない。例え目の前の敵と戦闘中であっても、ターナ姫から目を離すことはない。

「ふつ！」

シレーネさんと交戦していたドルイド率いる闇魔道士隊へと突撃する。リザイアの詠唱をしている一人目のドルイドへと詰め寄り、アダマンタイトの剣で魔道書を切り裂く。そしてそいつを踏み台にして飛び上がり、落下の勢いも乗せて二人目のドルイドの頭蓋を叩き割る。取り巻きのシャーマン達に囲まれたが、突撃しながらアダマンタイトの剣を振り回すことで数十人のシャーマンを一気に蹴散らす。

…今までの戦いで、時折剣を一振りしただけで突風のような力が発生し、数十人の敵を一度に吹き飛ばす現象が起こった。軍内で話を聞けばこの現象が起きたのは俺とターナ姫だけ。そして、誰もこの現象について一切の知識を持つていなかつた。このアダマンタイトの剣を使うようになつてから、成功率こそ低いものの意図的にこの現象を起こせるようになつた。俺とターナ姫、そしてこの剣には何か特別なものがあるのだろうか。

「ぐつ…」

三人目のドルイドが放つたルナに当たつてしまふ。追撃を食らう前に手斧で詠唱を中断させ、もう一度手斧を投げてどどめを刺す。魔力が暴走していなかつたのは幸いか。暴走したルナを食らえば死に直結する。

「…あつちも何とかなりそうかな。」

ターナ姫は他の天馬騎士達やクーガー、そしてネイミー・ヒーニアス王子を中心とした弓兵達と組んで北西から来るドラゴンナイト達を相手している。俺がやるべき事はこの橋を通さずに守りきることだ。

傷薬を使って応急処置を行うが、魔王のリザイアどころか、さつき食らつたルナ1発分すら賄えない。気休めにしかならないが、衛生兵が来るまで耐え凌ぐには十分だ。

「…っ！」

闇魔法の気配を察知して後ろに跳ぶ。この感覚はルナだ。イクリプスでないなら、近くに敵がいるはず。

「…後ろか！」

俺の背後、河の中洲に敵軍ドルイドが3人。敵の増援なのは間違いないが…ワープの杖か。

ナルーベの市民は騎兵達の救出によつて避難を済ませている。だが、もし奴らの魔法が飛行兵達に差し向けられたら押さえていたドラゴンナイト達が動き出し、戦線が崩壊する。

「おらよつ！」

「加勢するよ、お兄ちゃん！」

「サンダー：いけつ！」

ロス、アメリカ、ユアンの3人がドルイドの背後から同時攻撃を仕掛け、まずは1人倒す。

「片方頼む！」

ミイル持ちの方を3人に任せ、俺はリザイア持ちのドルイドに向かつて走り出す。リザイアが発動する瞬間に加速して回避、追撃される前に接近して仕留める。

「3人とも助かつた。…あいつらはまだか？」

「いつもお兄ちゃんの指揮下に入つてた傭兵達は西の倒木から渡つてくる敵の相手をしてたよ。パラディンやヴァルキュリアの増援がどんどん来るからしばらくは来れないと思う。」

「僕達もそつちで戦つてたんだけど、流石に戦力過剰だつたからこつちに来たんだ。もちろんエフラン様の許可も貰つてるよ。」

「アストラ、結構闇魔法を受けてるんじゃないか？これも使つとけよ。」

ロスが渡してきたのは…傷薬か？道具屋で売っているものとは違うようだが…

「輸送隊に親が薬師の人がいてさ。傷薬が少なくなってきたから分けてくれたんだ。傷薬よりもよく効くぜ。」

「…ありがとうございます。助かった。その人にも礼を言つておいてくれ。」

特製の調合薬か。試しに使用してみると、闇魔法を受けた時の痛みが引いていくのを感じた。確かにこれは傷薬よりも高い効果だろう。

「なぜこの薬が出回らないんだ？傷薬と特効薬では効き目に差がありすぎるし、その中間の薬であるこれにはかなりの需要があると思うんだが。」

「俺もそう思つたんだけどさ。必要な材料がそこそこ貴重なものらしくて、売るとしたら最低でも2800G辺りにしないと儲けが出ないんだつてよ。」

「…なるほど。」

2800G払つてこれを買うくらいなら200G足して特効薬を買った方が明らかに得だろう。一応特効薬よりも安価ではあるのでも多少の需要はあるかもしねれないが。

「引き続き橋の防衛を続けたいが…相手のワープ増援がどれだけ来れるか分からなくな。」

「3人同時に来たつてことは、相手はワープの杖を3本持つてることだよね？あと6人分つてことじやないの？」

「…」の程度の粗末な奇襲に貴重なワープの杖を3回も使うと思うか？

？

敵軍のど真ん中に魔法兵3人。ある程度の動搖は誘えるかもしれないが、どう転んでも形勢が傾くほどの影響はありえない。事実、たつた4人で十分対処出来たのだから。送り込むにしても全員にルナを持たせたり、或いはキルソードを持つたソードマスターやアサシンを送り込んだ方が遥かに良いだろう。

「だけど、それ以外にどうやって？」

「もしかして、魔王が何かしてくるかもってこと?」

「そういうことだ。3人同時にワープなんて離れ業も、魔王なら出来るんじゃないかと思つてな。」

魔王の力がどれ程のものか、俺たちには計り知れない。最悪の場合に備えて、最善の動きをとる必要があるだろう。

「じゃあ、ワープの警戒は俺たちに任せてアストラは橋を守つてろよ。行こうぜ、2人とも。」

「でも、その前にエフラム様にこのことを伝えに行かなきや。…ロスが行つてよ。私は鎧で素早く動けないし、ユアンは魔法使い相手だと欠かせないでしょ?」

「…分かつたよ。じゃあ行つてくる。」

ロスが2人に指示を伝えてから小走りで来た道を戻つていき、アメリカとユアンも言われた通りに周囲を警戒している。

…3人とも、仲間になつた頃は見習いだつたのが嘘みたいだ。少なぐともロスとアメリカはクラスチエンジニアアイテムを使えるレベルには達しているだろう。

ユアンは魔道士でありながら、理魔法だけでなく闇魔法も扱える特殊な才能を持つている。まだクラスチエンジニアアイテムは使えないだろうが、集中力が極限に達した時の詠唱速度はルーテ以上だ。

「じゃあ行つてくるね、お兄ちゃん。」

「ああ。油断するなよ。」

アメリカ達を見送り橋の防衛を続けるが、数人のドルイドを最後に増援の気配はなくなつた。もう打ち止めか?

「待たせたわね、アストラ。」

「シレーネさん。今の戦況は?」

「倒木からやつて来る騎兵達はもう全員倒したみたい。それと、東側の山を越えた先にある橋にウォーリアの敵増援が押し寄せているわ。傭兵団の人達が抑え込んでいるから問題はなさそうね。」

ウォーリアを抑え込める傭兵団・ユアンを抜いたジスト傭兵団だけでは人数が足りないだろうし、ジャハナの戦いまで俺の指揮下に入っていたフレリア傭兵団も加わっているのだろう。

「ドラゴンナイトも出尽くしたみたいですし…攻め時でしようか？」

ターナ姫のアキオスが空から降りてくる音が聞こえるということはそうなんだろう。

「ターナ姫、大丈夫ですか。」

「私なら大丈夫よ。アストラこそ無理してない？」

「問題ありません。」

：しかし、やはり歯痒いな。今の俺ではターナ姫の主戦場である空中戦に介入出来ない。手斧ではまるで届かないし、そもそもターナ姫を避けて敵にだけ手斧を当てるのは俺の技量では不可能だ。

「心配しないで、アストラ。私、どんな時もあなたに守られているから。」

「…声に出てましたか？それってどういう…」

「ずっと一緒だもの。顔を見れば何を考えているか大体分かるわ。それに…ううん、これを言うのは今じやないわね。さあ、エフラムと合流しないと。シレーネも行きましょ。」

ターナ姫が飛び立ち、そのまま後ろにシレーネさんも続いた。飛んで行つたのは真南の方角だつたし、直にここで合流するだろう。

「本当に、ターナ姫には敵わないな。命も心も救われてばかりだ。：」

ありがとう、ターナ姫。あなたの為なら、俺は…」

エフラム王子と合流し、橋を渡つてから東に進軍する。南側の山からヒーニアス王子が指揮する別働隊も進軍中のようだ。魔王が待ち構えるこの先の砦で合流する予定だという。

「…なんだ？」

前方から見た事のない甲冑を着た大勢の戦士が迫つてくる。謎の戦士達は俺達を視認するや否や、全員が鉄の斧を振りかぶつて突撃してきた。

「くっ！」

咄嗟に迎撃すると、謎の戦士は一切の手応えなく一撃で散つていく。だが、雪崩のように襲いかかる戦士達は俺達の間を抜けて混戦となる。

「これは…亡靈戦士ですわ！…どのような攻撃でも当たさえすれば簡単

に倒せますが、油断は禁物でしてよ！」

ドズラとレナツクに守られながらも杖を構えて戦おうとしているラーチエル王女が全員に聞こえるように大声をあげる。亡靈戦士か…これも魔王がやつたことか？

「誰か…コーサー！後ろを頼む！」

「ああ、任せろ！」

近くにいたコーサーと背中合わせになり、大量の亡靈戦士達を薙ぎ倒していく。1人…どころか、一度に5人や6人倒すことも難しくないが、敵の数が多すぎる。

「…ギガファイアー！」

「なんだ!?」

ルーテのいつもと違う詠唱が響き、エルファイアを超える勢いの炎が亡靈戦士の大群を焼き払う。…どうやら、エルファイアの魔導書を3冊同時に使つて新しい魔法を編み出したらしい。

「あいつ、本当にヤバいな。何者なんだ？」

「稀代の天才魔道士…だろうな。」

この戦争を通じて最も成長してるのはエイリーエ王女やではなくルーテなのかもしれないな。最初は変わった奴だという印象しかなかつたのに、今や最大級の戦力だ。

「ぜあああっ！」

500にも及ぶ数の亡靈戦士を葬り、何とか混戦から脱出する。俺とコーサーのペアと同時に、エフラム王子とエイリーエ王女、4人のルネス騎士。更にルーテとデュッセル将軍、そしてミルラが亡靈の群れから抜け出してきた。

「すぐ先に魔王がいる。…が、未だに数を減らす様子のない亡靈戦士を放置するわけにもいかないな。」

「さつさと分けましょ。」

ルーテとコーサー、フランツにカイルさんにフォルデさんの5人に亡靈戦士を任せ、残りで魔王が待つ砦へと進む。

「待ち侘びたぞ、矮小なる者どもよ。」

戯けるように語りかける魔王に対し、全員が持ち得る最高の武器を

構えて相対し、エフラム王子は怒氣を込めて魔王に問いかける。

「…答える、魔王。リオンを…俺達の親友をどこへやつた。」

「くくっ…くだらぬことを。あの者ならどうに死んだ。」

この身を支配するのは我…深淵の魔王よ。あの弱い皇子など最早どこにもおらぬわ！」

「くつ…貴様つ！」

エフラム王子は怒りに任せてジークムントを振るうが、直線的な攻撃では魔王に攻撃を当てることが出来ない。

「兄上、加勢します！リオン…どこにもいなくなつたというのなら、せめて！」

「ふん…雑魚は下がつておれ。」

エイリーエ王女も同じく雷剣ジークリンデを構えて斬り掛かるが、魔王は剣が届く前に詠唱無しのミイルを放ち、エイリーエ王女はその衝撃で落馬する。

「エイリーエ様！」

「はあつ！」

「ぬうん！」

ゼトさんが咄嗟にエイリーエ王女を救出し、入れ替わるように俺の剣とデュッセル将軍の銀の斧が降りかかる。しかし、俺の斬撃は魔王のローブを掠め、デュッセル将軍の斧は魔王の手で受け止められる。「所詮、人間などこんなものか…」

銀の斧は魔王に握り潰され、俺には3体の亡靈戦士を喰らわれる。1人だけ勇者の斧を持っている上に、さつきの大群と比べて動きも力も桁違いだ。

「みんなだけじゃ…ありません！」

ミルラがセライナさんから取り返した石を掲げると、大きな竜へと姿を変えた。そして雄叫びをあげて口から炎を吐き出し、魔王の身体を焼き焦がす。

「小癪な…」

「グオオオツ！」

ミルラは反撃のノスフェラートをものともせず、巨大な爪で魔王の

腕を切り裂く。更にもう一度炎を吐き、魔王をあと一步の所まで追い詰めるが、あと一步のところで少女の姿に戻ってしまう。

「…つ。」

「おのれ…忌々しき竜神の生き残りがいようとは。…このままではこの肉体が持たぬな。惜しいが、貴様らを葬るのは次の機会にするとしよう。」

「逃がすものか！」

「はあっ！」

魔王を逃がすまいとエフラム王子とエイリーエ王女が双聖器を振り下ろすが、その刃が届く前に魔王は転移魔法で姿を消してしまった。

「くつ…兄上、追いましょう！」

「ああ、逃がすものか。すぐに周囲を捜索し、奴の行方を突き止める。これ以上俺達の親友を冒涜させはしない！」

エイリーエ王女とエフラム王子は逃がしたことを悔やむ間もなく追討の準備に取り掛かる。魔王が退却したことで亡靈戦士も土塊となつて崩れ去り、大河の戦いは集結したが：勝つたという気にはならないな。魔王は倒せず、退却させたのも殆どミルラ一人でやつたようなものだ。

魔王の行方が掴めるまで砦に寝泊まりすることになり、砦の内部には大量の天幕が並んでいる。戦時中とはいえ、やはりこの時間は皆の笑顔もそこそこ多くなるな。

「…アストラ。」

「ターナ姫？」

いつも通りターナ姫の傍に付いていると、ターナ姫がいつにない思い詰めた顔で話しかけてくる。

「ねえ、アストラ。…生きて帰りましょう。あなたはいつも誰かを庇つて、何度も死の淵に立たされてきた。もちろん、迷わず仲間を守れることは凄いことだと思うわ。だけれど…お願い。皆のことの大

事だと思うのと同じように、アストラ自身のこともちやんと大切にしてほしいの。」

「…分かりました。生きて帰ります。これからはそのことも念頭に入れて戦うことにします。」

本当に…本当にターナ姫は素晴らしい方だ。俺は…この方がいなければ、俺の命を代償にせずとも勝てた戦いでも、勝利の為に命を投げ出していただろう。

ターナ姫に頼まれては断れない。…だが、どうしても必要となれば、やはり迷わず命を賭けるぞ。

「ふふつ、ありがとうアストラ。それでね、フレリアに帰つたら…ずっと傍にいてほしいの。私——」

「…勿論です！フレリアに生きて帰つた暁には、一時的なものであつたターナ姫の近衛、正式に受けさせてもらうつもりですよ。この命果てるまで、ターナ姫の傍にお仕えする所存です。」

「…そういう意味じやないわ。」

「えつ？」

「もう！なんでもない！」

：何がいけなかつたんだ？途端に機嫌を悪くしてしまつたターナ姫は自分の天幕の中に入つてしまつ。

「…あそこまで言われて気付かないってのもな。」

「ん？何の話だ、ヨシュア。」

「いや、なんでもないぜ。」

…？変な奴だな。疑問が解けないまましばらくすると、天幕から微かに寝息を立てる音が聞こえてきた。ターナ姫はもう眠りについてしまつたらしい。…まあいいか。俺も休むとしよう。いつ出発になるかも分からぬ以上、少しでも睡眠をとつておかなければ。

20章 灼熱の戦い

「はあっ…」

魔王の行方を追つていた偵察兵の案内で、フレリア軍はロストン領内の峰火山ネラスへと足を進めている。この火山は今でも時々小規模な噴火を繰り返しているらしいく、そのせいか気温が異常に高い。長時間歩き続けるのはかなりの苦行だ。

「こんな状態で戦闘に入つて戦えるのかしら？」

「苦しいですが、不可能ではないです。ただ、この暑さにやられて倒れる兵は一定数いるでしょうね。」

なんせ軍内の大半が既に疲弊している。暑さに慣れているジャハナ出身の者はまだましで、それ以外で平気なのは極わずかだ。

「本当に酷いよ…鎧の中なんて蒸し風呂よりも暑いんだから。」

「だつたら戦闘が始まるまで脱いでおけよ。」

「…それはそれで持ち運びが大変なんだよね。」

「ほら、持つてやるからさ。」

アメリカが脱いだ鎧を預かり、肩に担いで歩く。金属部分はかなり熱くなっているが、今の俺ならこのくらいなんともない。うん？この感じは…

「…悪い、鎧を脱いだのは無駄な手間だつたみたいだ。」

「えつ？」

「魔物だ。」

遠目に皮膜の翼や触手の生えた目玉が見える。魔物相手の索敵にも随分と慣れてしまつた。既に全員が臨戦態勢に入り、先鋒の騎兵達が突撃していった。

「魔物相手にこの剣がどれだけ効くか…試すとするか。」

サイクロプス等の一部を除いて、魔物というのは鎧を着た兵士よりも脆い。この剣であれば、一撃で真つ二つにすることも不可能ではないだろう。

「見慣れない魔物がいるよ。」

「女性の様な上半身に蛇の下半身…ゴーゴン！ 石化の魔法を使つてくる

る非常に危険な魔物です！」

ノールから聞いた魔物の姿や特徴を思い出しながら軍に警告を飛ばす。石化の魔法を受けた状態で一撃でも食らえば即死だ。

「輸送隊、予備のレストを杖使いの人数分用意してくれ！聖水とMシールドも入っている分を全て出すんだ！」

エフラム王子が輸送隊に指示を出し、軍内の杖使いも輸送隊の周りへと集まっていく。ストーンの魔法はスリープ等の状態異常杖と同じように魔法への抵抗力が高いほど影響を受けにくい。聖水とMシールドの用意もすれば対策としては十分だろう。

「全員、決して単独行動はするな！最低でも3人1組で行動し、ストーンの魔法を受けた味方が出たらすぐに救出して撤退するんだ！」

「私とアストラとアメリカの3人で大丈夫かしら。」

「…どうでしょう。積極的に動くならもう少し仲間が欲しいところですが…傭兵達を呼びましょうか。」

「いえ、私達が同行しますわ。」

「アストラ達は空中の戦闘には参加出来ないでしょ？ターナ様を1人で戦わせるわけにはいかないので。」

俺が補充を要請する前にシレーネさんとヴァネッサが加わる。…が、やはり2人とも疲弊している。ジャハナ出身者を誰か入れたいところだ。

「…アストラ。」

「マリカか。どうした？」

「あなたの指揮下に入るように隊長に言われた。」

「そうか、助かる。少し無茶させるかもしれないが、大丈夫か？」

「問題ない。」

どうやらジストが気を利かせてくれたらしい。見ればジスト傭兵团のみならず、ジャハナの傭兵は全員別々の隊に配置されている。

「…見た限りだと、魔物の数は今までより少ないようです。ガーゴイルやビグルは早期撃破、ゴーゴンへの警戒を心掛けていきましょう。ゴーゴンは俺とマリカが魔法を回避、その隙にターナ姫達が不意を突いて対処を。」

正直、ゴーゴンの魔法は魔法防御に優れたペガサスナイトであるターナ姫達であつても2発は耐えられない。だが、万全であれば俺やマリカでも1発耐えられる。

「私は…流石に相性が悪いもんね。ガーゴイル相手の時は頑張るよ。」「悪いな、アメリカ。」

出現している魔物が魔法を使う種類に偏っているため、魔法防御が心許なく回避も難しいアメリカはあまり戦えない。ガーゴイル相手には頑張つてもらうが、手槍による補助やとどめ刺しが主になるだろう。

「これは…何の卵かしら？」

「ああ、それは魔物の卵だな。孵化する前に潰しておこう。」

ヴァネッサが見つけた不気味な模様の卵を斧で叩き割る。ノールから聞いた話では、ゴーゴンやバールのような一部の魔物は卵から産まれてくるとか。バールはこの辺りに居ないようだから、おそらくこれはゴーゴンの卵だろう。

「…さあ、始めましょう。」

まず接近してきたのは2体のガーゴイル。片方はターナ姫が地面近くに誘導させ、アメリカの手槍で翼を貫く。もう1匹はシレーネさんとヴァネッサの2人による連携で撃破した。

「これも卵ね。潰しておきましょう。」

崖の上にある卵を見つけたヴァネッサが鉄の槍で殻を貫く。産まれたての魔物は卵の中で蓄えていた魔力が漲つていて、最も危険な状態らしい。なるべく孵化する前に潰しておきたいところだ。

エフラン王子達とは別行動、エイリーエ王女を中心とした隊に続き、北西側の山道を進む。

「皆さん、遅れないように…きやあつ!?」

「エイリーエ！大丈夫？」

「ええ、問題ないわ…先へ進みましょう。」

エイリーエ王女が立ち止まつたその場所から炎が吹き出した。しかし、吹き出たのは一瞬だつたので軽傷で済んだようだ。

アメリカが通りすがりに魔物の卵を破壊しつつ、エイリーエ王女が

立ち止まつた辺りの地面を凝視している。

「今のは…地面の小さな亀裂から吹き出したのかな?」

「似たような亀裂もいくつかあるな。例えば…これもか。」

近くにあつた亀裂を爪先で小突いてみるが、反応はない。だが、同じ場所に大きく踏み込むとその亀裂から炎が吹き出した。

「うわっ!…亀裂に強い衝撃を与えるといけないってことか。ヴァネッサ、シレーネさん、他の隊にも伝言を頼めますか。」

「ええ。ヴァネッサは南のヒーニアス様達に。私は東のエフラム様に伝えてくるから。」

「了解です!」

俺の伝言を伝えにシレーネさんが東、ヴァネッサが南東に飛び去る。俺自身も周囲に足元の亀裂への注意を喚起し、再び進軍する。

「さて、ゴーゴンのお出ました。…マリカ、行けるか?」

「大丈夫。」

「ターナ姫も準備を。」

「任せて!」

マリカはシャムシールを構え、ターナ姫はキラーランスを持つて上昇する。俺もアダマンタイトの…えい、長いな。後で別の呼び方でも考えるか。剣を構え、マリカと共に突撃する。

「キシャアアツ!」

ゴーゴンは深い緑色の魔力の塊を放つが、マリカは横に飛んで回避、俺も前転することで立ち止まることなく回避する。

更にゴーゴンは俺達の足元に黒い穴のようなものを出現させる。咄嗟に跳び上がつてストレスで回避したが、一瞬だけ背筋が凍るような感覚が走った。今のが石化の魔法だったのだろうか。

「はつ!」

「ツ!」

俺が剣を突き出したがゴーゴンは身体を曲げて回避、マリカの斬撃は尻尾で弾き返される。

「やあつ!」

更にゴーゴンの頭上からターナ姫が必殺の一撃を放つたが、それす

らも器用に回避された。

「バレた…？」

「…髪。あれの髪、蛇だから見てたのかも。」

「不意打ちは効かないってことか。」

再びマリカとの連携で攻撃を仕掛けるが、ゴーゴンは身体をくねらせて器用に回避してくる。…剣が重い。暑さで体力を奪われているのがかなり効いている証拠だ。

「こうなつたら…アメリカ！」

「わかつた！」

アメリカは槍で地面スレスレを薙ぎ払い、ゴーゴンが浮いたところをターナ姫が狙う。それすらも回避されたが、ゴーゴンは完全に宙に浮いた状態だ。

「…これまですれば絶対に避けられないよな！」

ゴーゴンが魔幻の波動を放つたが、構わず剣を振り下ろす。ゴーゴンの身体は上下真っ二つに裂かれ、上半身は駆け付けてきたエイリークが貫き、下半身はマリカが細切れにした。

「これは…確かに2発は受けられないな。」

まともに魔幻の波動を受けたダメージは相当にでかい。全身に激痛が走り、思わず倒れそうになる。剣を支えにしてなんとか立ち上がるが、焦った様子のターナ姫とエイリーク王女が駆け寄ってきた。
「アストラ、大丈夫!?」

「また無茶を…！」

「無茶しなければ勝てるものも勝てなくなってしまいますから。…まあ、今のは軽率でしたね。申し訳ありません。」

わざわざ大振りにせずとも、さつさと斬つてしまえば反撃を受けることもなかつただろう。

「お主はターナ姫様の近衛だ。姫様の隣で胸を張れるような戦いを心掛けよ。よいな？」

モルダさんのリライブの杖で傷が癒える。勇者へとクラスチェンジし、強力な武器を手に入れた。…慢心していたようだ。俺はまだまだ未熟らしい。

「…俺はターナ姫の盾。もう油断も慢心もしません。」

「うむ。…魔物の数も減ってきたな。ナターシャ殿も司祭へとクラス
チエンジをしたからか、今回は早く片付きそうだな。」

見渡せばゴーゴンは既に倒されており、モルダさんも使い切られた
シャインの魔導書を持つていて。司祭の使う光魔法は神の加護によ
り、魔物に対して特に高い効果を発揮するとか。どうやらモルダさん
とナターシャさんが猛威を振るつたらしい。

「南へ急いでください！」

「ヒーニアス様達が危険です！」

「お兄様が…アストラ、掴まつて！」

ヴァネッサとシレーネさんが伝令に来る。やはりそう簡単に戦い
は終わらないらしい。ターナ姫の腕に掴まり、飛び上がってアキオス
に同乗する。南にはかなりの戦力が揃っていたはずだが…

「…ヒーニアス、そろそろキツいぜ！」

「ヴァネッサ達が援護を連れてくるまでなんとか持ち堪えなければ…
ぐつ。」

北側と比べて魔物の数も質も桁違いだ。北側にはいなかつたサイ
クロップスが前線を張り、ゴーゴンがその後ろから一方的に魔法を放
ち、更にガーゴイルとビグルの遊撃が加わる。聖水やMシールドを
使ってギリギリ持ち堪えているような状態だ。

「明らかに統率が取れている…ここにいるのは野生の魔物ではなく、
魔王の支配下にあるということか。」

「私達が2人加わっても状況が改善するとは思えないわ。エフラム達
が挟撃できればいいんだけど…」

「そつちにも伝令が行っているはずなので、耐久戦になりますね。あ
るいは指揮を潰せたらいいんですけど…」

とはいえ、上空から見下ろしても指揮を執つていそうな魔物の姿は
ない。魔王が命令を出した後にこの場に放つたのだろう。

「…ターナ姫、サイクロップスの真上まで頼めますか？この剣なら、サイ
クロップスの首を斬るのも可能なはずです。」

「…くれぐれも、降りるなら味方がいる方にするのよ。」

「分かつてますよ。じゃあ、行きます！」

サイクロプスの頭上に飛び乗り、そのまま肩へ。俺を掴もうとする腕を躲し、首に剣を宛てがつて力任せに押し付ける。

「グオオオオッ！」

一度で完全に斬り飛ばすことは出来なかつたが、首に通る太い血管を分断した。サイクロプスは痛みでのたうち回り、それにゴーゴンの集団が1割ほど巻き込まれる。

サイクロプスの骨だけは硬くてどうにも斬れないが、代わりにもう一つの血管にも剣を突き立ておく。これでもう放つておいても死ぬだろう。動かなくなつたサイクロプスから飛び降り、闇魔法を回避しつつヒーニアス王子達と合流する。

「ターナを護る者にしては、随分と残酷な倒し方をする。」

「綺麗な戦い方、なんて言つてられない状況でしょ？ エフラム王子達が来るまで持ち堪えましょ、ヒーニアス王子。」

「…その通りだな。余計なことを言つた、忘れてくれ。」

この剣であればサイクロプスの硬い皮膚も貫ける。サイクロプスのふくらはぎを斬り、筋肉と骨を繋ぐ腱に傷を入れる。そして、ヒーニアス王子がまともに歩けなくなつたサイクロプスの目玉に狙いを定めて射抜いた。

「ライトニング！」

遅れて加勢に来たモルダさんが満身創痍のサイクロプスに光魔法を放ち、サイクロプスの肉体は内側から破裂した。

「なんとか間に合つたようですが、ヒーニアス様、加勢致しますぞ。」

「他の者は？」

「エイリーケ様に同行していた者の約半数がエフラム様と共に挟撃に向かっております。」

「最後のひと踏ん張り、ですね。」

「ああ、行くぞ！」

2体目と同じ手順で3体目のサイクロプスを倒し、ヨシュア、マリカと共にゴーゴンを一本ずつ倒していく。

「行くぞ、ヨシュア！」

「分かつてる！」

3人でゴーゴンを囮つて逃げ道を塞ぎ、順繰りに攻撃を入れることで反撃する隙を与えない。攻撃を避けきれなくなつたゴーゴンは誰かの斬撃で身体を裂かれて息絶えた。

「このままじゃキリがないな。…2人とも、一旦下がってくれ。」

ゴーゴンの数が多くて、一体ずつ倒していくには先に体力が尽きる。あの力に頼る必要があるだろう。目を閉じて剣の刃へ意識を集める。

「…斬る！」

魔物単体ではなく、群れ全体を見据えて大きく薙ぎ払う。すると、ゴーゴンの群れは突風に飛ばされたかのように散っていく。更に、俺の剣に斬られたかのような傷もついている。

「…何、今の。」

「俺にも分からぬ。誰に聞いてもさっぱりなんだ。」

俺やターナ姫が持つ謎の力、これの正体を知る者はこの軍にはいなかつた。ルーティノール、サレフ、デュッセル将軍やラーチエル王女、様々な伝承に詳しそうな人には全員聞いたが、取っ掛かりすら掴めなかつた。

更に、この剣を手に入れてからは意図的にこの力を使えるようになった。謎は深まるばかりだ。

「おつと、エフラム達も来たみたいだな。」

「そのようだな。…全員、畳み掛けろ！」

ヨシュアが呟いたのを聞いてエフラム王子達の挾撃を確認したヒーニアス王子が突撃命令を出す。これで決着となるはずだ。最後の体力を振り絞つてゴーゴンに向かつて剣を振りかぶる。

「さつきのをもう一度使えないのか？」

「いつも2回目は上手くいかないんだよな。」

理屈は分からぬが、あの力を使えるのは一度の戦いで1回だけなのだ。使つたからといって疲れたり、なけなしの魔力を消耗しているような感じはしないんだが…

俺の斬撃を避けたゴーゴンをヨシュアが追撃、他のゴーゴンが阻止

すべく横槍を入れてくるが、アスレイが光魔法でゴーゴンの闇魔法を相殺する。

「やああああっ！」

ターナ姫は一度高く飛んでから急降下してゴーゴンの群れに突撃、その勢いで数体のゴーゴンを串刺しにする。そして溶岩の吹き出る崖へと槍ごと放り投げた。壊れる寸前だつたのだろう。

「今の私には、これがあるから！行くわよアキオス！」

ターナ姫は天空のムチでアキオスを叩き、天から降り注ぐ雷光に撃たれる。そしてターナ姫はファルコンナイトに、アキオスはより立派な天馬へと変化した。

「これで終わらせる！」

「ヴァネッサ、ターナ様に合わせるわよ！」

「はい！」

最後に残った空中の魔物、デスガーゴイルに対してターナ姫とシリーネさん、ヴァネッサはその周囲を縦横無尽に飛び回り撹乱する。そして、魔物が3人の姿を捉えきれなくなつた瞬間、それぞれが別方向から同時攻撃を仕掛ける。

「これが、フレリア天馬騎士団の奥義！」

『トライアングルアタック！』

本物のトライアングルアタックが魔物に炸裂、主軸となつたターナ姫の一撃が急所を貫き、デスガーゴイルは塵となつて消える。

ターナ姫が仕留めたデスガーゴイルが指揮権を握っていたのか、徐々にゴーゴンの群れの動きも悪くなつてくる。中には群れから外れて逃げ出す個体もいる。

「おおおおおっ！」

群れの向こう側からエフラン王子とエイリーエ王女が怒濤の勢いでゴーゴンを蹴散らしているのが見える。この戦いも終わりだろう。「こいつで最後だっ！」

最後の一体をエフラン王子が仕留め、周囲から魔物の気配は無くなつた。これで安心して先へ進めるだろう。

「休むべきか、進むべきか…非常に悩ましいところですね。」

「進むぞ。こんな所で休んだら、かえって体力が奪われる。まずは火山帶を抜けて…」

エフラム王子が言葉を止めて視線を一点に集中させる。あれは…：

「魔王っ！」

「待つてください、エフラム王子！」

視線の先にリオン皇子・魔王の姿を見たエフラム王子は疲れも忘れて一目散に駆けていく。一人では危ない。後を追おうとするが、体力も限界に近くまともに走れない。他の皆も同様だ。馬やペガサス、ドラゴンでさえ疲れ果てている状態だ。

「エルトッ！」

輸送隊で待機させていた俺の馬を呼び寄せる。まだそこまで遠くには行っていないはず。まだ体力に余裕のあるこいつなら何か起きた前に追いつけるはずだ。

エフラム王子の背中が見えてきた。結界に縛られ、魔王に鎧を剥ぎ取られている。確かそこには…聖石！

「おおおおおっ！」

聖石を握りつぶさんとする魔王に対し全力で剣を振り下ろす。

「つー・余計な邪魔が入ったか…」

全力の一撃は回避され、浮遊した魔王は溶岩の真上へと移動したが、構わず飛び出して魔王に掴みかかる。

「よせっ、アストラ！」

魔王に組み付き、聖石を持つて右腕に剣を突き刺す。魔王の右肘から先が千切れ、握っていた聖石が宙に舞う。

「つー！」

硬直する魔王を足がかりにして飛び、落下する聖石を空中でキャッチする。

「くく、無駄なことを。そのまま聖石と共に消えるがいい。」

崖の突起を掴んで落ちまいと耐えていたが、魔王の左手から放された闇魔法に崖を崩される。溶岩が目の前まで迫っている。聖石：絶対に壊させてなるものか…！

「—————っ！」

エフラム王子が何かを叫んでいる。だが、それが何かのは分からなかつた。

エフラム Side

「アストラああああああああっ！」

アストラが溶岩の中へと沈んでいく。助けようにも身体が動かず、仮に動けたとしてももう遅い。残るのは無策に奴を追いかけた俺自身への怒りや情けなさだけだ。

「くく、聖石も守れず…無駄死にだつたな、哀れな男め。」

「…黙れっ！」

アストラの決死の一撃、無駄にするわけにはいかない！俺が魔王の左腕を持つていけば、奴の戦う手段を奪うことができるはずだ。

魔王の左腕を狙つて手槍を投げつけたが、魔王は槍の柄を掴み、握りつぶした。

「……ふん、興醒めだ。」

魔王は一言呟くと、瞬間移動でどこかへと消えていった。その目はアストラが落ちていった方を見ていた気がする。

「兄上！」

エイリーエにゼト、そしてターナが追いついて来た。

「エフラム、アストラを見なかつた？あなたを追いかけていつたのだけれど…」

「……」

「…エフラム？」

ターナが俺の顔を覗き込む。今俺がどんな顔をしているのか自分でも分からない。ただ、目線だけがアストラが落ちていった場所へと向いてしまう。

「え…？」

顔を上げれば、絶望した面持ちのターナが俺と同じ場所を見つめていた。

「そん…な…アストラ…ああ…ああああああっ！」

…アストラが死んだ。その事実が、今まで見てきた他の誰の死より

も重くのしかかつた。

21章 最悪の剣

エフラム Side

ネレラス峰火山の麓、ようやく涼しくなつてきたところで野営の準備が進んでいる。ロストン城が遠目に見える、ラーチエルに訊けば明日の昼頃には着くだろうと言つていた。

現在、フレリア軍内の士気は著しく低い。アストラの死はこの軍にとってそれほどまでに大きな犠牲だつた。あいつの存在を心の支えにしていた者は少なくない。あいつの活躍を見て奮起した者もいる。あいつがいたから救えた命も沢山あるだろう。

アストラの死で最もショックを受けたのはターナとアメリカの2人だ。今までの明るさが嘘のように消え、今も天幕に引きこもつている。

「兄上。」

「エイリーケか。…ターナとアメリカは？」

「ターナは徐々に回復しつつあります。既に会話もできますし、本調子に戻るまでそう遠くはないでしょう。ですが、アメリカは…」

「残る唯一の肉親を喪つたんだ、無理もない。…お前も休め、エイリーケ。」

「兄上、私は別に…」

「いいから休むんだ。」

「…はい。分かりました。」

氣丈に振舞つてはいたが、エイリーケの顔色も随分と悪い。とにかく休ませるべきだ。

：残る聖石はロストンにある1つのみ。魔王の完全復活を阻止するためには、残り1つの聖石を持つて魔王の肉体が封印されている闇の樹海の祠へと向かう。あと少し。もう少しでこの長い戦いに終止符を打てる

「…？天幕の方が騒がしいな。」

ざわざわと、休息の場には似合わない喧騒が聞こえる。…もしや、夜襲か？

「何があつた!」

レギンレイヴを構えて騒ぎの中心へと向かう。だが、戦いが起きている様子はない。仲間内のトラブルか?人集りの外側で傍観するフォルデに事情を聞く。

「エフラム様。どうやら、ロスとユアンが口論になつたみたいですね。今はもう収まつてゐみたいですけど。」

「なに? ロスとユアンが?」

ロスとユアンか。アメリカも加えて軍内でも最年少である3人が共に行動しているのはよく見る。仲が悪いことはなかつたはずだが、一体どうしたんだ?

「これは、エフラム様。お手を煩わせてしまい申し訳ございません。」天幕の中に入るとロスの傍に座つていたガルシアが頭を下げようするが、手を向けて止めさせる。2人はそれぞれガルシアとテテイ丝に宥められて一旦落ち着いたものの、納得はしていないという顔だ。「構わない。何を揉めていたんだ?」

「あの、アメリカはアストラガ: いなくなつちやつて辛いだろうから、帰した方がいいんじゃないかなつて思つたんだ。」

「けど、それはアメリカが決めるこだろつて俺が言い返して、それでユアンが「アメリカは責任感が強いから無理にでも戦うつて言う」つて返してきたんだ。だけど、帰れつて強制するのも違うだろ?」

「でも、そもそもしないとアメリカは絶対に戦うのをやめないよ。」

「…まあ、こんな感じでお互い熱くなつちまつたんだ。…迷惑かけたのは反省してる。」

難しいな。お互い間違つてはいない。アメリカのことを考えて発言したのも確かだ。更に言えば、2人とも血の繋がつた家族は1人だけ、家族と別れる悲しみもまた、深く共感できるのだろう。俺もそうだ。そして、エイリーエクも。

「2人の言いたいことはよく分かる。…アメリカに決めさせよう。ユアンには悪いが、それが正解なのは間違いない。」

確かに俺が帰るよう命じし、他にも何人か説得すれば、アメリカもそれに従うだろう。だが、その後は?全てを失つたアメリカは、こ

これからどう生きていく？…今ままアメリカを帰せば、最悪アストラの後を追うことすら有り得る。

「おそらく、ユアンが言うようにアメリカは無理にでも戦うことを選ぶだろう。出来るなら俺達でアメリカのことを助けてやりたい。だが、今の状況で1人だけの為に割ける時間はほとんど無いに等しい。だからロス、ユアン。アメリカのことはお前達に任せる。あいつが絶望に潰されないように、支えてやつてほしい。」

今、アメリカに最も必要なものは心を整理できるだけの時間だ。それまでは激情に駆られて間違いを犯さぬように、俺達が近くで監視しておくべきだろう。

「ああ、そういうことなら任せろ！なあ、ユアン！」

「もちろんだよ。僕達がアメリカのことを見ておくから、エフラム様は安心して戦いのことを考えて。魔王を倒して、アストラの仇も討つてあげないといけないからね。」

魔王を倒すということは、戦争を終わらせ、リオンの無念を晴らすこと。そして、今まで死んでいった者たちの、アストラの死を無駄にしないこと。奴と決着を付けなければならない理由がまた増えた。

「ああ。頼んだぞ、2人とも。」

天幕を出て、ばらける様子のない人集りに事態を説明し、夜の見張り番に声を掛けてから俺も休む準備に入る。戦争中とはいえ、明日謁見することになる聖教国の教皇に疲れ果てた姿を見せる訳にはいかないだろう。

Enemy Side

「…つ。右腕を失った影響は大きいけれど、お陰で身体の支配を取り戻せた。彼には感謝しないとね。」

グラド皇子リオンは、右肘を押さえながら闇の樹海近くの拠点へとワープする。その傍らには皮膚が焼け爛れた金髪の人間が浮いている。

「り、リオン様、右腕がつ！」

「いいんだ。…アーヴはどこだい？」

「は、はつ、アーヴ将軍は会議室にてリオン様の到着をお待ちになつております。」

「わかつた。仕事を続けて。」

「承知致しました。」

右腕を失つたりオンを見て慌てる見張りを制止し、リオンは拠点内の会議室に入る。中ではアーヴが古い書物を読んでいるところだつた。どうやら最強クラスの魔物、ドラゴンゾンビを従える術を調べているらしい。

「ふえふえふえ、これは…リオン様。…隣の焼死体は何ですかな？」
「フレリア軍で活躍していた彼だよ。聖石を取り戻すのに躍起になつて、溶岩に落ちてしまつてね。…興味深い武器を扱つていたから、連れてきてみたんだ。」

リオンは金髪の人間…アストラの身体を机の上に横たわらせる。
：僅かながら胸部が動いている。誰が見ても死んでいるようになしか見えないが、生きて呼吸をしているようだ。溶岩に落ちたにも関わらず、黒い剣も溶けることなくアストラの手に収まつている。

「これは…生きておるのですか。溶岩に焼かれながらも息絶えぬとは、同じ人間とは思えませんな。」

「彼が特別なのは違ひないだろうけど…死ななかつたのはこの剣のせいかな。魔剣は主の死を許さないからね。」

リオンは黒い剣を取り、自身から溢れ出る魔力を剣の中に注ぎ込む。すると、黒い剣に赤色の幾何学的模様が表れ、禍々しい雰囲気を纏いだす。

「アダマンタイト…ではありませぬな。あの鉱石よりも更に黒い。」
「…かつて、この大陸が魔王による脅威に晒されていた時代。現在のカルチノ共和国とフレリアの東側。その辺りに領地を持つ王国が存在していたんだ。」

「【ヴエルニ王国】でしたかな。」

「そう。ヴエルニ王国…又の名を【魔属国ヴエルニ】。魔王の侵攻に耐えきれず、降伏を余儀なくされたその国は人質として2人の人間を魔

王に捧げた。1人は歴史上随一の闇魔道の才能を持った、ヴエルニ王国第2王子ナーグル。そしてヴエルニ王国将軍の娘アステイナ、こつちもまた剣技に関して天賦の才を持つていたよ。」

アストラの治療をしながら魔王の記憶を読み上げるリオン。リザイアの魔法を応用した強引な治療によつて、アストラの身体はみるみるうちに回復していく。

「元々闇魔道に精通していたナーグルは間もなく魔王に心醉した。だけれど、アステイナは違つたんだ。【騎士の中の騎士】と称えられた将军の一人娘。彼女の心は簡単には揺るがない。ゾンビやスケルトンはもちろん。バールやマグダイル、果てにはサイクロプスやゴーゴンを差し向けても彼女は屈しなかつた。」

アストラの治療を終えたリオンはビグルの触手を召喚し、アストラの身体を壁に縛り付ける。その衝撃でアストラの意識が覚醒するが、強引な治療による激痛で言葉を発する力すら湧いてこない。

「力に屈さぬアステイナを見た魔王は、彼女に絶望を見せつけた。父が、母が、友が死んでいく幻覚を。国が、大陸が、世界が滅びていく悪夢を延々と見せ続けた。まだ子供だった彼女がそれに耐えられるはずもなく、遂に心が折れたアステイナは魔王の洗脳に屈してしまつた。」

リオンは再びアストラの剣を手に取り、その切先をアストラに向ける。

「そうして魔王の手先となつたナーグルとアステイナに、魔王はその力に相応しい武器を与えた。それが【ナグルファル】と、この【レイヴァテイン】。英雄達の双聖器になぞらえて【双魔器】とでも呼ぶとしようか。このレイヴァテインは魔界の鋼鉄で造られた剣。これの主に選ばれると、どれだけ傷ついても死ねなくなる最悪の剣だ。」「レイヴァテインがその小僧を主に選んだというのですか。」

「そのようだね。理由は分からぬけれど、今重要なのは剣が彼を選んだという事実だけだよ。レイヴァテインに選ばれた若者が魔王に囚われている。…そう難しくはないはずだ。」「があああああああつ！ぐつ…がああつ！」

リオンはアストラに向けて膨大な魔力を注ぎ込む。全身の激痛がさらに激しくなり、アストラは目を剥いて苦悶の叫びを上げる。

「あつ…がつ、ぐううううう…」

「うーん、思つたより抵抗してくるね。彼の意志は思つたより強固なものみたいだ。」

リオンはアストラの魂に膨大な魔力を流し込み、アストラを支配せんとするが、アストラは朦朧とする意識の中で必死に抵抗する。歯を碎けんばかりに食いしばり、掌が裂けるほどに拳を握りしめる。

「ああ、そうだ。彼女もこうやって抵抗していたよ。…眠れ。」

リオンは杖を使うことなくアストラを強制的に眠らせる。既にボロボロのアストラは、別方向からの精神攻撃に抵抗する暇もなく眠りだしてしまった。

「ふむ…かつてと同じ手順を踏んでいるのですかな？」

「そうだよ。とはいって、彼は当時のアステイナよりは年上だし、それに伴つて精神も成熟しているからね。どう転ぶかは分からないな。」

アストラ Side

「へつ、粹がつた割には大したこと無かつたな。」

所詮山賊だろと高を括つていた。いくらなんでも4人を同時に相手取れば多勢に無勢、こうなるのは分かりきつていたはず。疲れで頭が鈍っていたのかもしれない。

「死ねえつ！」

「だめ——つ！」

ターナ姫がペガサスに乗つて山賊に攻撃する。細身の槍で突かれた山賊は気絶したが、ターナ姫は2人の山賊に挟み撃ちにされる。「けつ、黙つて逃げてりや酷い目に遭わずに済んだのに、馬鹿なガキだな。」

ターナ姫はペガサスの上から引きずり下ろされ、頭を殴つて気絶させられる。

「金も手に入つたし、おまけに女まで付いてきた。さつさとぞらかる
ペガサス

ぞ。」

「へい。…じゃあ、てめえは死んどけや。」

脳天に鉄の斧が振り下ろされる。俺は結局何もできずに死んでいくのか。最後の最後に、フレリアの王女まで巻き込んで。

「…っ、駄目です、アストラ。小舟に乗っていたアーチャーがこちらに来ています！」

前方にはソルジャー、後方からはアーチャー。…正面突破はあまりにも無謀だ。受けに回つて戦つたところで勝てるとも思えない。

「この場で耐え凌ぐ他ありません。俺がソルジャーの相手をしますので、エイリーエ王女はアーチャーの相手を。回避と防御に専念してください。」

「分かりました。槍を相手する貴方が負担は大きいはず。無茶は

⋮

「しますよ。今、無茶しなきゃいつするんですか。心配なさらずとも、易々と死ぬ気はありませんので！」

ソルジャー達の攻撃を避けて、避けて、避け続ける。俺の横をすり抜けてエイリーエ王女側に行こうとしている奴は避けるついでに足払い転ばせる。

「しまつ…アストラつ！」

「があつ…」

後ろから飛んできた弓矢が頭に刺さる。エイリーエ王女が避けた矢が偶然俺に当たったようだ。

意識がぼやける。これを好機と見たソルジャー達が一斉に襲いかかってくる。立ち上がるうにも力が入らない。迫る鉄の槍はいとも容易く俺の身体を貫いた。

ターナ姫と初めて出会ったあの日、レンバール城で2人だけ分断されたあの時、幽霊船の戦い、セライナさんとの戦い、皇帝との決戦：確かな記憶と、覚えのない結末。その中で俺が死に、ターナ姫が殺され、アメリカが、エイリーエ王女が、エフラム王子が、仲間達が死んでいく。

気がつけば俺は何も無いの空間に立っていた。光一つない暗闇の中に、俺と目の前の男の姿だけが映し出されている。

「魔王…！」

「今の僕はグラード皇子のリオンだ。魔王じゃないよ。」

「…俺にあんなものを見せて、何のつもりだ。」

今の俺は武器を持つていてない。たとえ表に出ている人格がリオン皇子のものであろうと、魔王の魔力を持つている相手に丸腰で攻撃を仕掛けるのは得策ではない。

「やつぱり、まだ心が折れる様子はないね。」

「…とつぐに過ぎたことだ。もしもの話をされても困るな。」

「なら、こうしようか。」

リオンは俺の手に黒い剣を出現させ、マミーを召喚して俺に喉かける。

「グアアツ！」

マミーの猛毒の爪を避け、首を飛ばして斬り捨てる。それを見たりオンは更に複数体のゾンビやスケルトンを召喚して来る。…舐めているのか？

「俺を翻りたいなら大量のゴーゴンでも呼んだらどうなんだ。」

上位の魔物はおろか、ビグルやモーサドウークすら呼び出す気配がない。

何体目かの槍を構えたスケルトンを斬り、リオンは魔物の召喚を止める。槍が一度だけ掠つたが、それだけだ。

「もう終わりか？」

「ああ。これで最後だよ。」

最後に召喚されたのは、またまた槍を構えたスケルトンだ。結局、何をするつもりだったのかは分からなかつたな。胸骨から背骨まで

を貫き……人を刺したような感覚が…

「ア…ス…ト…ラ…どう…して…」

「ひつ!?た、ターナ…姫?」

さつきまでスケルトンだつたものがターナ姫へと姿を変えている。

…黒い剣はターナ姫の胸を貫いている。お、俺が…やつたのか。

「…まさか。」

背筋が凍る。恐る恐る俺が今まで斬つた魔物達を見ると…

「…つ!」

アメリカ、エイリーエ王女、エフラム王子…俺と共に戦ってきた仲間たち、俺が守るべき人々が倒れ伏し、地面を赤く染め上げている。「ち、違う。違うんだ…そんな、つもりじゃ…違う…俺は…つ!おれは…ちがつ…!うあああああああああああああああああああああああああああああつ!」

エフラム Side

「叔父様、ただいま戻りましたわ。」

「おお、ラーチエル!よく無事で帰つた!」

俺達はラーチエルに連れられロストン宮殿に到着、聖王国教皇であるマンセル様の下へと案内されている。

「ロストン聖教国教皇マンセル様、初めてお目通りいたします。私はルネス王女エイリーエ。フレリア王国からの使者としてここへ参りました。」

「俺はルネス王子エフラム。妹のエイリーエと共に、今この世界に迫る危機を伝えるため参りました。」

マンセル様にグラドの目的は聖石の破壊であること、ロストンを除く4ヶ国の聖石は既に破壊されていること、そして、封印を解かれた魔王が復活を目論んでいることをエイリーエとふたりで説明する。

「…ふむ、事情はわかつた。にわかには信じがたい話ではあるが…闇の樹海の魔物どもが勢いを増していることは私も聞いておる。ラーチエル、正義を為すためにはロストンの聖石が必要なのだな。」

「はい、叔父様。ついては神殿の封印を解く許可をいただきたく思いますわ。」

どうやら聖石はこの宮殿とは別の場所に安置されているらしい。厳重に封印されているのならば、知らぬ間にグラドの手にかかることがないだろう。

「あいわかつた。しかし、そう急くこともあるまい。幸いここは魔の手の掛からぬ聖領、まずはゆっくり身体を休めるがよかろう。」

「…そうですわね。今は皆様、大変疲れておりますもの。ここで一晩休ませていただきますわ。構いませんわよね、エフラム。」

「ああ、勿論だ。マンセル様、ご助力感謝いたします。」

「正義を為すためであれば協力は惜しまぬ。他に必要な物があれば何なりと申されよ。」

マンセル様のご厚意によつて宮殿の大広間に天幕が張られ、皆思い思に休息を取つてゐる。浴場に直行した者もいれば、大の字になつて寝転がる者もいる。

「ふん、随分と情けない顔をしているな。」

「ヒーニアス。…そんなに酷いか?」

先程まで銀の弓の手入れをしていたヒーニアスがいつの間にやら俺の隣まで來ていた。

「お前ともあろうものが、人ひとり死んだだけでその様か。」

「ああ。あいつの死は俺にも責任があるからな。魔王が元凶とはいえ、俺がきっかけを作つたのは違ひないんだ。」

俺がまんまと魔王の罠に掛からなければ、聖石を奪われされしなければアストラも死ぬことはなかつただろう。リオンが魔王に支配されていたことは分かつてゐたのに、俺は俺自身を抑えることが出来なかつた。

「魔王が元凶であることは言うまでもなく、お前の不注意もあるだろう。…アストラは己の命と聖石を秤にかけ、聖石を選んだ。結果失敗し、アストラは命を落とし聖石も溶岩に沈んだ。全てはアストラの選択だ。お前が背負う必要などあるものか。」

「…励ましているつもりか?」

「この軍の指揮官はお前だ。警告しておく、指揮官がそんな様では勝てる戦いも勝てなくなるぞ。」

ヒーニアスはそう言い残して、俺から離れていった。俺の死角にある柱の裏で弓の手入れを再開している。相変わらず変わったやつだな。事ある毎に好敵手視してくるというのに、俺に何かあれば人一倍気を遣つてくれる。：：今のヒーニアスの言葉のおかげで、心の整理が出来るようになつた気がする。あいつには感謝しておこう。

「…休むか。」

ヒーニアスのおかげで軽くなつたものを、今のうちに整理しておこう。そうすれば、今日はゆつくりと休めるはずだ。

「エフラム、起きてくださいまし！ 敵襲ですわ！」

「…なんだって！？」

眠りについていた真夜中、ラーチエルに杖でつつかれて目が覚め、その後に続いた言葉で眠気が吹き飛ぶ。

「状況は？」

「警備兵とドズラがなんとか侵攻を防いでいますわ。とはいえば数分も持ちません。早く援護を！」

「分かった。すぐに行く！」ラーチエルは輸送隊も動かして皆を起こすんだ。」

天幕内に置いてある装備を手早く装備し、戦いの音がする方へと向かう。侵入を許してマンセル様が殺されてしまえば、魔王に対抗する為の最後の聖石も手に入らなくなる。なんとしてでも守り切らなければ。

??? Side

遠目にロストンの宮殿が見える。真夜中だというのに、戦の音が絶え間なく鳴り続けている。

私が掘んだ情報が正しければ、あの宮殿にはフレリア軍が泊まつて

いるはず。それを知ったグラド残党が、残る聖石を破壊すべく夜襲を仕掛けたのだろう。

「…行くか。」

手練揃いのフレリア軍やロストン聖騎士団と言えど、アーヴが指揮しているであろう残党に夜襲を受けては苦戦は免れない。私一人の力でも十分助けになるだろう。…これから私の私も、今までの私と変わらない。ただひたむきに、優しかった本当の陛下が望むであろう道を進むだけ。

いや、少しだけ変わったかもしれないな。私がフレリア軍に味方するには陛下の望んだであろう未来のためだけではない。本来温原で果てるはずだつた私の運命を変え、考える機会を与えてくれた彼への恩返しでもあるのだから。

22章前編 真夜中の覚悟

エフラム Side

「とにかく、全ての出入り口を警戒するんだ！ 万が一でもマンセル様に手を出させるな！」

油断していたところへの襲撃、夜襲への迎撃という経験のない戦い、訪れたばかりの宮殿の防衛。軍が混乱するのも無理はなかつた。最悪の状況だ。まず、北側の部屋に4人分断されている。エイリーク、ターナ、アメリカ、ミルラ。全員が十分な実力を持つているが、杖の使い手がいない上にアメリカの精神状態は未だ不安定。

そして、宮殿の外で休んでいたフレリア正規軍は：殆ど全滅だ。グラド軍残党の侵攻を防ぐために命を賭したもの、ラーチエルが俺を起こしに来るよりも前に奇襲を受けた。9割が戦死し、残りは皆重傷を負つて宮殿に逃げ込んだ。

「杖使いはある限りのトーチを持って！ マリカ、フォルデ、ガルシア、モルダは右奥の通路を警戒、ギリアム、ドズラはデュッセル、ジストと交代！ ラーチエル、フランツ、ゼト、及び傭兵隊は裏口からの攻撃を受けているエイリーク達の援護に向かえ！」

戦況が整うまでは、指揮官である俺が前線に出る訳にはいかない。逸る気持ちを押さえ込みながら指示を出していく。

「…シレー、ヴァネッサはマンセル様の近くに付け！ 討ち漏らした敵が来ても、絶対に手を出させるな！」
城内での戦闘、特に受けに回る防衛戦ではペガサスナイトの空中機動力が活かせない。しかし、その広い視野と瞬発力で討ち漏らしの対処をするには最適だろう。

ヨシュア、カイル、クーガーはデュッセル達が消耗したら交代。杖使いの内、サレフ、ナターシャは回復に専念させる。…そうだ、アスレイも司祭にクラスチエンジしていたな。ルークと一緒に後ろから攻撃させつつ、合間に前線で戦っている者を回復させよう。
数時間前、実力があるのにクラスチエンジしていない面々を見たラーチエルがマンセル様に話した結果、大量のクラスチエンジアイテ

ムを支援して頂いた。実際、下級職のまま限界に達していた者は多く、10人ほどが一気にクラスチエンジを行つた。アスレイもその一人だ。

「エフラム様、俺たちはどうすればいい？」

コーマとネイミー、それにユアン、ロスか。コーマはローグ、ネイミーはスナイパーへとクラスチエンジしている。ユアンとロスもクラスチエンジ可能な段階までは成長しているが、下級職のままで、まだまだ伸び代が多い。

「コーマは松明を持つて宝物庫の更に奥側を見てきてほしい。グラド残党はいないだろうが、盗賊が紛れ込むかもしねれない。ネイミーは入口を押さえている前線の援護を頼む。ロスとユアンは分断されるアメリア達を助けに行ってくれ。」

「了解。ネイミー、寝ぼけてないでさっさと行くぞ」

「もう、寝ぼけてないよ。戦いの中で夜更かしにも慣れたんだから：行ってきます、エフラム様。」

「おっし、行くぞユアン！」

「うん、僕達がアメリアを守るつて、決めたからね！」

これで現状出せる指示は出し終えたか？やはり、北の裏口側が心配だな。アメリアが立ち直ってくれたら、ラーチエル達が加勢するまで耐えることも難しくないだろうが…

エイリーカ S:i:d:e (三人称視点)

「敵襲つ！ 敵襲です！」

「…つ！」

警備兵の警告を受け、別室で休んでいたエイリーカは飛び上がる。

「ふあ…んつ…てき…しゅう…敵襲つ！? ミルラ、アメリア、起きてつ！」

次いでターナが目覚め、ミルラとアメリアを起こしている。2人も続いて覚醒したが、ミルラはまだ眠いのか目を擦っている。

「くつ、もう敵がこんな所まで…僕が少しでも時間を稼ぎます、皆さんはその間に戦闘準備を！」

警備兵は部屋の外を確認すると、すぐさま外に飛び出した。エイリーグ達も戦闘準備を始めるが、エイリーグの馬やターナのアキオスは別の場所にいる。装備品は傍に置いていたとはいえ、万全な準備は出来ない。

更に、アメリカは兄を喪ったショツクから立ち直れていない。エイリーグは彼女の様子を確認する。

「戦えますか、アメリカ？もし、無理でしたら…」

「…大丈夫です、エイリーグ様。私、決めたんです。お兄ちゃんの代わりに私がターナ姫を守る。お兄ちゃんがやり切れなかつたことを、私が引き継ぐつて。だから私は大丈夫、戦えます！」

しかし、アメリカは瞳に強い光を宿してそう答える。エイリーグはその瞳をじっと見つめるが、その光が揺らぐ様子はない。

「そうですか、安心しました。…準備を急ぎましよう。グラド軍の残党には手練の兵士も多く残っています。あなたの防御力に頼ることになるかもしれません…お願いします、アメリカ。」

「任せてください！」

エイリーグはアメリカの想いを受け取り、また、いつも通りの明るい彼女が戻ってきたことに安堵する。その決意に応えなければと、より一層気を引き締めた。

「準備…できます。何をすればいいですか、エイリーグ。」

戦闘準備を終えたミルラが翼をはためかせてエイリーグに指示を乞う。目を見ましたのは遅かつたが、竜石と傷薬等を用意するだけだつたので、エイリーグ達よりも早く準備が整つたのだ。

「部屋の外で警備兵の援護をお願いします、ミルラ。弓兵や魔法兵には気をつけて。」

エイリーグは真っ先に準備を済ませたミルラに指示を出し、程なくしてエイリーグの準備も完了する。

「…準備良し。早くミルラの援護に…」

「準備できたわ！エイリーグ、指示をお願い！」

「私もできたよ！」

「…ミルラ達が支えている戦線を維持します。可能なら戦線押し上

げ、本隊からの応援を待ちましょう。」

3人同時に戦闘準備が整い、部屋を出て戦闘に参加。今は警備兵が守備に専念し、ミルラが炎を吐いて反撃している。

アーマーナイトや剣士、アーチャーといった下級職相手にはそれで十分戦えていたが、上級職相手には厳しいだろうとエイリークは判断する。ミルラの炎で仕留め切れず、警備兵も連戦に耐えられない上、エイリーク達が戦闘に参加すれば、ミルラが味方を巻き込まずに攻撃するのも困難を極める。

「来たわ！ ウオーリアと勇者、それにスナイパーも！」

ウオーリア、勇者、スナイパーがそれぞれ2人ずつ編成された小隊が迫ってくる。相手はたった6人だが、味方はそれより少ない5人。更にこちらは5人中3人が槍使い。斧使いのウオーリア相手に苦戦は必至だろう。

しかし、この程度の劣勢は何度も乗り越えてきた。誰ひとり怯むことなく武器を構え、どう戦うべきかを考える。

「ミルラが動きやすくなるよう、スナイパーを優先して倒したいところですが……」

「まずはウオーリアの攻撃を受け止めないといけないわね。だけれど、エイリークとミルラ以外はみんな槍使い。エイリーク、片方のウオーリアを1人で任せていい？ 私とアメリカ、警備兵さんの3人でもう片方のウオーリアを相手するから。」

「…そうね、それが最善だわ。ターナ、そつちはお願ひ。」

エイリーケはターナの提案に乗り、エイリーケは向かって右側のウオーリア、ターナ達は左側のウオーリアに戦闘を仕掛ける。

エイリーケは振り下ろされるウオーリアの斧を躱し、鉄の剣を突き出す。しかし、ウオーリアの急所は防具に守られている。動きやすさが最優先されたウオーリアの防具だが、防御を蔑ろにしている訳ではないのだ。

「ふんっ！」

「無駄です！」

エイリーケは、懷にまで潜り込んだ自分を掴もうとする腕を潜り、

脇の下を通つてウォーリアの背後に回り込む。大きく振りかぶった剣を振り下ろし、ウォーリアの背中に大きな傷を入れる。更に、その傷をなぞるように切り上げて追撃する。

「ぐつ…があつ！」

あまりにも精密な追撃、たつた今付けられた傷を更に抉られたウォーリアは余りの痛みに悶え、武器を取り落とす。

「終わりです！」

エイリーエは隙だらけになつたウォーリアに必殺の一撃を決め、とどめを刺した。そのまま息をつく間もなくスナイパーへと狙いを変える

「ぐつ…！」

「ターナ姫、今です！」

「やあああっ！」

少し遅れて、ターナ達も前衛のウォーリアを仕留める。2人で攻撃を受け止め、残りの1人が反撃する動きを繰り返したようだ。

「皆さん、下がつてください…！」

ミルラはウォーリアを倒したターナ達の頭上を通り、竜石の力で巨大な竜に姿を変える。グラドのスナイパーもミルラの翼を狙つて弓を放つたが、竜の姿となつたミルラの翼を貫くことは出来ない。

「グアオオオッ！」

竜の姿となつたミルラは大きな手でスナイパーを掴み、地面に何度も叩きつける。更に、口から炎を吐き出して、後ろに控えていた勇者達にも大きなダメージを与えた。

「やああっ！」

ミルラの攻撃が終わり、入れ替わるように飛び出したターナが、ミルラが狙わなかつた方のスナイパーに攻撃を仕掛ける。

「ひいいっ！待て、こ、降参だ！」

「か、勝てねえよ、あんな化け物に勝てるか！」

ターナの攻撃を耐えたスナイパーは武器を捨てて両手を挙げる。

更に2人の勇者の片割れはミルラに恐れをなして逃げ出した。
「降伏するのですね？警備兵、捕縛をお願いします。」

警備兵は侵入者を拘束する為の縄を取り出し、降伏したスナイパーを縛ろうとする。しかし、残つたもう1人の勇者が割り込み、味方のスナイパーと警備兵の急所を貫いた。

「…っ！」

「ふん、情けねえ。グラドを裏切る者には死あるのみだ。」

剣が貫通しているスナイパーはもちろん、胸を深く刺された警備兵も、もう助かりはしないだろう。勇者は剣を抜いてその場で切り払い、付着した血を飛ばす。

「ルネス王女にフレリア王女、裏切り者のガキにマムクートまで。合わせて何ゴーレド分の首だろうな？」

勇者は盾を正面に構え、アメリカに向かつて突撃。アメリカも盾を構え、真っ向から攻撃を受け止めようとする。

「ターナ姫！」

「こつち!?」

しかし、勇者はアメリカに攻撃する直前に方向転換、すぐ近くにいたターナに標的を変える。

「くつ…！」

「まずはお前の首、貰った！」

ターナは咄嗟に防御したが、バランスを崩して尻餅をつく。その隙が見逃されるはずもなく、首を捉えた追撃が迫る。

「させないっ！」

間一髪でアメリカが勇者に体当たり、勇者は姿勢を崩し、剣先はターナの首の皮を掠める。

姿勢を崩した勇者にアメリカが追撃、しかし、勇者は盾を振り回してアメリカの攻撃を弾く。

「はあっ！」

続くエイリーケの追撃も剣で防がれる。勇者は鍔迫り合いに持ち込み、その間に姿勢を立て直す。

互いにフェイントを織り交ぜながら間合いを離し、戦況は振り出しに戻る。

「女ばかりでつまらんかと思つたが、強いな。戦乱を生き抜いてきた

だけはある。」

（この勇者、強い。他の残党達とは格が違う！）

エイリーエとグラド残党の勇者は、互いに互いと同じように評価する。ミルラを除く3人を相手取りながら互角に戦う残党など、帝国将軍に並ぶ実力と言つても過言ではない。

「…だが、この戦争の最前線で戦い抜いたのはこの俺も同じ。強くなつてゐるのが自分だけだと思うなよ、フレリア軍。」

この勇者相手には、3人同時に畳み掛けたとしても互角の戦いになる。やはり、隙を作つてミルラが攻撃する時間を作るべきか…そう考えたエイリーエはターナ、アメリカとアイコンタクトを取る。どうやら3人とも同じ結論に至つたようだ。

「しかし、後続の小隊が随分と遅いな。後ろの連中は何をやつてるんだ？」

3人で展開し、多方向から同時に攻める。それが最善だろうと決め、いざ仕掛けようとした、その時だった。

「私が倒した。全員な。」

「ぐがつ…!?

勇者の頭上に雷が落ちる。本隊からの援護：にしては、疑問が多い。フレリア軍であれだけの威力のサンダーを放てる理魔法使いはルーテ、サレフの2人だ。だが、そのどちらもが歩兵である。まさか歩兵が騎兵よりも先に援護に来るはずもなく、エフラムが分断されている4人に騎兵を送らないことも有り得ないだろう。

「中々苦戦している様子だつたので、横槍を入れさせてもらつた。不都合はないな？」

「あなたは…セライナ将軍！」

エイリーエ達の前に現れたのは、元帝国将軍【螢石】のセライナだつた。以前よりも少しくすんで見える金髪。それとは対照的に透き通つて見えるエメラルドのような瞳。心做し痩せたような気もするが、それ以上に活気を感じる彼女は、不意を突いた勇者に向かつてもう一度雷を放つ。

「帝国将軍だと!? 【血碧石】と【黒曜石】以外にもまだ生き残りが…」

「仕留め損なつたか。……これで終わりだ。」

必殺の一撃。一発目よりも更に高い威力で放たれた雷は、金属の防具を通つて勇者の全身に強い衝撃を与える。肉体を焦がし腸を貫く。

「セライナ将軍…？どうして私達の味方を？」

「嘗ての陛下が望まれた世界を取り戻す為。そして、彼に救われた恩を返す為だ。……それと、今の私は帝国将軍ではない。『將軍』と呼ぶのはよせ。」

「それは…」

「私が説明するわ、エイリーグ。」

アメリカやターナ、ミルラにとつて、湿原での戦いの結末は未だ記憶に新しい。一方、ロストンに向かう予定で、エフランと別行動していたエイリーグはその詳細を知らない。

ターナがエイリーグに説明している間に、アメリカがセライナとの会話を受け継ぐ。

「とにかく、一緒に戦つてくれるんですね。彼に救われた…っていうのは、お兄ちゃんの事ですよね？」

「君がアストラの妹か。…彼は、私にこの道を選ぶ機会をくれた。彼の説得がなければ、例え何が起きようと乱心した陛下の命に従い、あの場で絶えていただろう。」

主の過ちを正すのが真の忠誠である。そう言つたアストラの全てが正しいと認めた訳では無い。過つ主への忠義を愚直に貫き通すこともまた、正しい忠誠であるとセライナは断言できる。

セライナが考え辿り着いた結論。それは、かつての皇帝と、乱心し戦争を仕掛けた皇帝は別人物であるということだ。そう決めつけ、かつての皇帝への忠義を貫くと決意を固めた。

「そう…ですか。あなたが味方してくれると聞けば、お兄ちゃんも喜んだと思います。でも、お兄ちゃんは…」

「…そうか。ならば、私は死者への忠誠を貫き、死者への恩に報いる為、力を振るおう。…裏口の増援は粗方倒している。エイリーグ王女、指示を。」

セライナはターナの説明が終わつたのを確認し、エイリーグに向かつ

て指示を乞う。

「はい。裏口の敵を全滅させは訳ではないようなので、迎え撃ちましょう。本隊からの援護が来たら、私とターナは一度下がり、騎馬と天馬を迎えに行きます。」

「であれば、早く行きなさいな。私達が来ましたわ！」
「ラーチエル、ゼトにフランツも！」

エイリーグが方針を決め、指示を出そうとしたタイミングで、本隊から送られたラーチエル達と合流する。

続いてフランツ、ゼトも合流。少し遅れて傭兵達も到着し、迎撃に十分な人数が揃う。

「俺達も来たぞ！」

「アメリカ！大丈夫！」

「ロス、ユアン！これで万全だね！」

更にロスとユアンまで加勢し、すっかり元気になつたアメリカを見て2人は安堵する。

「アメリカ、君も元気になつたみたいで何よりだよ。」

「もう大丈夫。お兄ちゃんが守りたかったもの、全部私が守るから。みんな、心配かけてゴメンね。」

エイリーグとターナが騎馬と天馬を回収しに向かつたのを見送り、アメリカ達は迎撃の為に備える…が、廊下は2、3人いれば塞げる程度の幅、ミルラが炎を吐けば覆い尽くせる程の狭さだ。

「えつと、魔法や手斧、手槍での援護が主になりそうだね。」

「エイリーグ様にターナ王女、ミルラにアメリカ。こちら側に残つていた誰もが重要人物だからね。過剰だとして多くの戦力を送らざるを得ないよ。」

ユアンが呆れ混じりに放つた言葉に、フランツがその理由を話す。だが、アメリカからすれば違和感がある。

「えつと、私も？」

「そりやあお前、戦える状態だと確認するまでは護衛対象だったんだからな。」

軍の指揮官であり、ルネス王女でもあるエイリーグ。フレリア王女

のターナ。そして、太古から生きているマムクートのミルラ。グラード辺境の村出身で、元グラード軍の志願兵でしかないアメリカが彼女達と同列に扱われるのは、どうにも違和感が拭えない。

「うん、もう納得するのは諦めるよ。それよりも、目の前の戦いに集中だね。」

「アメリカ、状況を簡潔に伝えて欲しい。」

理解はしたが、納得は放棄したアメリカ。話が一段落した所に、ゼトが現状の説明を求める。話すのが苦手なミルラや、何故ここにいるのかすら分からぬセライナに説明させる訳にもいかず、エイリークとターナが離脱している今、最も説明できる立場にいるのは彼女だ。「あっ、はい！えっと……まず、警備兵さんが1人倒されました。今まで来たのは、まずは剣士やアーチャー、その後はウォーリア、勇者、スナイパーがそれぞれ2人ずつ。勇者の片方は4人がかりでも苦戦する手練でした。そして、セライナさんは味方です。昔のヴィガルド陛下と、お兄ちゃん：アストラの為に戦うと。忠誠を貫き、恩に報いると。そう言つていました。裏口から来るグラード軍は彼女がある程度倒したそうです。」

「なるほど、理解した。：セライナ殿、話を聞きたい。」

ゼトはアメリカの報告を聞き、セライナは信用に値するだろうと判断する。2人に直接の面識は無いが、戦争前、【螢石】セライナの評判はゼトの耳にも届いていた。そして、同じく帝国将軍だったデュッセルからも彼女の人となりは聞いている。忠節ある騎士と聞く彼女が、騙し討ちのような真似をすることがあるまい。

「どうした、【真銀の騎士】殿。」

「ゼトだ。改まつた挨拶は後程させていただく。：道中、倒してきたグラード残党達の実力を教えて欲しい。アメリカ曰く、手練の勇者が1人いたとの事だが、それと並ぶ、若しくは超える実力の者はいたか。」「確かにことは言えないが、少なくとも私が倒してきた者の中に、彼女達4人がかりで苦戦しそうな程の者はいなかつた。手練の数はそろ多くないだろう。」

「了解した。：ラーチエル王女はトーチの杖を。アメリカ、フランツ、

前に出るぞ。傭兵隊は前衛の援護、可能ならば遊撃せよ。」

手練が少ないのであれば、過剰な警戒は却つて体力や気力を消耗する。ゼトは傭兵隊を遊撃に回し、素早く敵の戦力を減らす事を優先させた。

エフラム Side

「デュッセル、下がれ！」

エルファイアーを受けたデュッセルと入れ替わり、それを放ったマージナイトに手槍を放る。目の前のパラディンはレギンレイヴで仕留め、手槍を回収。マージナイトに追撃を入れて倒す。

「エフラム王子！あまり突出されるな！」

横から飛んできた弓矢は避けられず、鼻先を掠める。銀の弓を持ったフォレストナイトはギリアムが鋼の槍で撃破。ウォーリアがギリアムが前に出て出来た隙を突くが、ヨシュアがキルソードで必殺の一撃を2連発で繰り出し、ヒーニアスが頭を射抜く。

「…すまない。少し逸つてしまつた。」

「しつかりしろよ、指揮官。」

無理に押し上げた戦線を下げつつ、アクスバスターでグレートナイトの攻撃を受け止める。

どうやら、グラド残党軍は戦力の大半をこの正面口に注いでいるらしい。次いでエイリーク達のいる裏口が多く、フォルデ達に向かわせた東側は牽制程度の戦力。コマに警戒させた西側は、グラドとは関係ない盗賊が紛れ込んだのみだ。

「ちつ・ルーテ！決めてやれ！」

「見せて差し上げましょう。ジャハナの双聖器が一つ・エクスカリバー！」

ルーテが放つた真空の刃が、いとも容易くグラド残党達を両断する。ヨシュアから託され、俺が渡したジャハナの双聖器の片割れ、【風刃】エクスカリバーをルーテは十全に使いこなしている。

ルーテは幽霊船で見せた大規模なエルファイアー以降、様々な形に改良された魔法を使いこなしていた。それは、例え双聖器であろうと

例外ではないのだろう。詠唱の度に真空の刃の数や大きさが変化している。

「見えぬ刃にばかり気を取られている場合ではないぞ！」

ルーテのエクスカリバーを警戒するグラド残党に、ドズラが巨大な斧を振るう。残党が避けた先に俺が手槍を投げ、ヒーニアスが防具の隙間を射抜く。

「ガハハ！ 宮殿の中には一步たりとも入れさせぬぞ！ 悪しき者どもよ、覚悟せよ！ ……ぐうお!?」

ドズラが斧を振り翳し、残党達を威嚇する。しかし、そんなドズラの足下から光の渦が巻き上がり、頭上から光が柱となつてドズラに降り注ぐ。元々手傷を負っていたドズラは瀕死寸前にまで追い詰められる。

「ふえふえふえ……残る最後の聖石。それさえ破壊すれば、世界は闇に閉ざされる。」

「アーヴ…！」

帝国六将、【血碧石】のアーヴが夜闇の中から姿を現す。帝国に属する最後の将、ここで討ち取れば魔王の動きも大きく阻害出来るはずだ。

「そして…ルネスの王族2人を討ち取つてもそれは同じ事：英雄なくして魔王様を滅することは叶わぬ。」

「エイリーケも…貴様、何を企んでいる！」

ドズラへの追撃はギリアム達が庇い、なんとか致命傷は避けられた。ドズラの事は彼等に任せ、俺は目の前の男を警戒する。

「ふむ、ルネス王女は北の裏口か？…それは都合がよい。」「なんだと…？」

「戦力の大部分をここに割いてはおるが…わしの本命は裏口の突破。ふえふえふえ、貴様らにあの男は殺せまい。」

アメリア S.i.d.e

「…これで終わりか？」

ターナ姫達も戻ってきて、引き続きこの場で敵を迎え撃つ。ロスと

連携してウォーリアを倒した…けど、断続的に攻め込んできた残党達は、ぱたりと姿を見せなくなる。さつきの勇者みたいな強敵は現れない。苦戦しないのは良いことではあるんだけど…胸騒ぎがする。強い地揺れの前に感じるような、妙な静けさ。

「傭兵隊、敵影は？」

「少なくともここからは見えな……ん？」

ゼト将軍が問いかけた、敵影を確認していた傭兵は何か怪訝な様子。私も通路の奥に目を凝らしてみる。…仄かに赤い光が見えた。何かが光っている？

「赤い光、何か来る！」

最初に気付いたのは私だつた。武器なのか、魔法なのかも分からなければ、とにかく警戒する。

「姿を見せなさいな！」

さつきまでフランツを治療していたラーチエル王女がトーチの杖で通路を照らす。…なるほど、見えづらい訳だよ。

「私が出る！」

ゼト将軍が前に出て、赤い光の主…暗い色の鎧を全身に纏つたグラド残党を迎撃つ。その残党が右手に構える剣に刻まれている、赤い線の模様が光を放つていたんだ。

ゼト将軍は鎧の男の先制攻撃を盾で弾いて、隙を与えずに銀の槍で反撃。しかし、既に追撃体勢に入つていた男によつて相殺される。次の攻撃も男が先制し、それを防いだ上での反撃は再び追撃によつて弾かれた。

「速すぎる…！」

「ゼトの倍の手数で攻撃を繰り出しているなんて…」

私達も戦闘に干渉する機会を窺つてゐるけれど、あまりにも素早い応酬に、付け入る隙が見つからない。

ゼト将軍は防御を捨てて、相打ちを狙つてゐる。しかし、それでも男は全ての攻撃を的確に弾いてくる。…でも、あの男の戦い方には違和感を感じる。あれだけの速さがあれば、相打ちになつても男が優勢のはず。私達の横槍を警戒してるの？

「ぐつ……！」

男がゼト将軍の振り下ろしに對して、赤い模様の剣を大きく跳びながら斬り上げる。ゼト将軍の槍は弾かれ：銀の破片が見えた。まさか、あの剣は銀の武器よりも頑丈なの……？ゼト将軍の武器を壊してから倒すつもりみたいだ。

「よく分からぬけど……ただの強敵じやない。……考えなきや。」

ゼト将軍は鉄の大剣で防御している。今の内に打開する考え方を：ユアンやセライナさんの魔法は多分避けられる。……でなきや、2人はもう攻撃してる。ミルラの炎はゼト将軍を巻き込んでしまう。グラド城の時みたいに、私とターナ姫で攪乱しながら……でも、あの男はヴィガルド皇帝よりもずっと速い。避けられ：いや、それでいいんだ。攻撃を中断させれば十分だ。

「ターナ姫！お兄ちゃんと3人でやつた攪乱攻撃！今度はエイリーエ王女と3人で！」

あれから練習してみたけど、本物と比べて同時攻撃の部分がどうしても無理で、隙も大きいし攪乱効果も薄い擬似トライアングルアタック。でも、それは本家トライアングルアタックの完成度が高すぎるだけで、こつちも実用性は高い……つてお兄ちゃんは言つてた。

「分かつた！エイリーエ、私とアメリカで注意を引いている間に後ろから！」

私とターナ姫が前に出て、その影からエイリーエ王女が駆け出す。まずはターナ姫が空中から攻撃、男は反応して回避、反撃するけど、私が鎧で受け止めて鉄の槍を振り下ろす。……痛い。鎧越しでこんなに痛いと感じたのは初めてだ。

「ぐううつ……負けない！」

それでもなんとか耐えながら、背後に気付かれないように攻撃を続ける。……よし、今！

私とターナ姫が後ろに下がつて、男は追う構えを……取らない？

「なつ！」

男は身体を回転させて背後に向かつて剣を振るう。エイリーエ王女は咄嗟に反応して初撃は回避したけれど、追撃のもう一発は避けき

れずに馬から叩き落とされた。

「ファイアー！」

「ファインブル！」

「はあっ！」

対応されることを警戒していたのか、ユアンとセライナさん、フランツが男の背に向かつて攻撃、なんとかエイリーエ王女への更なる追撃は防いだ。

「まさか、反応されるなんて…」

迂闊だつた…エイリーエ王女は絶対に殺されとはいえない。そんな人に、私達3人でお兄ちゃんが担当するような役割を与えてしました。動きを読まれる事を考えてなかつた。

とにかく、私もエイリーエ王女が体勢を立て直すまで時間稼ぎを…？

「うつ…!?」

全身に痛みが走り、力が入らない。槍を杖にしても、立っている事すら儘ならない。

「アメリカーっ！攻撃を受け過ぎだ、馬鹿！」

ロスに腕を掴んで引っ張られる。…そうか、一撃だけでも身が軋むような痛さだつたのに…十発は受けただろうか。むしろ、よく死なずに済んだ方かもしれない。

私は安全な位置まで下げられ、私を運び終えたロスは手斧で男の注意を引き付ける。傷塗れの私と、戦闘能力のないラーチエル王女、治療中のゼト将軍、そしてそれらを守る傭兵隊。それ以外の全員が男に向かつて攻撃している。セライナさんが起こした吹雪を避け、ターナ姫とフランツの同時攻撃も回避。回避した先に飛んでくる火の玉と手斧も剣で弾く。エイリーエ王女は、男が攻撃を弾いた隙に詰め寄り、鍔迫り合いに持ち込んだ。

「…！ダメ！」

男は滑るように身体を倒し、エイリーエ王女の股下を潜つて背後に回り込む。完全に虚を突いた行動。反応出来たのは、遠くから眺めていた私だけ。ありつたけの力で手槍を投げる。

手槍どころか、長弓ですら当たらないだろう距離。それでも手槍は一直線に飛んで、咄嗟に避けたエイリーエ王女の髪を掠めて、男の兜に命中した。

「……え。」

手槍が当たつて吹き飛ぶ兜。体力を使い果たして力尽きる直前、暗くなる視界の中：一瞬だけ見えた男の顔。

お兄ちゃん……？

22章後編 魔の傀儡

ターナ Side

「ア、アストラ…？」

アメリカが放った渾身の手槍が男の兜を弾き飛ばした。そして、その正体を見て誰もが動きを止める。火傷跡が酷いけれど、一緒に戦つてきた私達がアストラの顔を見間違えるわけない。

「有り得ない。アストラは溶岩に落ちたと、兄上は確かにそう言つていたはず…！」

アストラは再び剣を構えて、動搖して固まつたままのエイリーエクに追撃を仕掛けて来た。エイリーエクは咄嗟に反応、紙一重で追撃を躱してアストラから距離を取る。

「おらあつ！」

「やあつ！」

左右からロスとフランツが連携攻撃を仕掛ける。だけど、ロスの攻撃は剣で弾かれ、フランツの槍は柄を掴まれて止められた。

「…つ！」

アストラはフランツの槍を強く握つてへし折り、ロスに向かつて体当たり、私が飛び出してロスへの追撃を受け止める。

「やあつ！」

アストラは狙いを私に変える。首元を狙つた突きを避けて、槍を振り下ろして反撃する。…うん、戦い方は元のアストラとそんなに変わつてない。擬似トライアングルアタックが対応されたのも、アストラが相手だったからなのかもしれない。

「そこつ！」

私の手元を狙つた一撃、武器を弾き飛ばしての無力化狙い。これもアストラがよくやる攻撃。腕を手前に寄せてアストラの攻撃を透かして、今度は私がアストラの手元を狙つて槍を振り上げる。アストラは右手で持っていた剣を左手に持ち替えて、私の攻撃を右手で受けた後、すぐに剣を右手で構え直した。…反応の速さは元のアストラの比じやない。今までの動きどいい、何か異様な物を感じるわ。

「ずっとアストラの近くで戦っていたんだもの！あなたの攻撃は全部お見通しよ！」

アストラがどうして生きているのか、何故敵として現れたのか、私もまだ戸惑っている。だけど、戸惑っているだけじゃ何も変わらない。だから私は今出来る事をする。

「ターナ…」

「下がつて、エイリーエ。2人で戦うとアストラの動きが分からなくなるから。」

アストラを倒す。それが私に出来る事。その後どうなるかなんて分からない。最悪、そのまま私がアストラを殺すことになるかもしない。でも、それで構わない。アストラは自分自身が私達の敵である事を望むはずがないから。

「やああっ！」

脚の付け根、肩の関節、首の血管。とにかく一撃で動きを奪えそつな所を狙つて攻撃する。終いには逆さになつて落ちながら脳天を狙うけど、その悉くが避けられて、防御されて、反撃される。

「くつ…！」

一度離れて手槍でアストラを狙う。だけど、アストラが剣を掲げると闇魔法のような力が剣から放たれ、手槍の投擲を妨害される。あの剣は魔法剣だったの…？ルーンソードとは違う、ルナのような力を感じた。つまり、あの剣が放つ魔力は魔法防御を無視する。魔法や手槍の間合いで戦うのは却つて危険という事ね。

再び近接戦に持ち込んだけど、アストラの反撃を受け止めた槍が折れて、鎧も肩の装甲が碎かれて胸の装甲も深く傷が入る。鉄の剣に持ち替えたけど、一撃目の相打ちですぐに碎かれた。

：強いわ。体捌きはアストラのそれだけど、動きを予測しても速すぎて対応できない。対応しても力で上から叩き潰される。まともに戦つても勝ち目なんて無いわ。奇を衒つてアストラの不意を突くしかない。

アキオスから降りて、地に足つけてアストラに向かつて構える。得物が手槍だと少し頼りないけど、壊れていかない武器はもうこれだけ。

やるしかないわ。

「やああつ！」

手槍を大きく振りかぶり、全力でアストラの顔を狙つて投げる。当然、アストラは剣で手槍を碎く。碎けた手槍の破片がアストラの視界を遮っている内に私はアストラに向かつて突進、そのまま両脚を掴んでアストラを転ばせた。

アストラは剣で地面を突いて転ぶのを阻止したけど、剣が強すぎるので床に深く突き刺さつて抜けなくなる。

「剣を離して！」

剣を抜こうとするアストラの腕を掴んで剣から引き剥がそうとするけど、私の力じやびくともしない。床に入つたヒビが広がっていく。このままじや折角のチャンスが無駄になる…！

「力勝負なら任せろ！」

「僕も加勢します！」

ロスとフランツも加わつてアストラの腕を引っ張る。ユアンはファイアーでアストラの足下を焼いて、セライナさんはサンダーをアストラに当てるべれさせる。それでもアストラは剣を離さない。

「皆さん、3つ数えて離れて下さい！」

ミルラが大きく声を張る。言われた通りに3つ数えた瞬間にアストラから手を離して距離を取ると、竜の姿になつたミルラがアストラを巨大な腕で突き飛ばした。その勢いでアストラの剣は抜けてしまつたけど、同時にアストラは剣から手を離して吹っ飛び、暗闇の中に消えていった。

「剣を遠くに！」

「はあつ！」

回復したゼト将軍がアストラの剣を槍で弾いて、それをアキオスが咥えて私達が寝ていた部屋の前まで放り投げる。傭兵達もアストラを通すまいと壁を作つている。

「…アストラ？」

再び暗闇から姿を現したアストラ。：何か様子がおかしい。ふらついた足取りで、目は虚ろで、ぶつぶつと何かを呟いている。

「…剣…ハ、ドコ……レイ……ヴァ…！」

私達の方：：剣に向かつて突進するアストラを私とエイリーエ、口ス、フランツの4人がかりで押さえつける。でも、アストラはそれを強引に突破。更にゼト将軍の槍も躱したけど、今度は6人の傭兵達によって取り押さえられる。

「ググ…！」

アストラも振りほどこうと藻搔くけど、私達とは人数も一人一人の力も違う。そう簡単には抜け出せないはず。

「邪魔ダ！」

アストラが拳を床に叩きつけると、信じられない程の強い衝撃によつてアストラを押さえていた傭兵達を吹き飛ばす。：：あの力ね。剣の一振りで周囲を吹き飛ばす、私とアストラが使える力。

「お兄ちゃん！」

目を覚ましたアメリカが立ち上がつたアストラに体当たり。私もアキオスを呼び寄せて飛び乗り、一瞬よろめいたアストラに真上から飛びかかる。

「耐えろ。私がアストラを氣絶させる。」

セライナさんがサンダーの魔法を詠唱しながら右手に魔力を溜めている。：：強い魔力を感じる。必殺の一撃をアストラに放つつもりね。そうでもないと今のアストラは倒れそうにない。私とアメリカにも少しだけ衝撃が来るだろうけど、それくらいなら大したダメージじゃないはず。

「そう簡単には事を運ばせぬぞ。」

どこからか飛んできた光魔法がセライナさんの魔力を搖き消す。この耳に障る笑い声は…

「また貴様か、アーヴ！」

残る最後の帝国將軍、【血碧石】のアーヴ。本人も唯ならない傷を負つたその男は杖を振つて私達が押さえていたアストラをワープさせ。放り投げられていたアストラの剣と共に自分の手元に引き寄せた。

「情などという生温いものを持つ貴様らであれば、数日前まで仲間

だつたこの男を前に刃が鈍ると思つたのだが…當てが外れたわ。」「黙りなさい。あなた達の術で操られていようと、アストラは今も変わらず私達の仲間です。彼を解放しなさい。」

武器は無いけど、拳を構えてアーヴに攻撃が届く距離で構える。エイリーグはアーヴの正面ですぐにでも攻撃出来る距離で構えているし、左右はゼト将軍とフランツ、傭兵達が塞いでいる。そして背後は私とアメリカ。これでアーヴの逃げ場はなくなつた。

「ふえふえふえ…南の本隊も壊滅させられた以上、最早わしに勝ち目はない。だがこの男と剣だけは手放す訳にはいかぬ。無双の一撃の使い手であり、魔将軍の器。我々にとつて、これ程強力な駒は他にあらまい。」

「…どういう意味だ。」

無双の一撃に魔将軍の器。前者はなんとなく想像できるけど、後者についてはまるで分からぬ。ゼト将軍がアーヴに問いかける。

「無双の一撃とはこの男とフレリアの小娘が使う、一で十、十で千を斬る力よ。魔将軍とは…」

「エイリーグ！…どうなつていてる！」

「ふえふえふえ…いつまでも喋つてゐる訳にはいかぬな。退かせてもららうとしよう。わしを追い、闇の樹海まで来るがよい…」

「待ちなさい！」

エフラムの姿を確認したアーヴはアストラや剣と共に姿を消した。きつとこの宮殿にはもういない。アストラを取り返すことが出来なかつた。マンセル様を守る事は出来たけれど、勝ち誇る気分にもなれないわ。

エフラム Side

「アストラが操られていた、か。色々な意味で信じがたいが…」

皆が戦闘後の処理をしている中、俺とエイリーグ、ゼトの3人はそれぞれの戦況を共有していた。アストラが溶岩に沈んだ上で生きていて、敵の…おそらくは魔王の洗脳に屈したとはとても信じられないが、2人が嘘を吐くはずもない。

「アーヴはアストラの事を『魔将軍の器』と言つていました。しかし、魔将軍とは…？」

「単に魔王の軍勢を率いる者としての呼称か、それとも別の意味があるのか。我々の持つ情報では判断しかねます。」

「たとえアストラが何者であろうと、あいつは仲間だ。必ず洗脳から解放させてみせる。マンセル様と話してくる。出発も遅れる事になるだろうし、アストラの洗脳の事も何かご存じかもしない。」

疑問は残るが、この場で幾ら話そうと解決する物ではない。だつたら時間を無駄に消費する前に話を切り上げ、ロストンの教皇としての知識を借りるべきだろう。

「失礼致します、マンセル様。」

「エフラム殿。この宮殿を守つていただき、感謝する。」

「いえ、俺達はやるべき事をやつただけです。ただ、今回の戦いで皆消耗しています。また暫く皆を休ませたいのですが。」

「うむ、構わぬ。必要とあらば治療の杖や傷薬も用意しよう。敵は古の魔王、急いで是事を仕損じる。万全を期するのだ。」

皆の休息については快諾いただけた。本来は今日の朝から手早く準備を整え昼前には出るつもりだったが、この状況では早くても今日の午後、最悪また次の日になるかも知れない。

「ありがとうございます。：俺達の仲間だつた男が今回の戦いで敵として現れました。敵はそいつの事を『魔将軍の器』と呼び、あいつは俺達の事も認識せず明らかに正気ではありませんでした。マンセル様は魔王の使う術について、何かご存じでしょうか。」

「ふむ。：古の時代、魔王の術によつて操られ寝返つた者も多くいたと伝えられている。中でも、魔物の侵攻によつて亡びたヴエルニという国は凄惨たる有様だつた。魔の軍勢に抗う戦士達はその尽くが魔王の支配下に墮ち、最後まで人々の味方として戦い続けた将軍を始めとする十にも及ばぬ英傑達もその圧倒的戦力差の前に散つたといふ。」

ヴエルニ？ フレリアに同じ名の塔があるのは知つてゐるが、まさか過去に存在していた国の名前だつたとはな。一国の軍隊を丸ごと操

り支配する力か。本来の力がそれほどまでに強力なものだつたのなら、力の大部分を封印されている今の魔王がアストラ一人を操ることも可能だろう。

「最後の希望であつたヴエルニ国将軍フイアラルが敗れたのを最後にヴエルニ王国は魔王に全面降伏。人質として魔王の下に送られた第2王子と将軍の娘も操られ、魔王の手先として殺戮の限りを尽くしたという。」

「もし俺達の仲間が魔王に操られているのだとしたら、もう助け出すことは出来ないのでしょうか。」

「魔王を再び封印すれば間違いなく洗脳は解ける。聖石の力によつて魔王と共に魔物がいなくなるように、魔王による洗脳も解除されるであろう。⋮あるいは、操られた者に直接聖石の力を浴びせる事でも洗脳は解けるはずだ。」

アストラに直接聖石の力を浴びせるには、聖石を手に取つて掲げる必要があるだろう。当然、掲げている所を狙われて聖石が破壊されてしまう危険もある。⋮アストラには悪いが、魔王を封印するか、倒すまでは魔王に操られたままでいてもらう事になりそうだ。

せめて、俺の失態で失つたルネスの聖石があれば直接洗脳を解いてやれたんだが⋮

E n e m y , s S i d e

「⋮夜襲は失敗したのかな。」

「ふえふえふえ⋮当ては外れましたが、奴らの動きに多少の遅れは出るでしよう。時間を稼ぐには十分かと。」

リオンはアストラと共に拠点に戻つたアーヴに声を掛ける。宮殿への夜襲でグラド軍残党は見張り兵士などを除き全滅したが、それを気にする様子はない。

「戻つてきたばかりで悪いけど、出発するよ。僕の身体はもう2日も持たない。早く魔殿にある魔王の肉体の下へ行がないと。」

リオンはリカバーの杖を振つてアーヴとアストラを回復。使用回数の限界に達したそれを踏み碎き、転移魔法の準備を始める。

「彼の使い勝手はどうだった？」

「戦力としては十二分ですな。セライナやゼトを含む10人程に囲まれながらも善戦しておりましたので。」

洗脳したアストラはターナ達の連携の前に敗北寸前だったものの、元帝国将軍やルネス将軍、神竜等を同時に相手して勝てというのはそれこそ完全に復活した魔王でもなければ無理な話だろう。

「しかし、奴らへの搔きぶりとしてはあまり機能しませんでしたな。それに、状況を鑑みれば数名は仕留められたはずですが、此奴は一人たりとも殺せておりません。元の人格が影響しているかと。」

「…おかしいな。洗脳が完全でないのかもしれない。だけど、これ以上魔王の力を使うと僕の中にいる魔王の支配も進んでしまう。洗脳をかけ直すわけにはいかないか。」

魔王の魔力を使うと、その分リオンの心に巢食う魔王の力も強まつていく。敵を殺すことは出来ずとも、時間を稼げるのなら十分だ。リオンは洗脳の重ねがけを行わなく、身体の支配権を保つことを優先した。

「さあ、転移魔法の準備が出来た。転移先は魔殿の前だ。」

「ふえふえふえ…悲願の達成は目前。必ずや成し遂げましようぞ、リオン様。」

アストラはリオンとアーヴに連れられ、拠点から姿を消す。そして、アストラが握るレイヴアテインの光が弱まっている事は誰も気づかなかつた。